庚塚・上・雷遺跡

国道122号(太田バイパス)道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

1980年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

庚塚・上・雷遺跡

国道122号(太田バイパス)道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

1980年

序

昭和53年度は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、旧前橋土木事務所の建物を借用して、呱々の声を上げた記念すべき年であります。設立されて間もない頃は、設備も調査体制も不十分ではありましたが、私達は埋蔵文化財の保護に使命感を燃やし遺跡調査に取り組んできました。

この新体制の中で調査された遺跡の一つである国道122号線太田バイパス地域における埋蔵文化財、庚塚、上、雷遺跡の調査報告書が刊行の運びとなり、その成果をここに公表できますことは、まことに感慨に堪えません。

太田市は、群馬県東部にあって、一大地場産業を基盤として、次第に宅地化が進み、街並も整備されて、現在では桐生市と並ぶ一大産業都市として発展を続けています。一方市内には東国随一の規模を誇る天神山古墳や著名な石田川遺跡、更に市民の憩いの場であり、市の歴史と文化を象徴する存在である金山などの多くの歴史、文化遺産を抱えております。とかく都市化、近代化の波に押されがちなこれら貴重な文化財について、今後もその保護、普及に努め、文化の香り高い近代都市としての発展が期待されています。

この度の調査は、太田市東部における国道整備事業に伴い、急拠実施されたものでありますが、中世の館跡や縄文時代、古墳時代の住居跡等の貴重な文化財が発見され、本地域における歴史に更にいろどりを加える事になりました。

今後、本報告書ができるだけ多くの方々の目にとまり、地域史をひもとく為の基礎資料として活用されますことを期待し、又発掘調査及び整理作業に関連された皆さんの御苦労を多とし敬意を表して序といたします。

昭和55年3月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　清　水　一　郎

例　　言

1　本書は国道122号線太田バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査遺跡所在地　庚塚遺跡　　太田市竜舞字庚塚4409他

　　上遺跡　　〃　下小林字上387他

　　雷遺跡　　〃　　〃　字雷548他

3　発掘調査は昭和53年、54年に実施され、昭和53年度調査の成果を報告する。

4　事業主体　群馬県土木部道路建設課（太田土木事務所）

5　調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

6　調査に関った組織は以下の通りである。

事務局長	磯貝福七（現県立渋川西高校校長）
調査研究部長	森田秀策（現県文化財保護課参事）
庶務課長	飯塚喜代子（現県教育センター調査員）
調査研究第1課長	阿久津宗二（現県文書館主任文書館専門員）
〃　第2課長	井上唯雄（現調査研究部長）
〃　第3課長	長谷部達雄
庶務課職員	国定　均
調査担当者	長谷部達雄
〃	西田健彦（現県文化財保護課主事）
〃	大木紳一郎

7　遺物整理は大木紳一郎が中心になって行い、特に縄文時代の遺物については当事業団調査研究員の藤巻幸男が、又板碑については同調査研究員新倉明彦が担当した。

8　本書の作成、編集は大木紳一郎が担当し、本文執筆に関しては以下の通りである。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ－1・2・4・5、Ⅴ－1・3・4・5、Ⅵ－1……大木紳一郎

Ⅳ－3、Ⅴ－2－(1)～(3) 遺物の項、Ⅴ－2－(4) 縄文土器、Ⅴ－5－(1)

土器について、Ⅵ－2……藤巻幸男

Ⅳ－3石器の項、Ⅴ－2－(1)～(4) 石器の項……長谷部達雄

Ⅳ－2－(4)……西田健彦

Ⅳ－4－(1) 板碑の項……新倉明彦

9　写真撮影は、遺構は西田健彦が中心となり、遺物は当事業団嘱託員佐藤元彦が行った。

10　遺物の整理及び実測、トレースは次の者が担当した。（以下敬称略）

浅井良子　内田京子　高橋京子　星野和子　辻口敏子　井野みゆき

萩原弘子　中村民子　石坂朋子　金井加代子　中野　恵　手賀瑞枝

宮崎由美子　宮内菊江　新井サイ子　石井弘子　浜野和宗作　伊能敬司
関　邦一

11　本書の作成にあたっては、下記の諸氏、諸機関に御協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。(以下敬称略)

大江正行　佐藤明人　中里吉伸　中沢　悟　能登　健　巾　隆之
原　雅信　真下高幸　松本浩一　山本朋子
群馬県立歴史博物館　太田市教育委員会　群馬県工業試験場

12　出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

13　なお調査にあたっては、作業に従事し、又多くの便宜を図って頂いた地元の方々の協力がなければ今回の成果はあげられなかった。文末であるが、記して感謝の意を表したい。

凡　　例

1　挿図の縮尺は以下の通りである。

遺構――埋甕１／10、それ以外の遺構１／60

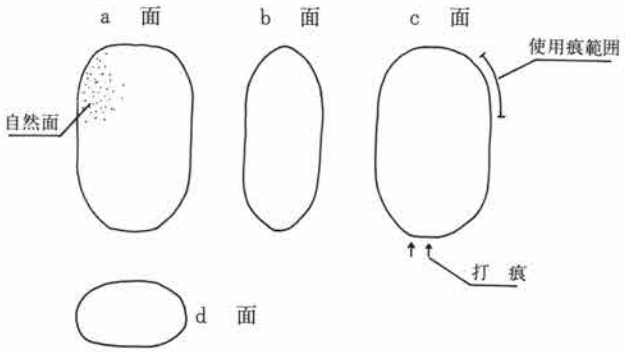
遺物――縄文土器・石器・土師質土器（かわらけ）１／３、中世陶磁器・内耳土器・土師器１／４、板碑・石臼１／５、五輪塔・不明石製品・埋甕使用土器１／６、陶器大甕１／８、石鏃１／１

2　遺物写真図版の縮尺は挿図とほぼ同様で、掲載遺物も可能な限り一致するよう配慮した。

3　表中の（　）は推定形態及び推定値を示し、遺物法量の略記は以下の通りである。

ａ―口径、ｂ―胴部最大径、ｃ―底径、ｈ―器高

4　石器説明中の略称及び挿図中の使用記号は以下の通りである。



5　遺構挿図中のスクリーントーンについては各図中に表示する。遺物挿図中のスクリーントーンの使用については以下の通りである。

6　縄文土器拓影の断面にみられるスクリーントーンは、胎土に繊維を含む事を示す。

目　次

序
例　言
凡　例

I　調査に至る経過…… 1
II　地理的環境…… 2
III　歴史的環境…… 4
IV　庚塚遺跡の調査…… 9
　1　庚塚遺跡の概要 …… 9
　2　遺構について …… 10
　3　縄文時代の出土遺物 …… 38
　4　中世の出土遺物 …… 43
　5　結　　語 …… 61
V　上遺跡の調査…… 69
　1　上遺跡の概要 …… 69
　2　縄文時代の遺構と遺物 …… 71
　3　古墳時代の遺構と遺物 ……143
　4　その他の遺構と遺物 ……155
　5　結　　語 ……158
VI　雷遺跡の調査……163
　1　雷遺跡の概要 ……163
　2　出土遺物 ……164

挿　図　目　次

図１　国道122号バイパス路線計画及び周辺遺跡…… 3
図２　周辺遺跡分布図 …… 5
図３　庚塚遺跡土層断面図 …… 9
図４　庚塚遺跡遺構配置図……11、12
図５　11号溝平面図……13、14
図６　11号溝断面図 …… 15
図７　方形竪穴遺構 …… 17
図８　掘立柱建物跡 …… 18
図９　井戸跡 …… 19
図10　７号井戸及び23・24号土壙 …… 22
図11　43・44号土壙 …… 23
図12　土壙(1) …… 24
図13　土壙(2) …… 25
図14　土壙(3) …… 26
図15　土壙(4) …… 27
図16　土壙(5) …… 28
図17　土壙(6) …… 29
図18　土壙(7) …… 30
図19　土壙(8) …… 31
図20　土壙(9) …… 32
図21　遺構外出土遺物 …… 40
図22　11号溝出土及び表採遺物 …… 41
図23　11号溝・３号井戸出土遺物 …… 42
図24　11号溝出土板碑(1) …… 44
図25　11号溝出土板碑(2) …… 45
図26　11号溝出土石製品 …… 46
図27　五輪塔・不明石製品 …… 47
図28　11号溝出土遺物(1) …… 48
図29　11号溝・43号土壙出土遺物(1) …… 50
図30　11号溝・43号土壙出土遺物(2) …… 52

図31　11号溝出土遺物(2) …… 53
図32　11号溝出土遺物(3) …… 54
図33　11号溝出土遺物(4) …… 55
図34　43号土壙出土遺物 …… 57
図35　溝・土壙・井戸その他の出土遺物 …… 59
図36　長方形土壙主軸方位グラフ …… 64
図37　内耳土器口辺部形態 …… 67
図38　上遺跡遺構配置図 …… 70
図39　4号住居跡 …… 71
図40　4号住居跡出土遺物(1) …… 72
図41　4号住居跡出土遺物(2) …… 73
図42　5号住居跡及び15号土壙 …… 75
図43　5号住居跡出土遺物(1) …… 77
図44　5号住居跡出土遺物(2) …… 78
図45　5号住居跡出土遺物(3) …… 79
図46　5号住居跡出土遺物(4) …… 80
図47　1号埋甕炉及び埋甕展開図 …… 83
図48　2号埋甕 …… 84
図49　土壙(1) …… 85
図50　土壙(2) …… 86
図51　5号土壙出土遺物 …… 87
図52　土壙出土遺物(1) …… 88
図53　土壙出土遺物(2) …… 89
図54　土壙出土遺物(3) …… 90
図55　遺構外出土遺物(1) …… 94
図56　遺構外出土遺物(2) …… 95
図57　遺構外出土遺物(3) …… 96
図58　遺構外出土遺物(4) …… 98
図59　遺構外出土遺物(5) …… 99
図60　遺構外出土遺物(6) …… 100
図61　遺構外出土遺物(7) …… 102
図62　遺構外出土遺物(8) …… 103
図63　遺構外出土遺物(9) …… 105
図64　遺構外出土遺物(10) …… 107

図65　遺構外出土遺物(11) ……109
図66　遺構外出土遺物(12) ……110
図67　遺構外出土遺物(13) ……112
図68　遺構外出土遺物(14) ……114
図69　遺構外出土遺物(15) ……116
図70　遺構外出土遺物(16) ……117
図71　遺構外出土遺物(17) ……118
図72　遺構外出土遺物(18) ……119
図73　遺構外出土遺物(19) ……120
図74　遺構外出土遺物(20) ……122
図75　遺構外出土遺物(21) ……123
図76　遺構外出土遺物(22) ……125
図77　遺構外出土遺物(23) ……126
図78　遺構外出土遺物(24) ……127
図79　遺構外出土遺物(25) ……128
図80　遺構外出土遺物(26) ……129
図81　遺構外出土遺物(27) ……130
図82　遺構外出土遺物(28) ……131
図83　遺構外出土遺物(29) ……133
図84　遺構外出土遺物(30) ……134
図85　遺構外出土遺物(31) ……136
図86　遺構外出土遺物(32) ……137
図87　遺構外出土遺物(33) ……140
図88　遺構外出土遺物(34) ……141
図89　1号住居跡 ……144
図90　1号住居跡出土遺物(1) ……145
図91　1号住居跡出土遺物(2) ……146
図92　1号住居跡出土遺物(3) ……147
図93　2号住居跡 ……150
図94　2号住居跡出土遺物 ……151
図95　3号住居跡 ……152
図96　3号住居跡出土遺物 ……153
図97　土壙 ……156
図98　遺構外出土遺物 ……156

図99　雷遺跡全体図……165、166
図100 雷遺跡出土遺物 ……167

表　一　覧

表1　周辺遺跡一覧…… 6
表2　土　壙　一　覧 …… 33
表3　石　器　一　覧 …… 42
表4　施釉陶器一覧 …… 49
表5　陶　器　一　覧 …… 51
表6　軟質陶器一覧 …… 51
表7　青　磁　一　覧 …… 55
表8　内耳土器一覧 …… 56
表9　土師質土器一覧 …… 59
表10　4号住居跡出土石器一覧……74
表11　土壙出土石器一覧……92
表12　土製円盤一覧 ……132
表13　遺構外出土石器一覧 ……142
表14　1号住居跡出土遺物一覧 ……147
表15　2号住居跡出土遺物一覧 ……150
表16　3号住居跡出土遺物一覧 ……153

図 版 目 次

図版 1　庚塚遺跡　11号溝全景
〃　〃　11号溝断面
図版 2　庚塚遺跡　11号溝板碑出土状況
〃　〃　11号溝遺物出土状況
図版 3　庚塚遺跡　方形竪穴遺構・43号土壙・44号土壙
〃　〃　方形竪穴遺構
図版 4　庚塚遺跡　竪穴遺構・掘立柱建物跡
〃　〃　掘立柱建物跡
図版 5　庚塚遺跡　1号井戸
〃　〃　3号井戸
図版 6　庚塚遺跡　7号井戸
〃　〃　23号土壙
図版 7　庚塚遺跡　7号井戸・23号土壙・24号土壙
図版 8　庚塚遺跡　43号土壙断面
〃　〃　43号土壙
図版22　上遺跡　1号住居跡遺物出土状況
〃　〃　1号住居跡
図版23　上遺跡　2号住居跡
〃　〃　2号住居跡遺物出土状況
図版24　上遺跡　3号住居跡遺物出土状況
〃　〃　3号住居跡
図版25　上遺跡　4号住居跡
〃　〃　5号土壙
図版26　上遺跡　1号埋甕炉断面
〃　〃　1号埋甕
図版27　上遺跡　4号住居跡出土遺物
図版28　上遺跡　4号住居跡出土遺物
図版29　上遺跡　5号住居跡出土遺物
図版30　上遺跡　5号住居跡出土遺物
図版31　上遺跡　5号住居跡出土遺物
図版 9　庚塚遺跡　16号土壙
〃　〃　62号土壙
図版10　浄光寺堀跡
〃　浄光寺五輪塔
図版11　庚塚遺跡　遺構外出土遺物
図版12　庚塚遺跡　11号溝出土石器
図版13　庚塚遺跡　石製品類
図版14　庚塚遺跡　11号溝出土遺物
図版15　庚塚遺跡　11号溝出土遺物
図版16　庚塚遺跡　11号溝出土遺物
図版17　庚塚遺跡　11号溝・43号土壙出土遺物
図版18　庚塚遺跡　11号溝出土遺物
図版19　庚塚遺跡　井戸・土壙出土遺物
図版20　上遺跡調査前状況（南方ヨリ）
〃　国道122号バイパス現状（上遺跡）
図版21　上遺跡　1号住居跡断面
〃　〃　1号住居跡遺物出土状況
図版32　上遺跡　5号住居跡出土遺物
図版33　上遺跡　5号土壙出土遺物
図版34　上遺跡　土壙出土遺物
図版35　上遺跡　土壙出土遺物
図版36　上遺跡　1号埋甕土器
〃　〃　2号埋甕土器
図版37　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第1・2・3群）
図版38　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第3群）

図版39　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第４群）
図版40　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第５群）
図版41　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第６群）
図版42　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第６群）
図版43　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第６・７群）
図版44　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第８群）
図版45　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第８群）
図版46　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第８群）
図版47　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第８群）
図版48　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第９群）
図版49　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第９群）
図版50　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第９群）
図版51　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第９群）
図版52　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第９群）
図版53　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第９群）
図版54　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第10群）
図版55　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第10群）
図版56　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第10群）
図版57　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第10群）
図版58　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第10群）
図版59　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第10群）
図版60　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第11群）
図版61　上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第12群）
図版62　上遺跡　遺構外出土遺物（土製円盤）
図版63　上遺跡　住居跡・土壙及び遺構外出土遺物（石器）
図版64　上遺跡　遺構外出土遺物（石器）
図版65　上遺跡　遺構外出土遺物（石器）
図版66　上遺跡　１号住居跡出土遺物
図版67　上遺跡　１号住居跡出土遺物
図版68　上遺跡　１号住居跡出土遺物
図版69　上遺跡　２号住居跡・３号住居跡出土遺物
図版70　雷遺跡調査前状況
図版70　雷遺跡トレンチ断面
図版71　雷遺跡トレンチ・グリット出土遺物

Ⅰ　調査に至る経過

国道122号線は、館林市より西走し、太田市東部下小林付近で急に北上する。この地域で、竜舞と下小林を北西方向に貫くコースでバイパスを建設する計画が立てられ、昭和55年度開通を目指して、53年度から工事が着工される事になった。それに伴い竜舞と下小林地域に於ける、約3㎞の間に確認された5ケ所の遺跡につき工事に先行する事前調査を実施するに至った。調査に先立つ協議は、県教育委員会と委託側の太田土木事務所が行ない、調整されたものを事業団が受託し実施するという方式がとられた。遺跡の名称は、字名をとって、南から小町田B、賀茂、庚塚、上、雷遺跡と命名した。このうち庚塚、上、雷遺跡は、分布調査の結果から、密度、面積共に小規模なものと予測されたため、期間等を考慮し、小町田Bと賀茂両遺跡に先立って53年度に調査が行なわれる事になった。

各遺跡の調査対象面積と期間及び担当者は下記の通りである。

調査遺跡	調査面積	調査期間	調査担当者
庚塚遺跡	3,100㎡	昭和53年8月7日～12月1日	長谷部達雄　西田健彦　大木紳一郎
上遺跡	2,160㎡	昭和53年11月29日～12月27日	長谷部達雄　西田健彦　大木紳一郎
雷遺跡	1,450㎡	昭和53年12月4日～12月27日	長谷部達雄　西田健彦　大木紳一郎

調査の方法は、遺跡の範囲、遺構面、包含層の確認を主な目的として、巾3mのトレンチを設け、遺構、遺物の測量には、3mメッシュのグリッドを設定して、平板測量と遣り方測量を併用した。なお、メッシュの軸方向は、道路建設用のセンターポイントを利用したために、各遺跡で若干角度が異なっている。遺構確認の後は、全面調査を行なうように努めたが、路線外の部分については、工事用道路が敷設されているため、拡張調査を行なう事が出来なかった。

調査面積については、協議後に群馬県教育委員会文化財保護課が現地の分布調査を実施し、その結果より算定されたものである。又分布調査により推定された遺跡の内容は下記の通りである。

庚塚遺跡――土師器片（奈良、平安以後）の散布が認められる。集落跡か。

上遺跡――縄文土器片（中期が主）の散布が多く認められる。集落跡の可能性あり。

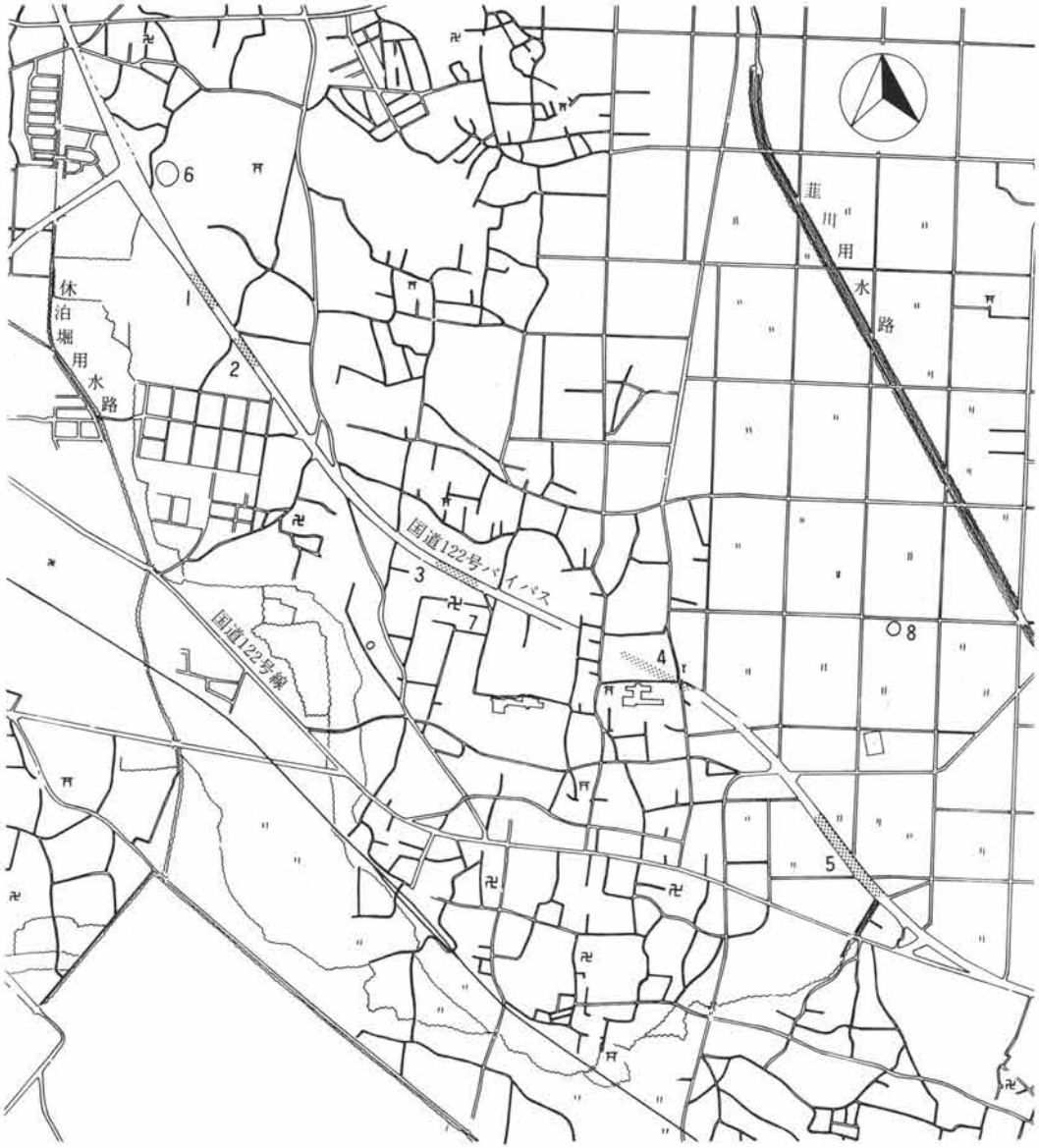
雷遺跡――縄文土器・土師器片の散布がまばらに認められる。包蔵地か。

II　地理的環境

太田市周辺の地形は、北側に古生代の第三紀層からなる金山丘陵がそびえ、北西側には広大な大間々扇状地が開析し、東及び南方には低台地と沖積平野が展開している。金山丘陵は、現在の渡良瀬川の西側を北西一南東に延びる八王子丘陵の南端にあたり、古生層の基盤の上に堆積した溶結凝灰岩から成っている標高223mの独立丘である。頂上からは周辺の平野部や利根川、渡良瀬川などが一望のもとに見渡す事ができ、自然の要害として優れており、室町時代には名山城と謳われる金山城が築城された。太田市の西側に展開する大間々扇状地は、大間々付近を扇頂とし、かつて八王子丘陵の西側を流れていた渡良瀬川によって形成されたものである。その規模は県内随一の広大さで、西は伊勢崎市、東は太田市をその扇端とし、同心円状のきれいな等高線を描いている。この大間々扇状地は上部ローム堆積以前に形成され、その後、渡良瀬川は八王子丘陵の東側に流路を変更し、足尾山地との間に、新たに渡良瀬扇状地を形成し、現在に至っている。太田市の東南部、渡良瀬川と利根川に挟まれた地域には、標高30～40mの低台地が広がっている。この低台地は、渡良瀬川やその支流などによって浸食されており、縁辺では小規模な崖が形成されている。太田市東部におけるこの低台地の東側には、更に渡良瀬川の流路変更や氾濫によって形成された自然堤防や後背湿地が展開している。今回調査を行なった地域は、現在の竜舞の村落をのせる、標高30～35mの低台地で休泊台地と呼ばれる。休泊台地はその基盤に凝灰質粘土層が堆積し、その上に中部ローム層以上を乗せる洪積台地である。長さは約2㎞、巾1㎞の狭小な台地で、周囲の低地との比高差は2～3mを測る。又休泊台地の北側にはほぼ同規模の小低台地が隣接しており、韮川台地と呼ばれる。休泊台地の西側では、対面する台地との間に挟まれた低地があり、現在「休泊堀」と呼ばれる小河川が流れている。又台地の東側に展開する低地には、矢場川、韮川の両河川が南流している。いずれも渡良瀬川の支流で、特に矢場川は渡良瀬川が現在の流路に変更する以前の遺流であると考えられている。休泊台地周辺の低地は、これらの渡良瀬川支流の小河川による氾濫や流路変更等により浸食や堆積がくり返されて、現在見られる地形になったものと思われる。この乱流に見られる土砂の堆積は相当な量で、後述する塚廻り古墳群を埋没させる程であった。しかし、それも平安時代末に降下した浅間山墳出のB軽石が比較的乱れのない堆積状況を見せる事から、中世以後においては安定したものと予想されている。

現在では、休泊台地及び韮川台地上には桑畑を主として営む集落が占地し、周辺の低地は水利施設の整った水田となっている。

建設される予定の国道122号線太田バイパスは、この休泊台地上を北西から南東へ縦断する計画であり、今回調査の行なわれた遺跡は低地から低台地にかけての広範な地域を対象としている。次に、この休泊台地を中心とした周辺地域の遺跡の分布状況及び歴史的変遷を論述してみたい。



1 雷 遺跡　2 上 遺跡　3 庚塚遺跡　4 賀茂遺跡　5 小町田遺跡　6 大日山古墳
7 浄光寺　8 塚廻り古墳群　（1／20.000）

図1　国道122号バイパス路線計画図及び周辺遺跡

Ⅲ　歴史的環境

太田市東部地域における遺跡は、先土器時代を除いて低台地とその縁辺を中心に比較的濃厚に分布している。しかし分布調査が主であったため、その明確な時期や内容については不明なものが多い。実際に発掘調査の行なわれた例は10遺跡ほどであり、しかも限られた地域に集中しているため[(1)]に当地域における原始、古代像を詳述するのは難かしい。そこで分布調査の結果をも含めて、簡単に歴史的環境を概括するにとどめたい。当地域における明確な生活跡は縄文時代から始まる。早期については良好な資料が認められないが、前期になると低台地の縁辺部を中心に遺跡が認められるようになる。主なものでは県教育委員会の調査で明らかにされた太田市竜舞の清水田遺跡で、土壙と埋設された土器が検出されており、同様に群馬県教育委員会と当埋蔵文化財調査事業団との調査による小町田遺跡でも、前期黒浜式、諸磯式の各住居跡が検出されている[(2)]。又、休泊台地の南側を東流する休泊川を挾んだ対岸の台地上には分布調査で確認された間之原遺跡があ[(3)]り、前期土器片の出土をみている。次の中期に至って、若干遺跡数は減少するが、前述の小町田遺跡、間之原遺跡で多量の土器片が出土している。遺構では、小町田遺跡で加曾利Ｅ式を主とした土壙100基、住居跡30軒と、比較的まとまった数が検出されている。後期のものは小町田遺跡、間之原遺跡等で認められるが、中期に比べて遺物の量は少ない。以上の事から縄文時代を概括してみると、早期には無人に近い荒野だったこの地に前期になると台地周辺に小規模の集団が進出しはじめ、中期に至ってある程度まとまった村落を形成してゆく過程が想像される。

弥生時代の遺跡については、当地域においてはほとんど認められていない。若干確認できたのは、休泊台地の北方3.5㎞、金山丘陵の東南端に位置する焼山遺跡で、中期及び後期の赤井戸式と櫛描文系の土器片が数点出土している。弥生時代後期の遺跡は、桐生市周辺から足利市にかけての地域に、丘陵周辺部を主として散在しており[(4)]、焼山遺跡の場合はこの分布の南端にあたるものと思われる。休泊台地周辺は広大な低湿地帯になっており、水稲耕作に適した条件も備えているが、この地が開発されるのは次の古墳時代まで待たなくてはならない。

古墳時代が到来すると、この地域はにわかに活気づき、集落が営まれ、古墳も多く築かれるようになる。集落は古墳時代の初頭からその存在が認められ、比較的早い時期に開発が行なわれた事を示唆している。清水田遺跡、沖之郷遺跡、焼山遺跡などをはじめとしてその他にも数ケ所が確認されている。清水田遺跡と沖之郷遺跡は正式報告が未刊のため詳細は不明であるが[(5)]、Ｓ字状口辺台付甕を伴ういわゆる石田川式の土器がかなり出土しているようである。焼山遺跡については遺構の検出がされなかったが、Ｓ字状口辺台付甕が数点出土している。本矢場薬師塚古墳は休泊台地から北方へ約３㎞程の平野内の微高地上に構築された100ｍクラスの前方後円墳で、粘土槨の主体部を持ち、内部から舶載獣形鏡、石釧、銅鏃、鉄刀、玉類等の豊富な副葬品が発見され、

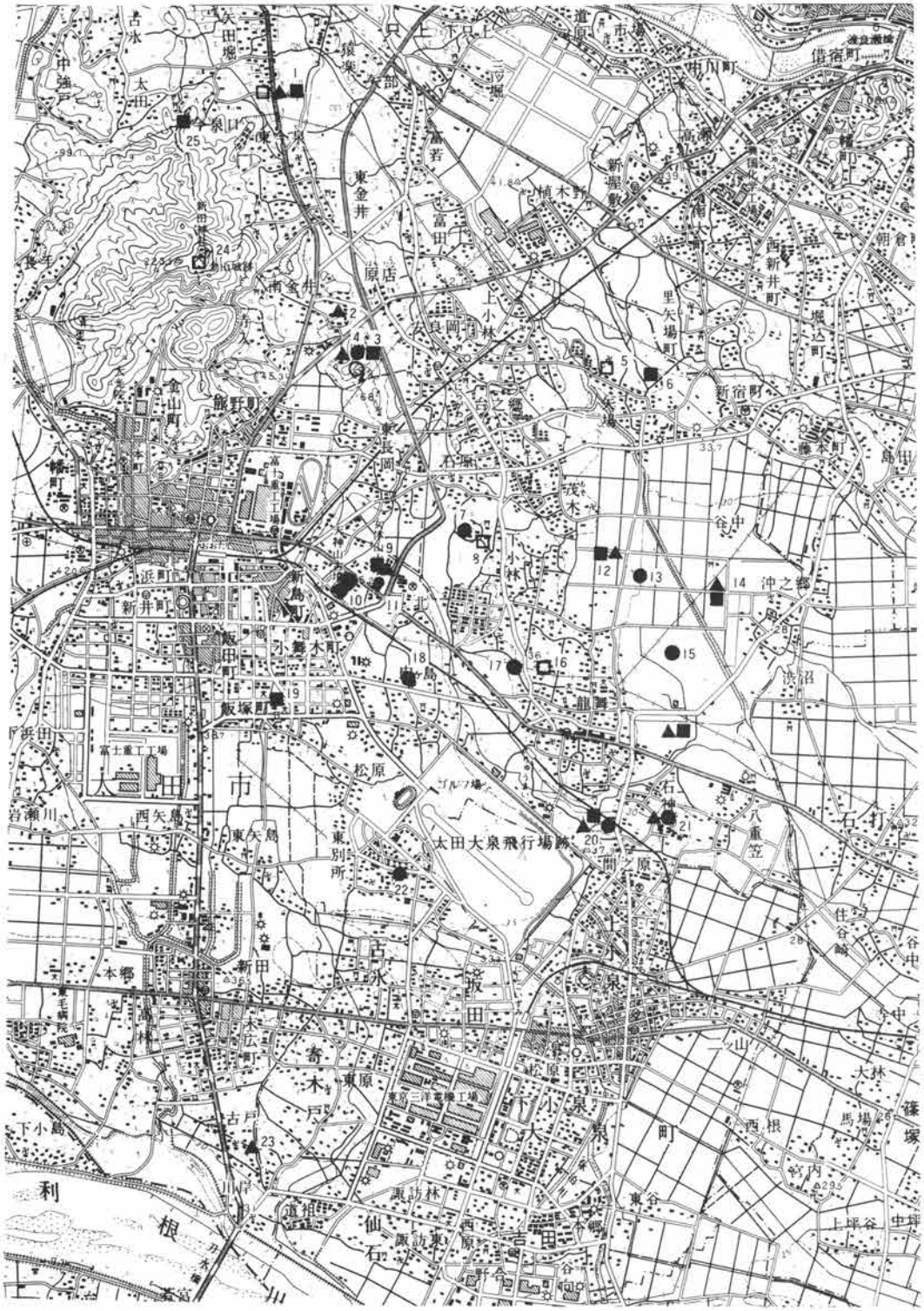


図２　周辺遺跡分布図

（１／５万）

表1 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種類	時期	備考
1	大道東遺跡	太田市大字東今泉只上	包蔵地	縄文・弥生 古墳	昭和41年、駒沢大学調査。
2	塩ノ山遺跡	太田市大字東金井字塩ノ山	包蔵地	縄文・古墳	
3	焼山遺跡	太田市大字東長岡字焼山	包蔵地	先土器・縄文 弥生・古墳	昭和43年、発掘調査。
4	焼山古墳群	太田市大字東長岡字焼山	古墳群	古墳	梅沢重昭氏調査。
5	矢場氏累代の墓	太田市大字矢場字寺境内	墳墓	天正年間	恵林寺境内。
6	寄合遺跡	太田市大字矢場字寄合	集落跡	奈良・平安	
7	大日山古墳	太田市大字下小林字大倉	古墳群	古墳	埴輪、直刀出土。
8	下小林館跡	太田市大字下小林字大倉	城館跡	中世	
9	県立太田工業高校 北裏遺跡	太田市大字内ケ島東長岡	集落跡	縄文・古墳	昭和47年、発掘調査。
10	天神山古墳	太田市大字内ケ島字天神	古墳	古墳	前方後円墳。昭和16年国指定。45年調査。
11	女体山古墳	太田市大字内ケ島字女体	古墳	古墳	帆立貝式前方後円墳。昭和2年国指定。
12	清水田遺跡	太田市大字茂木字清水田	集落跡	縄文・古墳	昭和50～51年調査。
13	塚井古墳群	太田市大字茂木字塚井	古墳群	古墳	昭和49～50年調査。
14	沖之郷遺跡	太田市大字沖之郷字二の堰遠笠、後原、安房田	集落跡	古墳	昭和49年調査。
15	塚廻り古墳群	太田市大字竜舞字塚廻り	古墳群	古墳	昭和52年調査。昭和52年県指定。
16	浄光寺五輪塔	太田市大字竜舞字上耕地	墓石	中世	
17	庚塚古墳	太田市大字竜舞字庚塚	古墳	古墳	
18	内ケ島古墳群	太田市大字内ケ島字北	古墳群	古墳	
19	無名称	太田市飯塚町字宮前、飯田前	(祭祀跡)	古墳	手捏土器出土。
20	間之原遺跡	太田市大字竜舞字高原	古墳・集落跡	縄文・古墳	古墳すべて滅失。
21	石神遺跡	太田市大字竜舞字石神	包蔵地	縄文・古墳	
22	長良神社古墳	太田市大字東別所字本郷	古墳	古墳	直刀出土。
23	無名称	太田市大字古戸字赤城	包蔵地	縄文・古墳	
24	金山城跡	太田市大字太田字金山	城館跡	室町	昭和9年国指定。
25	管ノ沢遺跡	太田市大字毛里田字今泉口	窯跡	奈良・平安	製鉄遺構、須恵器窯

本地域で最も古い古墳の一つとして注目される。又、和泉式土器が出土している太田工業高校北裏遺跡[6]は、休泊台地の西側の低地を挟んだ微高地上に立地しており、同微高地上には天神山古墳[7]、女体山古墳[8]が存在し、時期的にも一致する事から集落と墓域という一連の関係で把える事ができる。又、距離はやや離れるが、太田市の西南地域に分布する古墳や集落跡も、当地域の古墳時代の環境を考える上に重要である。学史的にも著名な石田川遺跡[9]や高林遺跡[10]、その他にも五反田遺跡、堂原遺跡[11]など休泊台地周辺地域以上の密度で集落遺跡が集中している。古墳についても、県内でも古い段階[12]の前方後円墳と思われる朝子塚古墳[13]をはじめ、中原古墳[14]、すでに消滅している牛沢頼母子古墳など比較的古式の様相をもった古墳が多く見受けられる。それまで開発される事のなかった広大な低地を中心にして、このように古式古墳や古墳時代初頭の集落がかなり密に、しかも時を同じくして存在するという事は、単に農業技術の発展や人口の増加等の理由では説明しきれない問題があるように思える。これを他地域からの「移住」という事象によって理解しようとする意見もある。

さて、休泊台地[11]では、このような古墳時代初頭の大きな動きの中で、台地の西、及び東側に展開する広大な低地を生産基盤として、かなり大きな勢力が生まれてきたものと思われる。それを如実に示すのが天神山古墳である。規模は全長210m、高さ16mの前方後円墳で、東国一、二を争う雄大さである。墳丘からは長持形石棺の一部が発見されており、その他に坩形土器[15]、朝顔形埴輪、円筒埴輪などが出土している事や、墳丘の平面形態の特徴などから、５世紀中頃から後半にかけて構築されたものと推定されている。又、天神山古墳の東側に主軸を同じくして女体山古墳が立地している。これは径100m程の帆立貝式前方後円墳で、時期は５世紀中頃に比定されており、天神山古墳とほぼ同時期、あるいはやや早い段階で構築されたものと考えられている。この天神山古墳、女体山古墳に象徴される強大な支配力のもとに置かれた太田市東部地域[16]は、やがて、小地域の支配へと分散していく様相が窺われる。時期の明確なものは少ないが、６世紀～７世紀に推定される古墳群が各丘陵上や台地上、微高地上などに散在するようになる。前述の焼山遺跡と同じ丘陵上に立地する前方後円墳と円墳からなる焼山古墳群、本遺跡の北方0.4kmの微高地上に立地する大日山古墳群、天神山古墳の南１kmには、５基の円墳からなる内ケ島古墳群、さらに休泊台地東側の低地上には豊富な埴輪群を出土した塚廻り古墳群と塚井古墳群、北方２kmには矢場川古墳群などが分布している。一方、休泊台地上ではかつて数基の古墳が存在したとされているが[17]、現在は径15m程の小円墳である庚塚古墳を１基見るのみとなっている。この時期の生活跡としては[18]、清水田遺跡、小町田遺跡などが調査されており、鬼高期の住居跡が検出されている。更に分布調査等の所見からは、この地域において、かなり広範囲に集落が分散していたものと推定される。

奈良、平安時代のものについては、前述の清水田遺跡、小町田遺跡、その北方1.5km程の矢場川右岸台地上に占地する寄合遺跡等[19]があげられる。検出された住居跡の軒数からかなり大規模な集落の存在が推定され、それを支える生産基盤として、休泊台地の東南に展開する広大な低地が着

実に開発されたものと思われる。

中世になるとようやく当地域も文献にその名が見えるようになってくる。休泊台地の中央部を占める現在の竜舞は、鎌倉時代に伊勢神宮の所領として、米や絹布等を上納する「寮米御厨」であったと推定されている。又南北朝以後においては、すでに他地域の有力な寺に寄進されたり、武家による侵奪が度重なり、支配の安定しない地域であった。更に室町時代には、金山城を中心に勢力を張った由良氏、そして後北条氏へと地域の支配権は移り変わってゆく。この時期の遺跡としてあげられるのは、休泊台地の北西部、低地を臨む崖付近に築かれている下小林館、庚塚遺跡の南に接する浄光寺境内に現存する4基の五輪塔、矢場川上流の矢場村に存する五輪塔、宝篋印塔等である。下小林館は大倉城とも言い、南北朝の頃は吉良氏の所領で、後に由良氏の前身である横瀬氏のものとなり、天正年間には、その一族に連らなる林左京介とその子孫の居城であったと伝えられている。又、浄光寺五輪塔は、2基の空・風輪が後補された以外は完存しており、そのうちの1基の地輪には、元弘三年（1333年）と刻銘されている。又境内には室町以後にまで下る五輪塔の水輪・地輪寺が散乱しており、各時代にわたるかなりの数が造立されていたものと推定される。矢場村の五輪塔、宝篋印塔は矢場恵林寺境内にあり、由良氏の一族である矢場氏の墓石群と推定されている。時期は主に永禄～天正年間のものが多い。文書や銘文などで、由緒や時期の比較的明らかなものは以上であるが、その他に地名や堀跡、伝承などから、当地域には鎌倉～室町時代における館跡や墓石群は比較的多く存在したものと思われる。

〈註〉

（1）『群馬県遺跡台帳』Ⅰ（東毛編）　群馬県教育委員会　昭和46年
（2）『清水田遺跡、太田東部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報』Ⅲ・Ⅳ　群馬県教育委員会　昭和51・52年
（3）『小町田遺跡、太田東部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報』Ⅴ　群馬県教育委員会　昭和53年
（4）『焼山遺跡総合調査報告』　はにわの会　昭和43年
（5）『沖之郷遺跡、太田東部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ　群馬県教育委員会　昭和49・50年
（6）『太田工業高等学校北裏遺跡発掘調査報告』　太田市教育委員会　太田工業高校地歴部　昭和47年
（7）『史跡天神山古墳外堀発掘調査報告書』　群馬県教育委員会　昭和45年
（8）　註（7）に同じ
（9）『石田川』　尾崎喜左雄　松島栄治　今井新次　昭和43年
（10）「群馬県高林遺跡の調査」　大塚初重　小林三郎　『考古学集刊』第三巻下　昭和43年
（11）『群馬県太田市五反田、諏訪下遺跡』　太田市教育委員会　昭和53年
（12）『群馬県太田市堂原遺跡発掘調査報告書』太田市教育委員会　昭和48年
（13）昭和31年、群馬大学史学研究室　外形調査
（14）斎藤　忠　「太田市高林古墳群」　『考古学年報』3　昭和30年
（15）註（7）に同じ
（16）註（7）に同じ
（17）『塚廻り古墳群』　群馬県教育委員会　昭和55年
（18）『上毛古墳綜覧』　群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯　昭和13年
（19）太田市教育委員会　中里吉伸氏より御教示

〈参　考　文　献〉

『山田郡誌』　昭和14年
『群馬県古城累址の研究』上巻　山崎　一　昭和46年
『日本の考古学』Ⅳ　古墳時代　上　昭和41年
『群馬のおいたちをたずねて』上　木崎、野村、中島　編　昭和52年

Ⅳ　庚塚遺跡の調査

1　庚塚遺跡の概要

庚塚遺跡は太田市竜舞にあり、休泊台地の中央平坦部に位置している。標高は現在の地表面で35～36mを測る。調査前の状況は一面に桑畑であったが、明治時代頃は雑木林であったと伝えられる。

事前の分布調査から、奈良、平安時代の集落跡が予想されたため、3mメッシュのグリッドを設定し、遺構の確認と分布範囲の確定を行なった。

土層は地山と思われるローム層まで均質な茶褐色土層が堆積する。その厚さは30～40cm程で、ローム面との境が比較的明瞭であり、漸移層は見られない。この事から近世以後の土地改良で削平、平坦化された可能性が強い。又茶褐色土層に土師器の小破片や現代陶磁器を含むが、極めて少量と判断されたため、調査区全体をローム面まで一気に茶褐色土を削除することになった。

遺構は、中世～近世の溝及び土壙を主体とすることが判明し、当初予想された住居跡はまったく検出されなかった。

全面調査の結果、検出された遺構は、溝12条、井戸跡7基、方形竪穴遺構と掘立柱建物跡が各1棟、土壙122基、大小のピット群であった。近世以後の溝や数基の土壙を除けば、調査区中央部に遺構が集中しており、本遺跡の主要な遺物である中世陶器もこの地域から集中して出土する。

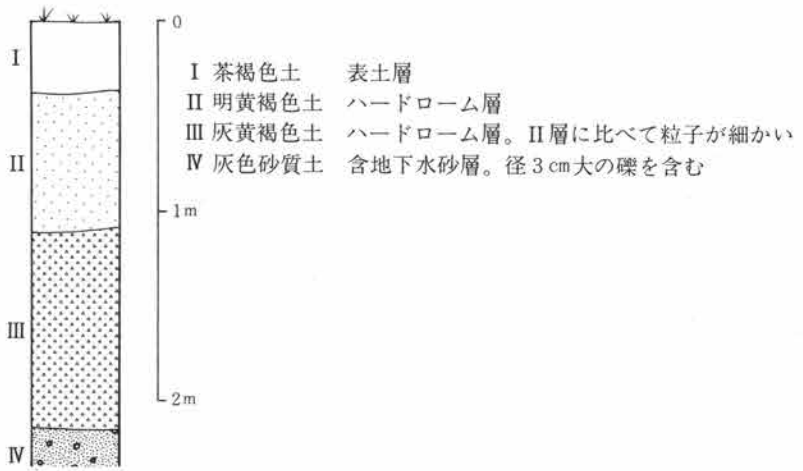


図3　庚塚遺跡土層断面図

2　遺構について

(1)　溝

1 号 溝（図4）

調査区の東南部分で検出された。西南から東方向へ延びる溝で、C―38グリッド付近で強く屈曲し走向が変わる。幅は約1mで深さは80cm程である。断面は「薬研堀」の形状を呈する。重複する2号溝よりは古いが6号土壙よりは新しい。又遺物がほとんど出土していないため具体的な時期については不明だが、近世以後のものと思われる。

2、3、4、5、6、7、10、12号溝（図4）

いずれも現在桑畑になっている土地区画の溝である。覆土も現在の耕作土と同質の土が堆積している。土層に浅間山の火山灰であるA軽石（天明三年）を含むが、純堆積ではなく、他の軽石と混在している。

8、9号溝（図4）

11号溝の南側に並行して走る。2条とも14m前後の長さで巾は1m、深さは40cm程の規模である。長方形土壙と重複するが覆土が近似するため、先後関係は不明確である。8号溝からは内耳土器の口辺部破片が、9号溝からは底部破片が1点づつ出土している（図35)。

11 号 溝（図5、6）

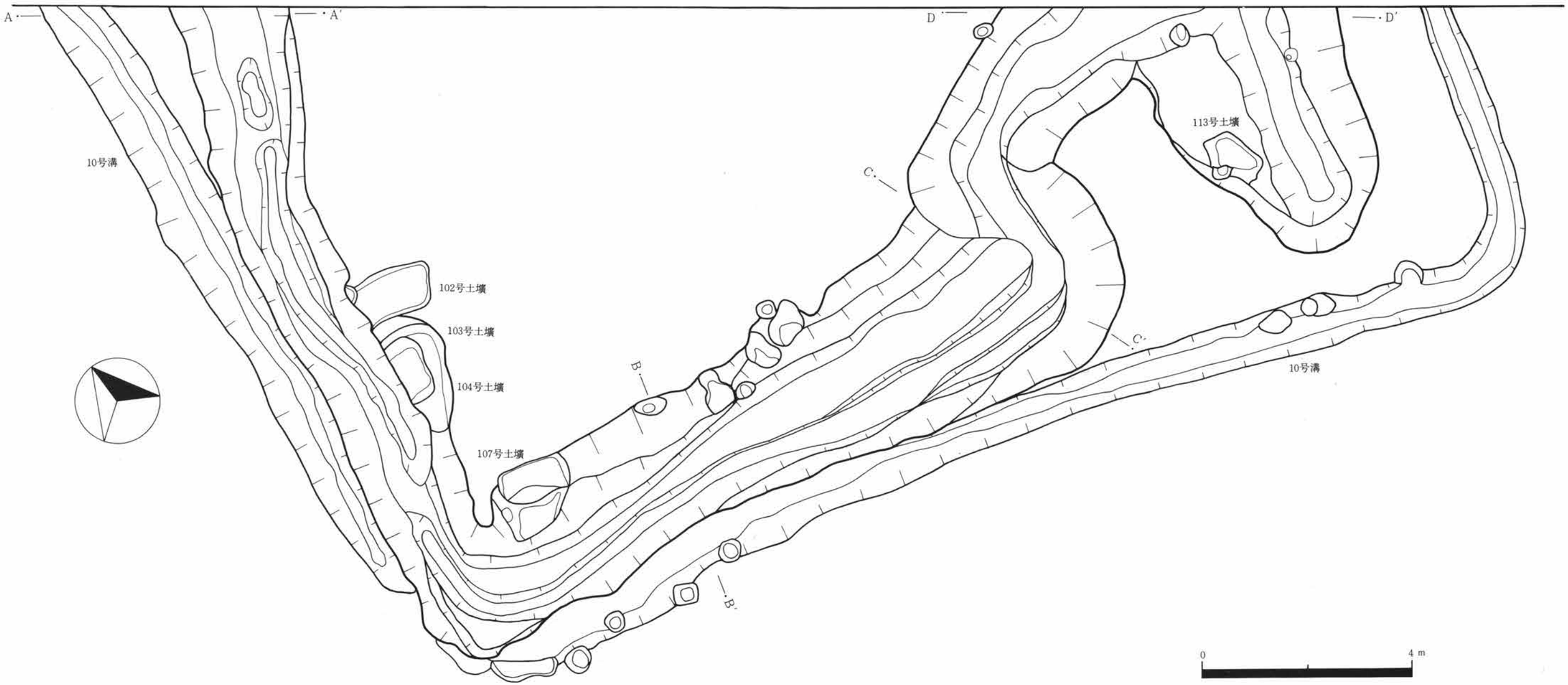
調査区中央部の北半で確認された。大きく「コ」の字状の形態を呈する部分であり、E―16グリッド付近で南北方向から東方向に走向を変え、H―20グリッド付近で小さく「コ」の字状に屈曲して土橋状の張出し部分を造り出している。溝の幅は東西に走る部分が最も広く、確認面で約4mを測り、南北に走る部分は1.5～2mと比較的狭くなっている。深さは現地表面から1.5m程を測り、断面形は全体的に「薬研堀」の形状を呈しているが、東西方向部分では底面が平坦で広いため、「箱薬研」の形状に近似するところもある。土層断面の観察から、その溝が機能していた当時、底面が埋没してやや浅くなったためか、底面部分のみを深く掘り直したと思われる場所が認められる(図5参照)。溝の覆土は土質の相異により7層に分けられるが、概ね上下の2層に大別される。下層は粘性が強く、鉄分とマンガン分の凝集が多く見られるため、水分をかなり多く含んでいた可能性がある。上層は主に暗褐色～黒褐色を呈する有機質分の多い土である。遺物はそのほとんどが中層以下から出土しており、上層からは近世以後のものが数点出土したのみである。

10号溝は、現在耕作中の畑を区画する溝と考えられるが、その走向が11号溝とほぼ並行する事

図4　庚塚遺跡遺構配置図

0　10m

（縮尺 1/200）



（縮尺　1／80）

図5　11号溝平面図

から現在の畑区画がなされた最近まで、この11号溝の痕跡は若干くぼんだ状態で残っていたと思われる。

出土遺物は全体的に散布するが、強いていえば、南西コーナー部分に集中する傾向がある。内容は中世の遺物がほとんどで、板碑、石臼、五輪塔等の石製品や施釉陶器や軟質陶器等を主体としている。これらは、遺構が溝である事、破片がほとんどである事、一個体の遺物で隣接する43号土壙出土品と接合できる事等から、使用不能になって廃棄されたものと考えられる。又出土遺物は底面から中層まで万遍なく包含されている事から、少なくとも溝覆土の下層が堆積する間に常に廃棄されていたと思われる。

以上のように、11号溝は「コ」の字状に屈曲する部分の平面形態や規模の大きさ、又出土遺物等から想定して、おそらく中世の館跡を囲む堀跡であったろうと思われる。又現在の滞地下水層を掘り込んで構築されている事から、当時も堀の下位に水を湛えていた可能性が強いが、機能的

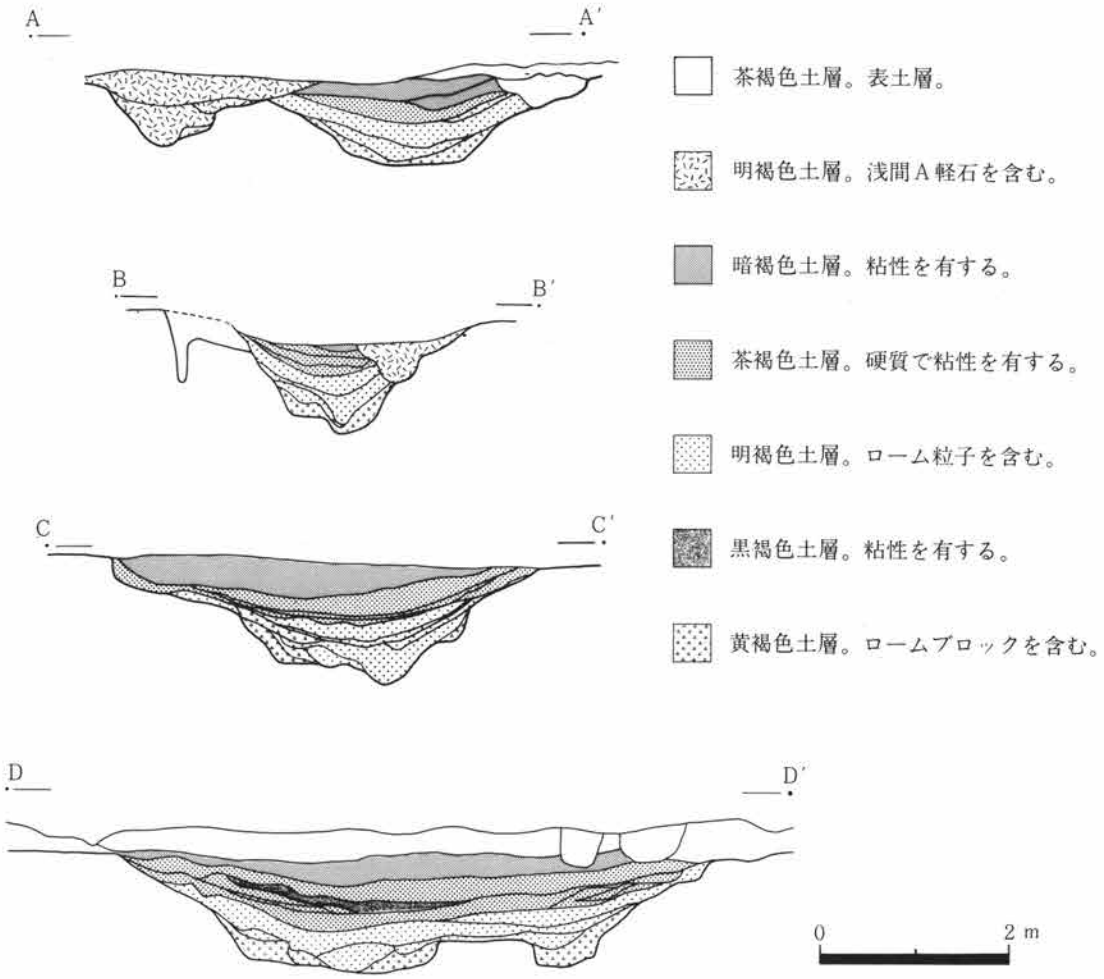


図6　11号溝断面図

に水堀であったか空堀であったかは不明である。

(2)　方形竪穴遺構（図7）

F－13グリッドに1基検出された。長辺2.68m、短辺2.65mの長方形を呈し、他の遺構との重複はない。短軸はN－17°－Eの方向である。ローム層を、約25cm堀り下げてあり、床面はほとんど水平で北東部を除いて硬くしまった床面を検出できた。覆土には、ロームブロックを多量に含む層が厚く堆積しており、自然堆積層にこの種の土層が認められないことから判断すると、人為的に埋塡された可能性が強い。床面の四隅と東西の壁際のほぼ中央に1ケ所づつ、計6ケ所（3対)の柱穴が検出された。柱穴の大きさは、直径30～40cmの円形で、深さ40～50cmである。また、中央部に直径約50cm、深さ8cmの浅い皿状のピットも検出されている。この遺構の床面中央から北壁の東にかけて、巾60cm、長さ1.5mの範囲に灰が散っている。しかしながら、炉跡及び、竈に相当しうる施設は全く認められず、また焼土等も発見されなかった。従って、本遺構を「方形竪穴遺構」と呼称する次第である。住居跡であるとするならば、移動式竈のようなものを想像すればよいのであろうか。11号溝との関係については、遺構の主軸方向が異なっているが、出土遺物が小破片ながらも11号溝のものと同じ時期のものである事、竈や炉などの初期の炊飯施設を持たない事などから、中世のものである可能性が強い。これと同じような遺構は県内でも数例が確認されており、又他県においても中世館跡に付随した検出例が増加している。その性格については、各遺跡毎に他の遺構との位置関係、遺物の出土状況などが若干異なっているため、一定の見解を出すには至っていない。主に住居跡や、厨房に付属する貯蔵施設などが考えられるが、本遺跡例の検出状況からは、そのどちらとも推定出来るような積極的証拠は認められなかった。

(3)　掘立柱建物跡（図8）

方形竪穴遺構の南、約1.5m離れて位置する。主軸方向はN－30°－E、桁行3.7m、梁間3.5mのほぼ正方形を呈する。桁行は1.1m－1.1m－1.5m、梁間は1.8m－1.8mの柱間をもつ、2間3間の建物であると推定される。柱穴は直径30～40cmの円形で、深さは20～40cm程のものである。中央部から南東部にかけては土壙群と重複しており、そのため南の梁の中央の柱穴は検出されなかったが、その地点での土層観察から判断すると、掘立柱建物跡が土壙群に先行すると考えられる。

方形竪穴遺構と主軸方向は異なるが、縦列して位置する事から両者は意識的に構築されたとも考えられ、同時存在の可能性がある。しかし遺物が全く出土していないために明確な時期決定は困難である。

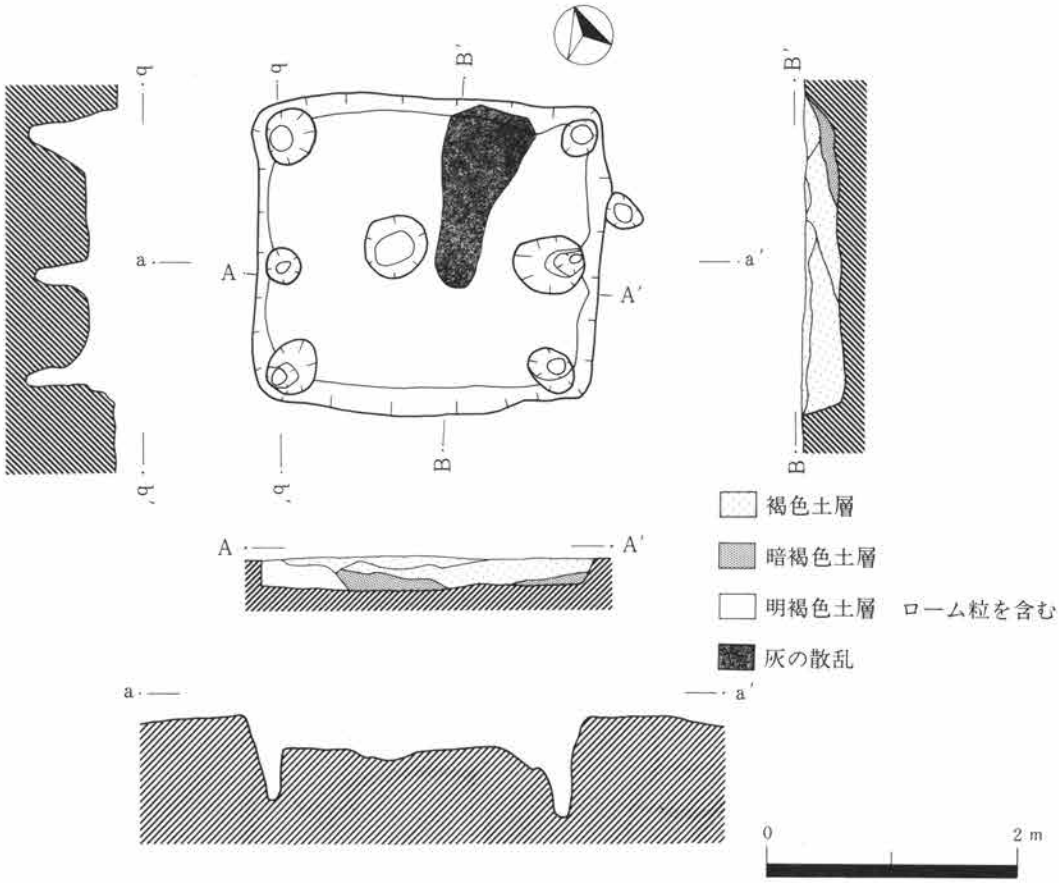


図7　方形竪穴遺構

(4) 井　戸　跡（図9）

1号井戸（図9－1）

西側は、32号土壙により一部壁が破壊されている。平面形は、直径1mの円形で深さは約1.5mを測り、下部は崩壊のため若干凹凸しているが、原形は円筒状であったと思われる。又底面は浅い皿状を呈する。覆土は、ローム粒子を含む褐色土が主体で、下部の層はローム土が厚く堆積している。常滑産と思われる甕片と軟質陶器の擂鉢が出土している。

2号井戸（図9－2）

平面形は、直径1.9mの円形で深さは1.2mを測る。東側壁面は、崩落のため凹凸が激しいがおそらく円筒状であったと思われる。底面は平坦で、ローム層下の砂層にまで達している。調査中に地下水の湧出をみた。覆土は、ロームブロック及びローム粒子を含む暗褐色土ないしは、黒褐色土でほぼ水平に堆積している。自然堆積の過程で壁面から崩れ落ちたローム粒子を含んでいっ

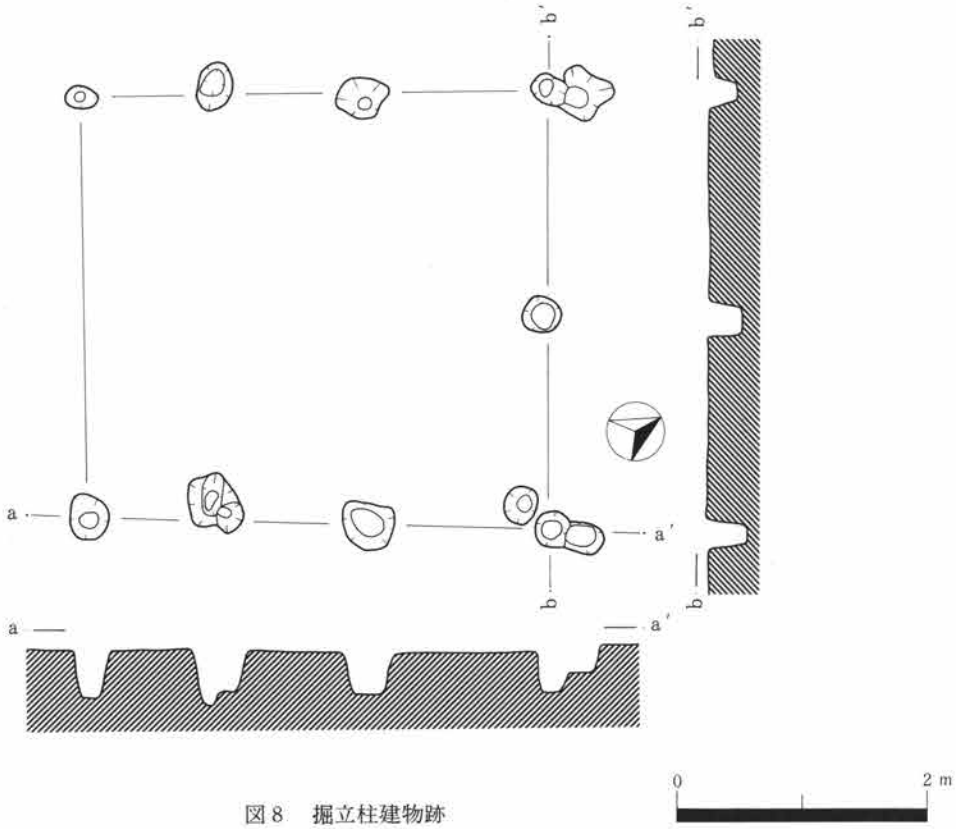


図８　掘立柱建物跡

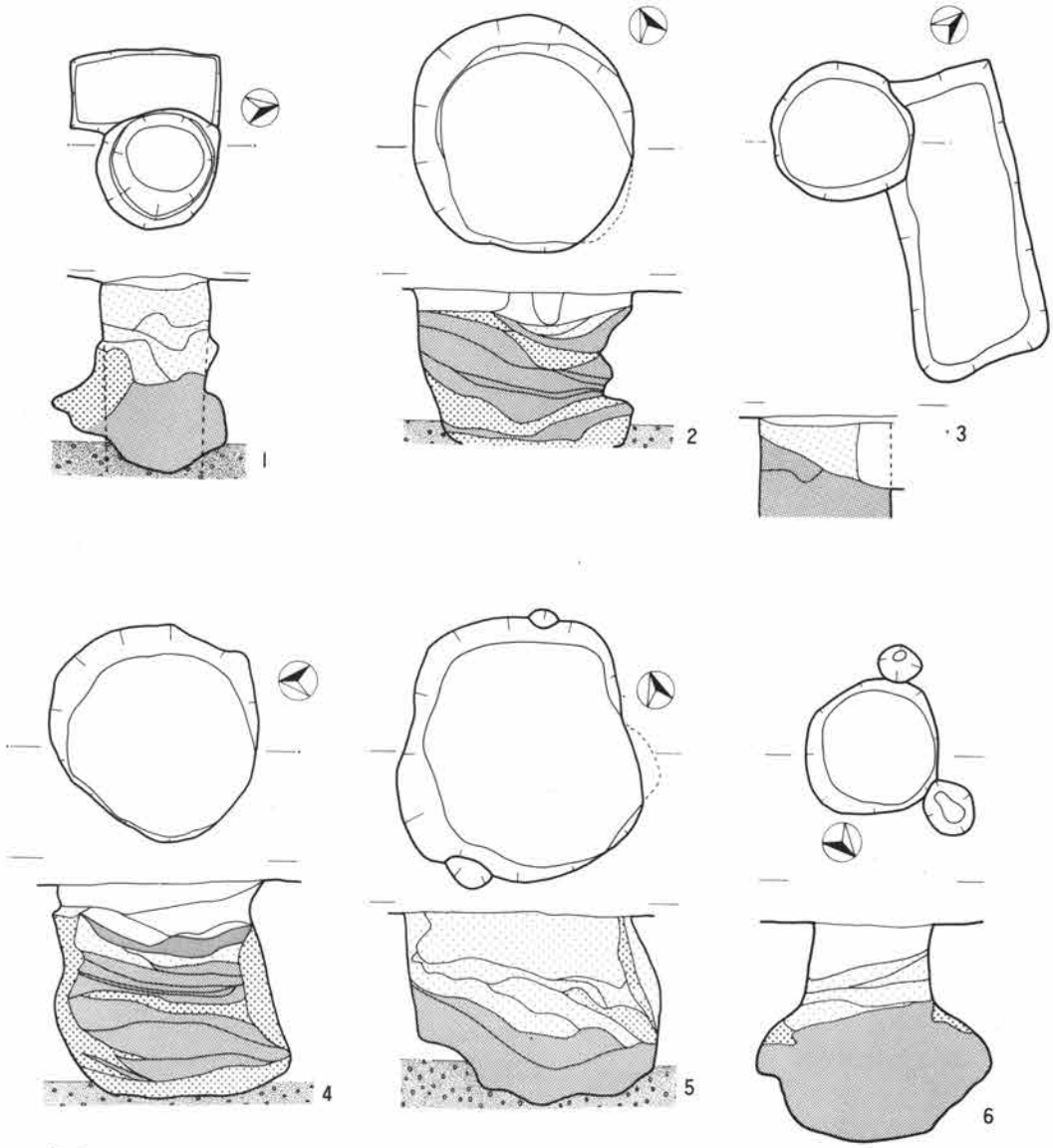
たものと考えられる。常滑産と思われる甕片、土師質土器片が出土している。

３号井戸（図９－３）

方形竪穴遺構の南側１m程離れて位置する。北東部は45号土壙により一部壁が破壊されている。直径1.1mの円筒状を呈する素掘りの井戸であるが、確認面から約１mのところで湧水があり、壁が崩れるため、正確な底部までの調査は不可能であった。調査可能部分の覆土は、ローム粒子を含んだ褐色土で、上部は褐色土、下部は粘性のある黒褐色土である。遺物は出土していない。

４号井戸（図９－４）

11号溝コーナー部分より７m程南に位置する。直径1.7mの円形で、深さは約1.8mの円筒状を呈する。掘り込みはローム層下の砂層にまで達しており、調査時に地下水の湧出をみた。覆土は10数層に分かれるが、そのほとんどにローム粒子を含んでいる。覆土は、水平に帯状堆積しており、自然堆積によるものと思われる。壁際は崩れたロームが認められるが、壁は比較的良く残っている。遺物は出土していない。



茶褐色土層　浅間A軽石を混入する

茶褐色土層　ロームブロックを多く含む

黒色土層　ローム粒を含む

黒褐色土層　ローム粒を含む

黄色土層　ローム崩落土

青灰色砂層

図9　井　戸　跡

5号井戸（図9－5）

11号溝の北側に位置する南北2m、東西1.8mの隅丸の不正方形で、深さは1.5mである。筒状にやや東に向かって斜めに掘り込まれている。素掘りであり、底部には凹凸がある。覆土は暗褐色土、黒褐色土が基調でローム粒子とブロックとの含有率の差異によって数層に分けられる。下底面は、青灰色砂層で滞水しており、明確でないため検出できなかったが、当時の底面はより下層を穿っていた事が予想される。遺物は常滑産の甕と思われる破片が1片出土している。

6号井戸（図9－6）

11号溝の南、約18m離れて位置する。直径1.1m、深さ1.7mを測り、上部から70cmは円筒状に、その下は、高さ1m、巾2mの扁平な球形をなす。全体としてはフラスコ形を呈している。覆土は、フラスコ状の膨脹部にほとんど粘性のない黒褐色土が厚く堆積し、その上部にはロームブロックを含む粘性のある茶褐色土が帯状に水平堆積している。肩にあたる部分のロームが崩れ落ちているが、残存状態は良好である。遺物は土師質土器が1片出土したのみである。

7号井戸（図10）

11号溝より東に25m程離れて位置する。24号土壙と重複し、23号土壙とは1.5m程で隣接する。長径2.3m、短径2m程の楕円形プランを呈し、検出面から2m程の深さに掘り込まれている。中位で弱い段をなし、それ以下は径1.2mの筒形の形状を示しており、この部分の壁に密着して細い割竹が出土している事から、おそらく内壁の補強が行なわれたものと考えられる。検出された他の井戸跡に比べて最も規模の大きいものであるが、井戸枠等の付帯施設は認められなかった。又覆土下層はロームブロックを多量に含んでいる事から、人為的に埋められた可能性もある。遺物は軟質陶器の擂鉢が出土している。（図35－1）

(5)　地下式土壙

3基が検出されている。いずれも円形プランで確認されたが、調査後その平面形や土層断面の検討から地下式土壙と認定した。

23号土壙（図10）

7号井戸の南側に並んで検出された。竪壙部と地下壙の天井部分は崩落し、原形をとどめていない。竪壙部は径1m程であったと思われ、深さは1.5mで地下壙底面より若干低く掘り込まれている。地下壙は短辺1.8m、長辺2mの長方形で、主軸方向の辺が短いという特徴を示す。底面は若干の凹凸があり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。地下壙の高さは、天井部崩落土の堆積状況から約1m前後のものであったと推定される。覆土は竪壙部から流れ込んだと思われる黒褐色土を最下層にして、天井部崩落土である黄色土層が堆積する。遺物は天井部崩落後の堆積である

暗褐色土層から内耳土器片が数片出土したのみである。なお土壙周辺や竪壙部分を精査したがピット等の附属施設を想定させる遺構は検出されなかった。

又７号井戸との間に24号土壙が検出されており、これは土層断面から察すると、７号井戸と23号土壙を掘り込んだ浅い溝状の遺構と判断される。更にその上を近世以後と思われる攪乱によって掘り込まれている。23号土壙の天井部崩落土である黄色土層の上位に堆積する暗褐色土層は、この24号土壙の堆積土と考えられる。従って23号土壙の上半部は24号土壙によって削平された可能性が強い。

43号土壙（図11）

平面はほぼ円形で、東側の壁が小さな段を持ち、やや緩い傾斜を示す。おそらくこの部分が竪壙に相当すると思われるが、地下壙との境は明確でない。規模は、上端で長径3.8m、短径3.5m、底面は約2.4m径の不整円形である。深さは、検出面から約1.6mの所で地下水湧出のため調査不可能になり計測は出来なかった。しかし土層堆積状況や断面形状から２m前後の深さになるものと思われる。形態から考えて地下式土壙ではなく、井戸跡であった疑いも残るが、土層断面に一方向からの流入堆積土とその上位に多量のローム土がブロック状に堆積するという状況が見られる点を重視し、この事から開口部と天井部を想定する事が出来るため、地下式土壙の可能性が強いと思われる。

遺物は、施釉陶器、陶器、軟質陶器等が出土しており(図34)、特に常滑系の大甕破片、内耳土器の破片が多い。大甕破片は11号溝出土のものと同一個体をなすものが出土しており、堆積時期の同時性を物語っている(図29)。しかし多くは天井部崩落土上層からの出土で遺構に伴うものではない。

44号土壙（図11）

平面は43号土壙と同様の不正円形を呈するが、東側が階段状の傾斜をなしており、又その反対側の壁は地山を掘り込んで内側にくびれている事から、地下式土壙と想定される。竪壙部は地下壙方向へやや傾斜し、曲線を描いて地下壙に続く。地下壙が竪壙との接続部より30cm程低く構築され、段をなしているのが特徴である。地下壙部の規模は径約1.8mの円形で、高さは断面観察からおそらく0.8m程と思われる。床面は比較的平坦であるが、壁は整っておらず構築後における壁の崩落も考えられる。覆土は第１次堆積としてローム土が認められ、その上位に流入黒色土のレンズ状堆積が見られる。ローム土の下位に流れ込みの土層が見られない事から、本遺構は構築後かなり早い段階で天井部が崩落したものと思われる。

出土遺物は、青磁碗、陶器、軟質陶器等（図35）で、いずれも天井部崩落以後と考えられる出土状況を示している。従ってこれらの遺物は本遺構に伴うものではなく、埋没時における廃棄又は流れ込みによるものであろう。遺物は小破片で、器種や形態の明確なものは少ないが、中世の

ものがほとんどで内容や時期等については11号溝や43号土壙出土遺物とほぼ同じものと考えられる。

又竪壙部北側の壁中位に径30cm程のピットが検出された。覆土は竪壙部堆積土と同質であるため、本遺構に伴うものと思われるが、どのような施設として機能したのかは不明である。

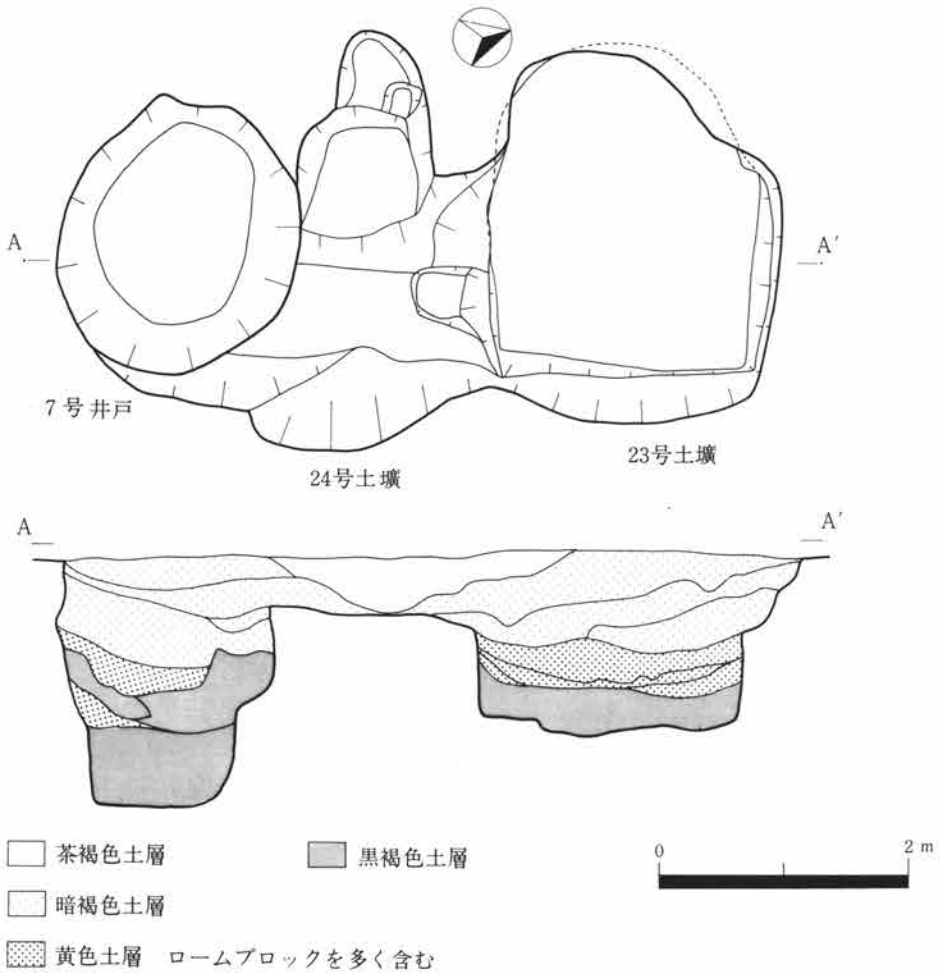


図10　7号井戸及び23・24号土壙

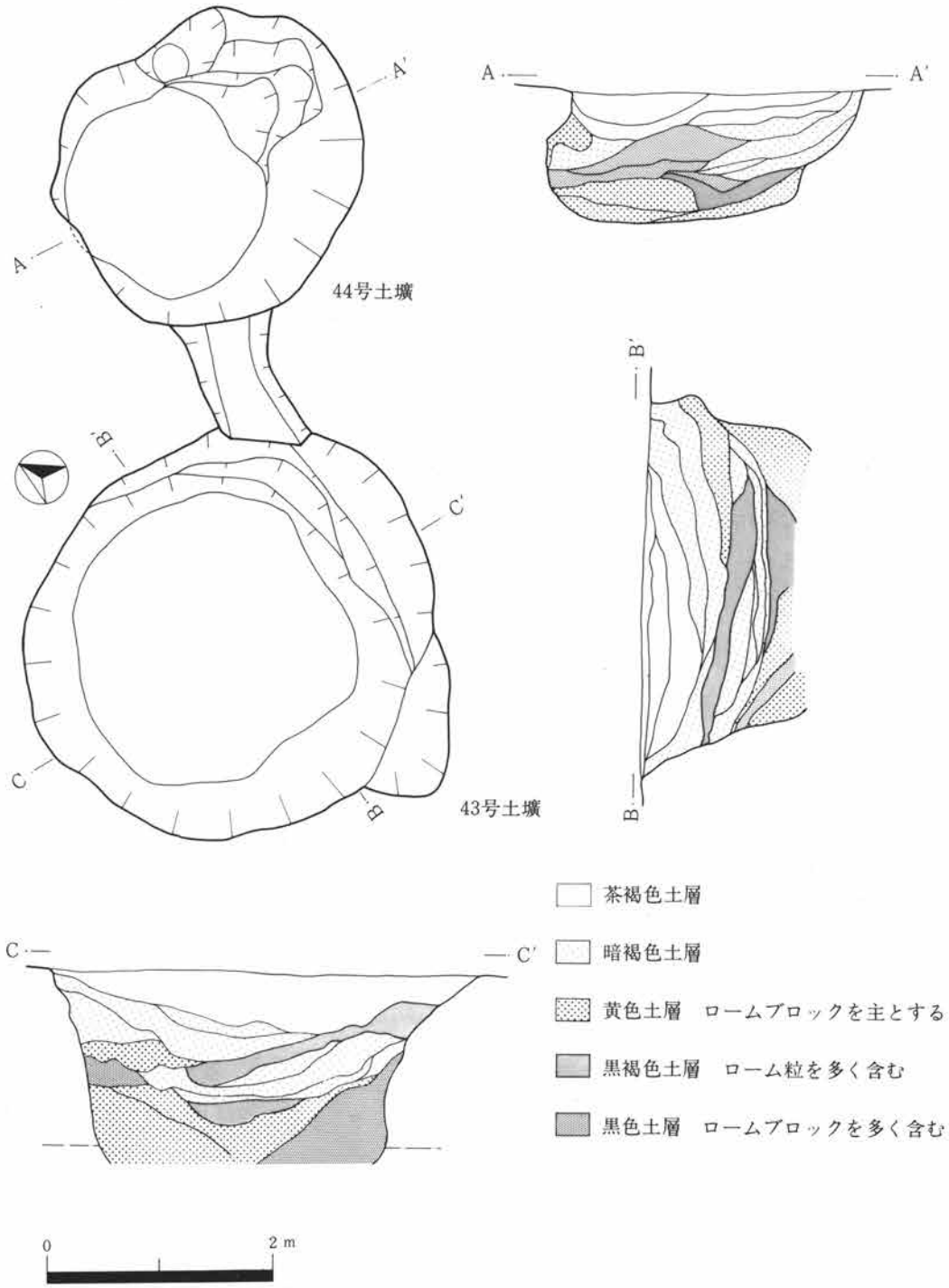

A
A'
44号土壙
B
B'
C
C'
43号土壙
茶褐色土層
暗褐色土層
黄色土層　ロームブロックを主とする
黒褐色土層　ローム粒を多く含む
黒色土層　ロームブロックを多く含む
0
2 m

図11　43・44号土壙

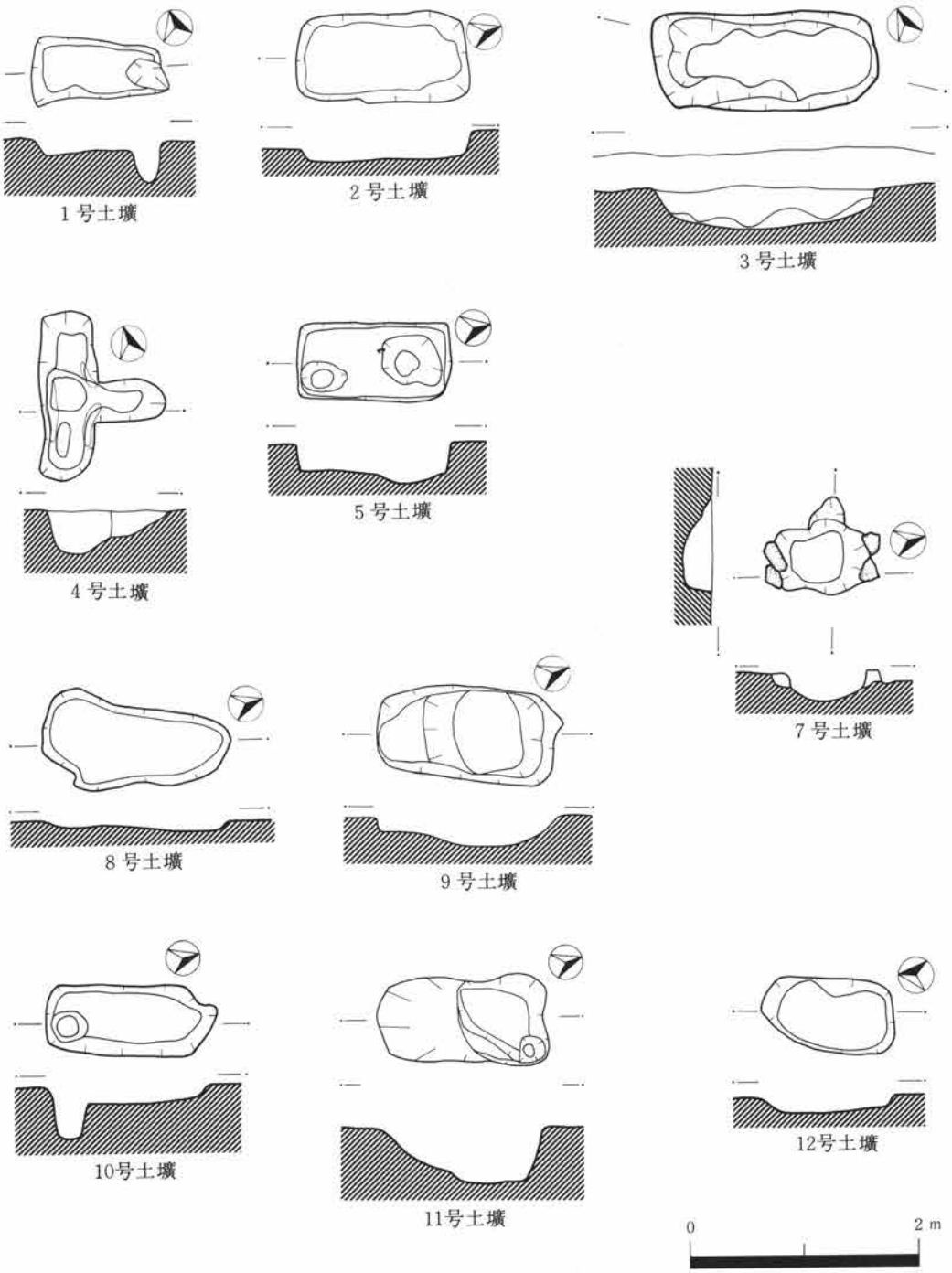

1 号土壙
2 号土壙
3 号土壙
4 号土壙
5 号土壙
7 号土壙
8 号土壙
9 号土壙
10号土壙
11号土壙
12号土壙
0
2 m

図12　土　壙 (1)

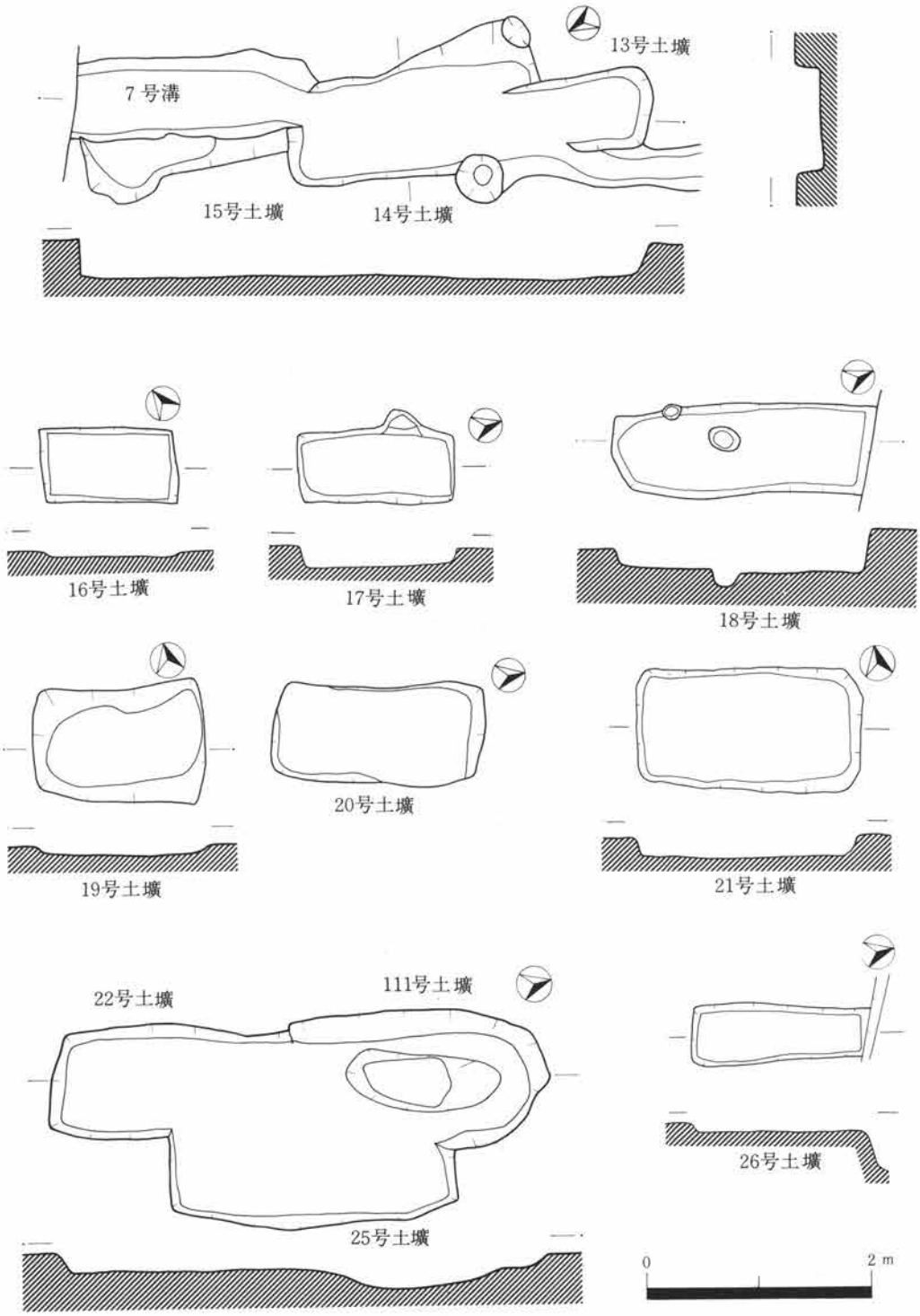

13号土壙
7号溝
15号土壙
14号土壙
16号土壙
17号土壙
18号土壙
19号土壙
20号土壙
21号土壙
22号土壙
111号土壙
25号土壙
26号土壙
0
2 m

図13　土　壙 (2)

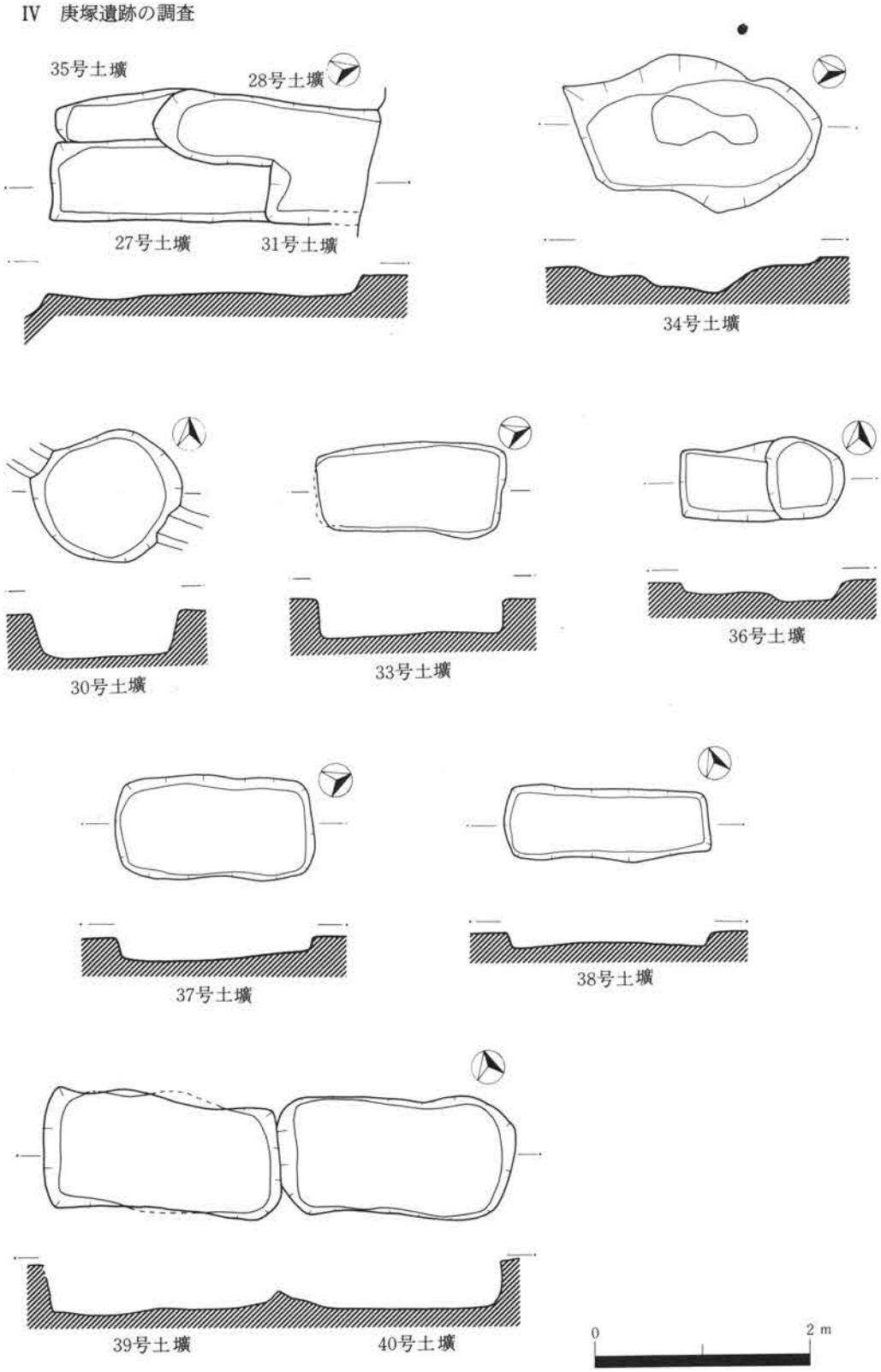
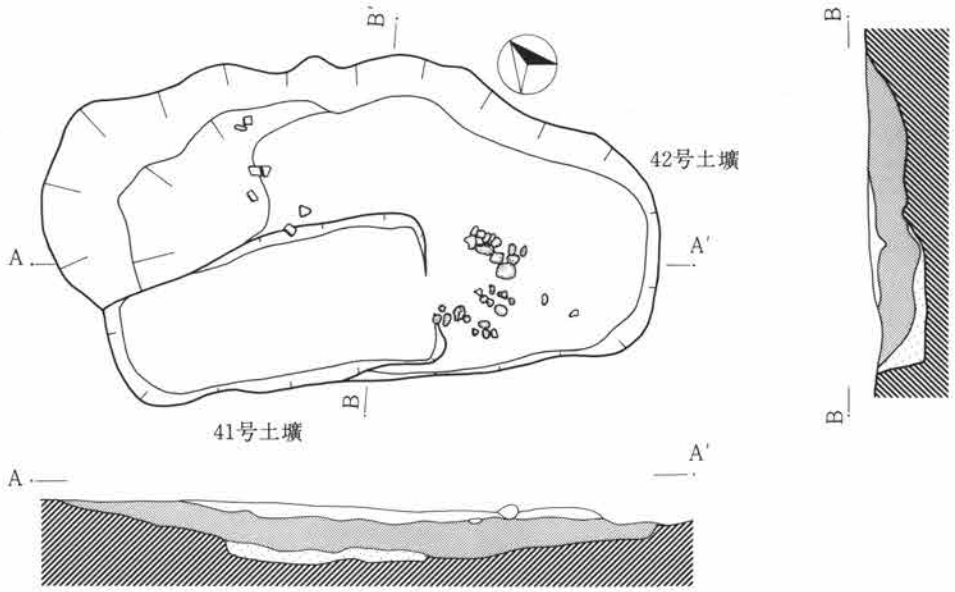

35号土壙
28号土壙
27号土壙
31号土壙
34号土壙
30号土壙
33号土壙
36号土壙
37号土壙
38号土壙
39号土壙
40号土壙
0
2 m

図14　土　壙 (3)



茶褐色土層

黒褐色土層　ロームブロックを含む

明褐色土層　ロームブロックを多く含む　41号土壙覆土

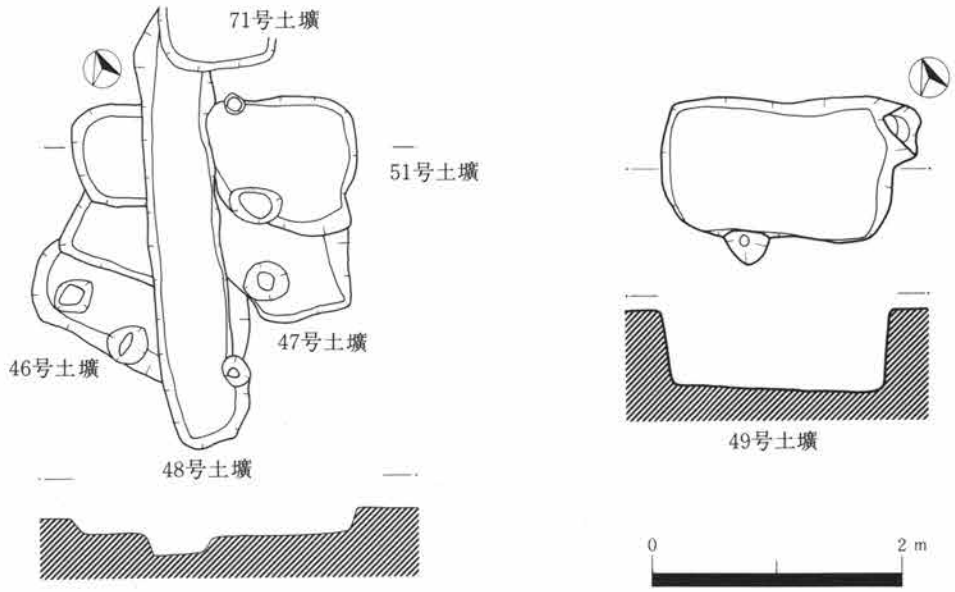


図15　土　壙 (4)

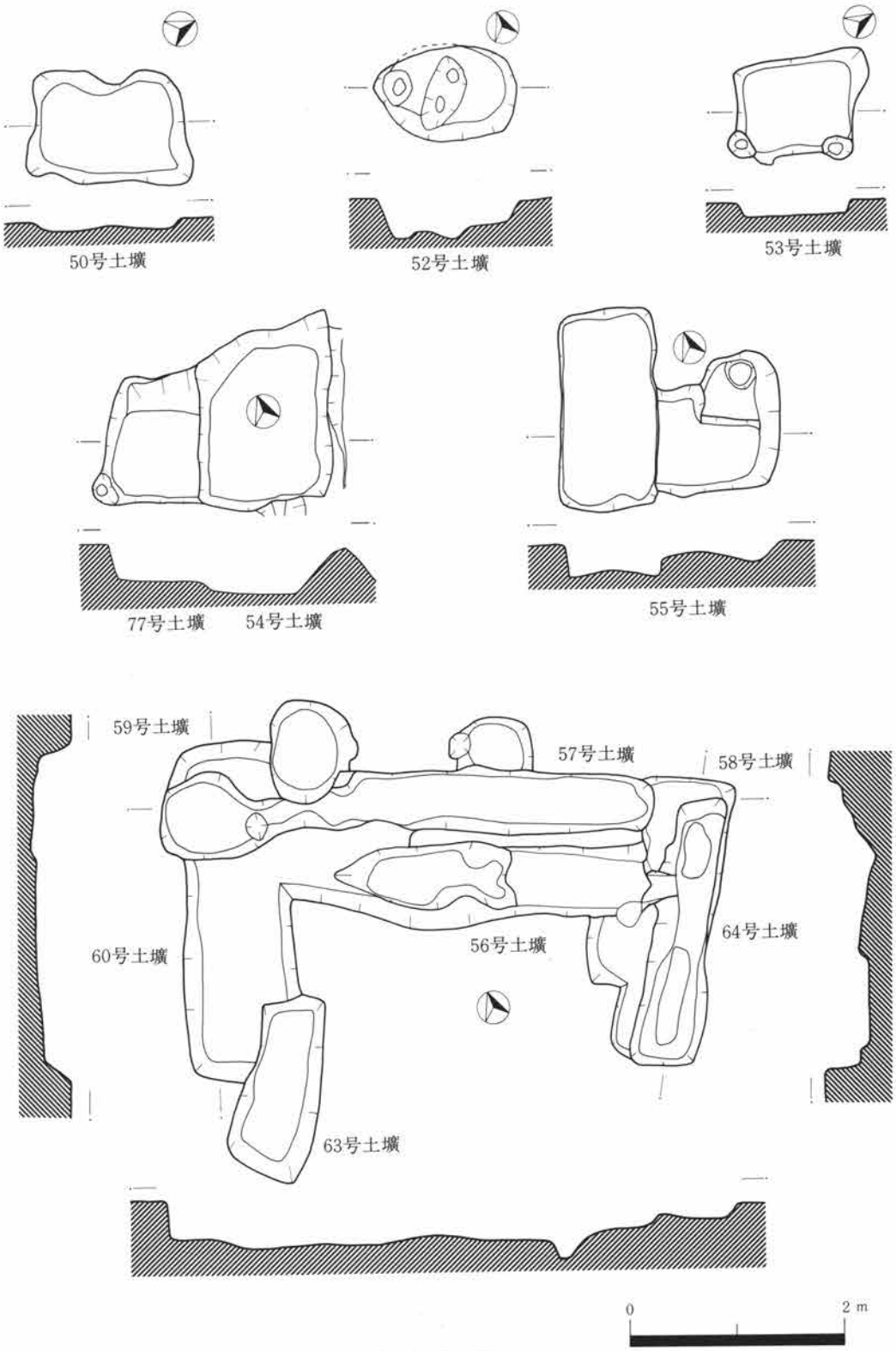

50号土壙
52号土壙
53号土壙
77号土壙
54号土壙
55号土壙
59号土壙
57号土壙
58号土壙
60号土壙
56号土壙
64号土壙
63号土壙
0
2 m

図16　土　壙 (5)

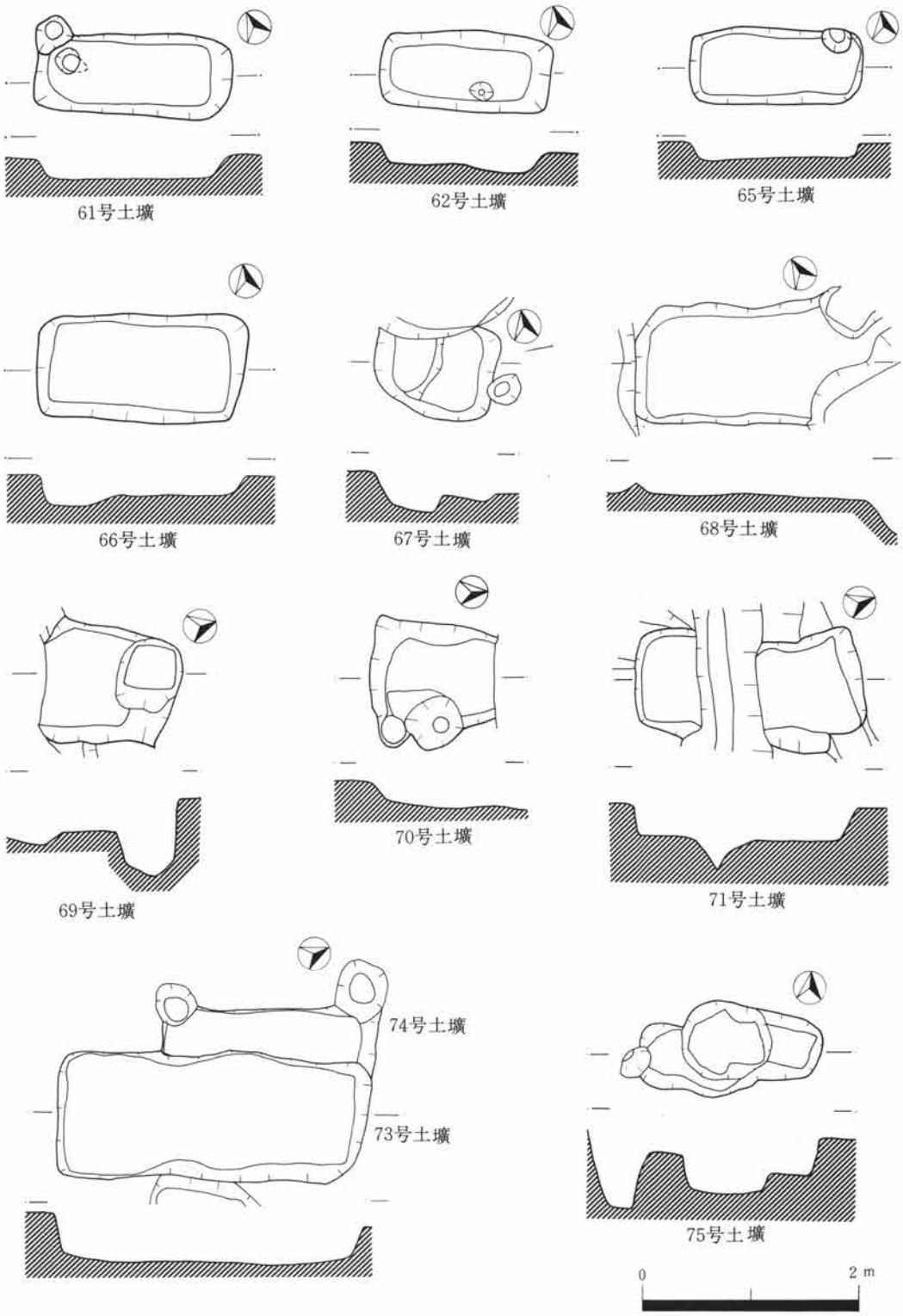

61号土壙
62号土壙
65号土壙
66号土壙
67号土壙
68号土壙
69号土壙
70号土壙
71号土壙
74号土壙
73号土壙
75号土壙
0
2 m

図17　土　壙 (6)

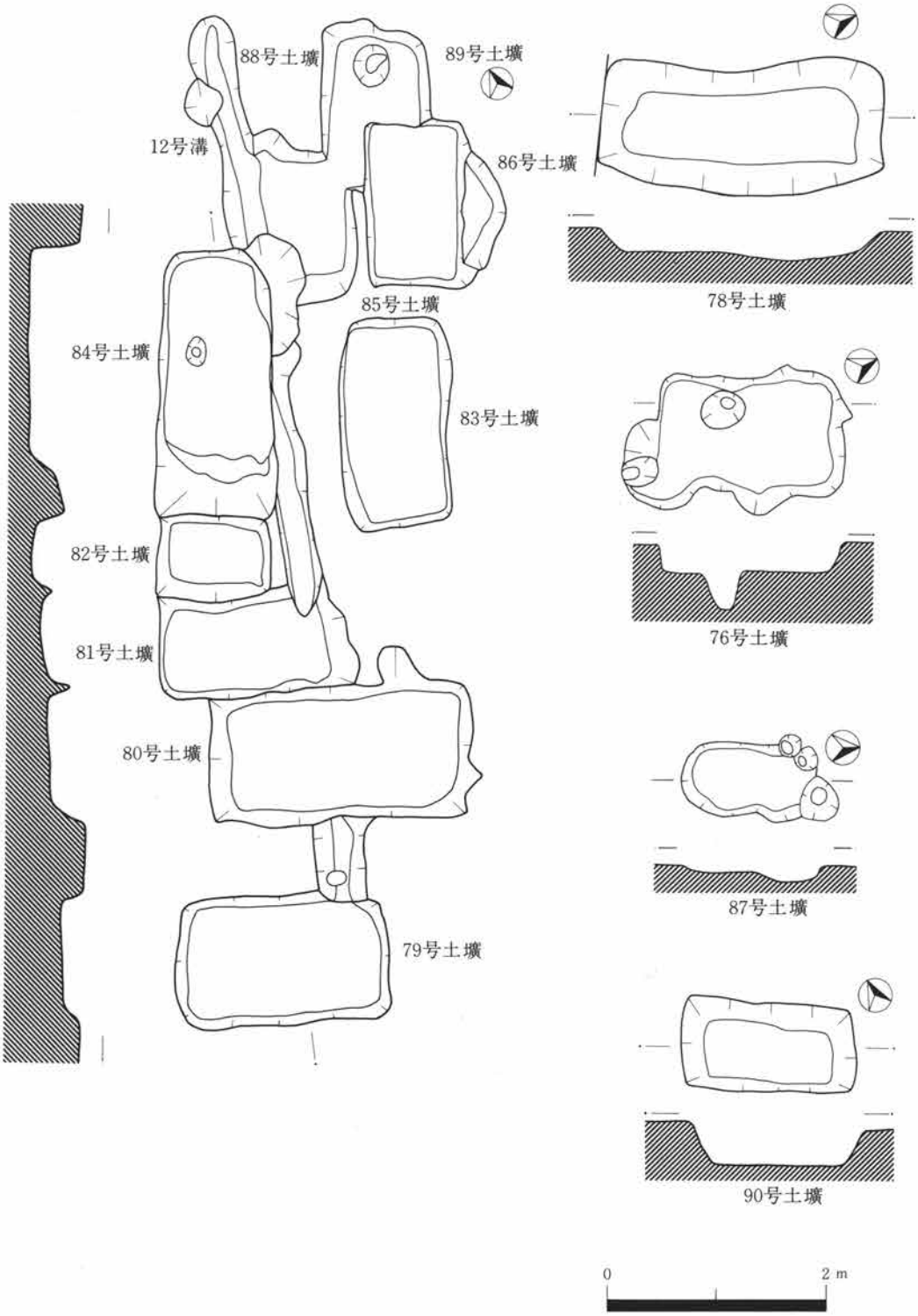

88号土壙
89号土壙
12号溝
86号土壙
85号土壙
84号土壙
83号土壙
82号土壙
81号土壙
80号土壙
79号土壙
78号土壙
76号土壙
87号土壙
90号土壙
0
2 m

図18　土　壙 (7)

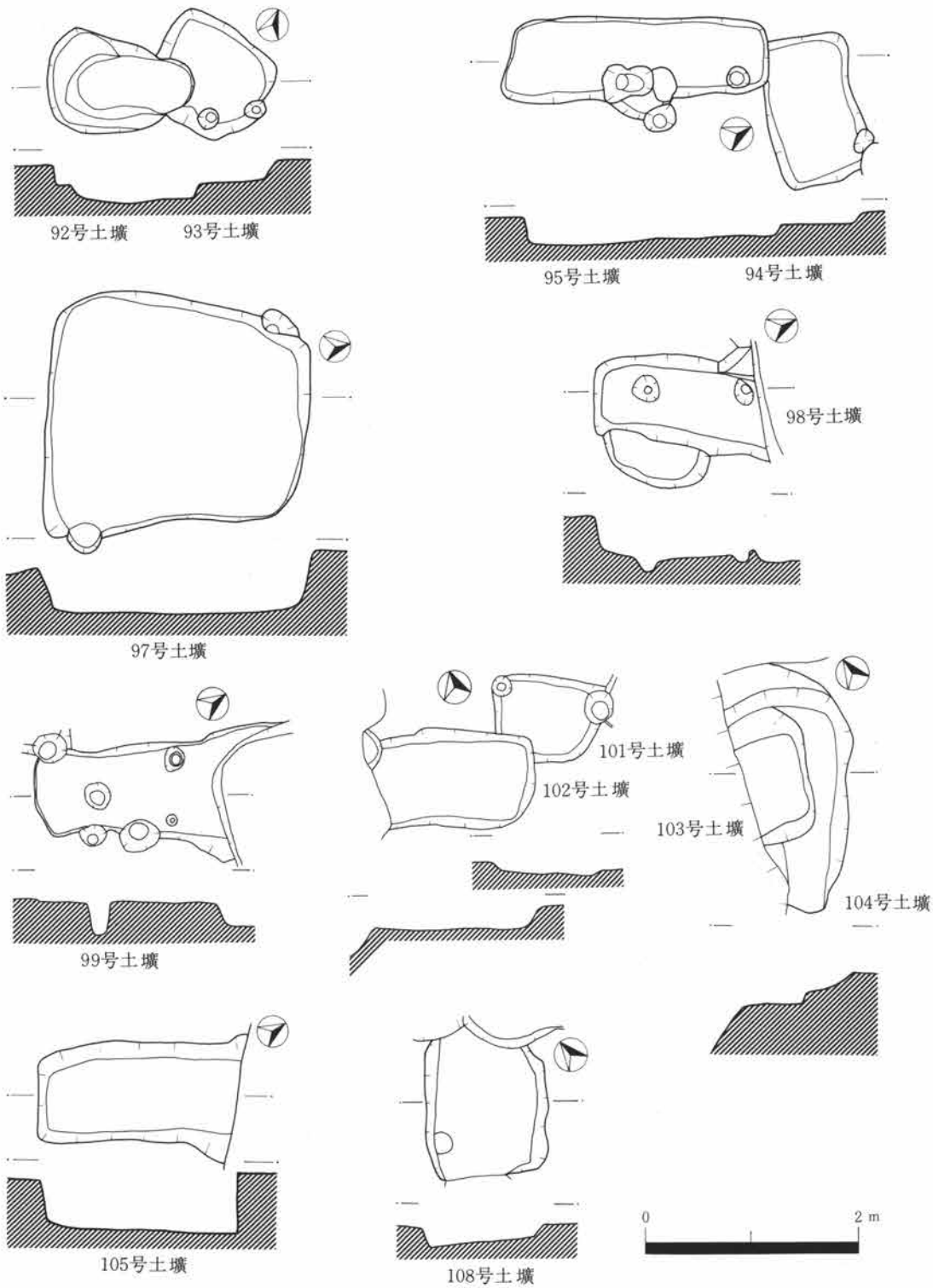

92号土壙
93号土壙
95号土壙
94号土壙
98号土壙
97号土壙
99号土壙
101号土壙
102号土壙
103号土壙
104号土壙
105号土壙
108号土壙
0
2 m

図19　土　壙 (8)

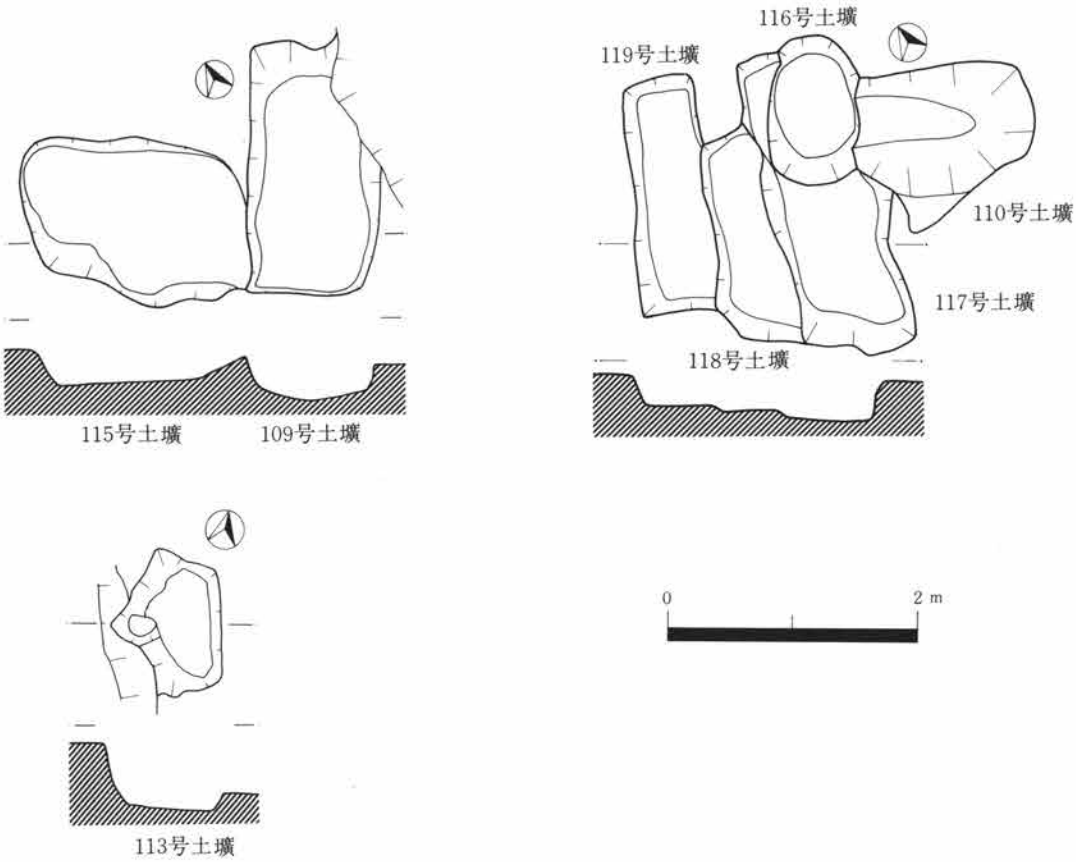


図20　土　壙 (9)

(6) 土　　壙（図12～20）

円形、長方形、正方形、不定形等の土壙が総計119基検出された。長方形土壙がその主体を占めており、主軸方位の画一性から、土壙群を形成したと思われる。この長方形土壙はロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積しており、遺物はほとんど出土していない。11号溝や井戸跡等を切って構築されている事から、その時期は近世以後のものと思われる。又円形や正方形、不定形を呈する土壙もほとんどが長方形土壙と同様の土層が堆積しており、やはり近世以後のものとしてよいだろう。これらの土壙については別表にその概要を記す事にする（表２参照）。

又土壙は調査区中央に群在しており、相互に重複し合うものがほとんどである。しかしながら土層がほぼ同一である事から、これらの先後関係を明確にする事は出来なかった。

土壙内に堆積する焼土粒や形状の相違等から、長方形土壙とは異質の性格をもつと想定される土壙も数基存在するが、時期不明であるため、すべて一括して扱う事にした。なお形態類別は以下のとおりである。

A類――長方形

B類――円形

C類――正方形

D類――不定形

推定の形態や数値は(　)で示して、不明の数値は記していない。

表2　土　壙　一　覧

土壙No.	形態	長軸×短軸(m) 上端	長軸×短軸(m) 下端	深さ(m)	出土遺物	主軸方向	備考
1	A	1.10×0.50	(0.95)×0.35	0.07		N-69°-W	東端でPit 1基と重複。
2	A	1.50×0.75	1.35×0.55	0.28		N-20°-E	
3	A	1.95×1.45	0.83×0.45	0.34		N-66°-W	壁の傾斜は比較的ゆるやか。
4	D	1.45×1.10		0.42			「T」字形のプランを呈し、焼土、炭化物が堆積。
5	A	1.35×0.70	1.25×0.60	0.32		N-5°-E	底面に皿状の掘り込みが2ケ所見られる。
6	(A)	1.50×(1.00)	1.40×(0.90)	0.13		N-85°-E	1号溝に北半を切られる。
7	D	0.85×0.65	0.45×0.40	0.23		N-10°-E	周囲に20cm大の礫を並べる。焼土が堆積。
8	D	1.60×0.65	1.45×0.50	0.10		N-19°-E	南端が膨張する長楕円形のプラン。
9	A	1.55×1.40	0.80×0.70	0.26		N-21°-E	底部は2段掘りになる。
10	A	1.45×0.60	1.30×0.40	0.16		N-15°-E	南端でPit 1基と重複。
11	D	0.75×0.75		0.23			不正方形プランを呈し、一方の壁が傾斜。
12	(A)	1.15×0.65	0.95×0.45	0.20		N-5°-E	やや楕円形に近いプラン。
13	(A)	1.30×0.70		0.33		N-22°-E	北半で14号土壙と縦列に重複する。
14	(A)	(2.30)×(2.05)	1.05×0.90	0.27		N-22°-E	
15	(A)	1.80×0.50		0.14		(N-18°-E)	
16	A	1.25×0.65	1.10×0.55	0.08		N-53°-W	
17	A	1.40×0.66	1.30×0.53	0.22		N-16°-E	
18	A	2.30×0.80	2.15×0.68	0.19		N-23°-E	Pit 2基と重複。
19	A	1.55×1.35	1.00×0.75	0.20		N-77°-W	
20	A	1.90×0.83	1.70×0.75	0.05		N-10°-E	
21	A	2.00×1.10	1.85×0.95	0.17		N-80°-W	

22	D	×(1.00)	×(0.85)	0.16		N-14°-E	25号土壙と重複。
23	D	2.90×2.35	2.55×2.15	1.68			地下式土壙。
24	D			0.43			
25	A	2.55×	2.40×	0.12		N-13°-E	
26	A	(1.60)×0.50	(1.45)×0.40	0.09		N-12°-E	北半は6号溝と重複。
27	A	×0.75	×0.60	0.22		N-13°-E	28・31・35号溝と重複。
28	(A)	×0.65	×0.50	0.24		N-21°-E	31号土壙と重複する。
29	A	1.40×0.85	0.45×0.35	0.19		N-18°-E	南壁がなだらかな掘り込み。
30	B	1.40×1.25	1.15×1.10	0.50			6号溝に切られる。
31	(A)			0.25		(N-15°-E)	27・28号土壙、6号溝と重複する。
32	A	1.20×1.15	0.65×0.50	0.14		N-18°-E	1号井戸を切る。
33	A	1.70×0.83	1.68×0.73	0.38		N-16°-E	
34	D	2.23×1.33	2.07×0.95	0.26		N-2°-W	断面は皿状の形態を示す。
35	(A)			0.19		N-6°-E	27・28号土壙と併行して重複する。
36	(A)	1.55×0.65		0.12		N-88°-E	階段状の底面
37	A	1.85×0.95	1.70×0.85	0.23		N-70°-W	
38	A	1.90×0.65	1.80×0.50	0.14		N-70°-W	11号溝の覆土を切る。
39	A	2.20×1.00	1.95×1.10	0.48		N-70°-W	40号土壙と縦列して隣接する。
40	A	2.20×1.05	1.90×0.95	0.51		N-73°-W	
41	A	2.65×1.20	(2.45)×1.00	0.54		N-66°-W	42号土壙に切られる。
42	D	4.95×2.60	4.30×2.15	0.46	甕・壺	N-49°-W	不正楕円形プランを呈する。
43	D	3.80×3.50	2.40×2.35	(2.00)	甕・火鉢・皿 椀・内耳土器等		地下式土壙。
44	D	2.80×2.70	1.90×1.80	1.24	甕・擂鉢 青磁碗		地下式土壙。
45	A	2.35×1.05	2.05×0.75	0.65	甕・擂鉢	N-55°-W	西コーナー部で3号井戸と重複。
46	(A)			0.10			47・48号土壙、Pit 2基と重複。
47	(A)	(2.20)×	(2.00)×	0.13			46・48・51号土壙、Pit 1基と重複。
48	(A)	(3.80)×0.60	×0.45	0.31		N-15°-E	

49	A	1.85×1.10	1.70×0.95	0.66		N-73°-W	
50	(A)	1.50×0.90	1.20×0.75	0.13	杯	N-27°-E	不正長方形のプラン。
51	A	2.30×2.1	1.05×0.90	0.18		N-65°-W	47・48号土壙、 Pit 1基と重複。
52	D	1.35×0.90	1.15×0.75	0.33		N-73°-W	不正楕円形のプラン、 Pit 3基と重複。
53	B	1.15×0.85	0.95×0.75	0.15		N-21°-E	Pit 2基と重複。
54	(A)	(1.60)×1.40	(1.25)×1.00	0.41	甕	N-21°-E	77号土壙、8号溝と重複。
55	A	1.85×0.90	1.65×0.85	0.52		N-21°-E	東側攪乱。
56	(A)	×0.65	×0.50	0.29		N-65°-W	57・58・59・60・64号土壙と重複。
57	(A)	(2.95)×0.60	2.80×0.40	0.34		N-66°-W	56号土壙と併列、58・60・64号土壙と直角に重複。北辺で大形 Pit 2基と重複。
58	(A)	2.65×(0.75)	2.45×(0.60)	0.21		N-29°-E	56・57号土壙と直行。64号土壙と併列に重複。
59	D			0.47			57号土壙の可能性有り。
60	A	3.05×1.05	2.90×0.75	0.37		N-32°-E	
61	A	1.84×0.73	1.50×0.55	0.23		N-58°-W	Pit 2基と重複。
62	A	1.58×0.75	1.30×0.48	0.19		N-81°-W	Pit 1基と重複。
63	A	1.65×0.70	1.40×0.50	0.32		N-31°-E	60号土壙と北辺で重複。
64	(A)	2.45×0.60	2.20×0.42	0.38		N-29°-E	58号土壙と重複。中央に溝状の掘り込み有り。
65	A	1.60×0.70	1.45×0.55	0.18		N-81°-W	Pit 1基と重複。
66	A	1.93×1.00	1.66×0.75	0.28		N-79°-W	
67	D	1.12×		0.28			階段状に掘り込まれる。5号井戸と重複。
68	(A)	×1.05	×0.90	0.40		N-59°-W	72号土壙、8号溝と重複。
69	(A)	×1.10	×0.85	0.26		N-25°-E	9号溝に南半を切られる。北壁で Pit 1基と重複。
70	(A)	×1.00	×0.70	0.23		N-13°-E	北半を11号溝、南東コーナーで Pit 2基と重複。
71	A	2.15×0.95	1.90×0.70	0.39		N-17°-E	8・9号溝と重複する。
72	(A)			0.20		(N-24°-E)	68・73号土壙と重複し、全体をつかみ得ない。
73	A	2.90×1.20	2.70×0.95	0.43		N-26°-E	74号土壙と併列に重複する。

74	(A)	2.00×	1.85×	0.34		N-25°-E	西及び北コーナー一部で Pit 2基と重複。
75	D	(1.70)×(0.90)	(1.55)×(0.60)	0.33			Pit 群の可能性有り。
76	(A)	1.80×1.20	1.55×0.90	0.32		N-25°-E	Pit 1基と重複。
77	(A)	×(1.10)	×(0.80)	0.37		N-65°-W	54号土壙と重複。南西コーナーで Pit 1基と重複。
78	A	2.55×1.05	2.05×0.65	0.32		N-25°-E	
79	A	1.85×1.10	1.75×0.90	0.20		N-66°-W	
80	A	2.20×1.10	2.05×0.95	0.30		N-66°-W	81号土壙に隣接。
81	A	1.70×0.90	1.50×0.75	0.32		N-68°-W	80・82号土壙に隣接。
82	(C)	1.05×0.80	0.85×0.55	0.40		N-62°-W	81・84号土壙に隣接。
83	A	1.90×1.00	1.75×0.85	0.50		N-25°-E	
84	A	2.10×1.05	1.80×0.95	0.50		N-28°-E	12号溝と重複。中央部で Pit 1基と重複。
85	A	1.50×0.95	1.35×0.75	0.34		N-25°-E	86・89号土壙と重複。
86	不明			0.22			長方形土壙のコーナー部の可能性あり。
87	D	1.40×0.65	1.15×0.55	0.16		N-1°-E	北壁で Pit 3基と重複。
88	(A)	(1.40)×	(1.00)×	0.27		N-32°-E	89号土壙、西端で12号溝と重複する。
89	A	1.45×1.00	1.30×0.90	0.26		N-30°-E	北半部で Pit 1基、南半部で85・88号土壙と重複。
90	A	1.60×0.80	0.80×0.45	0.40		N-67°-E	
91	D			0.34			100号土壙、11号溝と重複。
92	D	1.40×0.85	1.05×	0.34		N-63°-E	卵形のプランを呈する。
93	C	1.10×1.00	0.95×0.75	0.35		N-82°-W	楕円に近い方形プランを呈する。
94	A	1.40×0.85	1.25×0.70	0.10		N-82°-W	95号土壙と重複。
95	A	2.45×0.80	2.40×0.65	0.21		N-22°-E	Pit 2基と重複。
96	(A)	2.40×	2.25×	0.20		N-59°-W	北東半が未掘。
97	(C)	2.45×2.30	2.30×2.15	0.57		N-14°-E	やや台形状のプランを呈す。
98	(A)	×0.90	×0.60	0.37		N-31°-E	97号土壙、 Pit 1基と重複。
99	(A)	×0.95	×0.80	0.21		N-35°-E	97号土壙、 Pit 6基と重複。

100	(C)	2.50×	2.30×	0.24		N-33°-W	おそらく方形プランと思われるが11号溝と重複するため全形不明。
101	(A)	1.00×0.80	0.85×0.65	0.16		N-65°-W	歪んだ隅丸方形のプランを呈する。
102	A	×0.90	×0.70	0.28		N-75°-W	101号土壙、11号溝と重複する。
103	不明			0.53			104号土壙、11号溝と重複。
104	〃			0.38			
105	(A)	×0.90	×0.70	0.54		N-30°-E	北半は未調査。
106	(A)	×1.10	×0.95	0.13		N-68°-W	100号土壙、11号溝と重複。
107	D	1.40×1.15		0.41		(N-72°-W)	11号溝を切る。
108	(A)	×1.15	×0.95	0.40		N-32°-E	11号溝を切る。
109	A	1.95×1.15	1.65×0.85	0.70		N-29°-E	11号溝を切る。115土壙と重複。
110	D	×0.35	×0.40	0.57		N-25°-W	116号・119号土壙と重複。
111	(C)	(2.40)×1.25	(2.30)×0.90	0.22		N-12°-E	中央部に皿状の掘り込みがある。22号土壙との境は不明。
112	D	×0.55	×0.40	0.12		N-8°-E	2号井戸を切る。
113	D	1.05×(0.70)	0.95×(0.45)	0.16			11号溝突出部のテラス上に掘り込まれており Pit 1基を伴う。
114	不明			0.20			98号土壙と重複し、全形は不明。
115	D	(1.95)×1.35	(1.85)×1.20	0.26		N-52°-W	歪んだ楕円形プランを呈する。
116	(B)	1.20×(0.80)	0.80×(0.70)	0.59		N-27°-E	楕円形のプランを呈する。 Pit の可能性あり。
117	A	2.50×0.95	2.40×0.75	0.33		N-16°-E	110号・116号・118号土壙と重複。
118	(A)	1.70×	1.45×	0.32		N-20°-E	117号・119号土壙と重複。
119	A	1.85×0.60	1.65×0.50	0.27		N-21°-E	

3　縄文時代の出土遺物

(1) 縄　文　土　器

本遺跡では、縄文時代中期中葉から後期中葉に至るまでの若干の土器片が検出された。全て小破片であるが、各時期に属するものを極力資料化した。以下３群に分類して説明する。

第１群土器（図21―１～13）

中期中葉の勝坂・阿玉台式土器を一括した。１～５は勝坂Ⅰ式土器である。１は隆帯で区画文を構成する土器で、隆帯にそって半載竹管による平行線が加えられる。２・３は半載竹管による平行沈線、及び爪形文で文様を構成する土器である。４は隆帯で区画文を構成する土器で、区画内には隆帯にそって巾広の爪形文やペン先状の押引文が施される。５は口縁部に巾の狭い文様帯を持つ土器で、文様帯は把手により縦位に区画される。また、区画内には角押文が施される。なお、１・２は胎土に大粒の片岩を、５は多量の軽石を含む。

６・７・８は阿玉台Ⅱ式土器である。いずれも胎土には金雲母、白色砂粒を多量に含む。６は扇状把手の破片である。口唇部分には刻みが施され、その下位に半載竹管による平行沈線が加えられている。７は同沈線で波状文が施文される。８は平行沈線にそって爪形文が施されている。

９・12・13は勝坂３式土器である。９・12は隆帯で区画文を構成する土器である。13は沈線区画内に三叉文が施されている。縄文は、12・13ともにＲＬである。

10・11は無文の口縁部である。10は口縁部裏面に段を有し、胎土に金雲母、白色砂粒を多量に含む。

第２群土器（図21―14～18・21）

中期後半の加曽利Ｅ式土器を一括する。14は加曽利Ｅ１式土器である。内湾する口縁部には、大きな円形の貼付文が施される。貼付下に施された縄文はＲＬである。

15～18は巾広の無文帯を置いて１条の沈線を巡らし、以下にアーチ状区画の無文帯を垂下させる。縄文はともにＲＬである。

21は加曽利Ｅ４式土器の把手部と思われる。内湾する口縁部に、「８」の字状に隆帯を貼付して把手を形成している。

第３群土期（図21～19・20・22～28）

後期の土器群を一括した。19は充塡縄文帯で文様を構成する称名寺Ⅱ式土器である。26は沈線間に列点を施した称名寺Ⅱ式土器である。20は櫛状工具により波状条線文を施文した土器で、称名寺式土器に伴うものと思われる。

22～25・27・28は堀之内Ⅰ式土器である。22・23は口唇直下に文様帯を持つ土器である。22は「C」字状の貼付文が付される。24は波状口縁を呈する土器である。波頂部内面には円形刺突が施される。25は口縁部が内折し、口唇部が外反する口縁部破片である。口縁部は無文で、「く」の字に折れ曲がる頸部には隆線が施され、刻みが加えられる。胴部にはＬＲの縄文が施され、沈線で文様が描かれる。27は沈線のみで文様が構成される土器である。28は網目状の沈線が施される土器である。

(2)　石器について

図22、23は本遺跡出土の石器である。図23－３は３号井戸跡内、図22－３は表採で、他は11号溝内出土である。前述のように、本溝は中世の館跡とも考えられる遺構であり、石器とは関連のないものである。調査区内からも若干の縄文土器が出土しており、近辺にこの時期の遺跡が存在しているものと考えられる。

石器の総数は６点で、凹石２点、磨製石斧１点、打製石斧３点である。

打製石斧（図22－１・２・３）

１は分銅形である。刃部周辺は薄く、抉入部周辺は2.3cmである。刃部には磨耗痕は認められず、左右下部側辺に認められる。又ａ面左下部の剝離の稜にも磨耗痕を認めることができる。この剝離は使用時による欠損とも考えられる。上遺跡の同型の打製石斧にも同様な痕跡が認められる。

２は１と同形の石斧で、抉入部巾6.3cmを測り、大形で分厚いものである。上半刃部周辺に磨耗痕的な痕跡と刃潰れ状の痕跡が見られる。

３は片抉入の分銅形石斧である。調整が粗く、刃部調整が未完成であることから、同形の未完成品と考えられるが、ａ面抉入部右周辺に磨耗痕が明瞭に認められ、ａ面下部剝離の稜と両側辺、あるいはｃ面下部の表面に部分的に認められるため、未完成品のまま使用したものであろう。

磨製石斧（図23－１）

図23－１は磨製石斧である。ａ面上端部がわずかに欠損するのみで、ほぼ原形をとどめている。ａ面には自然剝離による面が残されている。ｂ面は念入りに調整されているが、原石にそれほど加工を加えずに利用したものである。

図23－２・３は凹み石である。ａ面上下端、右側辺部が特に使用されている。

３はａ面右側辺部に抉入状の凹部をもつもので上下端は切り取られた様になるまで、使用が著しい。ａ面左側辺にも敲き状の痕跡を残す。

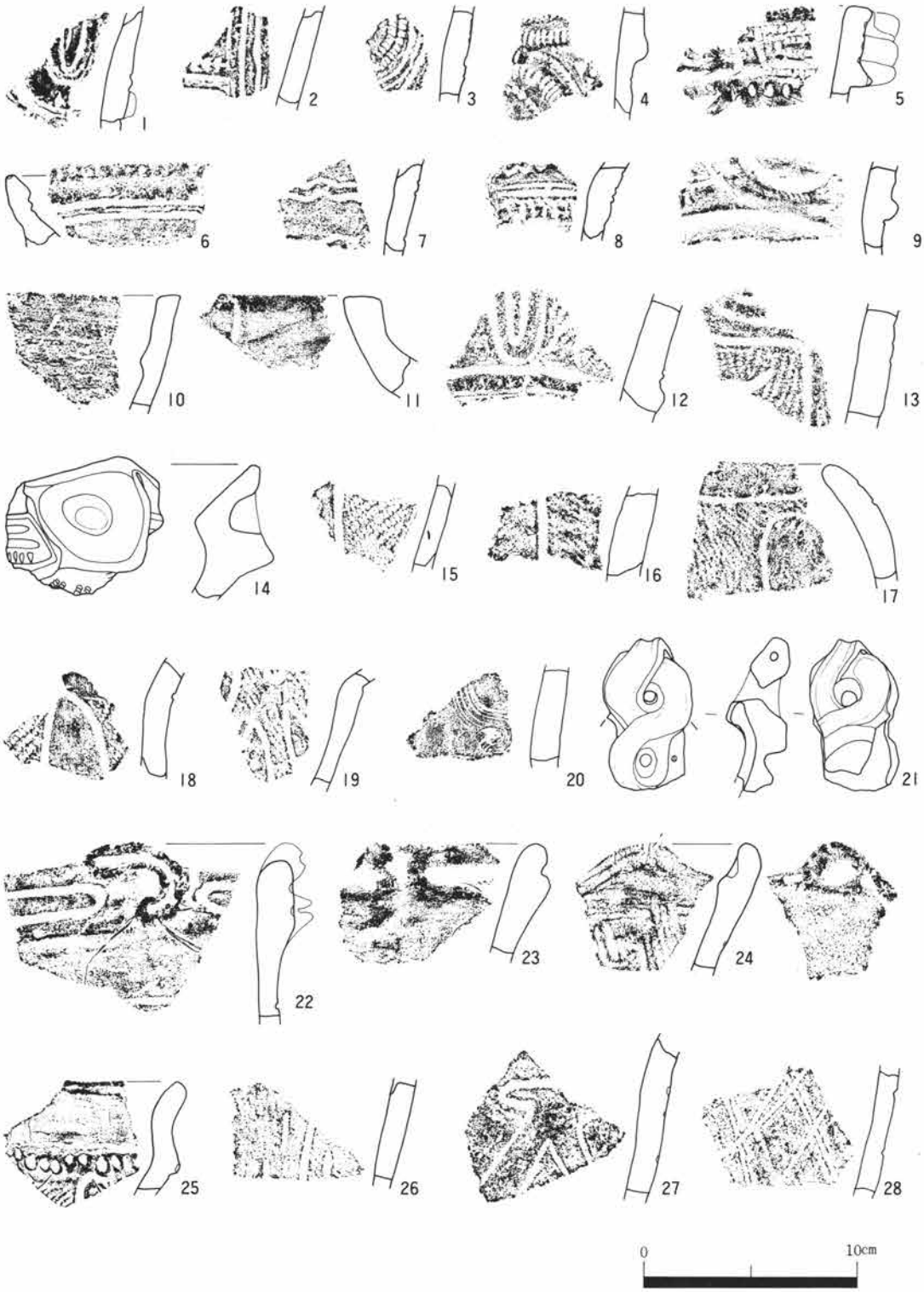

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

図21　遺構外出土遺物

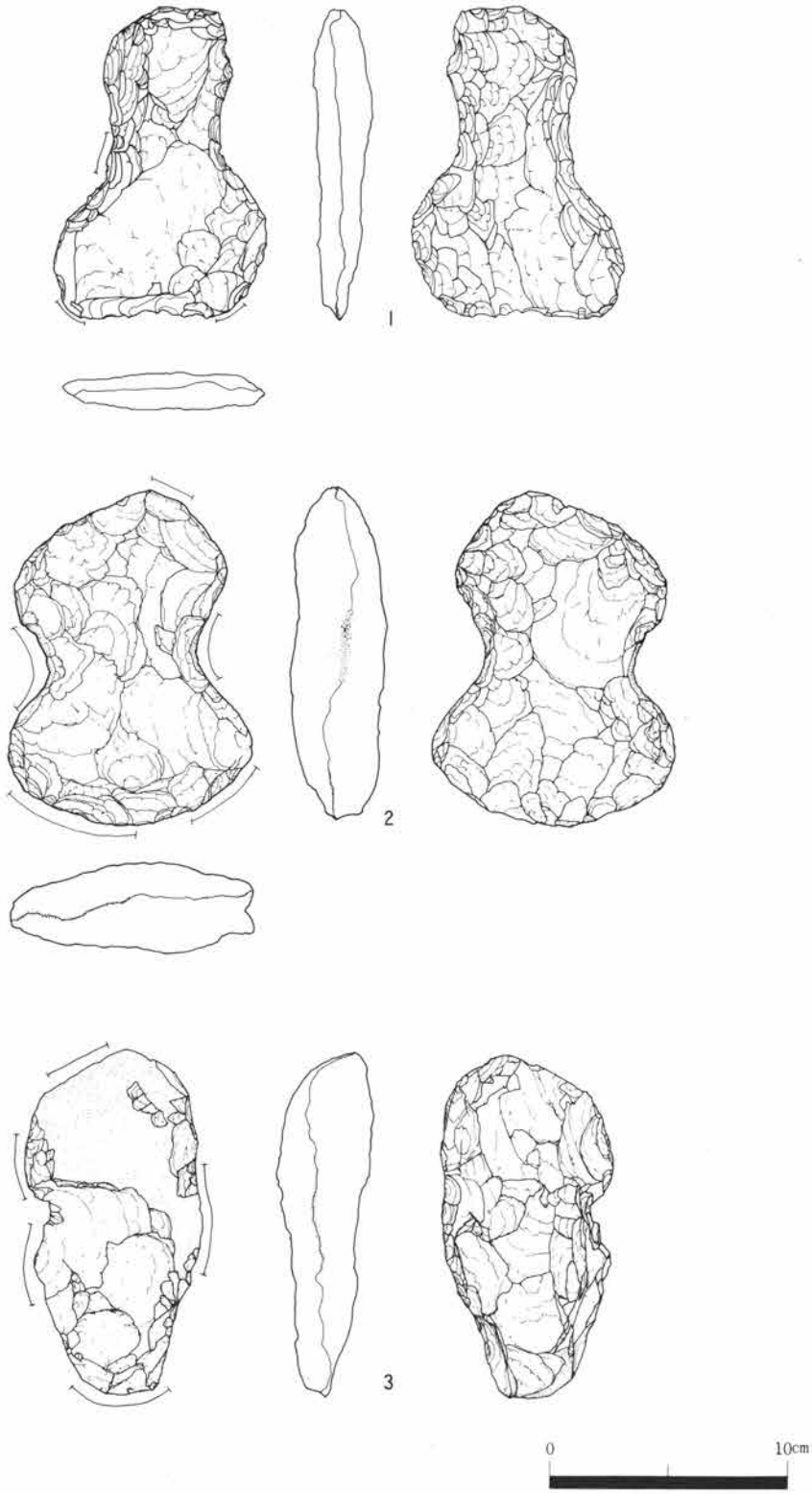


図22　11号溝出土及び表採遺物

図23　11号溝・3号井戸出土遺物

表3　石　器　一　覧

No.	器　種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　質	備　考
図 22—1	打製石斧	11 号 溝	12.8	8.6	2.3	260	粘 板 岩	
図 22—2	〃	〃	13.6	10.1	3.9	624	硬質砂岩	
図 22—3	〃	表　採	14.4	7.2	3.9	416	〃	
図 23—1	磨製石斧	11 号 溝	7.6	4.0	2.3	110	輝 緑 岩	一　部　欠　損
図 23—2	凹　石	〃	12.7	8.8	5.7	862	輝石安山岩	
図 23—3	〃	3号井戸	11.0	7.3	5.9	615	〃	

4　中世の出土遺物

主に溝、土壙、井戸跡から出土しているが、特に11号溝と43号土壙から多くの石製品、陶磁器類が出土しており、本遺跡出土遺物の主体をなしている。

(1) 石　製　品　類

板　　碑（図24、25）

11号溝の南西コーナー部に近い所で覆土中位から大小２枚が重なって出土した。大形のものは高さ55cm、巾23cm、厚さ2.5cmで下部を欠いており全高は不明である。石材は淡緑色の緑泥片岩で碑面は甚だ剝離が激しい。主尊はキリーク（阿弥陀如来）の一尊種子である。その下に蓮座を置き、天蓋と月輪は見られない。種子、蓮座共に様式化（＝簡略化）の様相が見られる。又この蓮座の左右の花弁は立ち上がっている。二条線は刻まれておらず、額部の凹凸も見られない。又紀年銘は「广永田□年□月八日少尓孝」と読める。年号の广永（応永＝1394～1428年）は確実であるが、年月日は碑面剝離が激しく判読が難しい。干支については刻まれていない。年号・年次と月日は左右別行に、その中央に「少尓孝」の三文字を刻む。この三文字は刻まれた位置から見て被供養者と推定されるが、一般的なもの（……禅尼、……禅門等）とは異なっている。主尊と紀年銘を囲み枠線が刻まれているが、その他、偈文、花瓶等は刻まれていない。又、基礎突起については、下部欠失のためその有無は不明である。碑面の種子、紀年銘等の彫刻は、風化のためいくらか丸味を帯びているが、深い部分に比較的鋭い刻目が残る事から、薬研彫りにより刻まれたものと思われる。表面は仕上げの削りが丁寧に施され「ハツリ」の時のノミ痕はまったく残さず平滑な面を作り出している。又、枠線については、直線にほとんど乱れがなく、深さも一定である事から、定規等をあてて刃先の鋭い工具で一気に彫り込んだものと思われる。裏面は横方向に細かくノミにより削られた痕跡が残り、比較的平坦に仕上げられている。この痕跡からノミは巾約２cm程のものを用いたと思われる。

図25の板碑は、高さ39cm、巾16.5cm、厚さ２cmで、これも下部を欠失しており全高は不明である。碑面は全体的に磨滅している。石質は緑泥片岩を用いている。主尊はキリークの一尊種子である。その下に蓮座を置くが、この蓮座も図様化の様相が見られる。天蓋、月輪等は無いようである。又、碑面上部には二条線が刻まれているが、額部の凹凸は見られない。紀年銘は磨滅がひどく判読が出来ず、偈文、造立趣旨等についても不明である。この板碑の年代は、小型化、主尊と蓮座の簡略化等から考えて、14世紀後半代～15世紀頃と思われる。碑面の種子はかなり磨滅して不鮮明であるが、その彫り方は図24のものと同様に薬研彫りと思われる。裏面も不明瞭ながら石目に直角方向のノミ痕が認められる。

板碑の出土状況から、付近に造立されていたものが、何らかの理由により２枚同時に廃棄されたものと思われる。又、他の陶器類についても同層位あるいはそれ以下から出土しており、11号

溝は「堀」として機能していた当時から「ゴミ捨場」であったと思われる。板碑の廃棄された時期は、共伴する陶器が後述するように14世紀～15世紀代のものを主としている事と板碑の紀年銘が応永年間である事から、おそらく15世紀後半代と思われる。

板碑の廃棄については、各地の中世遺跡で、井戸や溝、土壙等からまとまって出土する例が多く見られる。その場合、破片で出土する例がほとんどであるが、本遺跡出土例は２枚共下部を欠損している。これが故意によるものか、あるいは不可抗力による破損かは想像の域を出ない。しかしいずれにしろ、板碑がその造立意義を失ったものである事には相違ない。

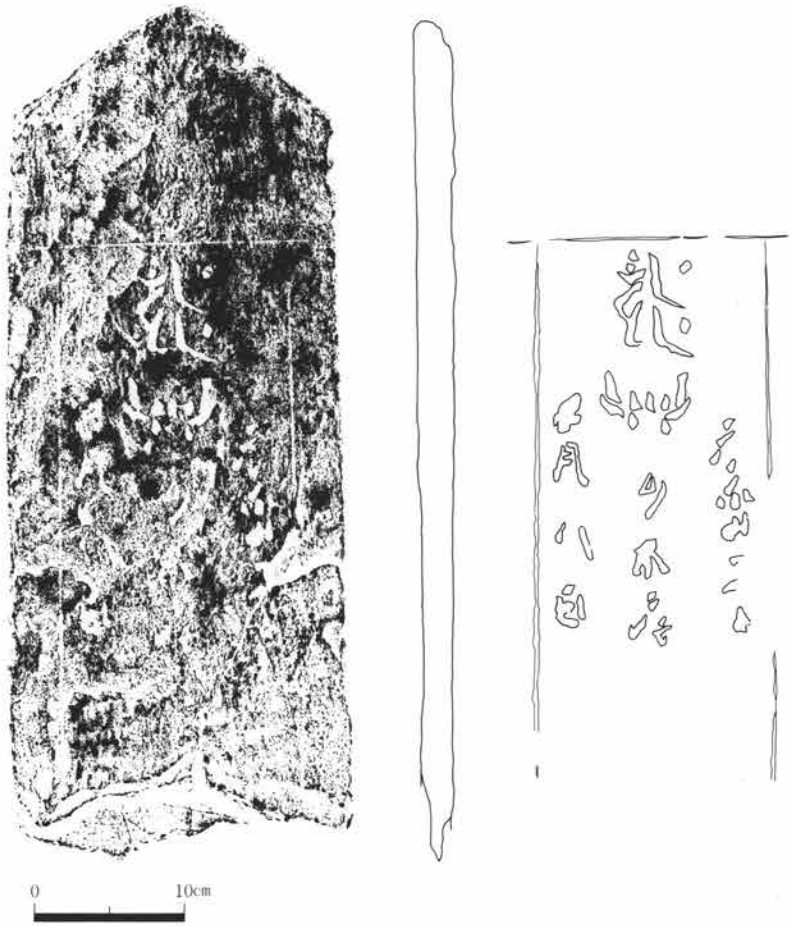


図24　11号溝出土板碑 (1)

石　臼（図26―1・2）

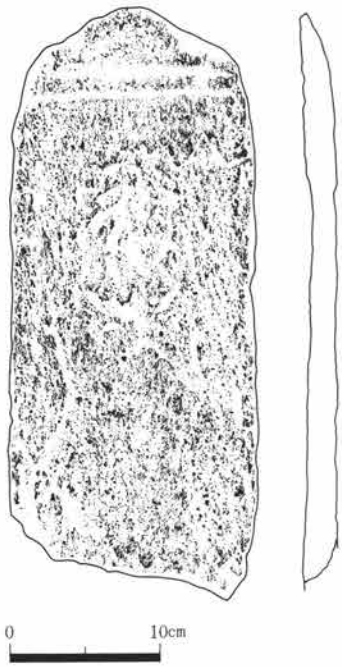


図25　11号溝出土板碑(2)

1は上臼の破片で、11号溝から出土している。全体の約4分の1の破片で周辺部を欠いている。石質は安山岩を用いている。厚さは中央部で11.2cm、径は不明である。芯棒受け穴は径が約3cm、深さ3.5cm程で上面はやや磨滅する。臼目は幅5mm前後、深さ2mm前後で、破損や磨滅のため一定していない。目の方向からおそらく八分画と思われる。又側縁部の中央よりやや上位に方形に穿たれた挽木留め穴が認められる。この部分は欠損しているため穴の深さなどについては不明である。原料供給口については、臼上面に若干残る痕跡から、挽木留め穴の反対側に穿たれたようである。又この臼の特徴として、臼目が芯棒受け穴まで伸びておらず、穴の周囲には幅3cm、深さ3mm程の浅い溝が廻っており、目がそこで止まっているようになっていることである。おそらく原料供給口はこの溝部分に貫通していたと考えられるが、米等の小穀物類ではなく大豆のようなやや大きめのものを挽くための臼ではなかったか。そしてこの浅い溝はやや大きめの原料によって目詰まりするのを防ぐためのものかと思われる。又断面形状の特徴からやや内湾する「ふくみ」をもつと思われるが、破片のためその程度は推察しかねる。

2は表採品で、下臼破片と思われる。側縁部分のため全形は不明であるが、厚さは12cm前後、径は31cm前後と推定される。石質は安山岩を使用している。臼目はわずかに残っているが、走向等については不明である。上面端部はかなり磨滅している。

本遺跡出土の石臼は以上の2例であるが、注目する点としてその破損状態があげられる。1は中央の割れ口は別としても周辺部分については故意に打割したと思われる節がある。又2についても図のような割れ方はやや不自然であり、そして上面に打痕のような剝離部分が見られる点などから故意に割られたと考えられる。これはおそらく普遍的に見られるという真二つに割る方法と同様に、石臼廃棄の際における破壊の習俗によるものと考えてよいだろう。

五 輪 塔（図26―3・4、図27―1）

いずれも11号溝から出土している。石質は安山岩製で、その形状から水輪と思われる。3、4は上面から径約20cm程の椀状の穴をあけている。おそらく蔵骨用として使われたものであろうか。上縁端部は小さな平坦面を造り出してある。両者とも破片であり、その規模については明らかではないが、おそらく径30cm前後の球形に近い形状であったろうと思われる。下部の形状は定かでない。2は側面にノミ痕が残っており、あるいは五輪塔以外の可能性も考えられる。

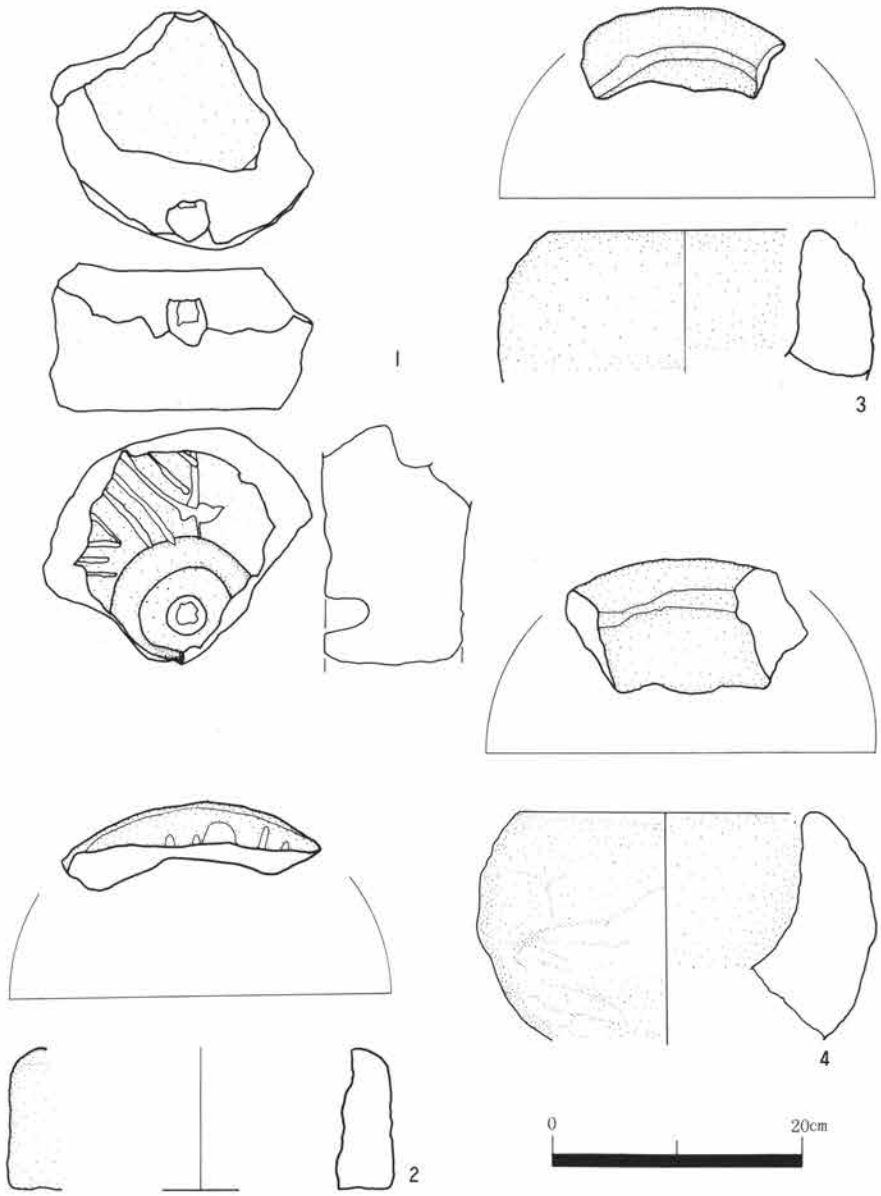


図26　11号溝出土石製品

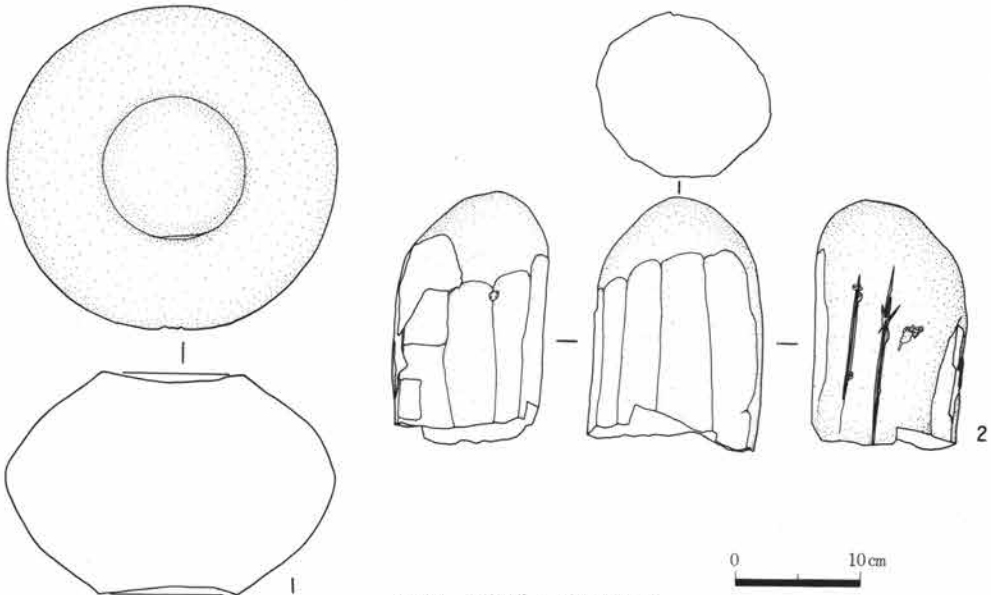


図27　五輪塔・不明石製品

図27の１は完形品で、径は26cm、高さ18cmの大きさである。断面形状はやや扁平の楕円形で上下両面はやや窪んでいる。梵字等は刻まれていない。時期についてはおそらく室町時代のものと思われる。

不明石製品（図27－２）

11号溝から出土している。長さ20cm、径約14cm程で下半部を欠く。石質は安山岩を用いている。側面片側を縦方向に削り、短冊状の平坦面を７面造り出している。又反対側面にも同様の平坦面を１面造り出しているが明瞭でない。上面はほとんど自然面のままで丸くなっている。又側面に縦方向の裂痕が２本平行して走るが、おそらく後世のものと思われる。角柱状にする意図が伺われるものの、「塔」の一種か、あるいはそれ以外のものか不明である。

又下半部を欠いているため、全体の形状も不明である。破損部分は自然現象で欠損したのではなく、人工的にノミ等の鋭い刃物で直方向に割ったような痕跡が残っている。

以上に記載したもの以外にも、11号溝から石製品と思われる石片が数点出土しているが、小破片のため、形状や性格については不明な点が多い。石質はすべて安山岩で面加工をしている事から、おそらく石臼ないしは石塔の一部であろうと思われる。

(2)　陶　磁　器　類

本遺跡出土の陶磁器類は、ほとんどが中世に属するもので、質、量共に出土遺物の主体を占めており、本遺跡の時期や性格を推定する上で、重要な根拠となるものである。

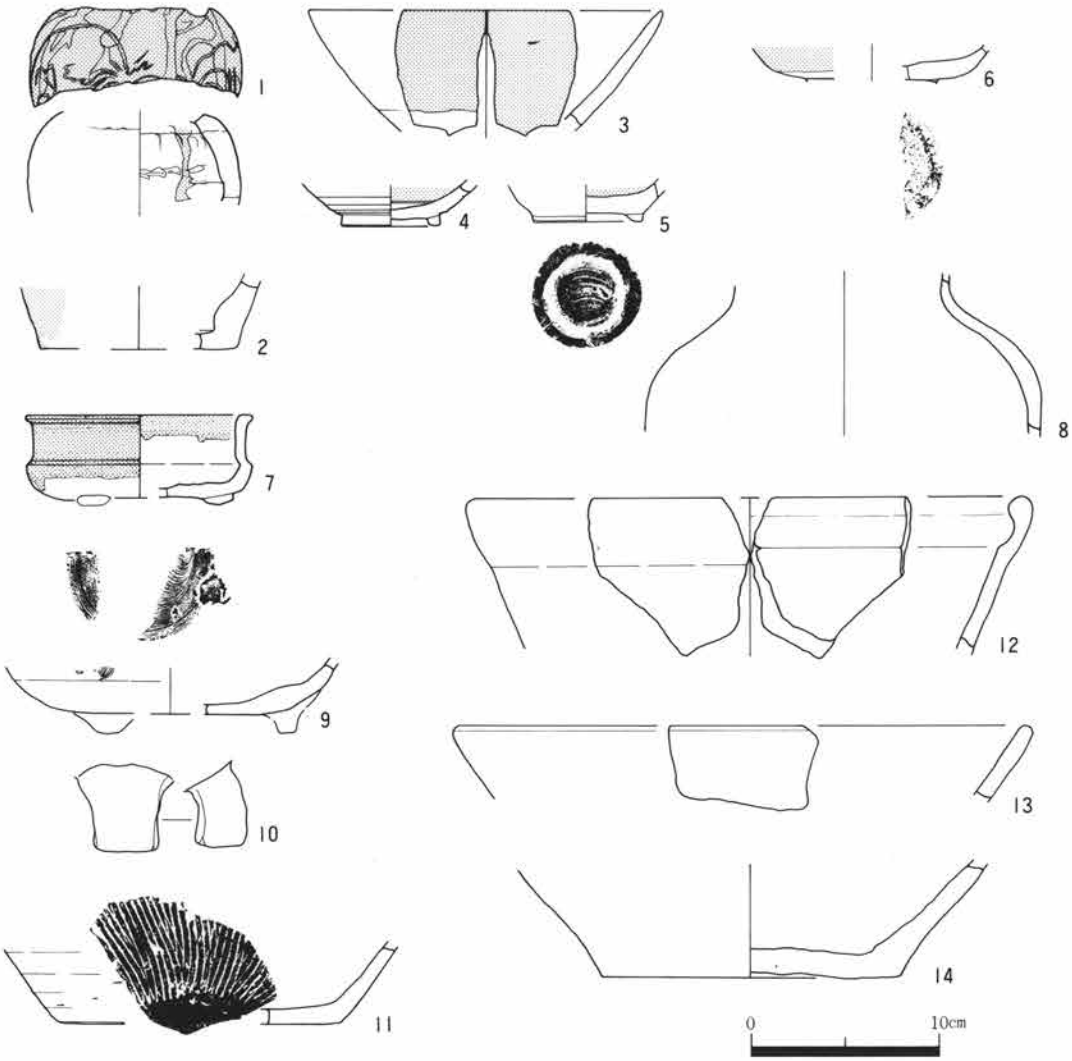


図28　11号溝出土遺物(1)

出土量は、11号溝が最も多く、次いで地下式土壙と思われる43号土壙から比較的多く出土しており、この両遺構からの出土遺物が主体となる。井戸やその他の土壙からも数点の陶器が出土しているが、量、質とも貧弱な内容である。

又これらの出土陶磁器類は、各遺構毎に特色がある訳ではなく、ほぼ同一内容を示している。図29の常滑大甕や図30の火鉢については、11号溝、43号土壙、及び方形竪穴遺構の覆土から、接合可能な同一個体の破片として出土しており、同時期における、これら各遺構への廃棄行為がなされた事を示している。

本遺跡出土陶磁器類は、古瀬戸や美濃のような器面に釉のかけられた施釉陶器、常滑や備前のように無釉で焼き締めのきいた陶器(炉器)、又無釉で比較的焼き締めのあまい陶器を軟質陶器と

して分類した。器種は梅瓶、瓶子、香炉、碗、鉢、火鉢、大甕等の中世における代表的な生活用陶器類が主である。時期は鎌倉～室町時代のものがほとんどで、傾向としては15世紀代のものが主体を占めている。

以下、各種については表4・5・6・7にまとめて記載した。

凡　例　a－口　径　(　)は推定値
b－体部最大径
c－底　径
h－器　高

表4　施釉陶器一覧

No.	器　種	出土地点	法量(cm)	技　法　上　の　特　徴	色調と胎土	備　　考
図28－1	梅　瓶	11号溝	b (12.0)	輪積成形後轆轤調整。内面に輪積痕を残す。篦で画花文を描き、淡緑色の灰釉を施す。酸化気味焼成。	灰白色。微小な黒色砂を含む。精良	古瀬戸。肩部1/2破片。
図28－2	瓶　子	〃	c (10.6)	輪積成形後轆轤調整。気胞の多い淡緑色の灰釉を施す。酸化気味焼成。	灰白色。微小な黒色砂を含む。精良。	古瀬戸。底部1/3破片。
図28－3	平　碗	〃	a (19.2)	轆轤成形。腰部以下を除き黄緑色の安定した灰釉を施す。酸化気味焼成。	黄白色。やや粗い。	古瀬戸あるいは美濃か。1/6破片。
図28－4	〃	〃	c　5.2	轆轤成形。付高台。内面見込み部と底部を除き黄緑色の灰釉を施す。高台接合部をなでる。酸化気味焼成。	灰白色。小黒色砂を含む。やや粗い。	古瀬戸。底部破片。
図28－5	〃	〃	c　6.0	轆轤成形。付高台。見込み部に淡黄色の灰釉を施す。底部に糸切痕を残し、高台接合部なで。酸化気味焼成。	灰白色、小黒色砂を含む。やや粗い。	古瀬戸。底部破片。
図28－6	(皿)	〃		轆轤成形。付高台。見込部と外面腰部まで淡緑色の灰釉を施す。底部に糸切痕を残す。酸化気味焼成。	灰白色。小砂を含む。精良。	古瀬戸。1/5破片。
図28－7	香　炉	〃	a (12.2) b (12.0) c (5.0) h　11.0	右廻転轆轤成形。小粘土粒の脚部を付ける。口辺内面と外面腰部まで淡緑色の安定した灰釉を施す。内面はなで、底部に糸切痕を残す。酸化気味焼成。	灰白色。精良。	古瀬戸。1/3破片。
図34－1	(皿)	43号土壙	a (22.5) b (20.6) c (15.3) h　5.4	輪積成形後轆轤調整。体部下半を篦削りで整形。底部は指なで痕が残る。全面に透明度の高い淡緑色の灰釉を施す。酸化気味焼成。	灰白色。精良。	古瀬戸、脚部を付けた可能性あり。1/3破片。
図34－2	平　碗	〃	a　20.0	右廻転轆轤成形。外面腰部以外に淡黄緑色の安定した灰釉を施す。酸化気味焼成。	灰白色。小黒色砂を若干含む。精良。	古瀬戸。釉は風化のため剝離が激しい。1/2破片。
図34－3	香　炉	〃	a (14.8)	轆轤成形。口辺内面と外面に淡緑色の安定した灰釉を施す。酸化気味焼成。	黄白色。小黒色砂を含む。やや粗い。	美濃か。口辺形状は図34－1に類似。上半1/4破片。

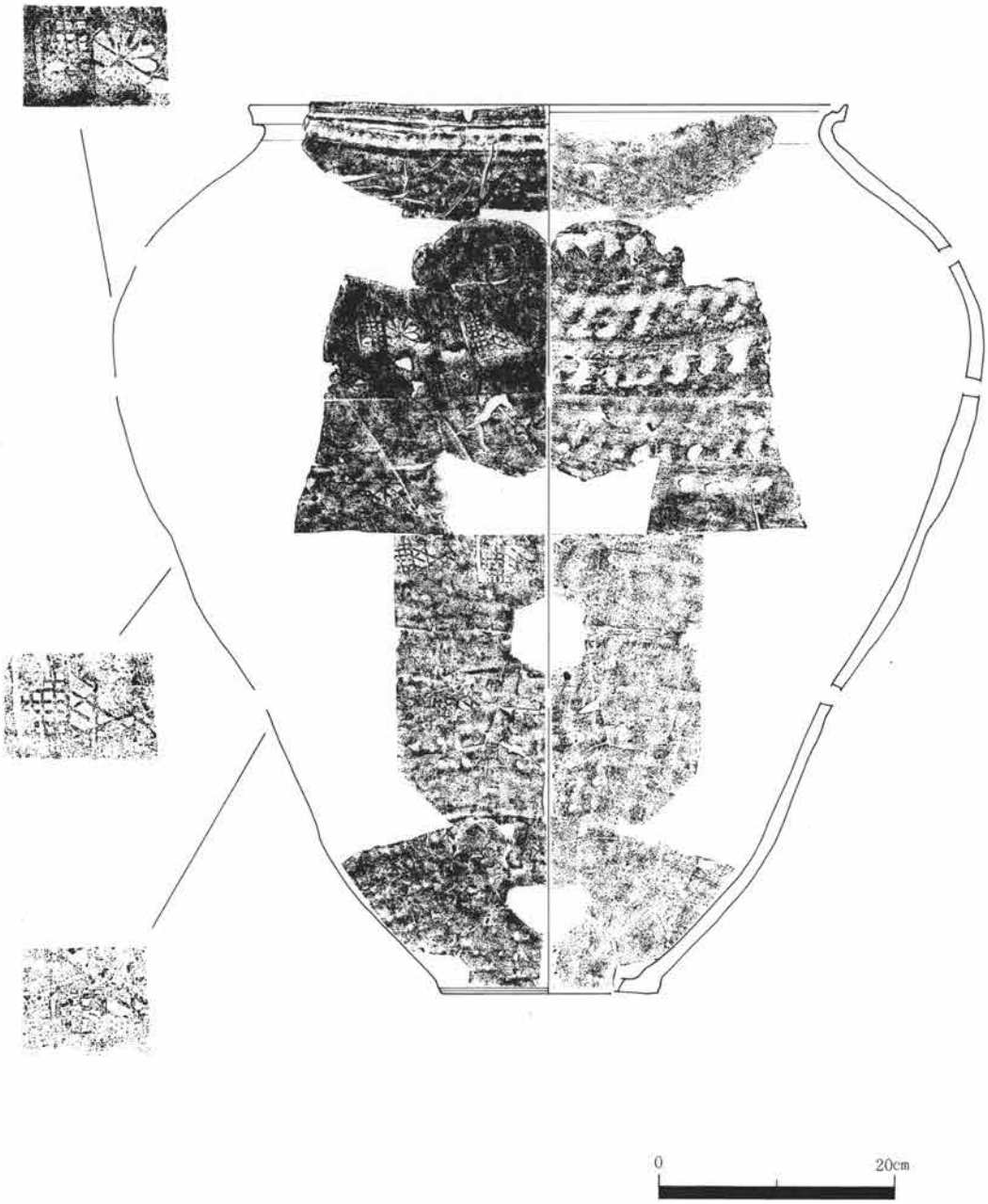


図29　11号溝・43号土壙出土遺物 (1)

表5　陶　器　一　覧

No.	器　種	出土地点	法量(cm)	技　法　上　の　特　徴	色調と胎土	備　　考
図28—11	擂　鉢	11 号 溝	c (15.0)	輪積成形後篦によるなで状整形。内面に8本単位の卸目を連続して施す。底部に指なで痕が残る。酸化焔焼成。	赤褐色。大砂粒を含む。粗い。	産地不明。底部約1/6破片。
図29	大　甕	11 号 溝 43号土壙	a (50.0) h (75.0)	輪積成形後篦によるなで整形。輪積接合部外面に押印を施す。口辺から肩にかけて緑色の自然釉がかかる。口縁は小さなN字状を呈する。砂底。	素地は灰色。器面は赤褐色。大砂粒を含む。泥土か。	常滑。約1/4破片。
図34—4	壺	43号土壙		輪積成形。指なで痕を残す。肩部に押印らしき痕跡がある。器表面にごまふり状の灰がかかる。還元焔焼成。	黒灰色。金雲母、小砂を含む。粗い。	産地不明。頸部約1/5破片。
図34—8	擂　鉢	〃	c (14.5)	輪積成形と思われる。付高台。体部下半を篦削り。高台部をなで整形。	明灰色。大砂粒を含む。	常滑か。内面の磨滅が激しい。
図35—3	(大　甕)	42号土壙	c (20.0)	紐輪積成形。なで痕が残る。焼き締めがきいていない。酸化気味焼成。	淡赤褐色。大砂粒を含む。	常滑か。底部1/4破片。

表6　軟質陶器一覧

No.	器　種	出土地点	法量(cm)	技　法　上　の　特　徴	色調と胎土	備　　考
図28—8	壺	11 号 溝	b (21.5)	輪積成形と思われる。器面に指なで痕が残る。還元焔焼成。	外面黒色、器肉灰色。比較的精良。	産地不明。肩部1/4破片。
図28—9	火　鉢	〃		輪積成形。内外面に指なで痕が残る。外面腰部に一条の沈線と印花文が施される。酸化気味焼成。	淡赤褐色。酸化鉄鉱物を含む粗い土。	産地不明。3脚がついたと思われる。
図28—10	〃	〃		手捏ね成形。	黒灰色。酸化鉄鉱物や長石を含む。	産地不明。火鉢の脚部と思われる。
図28—12	(鉢)	〃	a (30.5)	轆轤整形痕がわずかに残るが、成形は不明。還元焔焼成。	黒色、灰褐色。砂粒を含む。やや粗い土。	産地不明。胎土、焼成は内耳土器に近似。
図28—13	鉢	〃	a (31.0)	成形は不明。口辺部内外面は指なで痕が残る。還元焔焼成。	黒灰色やや粗い土。	産地不明。
図28—14	不　明	〃	c 15.9	輪積成形。内面には成形時のなで痕が残る。酸化気味焼成。	灰褐色。器面は灰色。砂粒を含む粗い土。	産地不明。壺あるいは甕の底部と思われる。

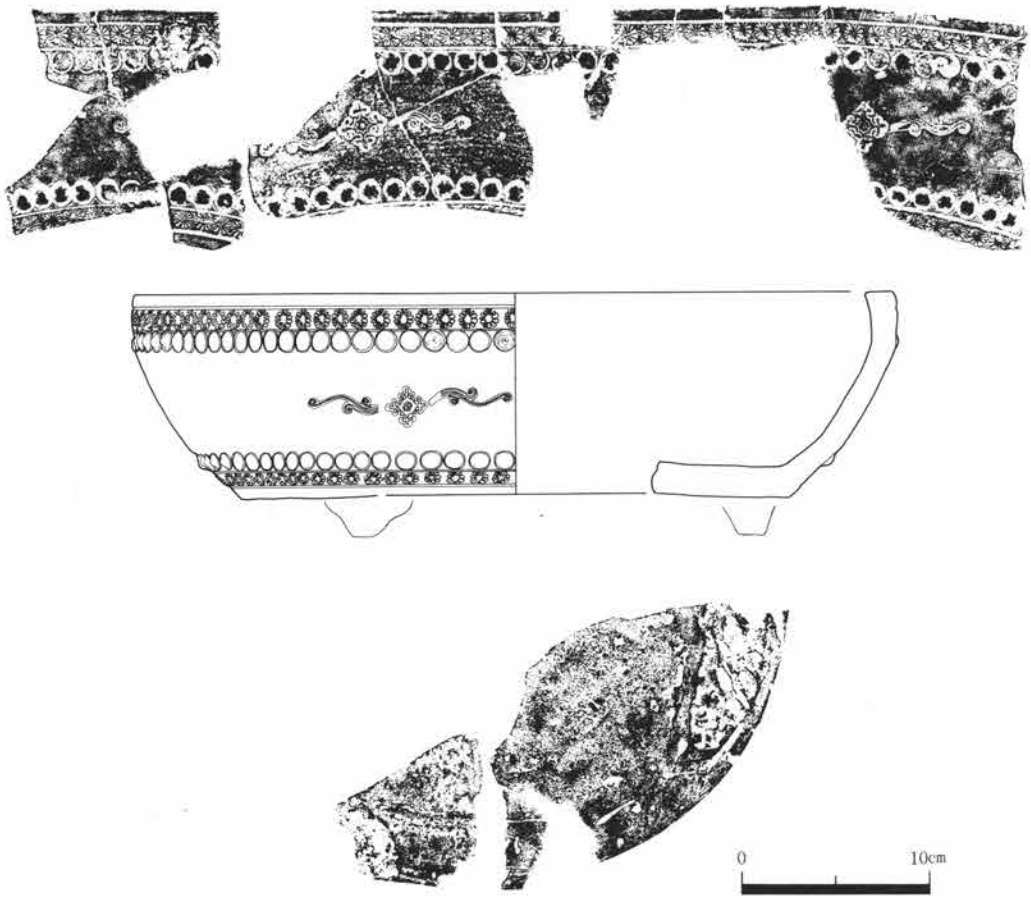


図30　11号溝・43号土壙出土遺物 (2)

図30	火　鉢	11 号 溝 43号土壙	a 41.0 h 11.0 c 29.5	輪積成形。篦で２条の平行沈線、その間に15弁の菊花印文、それに平行して印を用いた円形浮文、体部中央に花弁と唐草の組合せによる印文を施す。内外面とも丁寧な篦研磨。	赤褐色、黄灰色。砂粒を多く含むやや粗い土。	二次的火熱を受け色調の変化が激しい。底部に３脚を付した痕跡あり。
図34－５	鉢	43号土壙	a (32.0)	輪積成形。器面なで調整。口辺外面に弱い稜をなす。酸化気味焼成。	器面灰黒色。器壁黄褐色。砂粒多く粗い土。	内面に横方向の擦痕が残り、磨滅が激しい。擂鉢と思われる。1/2破片
図34－6	〃	〃	a (34.0)	輪積成形。器面なで調整。口辺外面はやや強い稜をなす。還元焔焼成。	暗灰色。長石を多く含むやや粗い土。	他の鉢と比べ堅緻で素地、色調も異なる。産地不明。
図34－７	〃	〃		輪積成形。器面なで調整。口唇は丸味をもつ。酸化気味焼成。	器面灰黒色。器壁灰褐色。砂粒多く粗い土。	内外面共剝離激しい。産地不明。

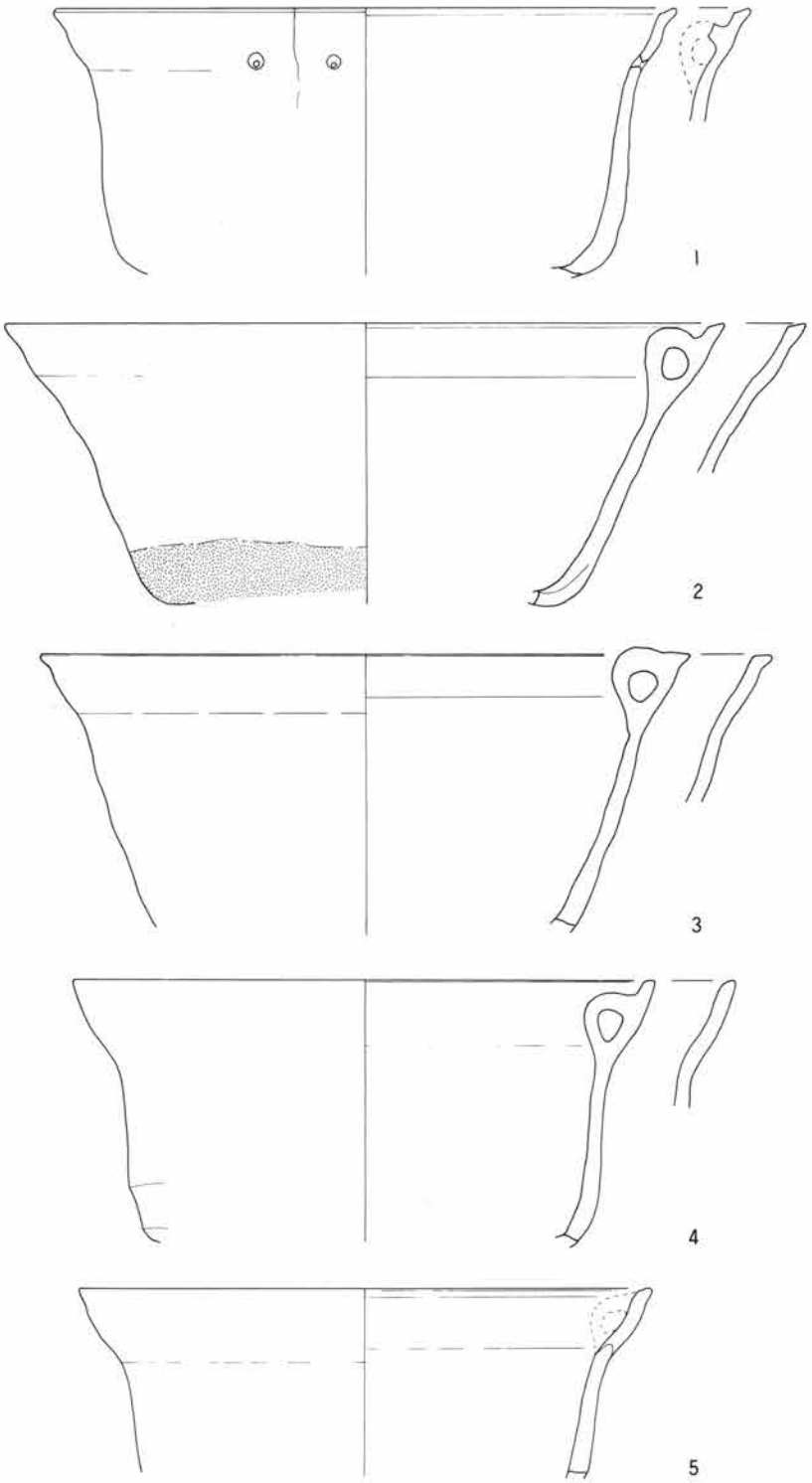


図31　11号溝出土遺物 (2)

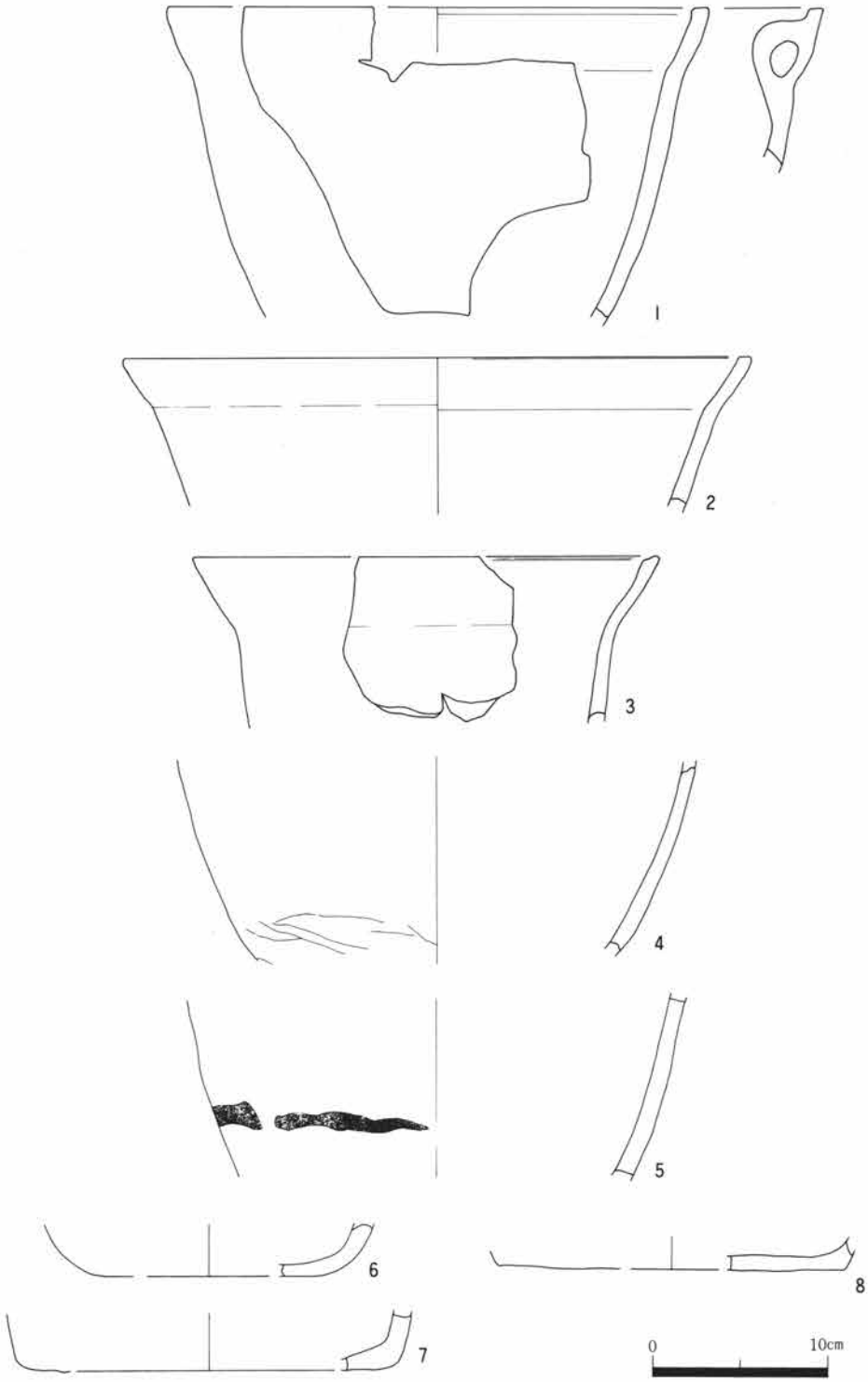


図32　11号溝出土遺物 (3)

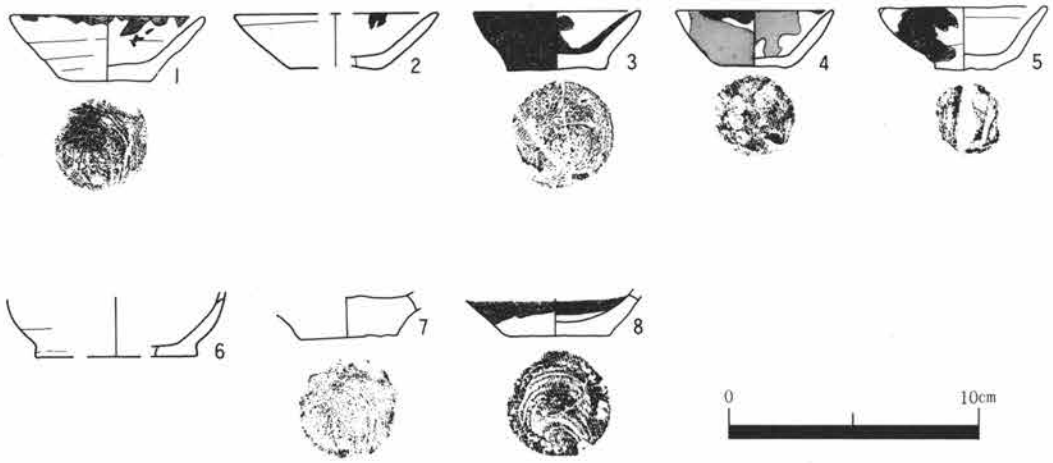


図33　11号溝出土遺物 (4)

図35－1	〃	7号井戸	a (27.0)	輪積成形。器面なで調整。口辺外側に強い稜をなす。酸化気味焼成。	器面灰色。器壁灰白色。砂粒含む粗い土。	内面に擦痕が残り磨滅が激しい。擂鉢と思われる。産地不明。1/2破片。
図35－2	〃	45号土壙	a (31.5)	輪積成形。器面なで調整。口辺外面は強い稜をなす。酸化気味焼成。	器面灰色。器壁灰白色。砂粒多い粗い土。	内面に擦痕が残り磨滅する。剝離激しい。産地不明。

表7　青　磁　一　覧

No.	器　種	出土地点	法量(cm)	技　法　上　の　特　徴	色調と胎土	備　　考
図35－6	碗	44号土壙	c (6.0)	丸味の強い高台。緑色のかった青白色の釉を高台内面以外の部にかける。釉は気胞が多く濁る。	器壁白色。混在物は見られない。	産地不明。底部約1/2破片。

(3) 内　耳　土　器

本遺跡から出土した中世遺物としては、最も量が多い。形態は、ほとんどが器高の深い鍋形である。色調や焼き締まりの程度が軟質陶器に近似するが、製作技法や焼成が古来の土師器生産技術を継承しているものと考えられる事から、陶磁器類とは分離して扱った。

11号溝、43号土壙から他の陶磁器類と共伴して出土しており、廃棄はほぼ同時期に行なわれたと思われる。完形品はなく、すべて破片であるが、個体数としては他の器種を凌駕しており、その使用頻度は高く、又各個体の耐用期間の短かかった事を示唆している。

表8　内耳土器一覧

No.	器　種	出土地点	法量(cm)	技　法　上　の　特　徴	色調と胎土	備　　考
図31－1	内耳土器	11 号 溝	a 34.0 b 30.0 h (14.0) c (27.0)	輪積成形。器面なで調整。耳は口唇下位に2耳か。口唇は内傾する平坦面をつくる。還元気味焼成。	器表黒色。器壁灰色。 砂粒を含む粗い土。	口辺部に2ケ一対の補修孔。 底部と体部1/3を欠く。
図31－2	〃	〃	a 43.5 b 32.5 h (15.0)	輪積成形。器面なで調整。耳は口唇下位につく。2耳。口唇はやや内傾する平坦面をつくる。還元焔焼成。	器表黒色。器壁灰色。 砂粒を含む粗い土。	底部は火熱を受け表面のみ赤変する。1/2破片。
図31－3	〃	〃	a 35.0 b 30.2	輪積成形。器面なで調整。耳は口唇上位につく。2耳。口唇は水平な面をつくる。還元気味焼成。	器表黒色～灰色。器壁灰褐色。粗い土。	外面に煤が付着する。 体部1/2破片。
図31－4	〃	〃	a (31.6) b (26.8) h (14.0) c (24.0)	輪積成形。器面なで調整。体部下半横位篦削り。耳は口唇下位につく。口唇は内傾する丸味のある面をつくる。還元焔焼成。	器表黒色。器壁灰色。 砂粒の多い粗い土。	底部と口辺の一部は火熱を受けて赤変する。 体部1/4破片。
図31－5	〃	〃	a (31.0) b (26.2)	輪積成形。器面なで調整。耳は不明。口唇は内傾する凹面をつくる。酸化気味焼成。	器表黒色。器壁灰褐色。 酸化鉄鉱物を含む砂粒の多い土。	体部1/5破片。
図32－1	〃	〃	a (31.0) b (28.0)	輪積成形。器面なで調整。口唇下位に耳をつける。口唇は水平面をなし内側にやや肥厚する。酸化気味焼成。	器表黒色、器壁暗褐色。 比較的砂粒の少ない粗い土。	口辺部は火熱を受け赤変する。 約1/5破片。
図32－2	〃	〃	a (36.0) b (32.0)	輪積成形。器面なで調整。耳部は不明。酸化気味焼成。	器表黒色。器壁灰褐色。 砂粒の少ない粗い土。	体部外面に煤が付着する。1/3破片。

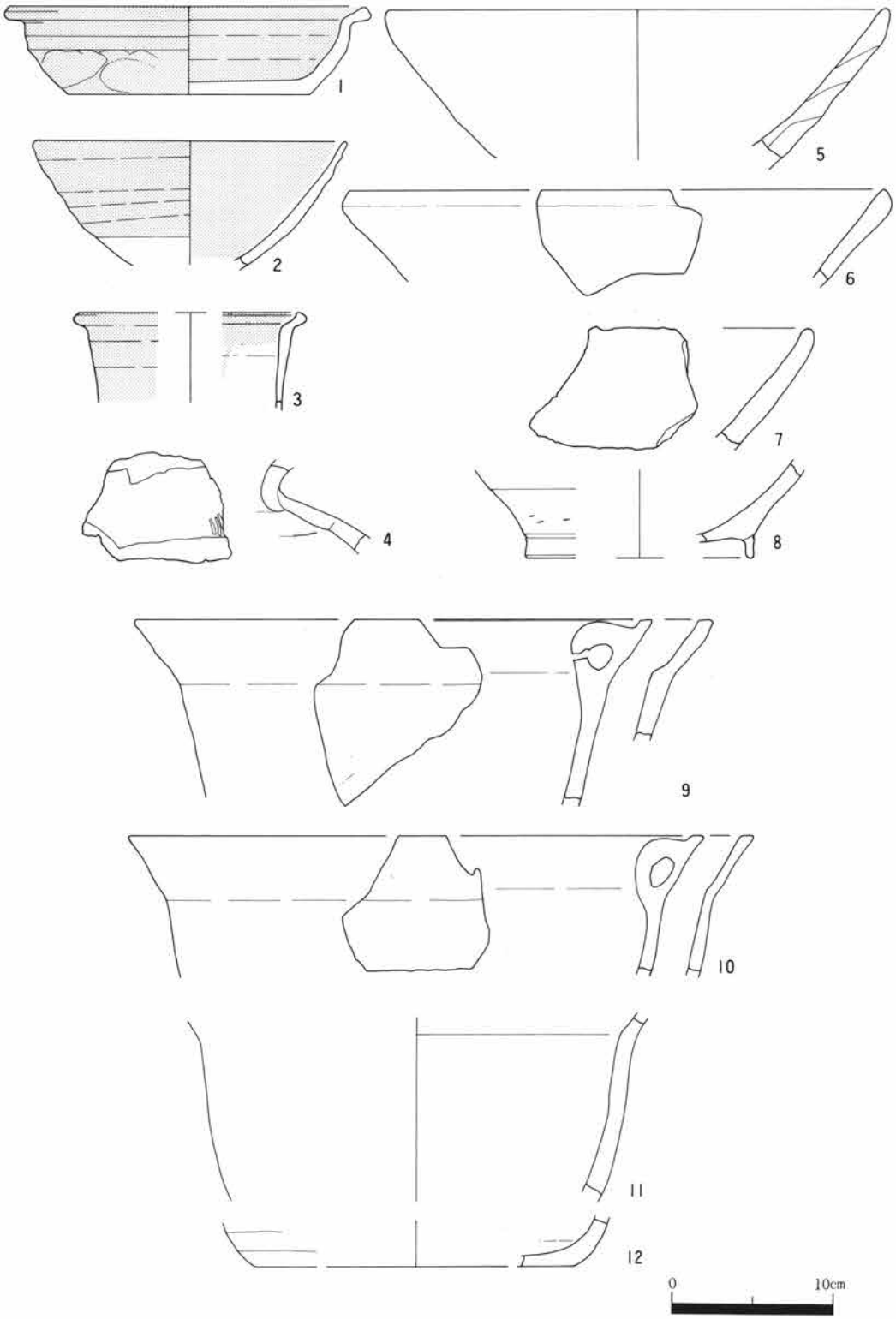


図34　43号土壙出土遺物

図32－3	内耳土器	11 号 溝	a (27.0) b (21.6)	輪積成形。器面なで調整。耳部不明。口唇は内傾する凹面をつくる。酸化焔焼成。	器表黒色。器壁淡褐色。砂粒多い土。	他と比べやや小形。1/6破片。
図32－4	〃	〃	b (29.5)	輪積成形。器面なで調整。体部下半を横方向の篦削り。還元焔焼成。	器表黒色。器壁灰色。砂粒多い粗い土。	体部1/4破片。
図32－5	〃	〃		輪積成形。器面なで調整。還元焔焼成。	器表、器肉灰色。砂粒多く粗い土。	体部下半に水平に炭化物付着。 体部1/3破片。
図32－6	〃	〃	c (15.0)	輪積成形。器面なで調整。丸底気味。還元焔焼成。	灰褐色。 砂粒多く粗い土。	火熱を受けたため一部赤変する。 底部小破片。
図32－7	〃	〃	c (22.0)	輪積成形。器面なで調整。体部と底部の境はほぼ直角の稜をなす。還元焔焼成。	器壁灰色。 砂粒多く粗い土。	火熱を受け一部赤変。底部小破片。
図32－8	〃	〃	c (20.2)	輪積成形。器面なで調整。体部と底部の境は稜をなす。	灰色～褐色。 砂粒多く粗い土。	火熱を受け一部赤変し、器面は剝離が激しい。
図34－9	〃	43号土壙	a (32.5) b (26.8)	輪積成形。器面なで調整。耳は口唇よりやや下位につける。口唇は水平面をつくる。体部篦削り。還元焔焼成。	灰色～灰褐色。 砂粒多く粗い土。	口辺は火熱を受け一部赤変。
図34－10	〃	〃	a (36.0) b (31.2)	輪積成形。器面なで調整。耳は口唇下位につける。口唇は水平面をなす。還元焔焼成。	器面黒色。器壁灰色。砂粒の多い粗い土。	
図34－11	〃	〃	b (27.4)	輪積成形。器面なで調整。還元焔焼成。	器面黒色～褐色。砂粒多く粗い土。	体部下半は火熱を受け、器面一部が赤変する。1/4破片。
図34－12	〃	〃	c (20.0)	輪積成形。器面なで調整。体部下半横方向の篦削りで、丸底気味に成形する。還元焔焼成。	灰色～黄褐色。 砂粒多く粗い土。	火熱を受け器面は赤変する。
図35－4	〃	8 号 溝		耳は口唇と同位につける。口唇は水平面をなす。還元焔焼成か。	金雲母を含む砂粒の多い土。	器表のみ赤褐色で二次的火熱を受けた可能性あり。
図35－5	〃	9 号 溝	c 19.0	輪積成形。器面なで調整。底部と体部の境は直角の稜をなす。還元焔焼成。	器壁灰色。砂粒をやや含む粗い土。	器表は火熱を受け赤変する。

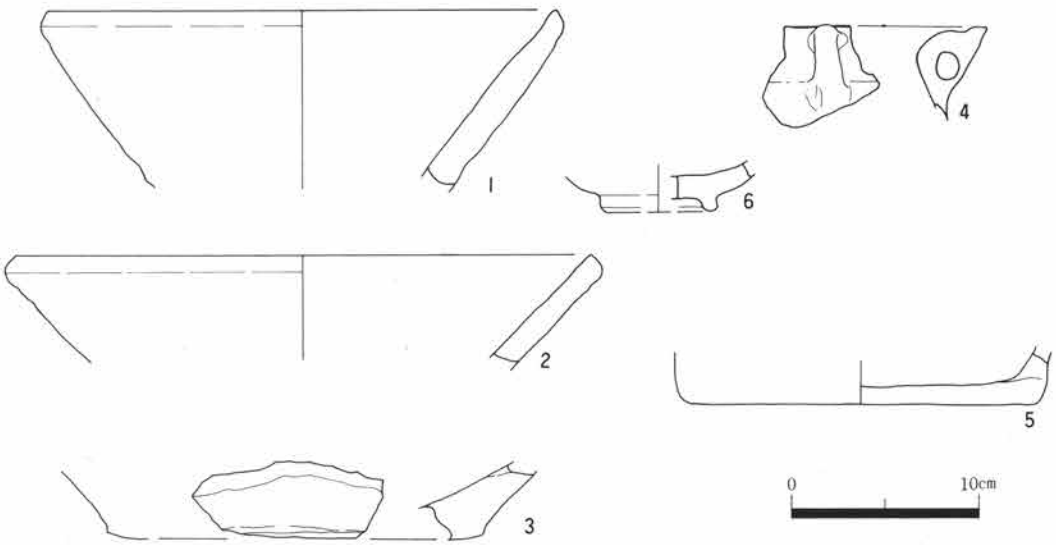


図35　溝・土壙・井戸その他の出土遺物

(4) 土師質土器

素焼きの杯、皿類である。形態の判明するものは8個体で、その他に小破片がかなり出土している。形態は小形杯が主で、いずれも底部に糸切痕を残す轆轤成形のものである。

又口辺の一部あるいは全体にタールの付着が認められるものがあり、おそらく灯明皿として用いられたものと思われる。

表9　土師質土器一覧

No.	器種	出土地点	法量(cm)	技法上の特徴	色調と胎土	備考
図26－1	杯	11号溝	a 7.8 h 2.6 c 3.7	右回転轆轤成形。底部内面なで調整。底部に糸切痕が残る。	灰白色。黒色鉱物を含むやや精良な土。	口辺全体に炭化物が付着する。底面がやや磨滅する。
図26－2	〃	〃	a (8.2) h (2.2) c (3.6)	右回転轆轤成形。底部内面の調整は不明瞭。	淡黄褐色。小砂粒を含むやや粗い土。	口辺一部に炭化物が付着する。底面が磨滅する。1/2
図26－3	〃	〃	a 6.7 h 2.4 c 4.0	左回転轆轤成形と思われる。底部内面なで調整。底部に糸切痕が残る。	黄白色～黒色砂粒の少ないやや粗い土。	内面が磨滅する。
図26－4	〃	〃	a 6.4 h 2.2 c 3.0	轆轤成形。	黒色～黄白色。砂粒の少ないやや粗い土。	内外面共磨滅する。口辺内外面に炭化物が付着する。

図26－5	杯	11 号 溝	a　6.6 h　2.5 c　2.3	右回転轆轤成形。底面に板目状痕が残る。	黒色～灰白色。砂粒の少ないやや精良な土。	底面は磨滅する。
図26－6	(杯)	〃	c (12.0)	右回転轆轤成形と思われる。	淡褐色。砂粒を含む粗い土。	底面は磨滅する。1/4破片。
図26－7	(〃)	〃	c　3.9	右回転轆轤成形。底部を突出させる。糸切痕が残る。	淡褐色。砂粒の少ない精良な土。	内外面共磨滅が激しい。
図26－8	杯	〃	c　4.0	右回転轆轤成形。糸切痕が残る。	黄褐色。やや粗い土。	内外面とも煤が付着する。

5 結　　語

(1) 遺構について

館跡について

11号溝は本稿で述べたとおり、その形態や規模から用水路等の溝ではなく、館等を囲む堀跡であろうと思われる。後述するように板碑を含めて出土した陶器類の年代がほぼ15世紀代を主にするものである事から、堀の使用された時期も15世紀代と考えてよかろう。又最初の構築時期については不明であるが、出土遺物が16世紀以後に下るものはほとんど認められない事から、少なくともこの堀跡は15世紀後半のうちに使用されなくなったものと思われる。

検出された堀跡の全体プランは、地籍図の地割からは復元出来ず、又これに連続すると思われるような溝状の凹み、土塁等は現地には残っていない。従って館の全形プラン及び規模を推定するのは難しい。堀を故意に屈曲させ、小さな突出部を造り出している部分は、おそらく虎口、あるいは郭相互の通路と思われるが、これを境に堀の走向が変化している事、そして堀のコーナー部から15mほどしか離れておらず、比較的近い場所に築かれている事等から、古段階に多い単郭方形の館ではないようである。この突出部周辺には門跡のような遺構を期待したが、調査では残念ながら明確なものは検出されなかった。この館跡に付随する施設として考えられるものに方形竪穴遺構がある。堀コーナー部から3mしか離れておらずこの間に土塁等が築かれていたとすれば、かなり際に寄って構築されたものである。その点から館の付随施設と解するには若干の疑問もある。しかしながら堀跡と同一及び同時期の遺物が床面から出土しており、同時存在の可能性は高いと考えられる。このような遺構は、若干の形態差はあるものの中世館跡に伴って検出されたものが数例認められる。群馬県内では高崎市矢島遺跡で10基確認された他、境町下渕名遺跡でも検出されている。他県では栃木県石那田館跡[(1)]や埼玉県河越館跡[(2)]等[(3)]に同様の遺構が見られる。いまだ類例が少なく、これらを総括して述べるには時期尚早であるが、大概共通する点として一辺3m以下の小規模のものが多く、方形あるいは長方形のプランを呈する竪穴遺構である事があげられる。又柱穴と思われるピットが検出されているが、それらは古代住居跡に見られるように床面ではなく、壁際に設けられる傾向がある。これは小規模な床面を可能な限り利用した結果に他ならないだろう。これらの遺構の性格については、倉庫や家畜小屋等の説があり、一定していない。これをより細かく解明していくには今後の資料の蓄積と、形態や出土遺物、検出状況等の分析は当然の事ながら、絵巻文書や古文献等からの中世館に関する各施設の復元考察は欠かせない作業になると考えられる。井戸跡については調査区からは7基程検出されているが、いずれも深さ2m前後の小規模な素掘りのもので、野外における一次的なものならばともかく、館跡内に設けられる井戸としての長期間の使用には耐えられなかったと思われる。又狭い地域に数本の小井戸を穿つ事は土地利用的にも非合理的なものであったと想像される。以上のような理由から、

これらが実際に井戸としての機能を持っていたとしても、そのすべてが同時存在で館跡に伴うものかどうかは若干疑問な点が残る。

この他の遺構として掘立柱建物跡が１棟検出されている。方形竪穴遺構の南側に並列して位置するもので、主軸方向は若干異なる。時期については遺物が出土しないため不明確にならざるを得ないが、上記のような配置関係から、方形竪穴遺構、堀跡と共に館跡の一部をになっていた可能性も十分考えられる。

さて、堀跡、方形竪穴遺構等の遺構群から、本遺跡を15世紀代の館跡と推定してきたが、その存在を裏付けるような古記録や地名は現在は残っていない。従って本遺跡の性格や歴史的位置付けを推定するのは非常に困難であるが、その数少ない手懸りとして時間的、位置的に最も密接な関係を持ったと考えられるものに浄光寺があげられる。浄光寺は本遺跡の南50m離れて立地し、現在も巾４m、深さ1.5mの空堀が北側に囲っており１m程の高さの土塁も残っている(図版10)。全形は方150m程の方形を呈すると思われる。寺の由来についての詳細な記録は残っていないが、寺伝や、境内に現存する五輪塔の年代等から14世紀前半にはすでに存在していたようである。従って少なくとも15世紀代には存在したと思われる本遺跡の堀跡は浄光寺と併存していたのは明らかである。現存する浄光寺堀跡と土塁が当時、既に築かれていたかどうかは別として、浄光寺域やその区画と無関係に本遺跡の堀が掘削されたとは思えず、むしろ浄光寺は現在残っている単郭方形ではなく、かつては複郭式で規模も大きく、今回検出された堀跡はその一部であった可能性も考えられるのである。又本遺跡の存する竜舞は、中世には「寮米(りょうまい)」と呼称されたものと思われ、(4)かつては伊勢皇太神宮領の御厨であったが、武士勢力の伸長と共に、その所有権は時の権力に左右され、室町時代には私有化、分割化も行なわれたようである。15世紀代には禅秀の乱、永享の乱等の戦乱が相次ぎ、この土地の武士達にとっても平穏な生活はまず望めなかったものと思われる。寺伝から浄光寺との関係が深いと考えられる舞木氏は、竜舞より南の佐貫荘で大きな勢力を張っていたが、永享の乱後衰亡してしまったため、浄光寺及びその周辺地域についても舞木氏没落の多大な影響(5)を受けたであろう事は想像に難くない。本遺跡の堀跡が館跡であろう事は前述したが、浄光寺とともにこれが舞木氏関係のものであるとすれば、出土遺物がほとんど15世紀代のもので、それ以後に下るものがない事から、この館跡の最下限は15世紀後半と考えられ、記録に残る舞木氏衰亡の時期とほぼ重なるのは興味深い。

地下式土壙について

竪壙と地下壙とから構成されるこの種の土壙は、かなり古くから注目され、その名称も機能を想定した「地下式横穴」、「地下式土倉」や形態的呼称である「地下式土壙」、「地下式壙」等で呼ばれてきた。各遺跡における検出状況や出土遺物、更に同時存在と思われる他遺構との関係などから、各遺跡毎でこの種の土壙の機能や位置付けが試みられてきたのは周知の通りである。本遺跡についてもある程度、その存在理由について推察することはできる。しかしこの土壙について

の総括的な研究はまだ端緒についたばかりで、機能についてはもちろんの事、その形態分類や変遷過程の検討についてもまだ不十分であり、解明すべき問題が多く今後の具体的資料の検討と研究の進展に期するところが大きい。従って現段階では機能的名称を避け、まずは形態的特徴から命名された「地下式土壙」あるいは「地下式壙」で呼称するのが妥当と思われる。

本遺跡では23号土壙、43号土壙、44号土壙の3基が検出された。地下壙の形態は23号土壙が主軸と直角方向に横長の長方形を呈し、43号土壙と44号土壙は共に円形を呈する。竪壙は3例とも地下壙端部から斜上方に穿たれたもので、いわゆる「羨道」状の施設を持たないものである。43号、44号土壙に見られる円形の地下壙は、群馬県前橋市清里南部遺跡群例、神奈川県当麻遺跡例、東京都小金井市前原例等[6]と同様であるが、この形態が基本型といわれる長方形[7]から変化し、規格性がくずれた段階のもの[8]であるかどうかは不明である。

本遺跡の3例とも遺構に伴う遺物はほとんどなく、大部分は天井部崩落以後に堆積したものと考えられるが、その中でも特に43号土壙からは多くの大形陶器片が出土しており、土壙崩落後にゴミ穴として使用された可能性がある。これらの出土遺物はほとんどが15世紀中葉のものであり、又本遺跡の地山は比較的砂質で崩れやすいことから、地下式土壙の天井部は構築後かなり早い段階で崩落した可能性が強く、この43号土壙の構築時期は、遺物の年代からさほど遡らない14～15世紀代と思われる。又44号土壙は出土遺物が少ないが、その位置関係から43号土壙とほぼ同時期の所産と推定される。23号土壙は小片が2～3点出土したのみで、遺物から年代を推定し得ないが、ほぼ同時期と思われる隣接する7号井戸から15世紀代の陶器が出土しており、43号土壙ほど限定できないが、やはり15世紀代の所産と考えられる。又これらの出土遺物は11号溝出土遺物、井戸跡出土遺物とほぼ同時期、同内容を示している事から、おそらく14～15世紀代のある時期にこの地下式土壙は、堀跡と思われる11号溝や井戸とほぼ同時期に存在し、館跡の一部として機能していた可能性が考えられるだろう。

地下式土壙の具体的な機能については、前述の如く各遺跡毎に「墓壙」説、「土倉」説、「麹室」説等の推定がなされているが、一般論として定説化しているものはない。最近数例の人骨の出土や板碑、石塔類の出土例をあげ、本土壙を墓壙とする説もあるが、その出土例はまだ数少なく、地下式土壙の範囲でとらえられるものは形態、規模、出土遺物[9]、他遺構との関係等なお様々な様相を示しており、これらをすべて墓壙と捉える考え方には無理があろう。この様相における違いが時間的変化と考える以外に、当然機能の違いも考慮すべきであり、その具体的な機能を解明するには数例をもってすべてを語るのではなく、分類された各類型の序列と、類型毎の詳細な検討という地味な作業を経てからでなければ説得力のあるものにはならないと考える。しかしながら、人骨が発見される以上墓壙としての機能もそなえていたのは事実であり、又たとえ人骨や副葬品が出土しなくとも、その可能性を考慮する必要はあろう。一方「土倉」説においては、それを証拠立てる遺物や構造がほとんど認められないだけになお一層根拠が薄弱である。しかしながら、他の伴出遺構等の関連から推定できる例もあり得る。本遺跡の場合、前述のように検出された3基

の土壙は館跡の一部として機能していたと推察され、又23号土壙に隣接して、同時期と思われる井戸が構築されている事から、墓壙よりむしろ土倉の可能性を考えたい。形態的にも竪壙部が地下壙上部へ直結するもので、羨道状の構造を持つものに比べて比較的人の出入が軽易であったと思われる事から、人の頻繁な出入を必要としない墓よりも土倉としての使用に適していると考えたい。

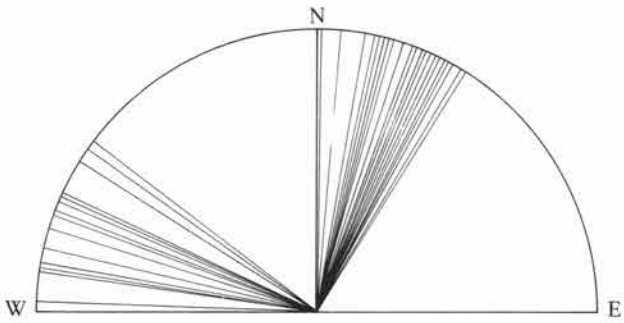


図36　長方形土壙主軸方位グラフ

長方形土壙について

近年各地で中近世の遺跡が調査されるに従い、類例の増してきた遺構である。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸が２m内外で短軸が0.7m前後のものが多い。深さは一定していないが１mを越えるものは少ないようである。本遺跡で検出された長方形土壙は表２に示したように長軸1.5～1.8m、短軸0.5～0.7mに集中する傾向がある。又その特徴として主軸方向が一定であるという点をあげる事ができる。図36によれば若干の振れはあるもののほとんどが南北方向と東西方向に集中しており、主軸方向はこの２方向にほぼ規制されたものと考えられる。覆土についてはほとんどロームブロックを混入する黒褐色土が主で、レンズ状水平の堆積はみられず人為的な埋没による堆積と考えていいだろう。遺物はわずかに45号土壙で大甕と擂鉢が出土したのみである。土壙相互の関係についての特徴としてはその位置関係があげられる。重復関係は数ケ所で認められるものの、並列したり又は主軸がほとんど同一であったりする例が多い点、又重復しないものについても並列あるいは縦列している例が多いという点から、これは土壙を堀り込む際に無作為でなく、他の土壙を意識して場所を選んだものと解釈していいだろう。

以上のように長方形土壙はほとんどが同一の特徴を有し、又相互に位置を意識していると考えられる事からほぼ同一時期の所産と考えられる。遺物が出土していないためその確実な時期は推定しえないが、室町時代と思われる11号溝や井戸を切って堀り込まれている事から、おそらく近世以後のものと考えられよう。性格については、墓跡あるいは貯蔵穴の可能性が強いと思われる。高崎市寺ノ内遺跡では長方形と思われる３基の土壙から人骨、人歯、古銭、かわらけ等が出土しており、墓跡であったとされている。又栃木県赤塚遺跡では、本遺跡と同様の長方形土壙群が検出されており、そのうちの一基からは破片ではあるが人骨が出土している。[10] 確認はしていないが、他にも数例、人骨ないしは墓の副葬品を出土した中近世の土壙が検出されているようである。[11] しかし大多数は人骨や副葬品の出土しない土壙であり、一概に長方形土壙を墓壙としてのみ類推する訳にはいかない。本遺跡の場合も長方形土壙の形状、規模、方向の規則性、相互の位置関係な

どの特徴、又地名が「庚塚」という墓場と関連をもつ名称である事など、消極的ではあるが墓跡であった可能性も考えられない事はない。しかし骨や六道銭などの遺物が検出されない限り推定の域を出ない。貯蔵穴は、地方によって「イモアナ」「ムロ」など呼称は異なるが、主に家屋の側、畑の区画やサク等にそって、穀類等を短期間保存するための穴を堀るものであり、現在でも行なわれている。これが遺構として検出された場合、出土遺物はほとんど無いものと予想され、又畑区画にそって堀られたものであればその主軸方向は自ずと一定したものになるであろう。本遺跡の長方形土壙の性格については以上のように墓か貯蔵穴かを判別する根拠を欠くため、結論としてはどちらともいえない。この時期の土壙については今後において類型化を進める作業が現段階で必要と思われる。

(2) 遺物について

本遺跡出土の遺物で主体を占めるのは、中世の陶器、土器類で、特に11号溝と43号土壙からまとまった資料が出土しており、これらを検討する事で本遺跡の時間的位置や地域的な特性の一端を伺う事が出来ると思われる。

陶磁器類

現在のところ、中世遺物で最も研究の進んでいるのは、古瀬戸や常滑等の陶器である。編年にしても、陶器に刻まれた紀年銘や古文書との関連等から、ある程度実年代との対比も可能である。そこで本遺跡出土の陶器類を従来の編年観に位置付けて本遺跡の年代推定の根拠としたい。

まず、11号溝出土の梅瓶は、やや小ぶりのもので、文様や成形技法から、古瀬戸の最盛期、おそらく14世紀代のものと思われる。又11号溝、43号土壙から出土している平碗及び香炉は、古瀬戸最盛期の後半、15世紀代のものと考えられる。特に11号溝出土の袴腰香炉（図28―７）は器高が低く、三脚が小さな粘土塊に退下している事から、その末期的なものと思われる。一方11号溝と43号土壙の両遺構から出土した常滑の大甕は、その口辺形態がまだ典型的な「N」字になっていない事から13世紀代まで遡りうる可能性があろう。又43号土壙出土の擂鉢（図34―８）は高台を付けたものである事から、おそらく13世紀代のものと考えられる。以上のように、古瀬戸及び常滑の陶器類については、13～15世紀のものが出土している。しかし、常滑の大甕や擂鉢が比較的耐用年数が高く、他の陶器や土器類よりも古段階のものである点を考慮すれば、その他の軟質陶器や内耳土器等は14～15世紀代に主体を置く可能性がある。軟質陶器類は壺、鉢、火鉢等が出土しており、個体数としては鉢が多い。壺と鉢はほとんどが焼き締まりがきいておらず、表面に燻しがきいたものである。これらは関東地方各地で同様のものが出土しているが、その産地や年代観については未解決な部分が多い。群馬県内では太田市金井丘陵に窯を想定した金井焼が注目されているが、まだその実態については明らかではなく、器種構成等の具体的な内容の検討については今後[12]の資料の蓄積によるところが大きい。一方の軟質陶器である火鉢は、本遺跡出土のも

のと同様の印文を施したものが県内の長楽寺遺跡をはじめ、関東地方各地の遺跡、更に九州地方にまでも分布[13]している。印文の種類や形態に若干の相違は見られるものの、比較的[14]画一的な製作技法や印文の特徴[15]等から、それぞれ各地域で独自に生産してのではなく、ある一定地域で生産を掌握し、全国的に播出していたものと想定される。その特定地域として、文様の特徴や技術的背景から大和や東海地域に求める論考[16]もあるが、現在のところそれを裏付ける窯の存在や、播布密度等は不明確[17]であり、その生産地は推定の域を出ないのが現状である。

内耳土器について

口辺部内面に耳状の環が付けられるこの一群の土器に関して、その発見や注目をあびた例は、かなり古くからあったが、資料が集積されるにつれ、分類や編年作業等手がつけられたのはつい最近になってからである。従って分類基準の選定や形能変化の要素の把握等については研究者のばらつきが大きく、今だに共通した認識を得ていないのが現状である。

東日本地域から出土した内耳土器は、その形態から主に鍋形、鉢形、ほうろく形の３種に分類できるようである。鍋形は器高が高いもので、逆にほうろく形は器高が低く、鉢形はその中間の形態を呈するもの[18]である。本遺跡出土の内耳土器はすべて鍋形であり、しかも、ほぼ同一形態を示している。つまり、口辺部が外傾し、屈曲して体部に続き、底部は平底を呈する一群である。近年、内耳土器についての総括的な論考を行なった中村倉司氏によれば、この形態は鍋形の最初のもので、体部の直立する器高の高いほうろく形から変化したものとしているが、この体部が外傾し、口辺部が屈曲するという形態的な変遷の過程については説得力のある説明がなされていない。又、体部が直立するものと外傾するものと比較して前者の方が古いともしているが、資料は完形品よりも破片が圧倒的に多く、ほとんどが復元実測のためその傾斜角の微妙な違いで先後関係を判断するのは危険であり、妥当とは思えないのである。又、体部直立するものの例として長野県出土の内耳土器を掲げているが、他地域にはほとんど見られないという地域的特性を持つ事、共伴遺物から体部外傾のものとさほど時間差[19]は認められない事等から、これらを編年的に古段階に位置付け、他の形態のものへ派生していくという氏の考え方には賛意しかねる。内耳土器の出土例は、共伴遺物等から判断して、室町時代以降のものを主としており、その祖形の追求は鎌倉時代や平安時代まで遡る必要がある。しかしながらこの時期の資料は少なく、内耳土器の祖形として積極的に呈示するようなものは現在のところ認められない。一方、鍋形の内耳土器と同形態の内耳鉄鍋の存在が知られており、これは内耳土器よりも、古い時期に存在したという証拠はないものの、同時期に存在した事は明白[20]である。この内耳鉄鍋については形態や時期等について不明解な部分が多いが、少なくとも内耳土器とほとんど同形態のものが存在する以上、これを模倣して土器を製作した可能性はかなり高いのではないだろうか。つまり、本遺跡例のような鍋形内耳土器は中村氏が述べたように、内耳土器の型式学的な変遷の過程の中から生まれるのではなく、むしろ内耳鉄鍋の模倣から始まったものと考えたいのである。ただし内耳鉄鍋は丸底を主とする

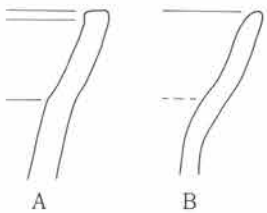


図37　内耳土器口辺部形態

が、土器の方は平底が一般的である。この点使用法の差違も問われるが、むしろ鉄鍋のような丸底が土器では作り難いという技法上の条件に起因するものと考えられる。

さて本遺跡出土の鍋形内耳土器は、前述のとおり、ほぼ同一形態をとると述べたが、口辺部形態に注目すると大きく2種に分類できる。これを便宜的にA類、B類と呼称する（図37）。

A類――口唇上面は水平で、内側にやや肥厚する。口辺屈曲部は強い稜をもつ。

B類――口唇はやや内傾する稜の弱い面をなし、口辺屈曲部はなだらかで稜は弱い。

ここでB類はA類の使用による「手ずれ」の結果とも考えがちだが、口辺部に製作時のなで痕が残っており、そうでない事は明白である。出土例からは、この中間形態ともいうべきものも数片あるが、ほとんどがA、Bどちらかに分類する事が可能で、形態的特徴の重要な要素として把握されるものである。そして同じ遺構から出土してはいるが、共伴遺物の年代がある程度の時間幅が与えられる事等から、このA、B2種の違いはそのまま時間差として把えられるのではないだろうか。この場合、より内耳鉄鍋に忠実な模倣と考えられるA類が古く、B類は口辺形態等が次第に簡略化された段階のものと考えたいのである。

以上、本遺跡出土の鍋形内耳土器を2種に分けて考察してみたが、口辺部形態だけでなく、体部形態や製作技法等にもバラエティが見られるため、更に細分する事は可能と思われる。又、本遺跡のみの現象としてではなく、他遺跡出土例を含めて総括的な検討を重ねていく必要があろう。

なお、鍋形内耳土器の使用法については、煤の付着や炭化した「煮こぼれ」の跡、底面の火熱を受けた跡等から、食物を煮沸したものと考えるのは当然であるが、その耳の利用法について、縄等の痕跡の無い事がしばしば指摘されており、本遺跡出土例についても同様に擦痕等の使用を裏付けるような痕は見られなかった。内耳部は後世まで退下せずに残っている点から、使用上不可欠な部分であるのは間違いないが、具体的なその利用法については推定の域をでないのが現状である。

〈註〉

（1）『矢島遺跡・御布呂遺跡』　高崎市教育委員会　昭和54年
（2）『石那田館跡』　栃木県教育委員会　昭和50年
（3）『河越館址遺跡―発掘調査概報―』　川越市教育委員会　昭和46年
（4）『山田郡誌』　山田郡教育会　昭和14年
（5）（4）に同じ
（6）『富田遺跡群　西大室遺跡群　清里南部遺跡群』　前橋市教育委員会　昭和55年
（7）『当麻遺跡　上依知遺跡』　神奈川県教育委員会　昭和52年
（8）前原横穴調査団「小金井市前原町地下式横穴の調査」『文化財の保護』第4号　東京都教育委員会　昭和47年
（9）中田　英「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』第2号　神奈川考古同人会　昭和52年
（10）『寺ノ内遺跡』　高崎市教育委員会　昭和54年

(11)　「赤塚遺跡」　『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』　栃木県教育委員会　　昭和55年
(12)　倉田芳郎　坂詰秀一　「古代・中世における手工業の発達　窯業―東北・関東―」　『日本の考古学』Ⅵ　歴史時代　上　　昭和42年
倉田芳郎　「関東」　『世界陶磁全集３　日本中世』　　昭和52年
(13)　『長楽寺遺跡』　新田郡尾島町教育委員会　　昭和53年
(14)　『越畑城跡』　埼玉県教育委員会　　昭和54年
(15)　『浜の館―阿蘇大宮司居館跡―』　熊本県教育委員会　　昭和52年
(16)　(13)に同じ
(17)　稲垣晋也「瓦器埦の成立と展開」『日本歴史考古学論叢』２　　昭和43年
(18)　中村倉司　「内耳土器の編年とその問題」　『土曜考古』創刊号　土曜考古学研究会　　昭和54年
(19)　山田瑞穂　「長野県における中世山城調査の現状と問題点」『中部高地の考古学』　長野県考古学会　　昭和53年
(20)　宇田川宏　加藤晋平　越田賢一郎　「北海道端野町のイワクテ」『考古学ジャーナル』67　昭和47年等で紹介される。

V　上遺跡の調査

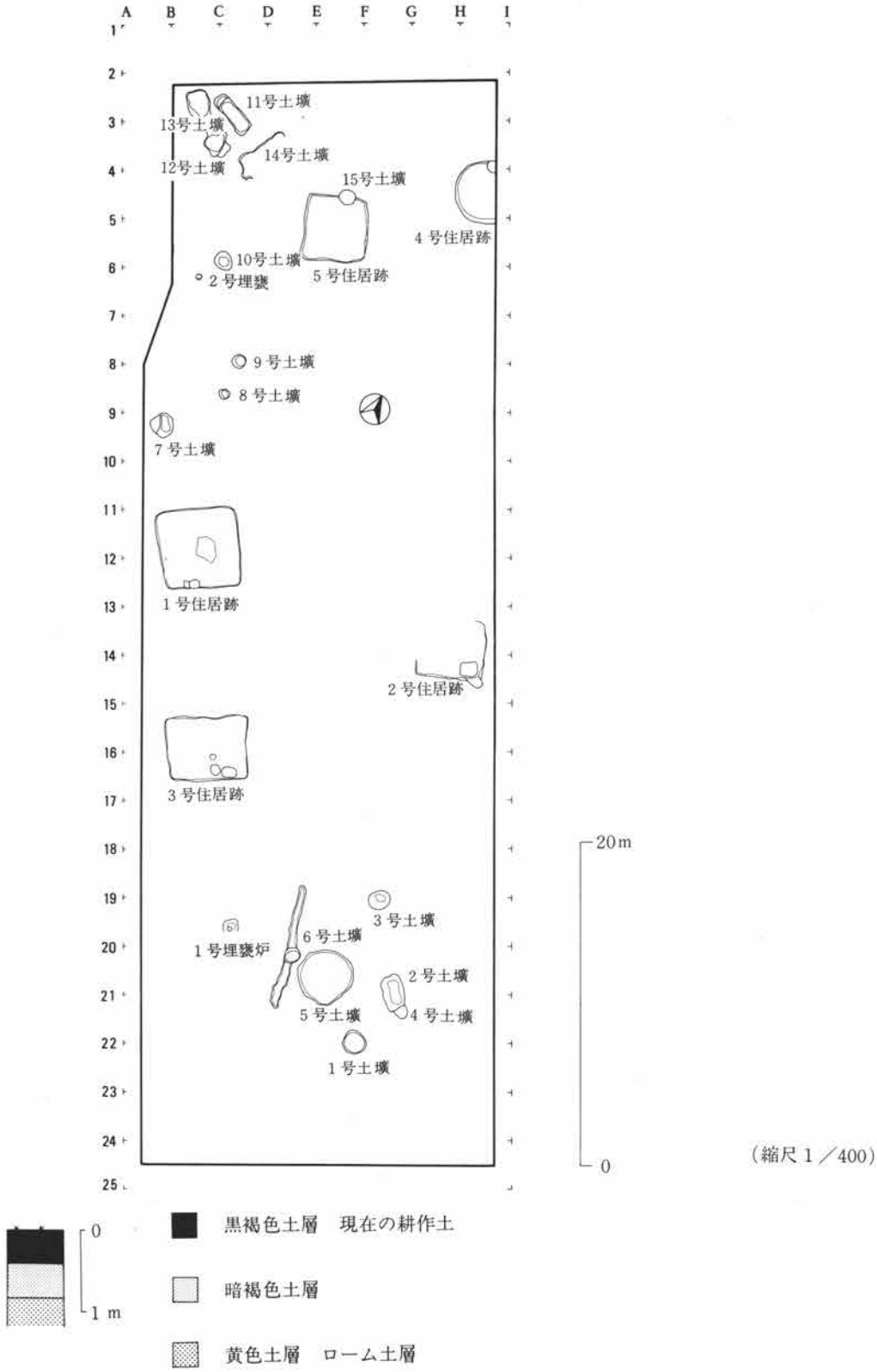
1　上遺跡の概要

本遺跡は休泊川を挟んで天神山古墳、女体山古墳を目前に臨む通称休泊台地の西側縁辺に沿って立地している。調査区の西側は後世に削平された可能性が強く、遺跡全体の範囲はより北西方向に展開していたと思われる。調査面積は2,160㎡で、北限と南限については削平されたため調査不可能であった。

表面に散布する遺物量が多く、比較的遺構面の浅い事が予測された。土層は上位に現在の耕作土である黒褐色土層、下位には暗褐色土層が堆積し、地表より0.5～0.8mで地山のローム土層に達する。黒褐色土層は軟質でロームブロックを含んでおり、下位の暗褐色土層やローム土層との境が比較的明瞭で漸移的な変化が見られない事から、自然堆積ではなく、削平後の人工的な埋土である可能性が強い。又暗褐色土層は均質で粘性を有するもので、古墳時代の住居跡が掘り込まれている事から、それ以前の堆積土であるのは明らかである。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡２軒（４・５号住居跡)、土壙10基（１～９・12号土壙)、埋甕２基(うち１基は埋甕炉)で、古墳時代の住居跡３軒(１～３号住居跡)、時期不明の溝１条、同様に土壙４基である。

遺物は縄文時代の土器が最も多く、時期は早期から後期にかけてのもので、特に前・中期のものが主体を占める。石器類は遺構外から打製石斧、凹石等が出土している。４号住居跡、５号住居跡からは前期の土器類が豊富に出土している。古墳時代の遺物は、「石田川」期のものが主体を占め、そのほとんどは住居跡から出土している。特に１号住居跡からは非常に良好な資料が得られた。以下各々の遺構、遺物について述べてみたい。



（縮尺 1／400）

図38　上遺跡遺構配置図

2　縄文時代の遺構と遺物

(1) 住　居　跡

4号住居跡（図39）

調査区北東端で検出されたが東半分は区域外になるため未調査である。地表下約0.3m程で確認され、その平面形状、堆積土の状況、遺物の集中度等から縄文時代の住居跡あるいは土壙であると予想された。平面形は小判形あるいは円形を呈すると思われ、規模は、直径約4m程と推定される。壁は遺存状態が悪く、崩落部分が多いが、直立あるいは若干外傾するようである。壁高は検出面より0.3m程を測る。床面は地山のロームをそのまま利用しており、凹凸が多く、中央部を除いては全体に軟質である。炉ないし焼土は調査部分においては確認できなかった。屋内施設としてはピットが2基検出されている。P1は北側の壁に掘り込まれており、平面形は直径0.8m程の円形を呈すると思われる。断面形は擂鉢形を呈し、深さは15cmを測る。又P2は東壁際中央部の床面に掘り込まれており、平面は楕円形を呈し、直径は0.3m×0.2mを測る。断面は筒形で、深さ20cmを測る。

住居跡内には暗褐色土と明茶褐色土が堆積しており、暗褐色土はレンズ状ではなく、水平に近い堆積状況を示す事から、明茶褐色土により埋没がかなり進んだ段階で堆積したものと思われる。出土遺物は大半が土器片で、石器が2点出土しており、ほとんどが明褐色土層からの出土である。

出土土器から本住居跡は関山期のものと思われる。

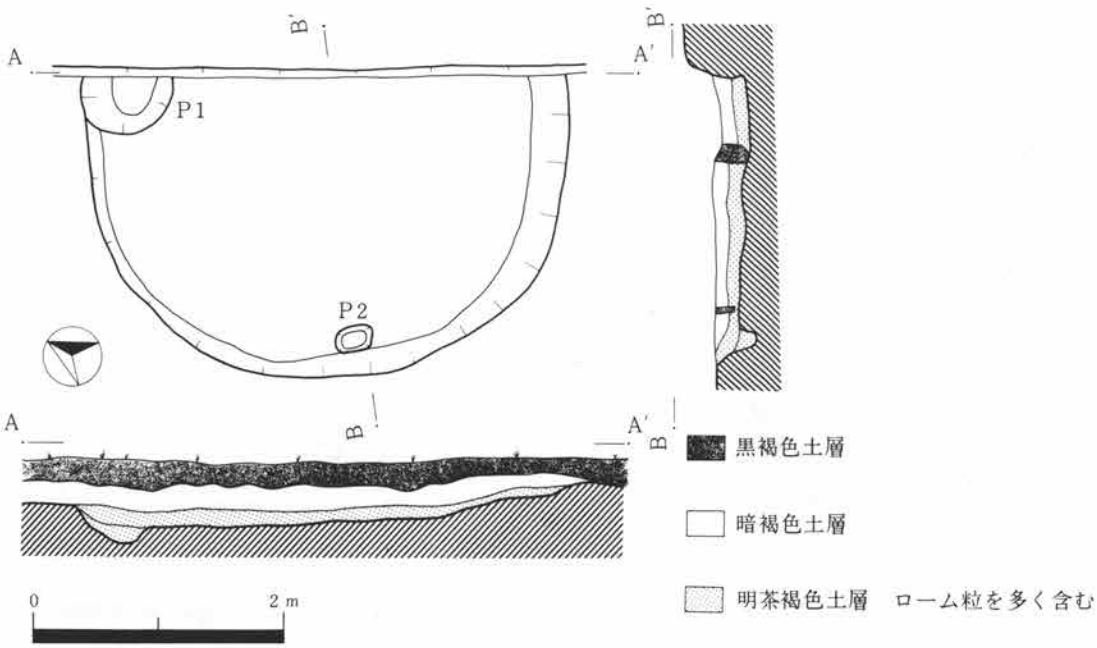


図39　4号住居跡

図40　4号住居跡出土遺物 (1)

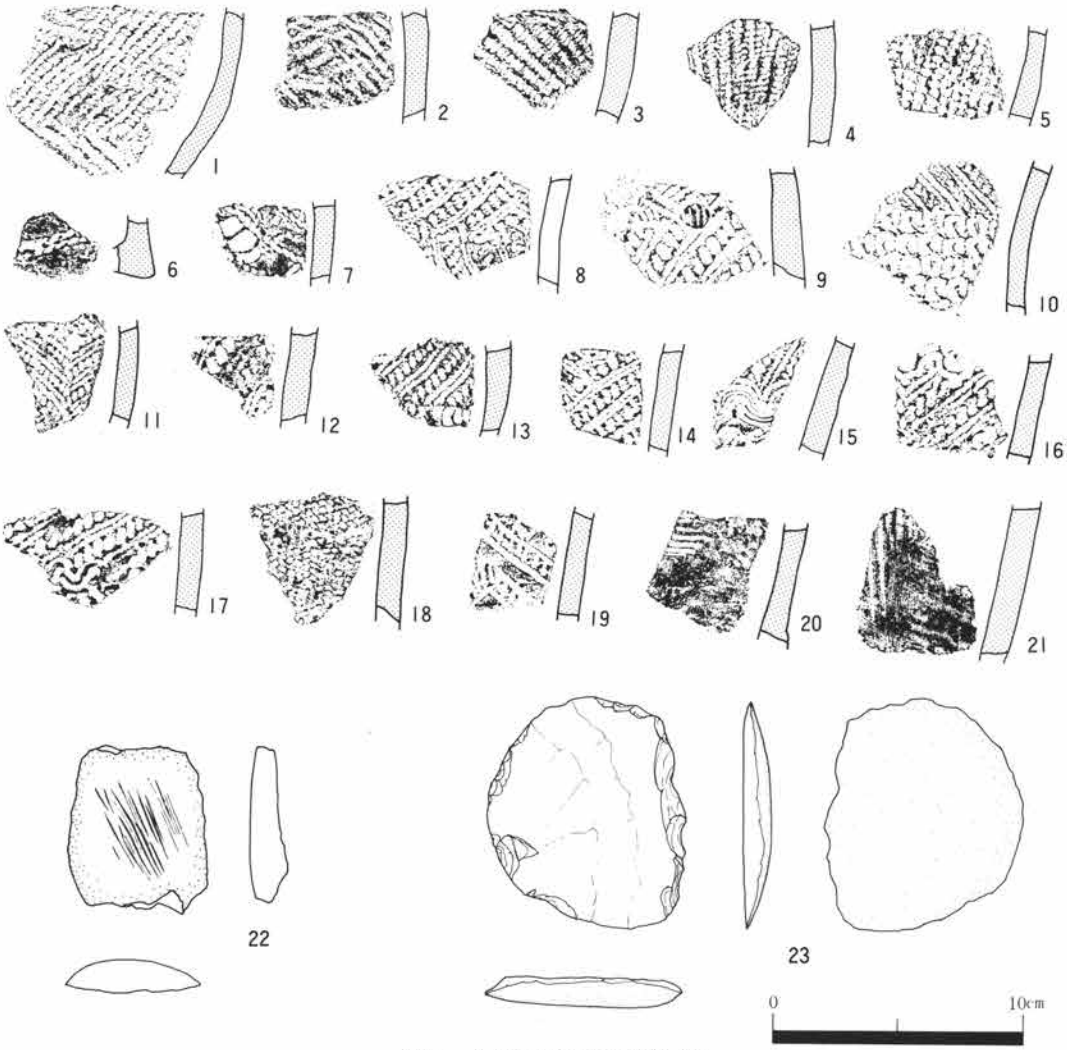


図41　4号住居跡出土遺物（2）

4号住居跡出土遺物（図40、41）

ほとんどが関山式土器で、その他に別型式のものが数点出土している。

1　　類（図41―19）

口縁部に半截竹管による平行線で文様を描くものである。沈線間には刻みが施される。

2　　類（図40）

ループ縄文を多段に施文する一群である。3・11・24および26～29は各々同一個体である。器形は7・19のように胴部がわずかに張るものと底部から直線的に開口し、胴上半がわずかに外反する深鉢形とがある。口縁は平坦で口唇部は内削ぎ状を呈するものが多いが、4のように丸味を帯びるものもある。1～3は口唇に鋸歯状の小突起が付けられる。4は口唇下に若干の無文部をおいて、その下にループ部分を重畳施文している。5は口唇直下無文部に鋸歯状の細沈線が施さ

れる。21～33は胴部にコンパス文を施す土器である。コンパス文は、櫛状工具によるもの(20～22)と半截竹管によるもの（23～33）とがある。25はループ縄文と正反の合撚りの異なる２種類の原体で羽状を構成し、特に重畳施文や縦位の羽状縄文が多用される。

３　　類（図41－８～17）

正反の合撚を施した土器である。原体は判読できないものもあるが、２類同様０段３条を用いるものが多く（８・12・13・14～17）、L$\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.\left\{\begin{matrix}L\\L\\R\\R\end{matrix}\right.$とR$\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right.\left\{\begin{matrix}R\\R\\L\\L\end{matrix}\right.$を交互に施文して羽状を構成している。９は半截竹管で文様を描く土器で、ボタン状貼付文が付される。10・13はループ縄文と交互施文される例である。15は櫛状工具、16・17は半截竹管によるコンパス文が施される。

４　　類（図41－１・６・７）

附加条縄文を施す土器である。１はＲＬと附加条第１種ＬＲ＋Ｌで羽状を構成する。６はＬ縄２本を付加した原体で施文される。７は附加条第３種Ｌ＋⤡が施される。

５　　類（図41－18）

ＲＲＬＬの組紐を施した土器である。

６　　類（図41－２）

ＲとＬの無節縄文で菱形縄文を構成する土器である。

７　　類（図41－３～５）

単節縄文を施す土器である。原体は、３・４が０段３条ＲＬ，５がＬＲである。

８　　類（図41－20・21）

条痕を施す土器を一括する。胎土には少量の繊維を含む。

以上の土器は、１類が関山Ｉ式、４～６類が黒浜式、８類が茅山下層式、その他は関山II式の古段階に比定されよう。

本住居跡から出土した石器は２点である。

22は自然面に一定方向の削痕あるいは擦痕を全面に残すもので、図示した面は特に明瞭に認められる。欠損部が多く、全体の大きさや形状については不明であるが、擦痕が唯一の使用痕であるとすれば、手に握れる程度の円礫であったと予想される。石質は蛇紋岩を用いている。

23はスクレイパー状の石器で、１回の剝離による剝片の半月形の直線部に片面のみ調整を加える。

表10　４号住居跡出土石器一覧

No.	器　種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　質	備　　考
図41－22	不　明	明茶褐色土層	(6.0)	(4.8)	(1.0)	(80)	蛇紋岩	使用痕有り。
図41－23	(掻器)	〃	7.8	9.4	1.2	110	サヌカイト	

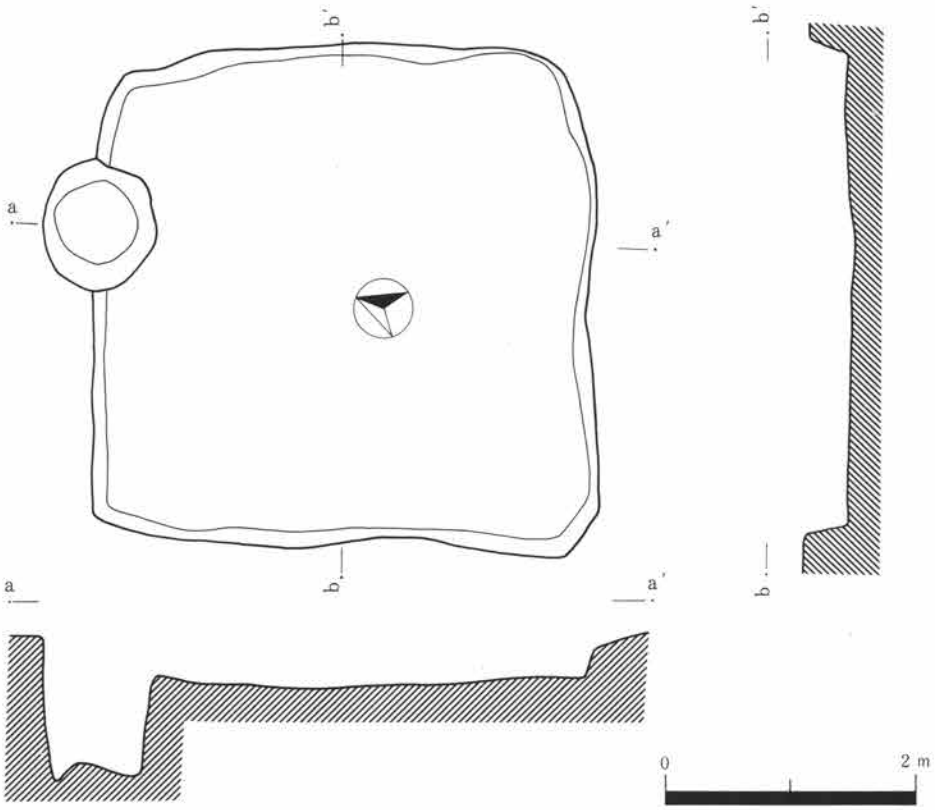


図42　5号住居跡及び15号土壙

5号住居跡（図42）

調査区の北辺、E－5グリッドで検出された。4号住居跡とは約4m程の距離を隔てて位置する。東壁及び南壁付近は近世の攪乱がみられ、遺存状態は悪い。北壁のやや東方寄りの部分で15号土壙と重複しているが、土層の観察から5号住居跡の方が先行するものと考えられる。

平面は隅丸正方形を呈しており、規模は良好な遺存部で、一辺4mを測る。壁はほぼ垂直あるいはやや外傾気味に掘り込まれ、高さは最大の部分で、検出面より0.4mを測る。主軸はN－69°－Eを指す。

土層はかなり深くまで攪乱層が堆積するが、床面近く、及び西半分では明茶褐色土層が堆積している。

床面は地山であるロームをそのまま利用しており、ほぼ平坦面をなすが、踏み固めが効いておらず、全体に軟質な状態である。屋内施設としての炉や柱穴等は全く確認されなかった。

遺物は明茶褐色土層及び床面上より多量の土器が出土している。石器類は出土していない。土器は完形品に近いものが2個体で、その他は小破片で、時期は前期関山式が大部分を占める。従っ

て本住居跡は関山期の所産と考えられる。

5号住居跡出土遺物（図43～46）

本住居跡出土土器は関山式を主体としている。又出土土器は全て胎土に繊維を含んでいる。以下縄文を中心に類別した。

1　　類（図43－1）

口縁部に半截竹管で文様構成する土器である。沈線間には刻みが施され、貼付文が付される。

2　　類（図43－2～30）

ループ縄文を多段施文する一群である。縄文は施文幅の広い2種類の撚りの異なったものを交互に施文して縦位羽状を構成するものと、ループ部分を重畳施文するものが多用される。口縁部は、波状を呈するもの（24）と平縁のもの（2・4・5）とがあり、後者は口唇が平坦であるが、前者は内削ぎ状あるいは角頭状を呈し鋸歯状の小突起が付く。2は口唇下に若干の無文部をもち、その下にループ文が施される。また、4・24には口唇下にコンパス文が施される。3は底部から直線的に開口する深鉢形土器の胴下半部である。底部は上げ底になっており、よく研磨されて光沢をおびる。文様は、0段3条RLとLRの足の長いループ縄文を交互に施文して鋸歯状に構成された縄文帯と、ループ部分を重畳施文した縄文帯を交互に施文している。胴部中程には、櫛状工具によるコンパス文が施される。4・22～29はコンパス文を施した土器である。コンパス文は、22～26は半截竹管、3・4・27～29は櫛状工具で施されている。30は底部破片である。3と同様に上げ底であり、よく研磨されている。縄文は21が0段2条で、3・7・9・12・16・26・29が0段3条、13・18～20は2段を撚る段階で反撚を加えたと思われるもの、その他は不明である。

3　　類（図44－1～3・5・7～9）

正反の合撚の縄文が施されたもの。7・8は同一個体である。原体は判読できないものが多いが、0段3条縄を用いたもの（3・7～9）が認められる。1は口縁部破片である。口唇部は丸味を帯びる。縄文は$R\left\{\begin{array}{l}R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\\L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\end{array}\right.$である。2は$L\left\{\begin{array}{l}L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\\R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\end{array}\right.$を横位と縦位に施文して羽状を構成する。3は、ループ部分の重畳施文帯と$R\left\{\begin{array}{l}R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\\L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\end{array}\right.$を帯状に交互に施文する。5・7・8は櫛状工具でコンパス文を施した土器である。縄文は5が$R\left\{\begin{array}{l}R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\\L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\end{array}\right.$、7・8は$R\left\{\begin{array}{l}R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\\L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\end{array}\right.$と$L\left\{\begin{array}{l}L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\\R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\end{array}\right.$で羽状を構成する。9は半截竹管でコンパス文を施した土器である。縄文は$R\left\{\begin{array}{l}R\left\{\begin{array}{l}L\\L\end{array}\right.\\L\left\{\begin{array}{l}R\\R\end{array}\right.\end{array}\right.$である。

4　　類（図44－4・6・10～20）

附加条縄文を施したもの。口唇部は内削ぎ状を呈するが、先端は丸味を帯びている。附加条は全て2本の縄を単位としている。4・6は軸縄の撚りと同方向に附加した例である。4は軸縄が

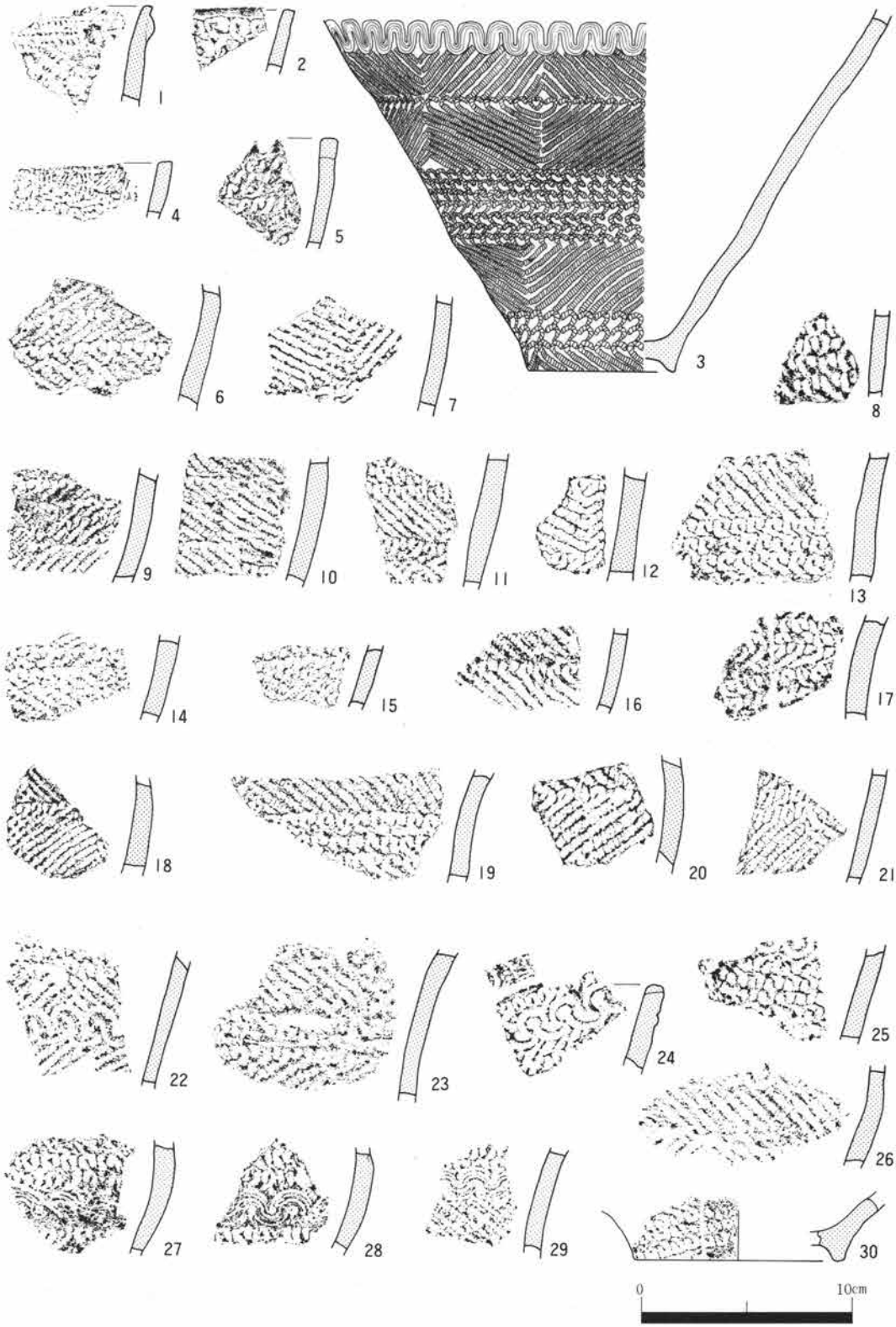


図43　5号住居跡出土遺物（1）

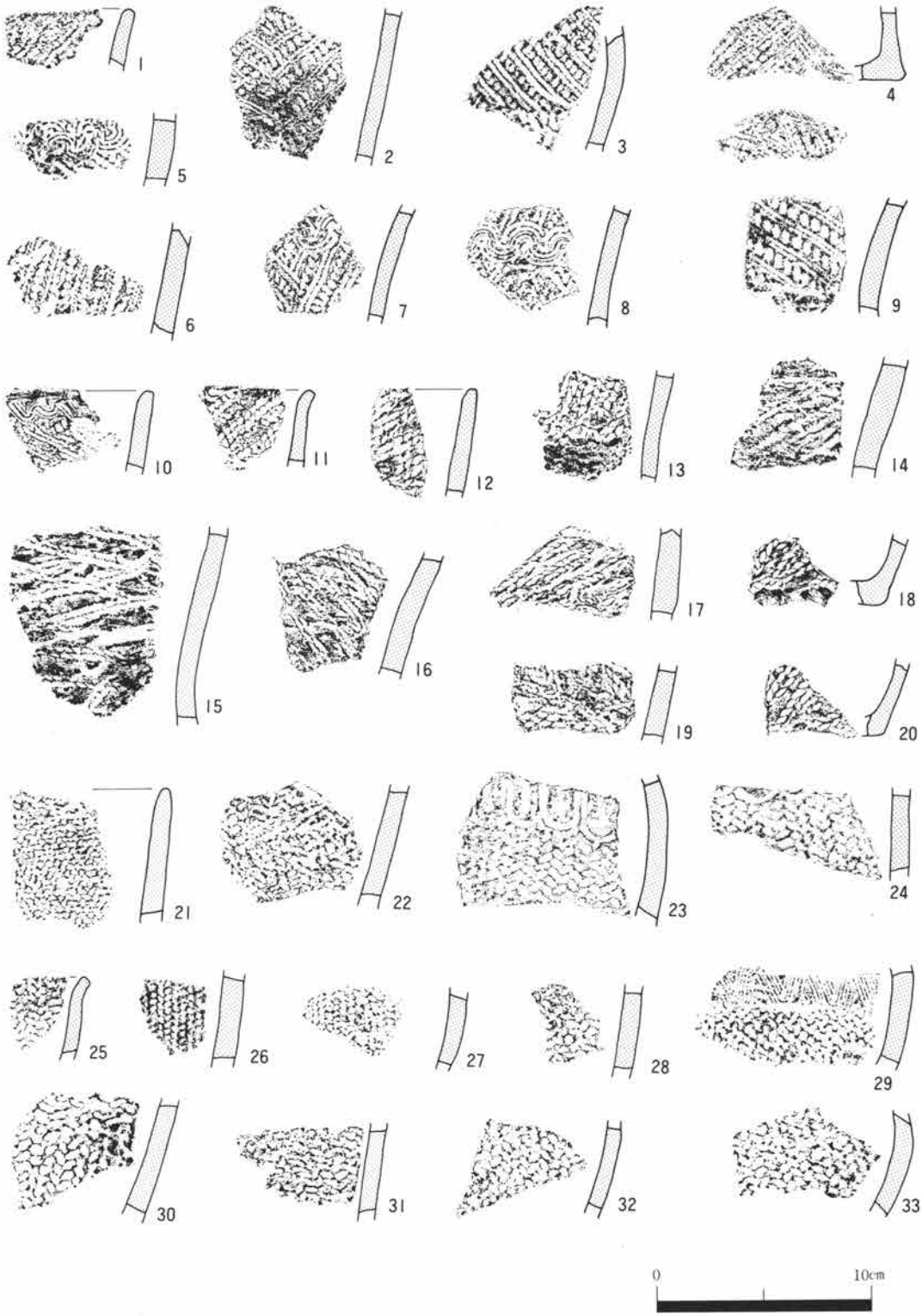


図44　5号住居跡出土遺物 (2)

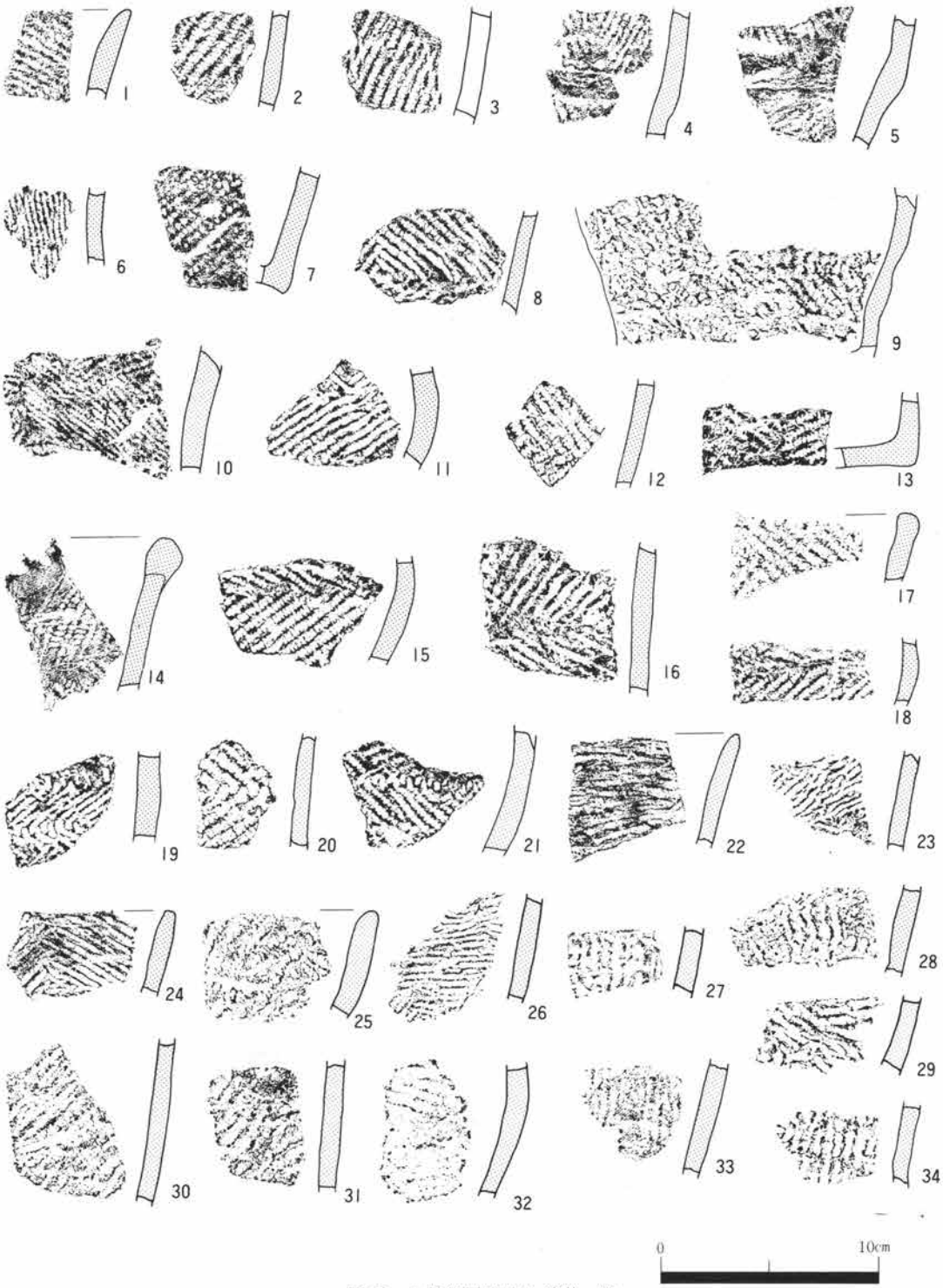


図45　5号住居跡出土遺物 (3)

図46　5号住居跡出土遺物 (4)

0段3条のＬＲであるが、附加条は判読できない。なお、施文は上げ底部にも及んでいる。6は軸縄がＬＲ、附加条がＲ２本である。10～14・17・19・20は、軸縄の撚りと反対方向に附加したと思われる例であるが、軸縄の判読できるものは11のみであり、他は圧痕が認められない。附加の方法は、10が右巻き、他は全て左巻きである。10は口唇直下に櫛状工具のコンパス文をめぐらし、その直下にＲＬのループ部分を一条施文している。附加条は、10・12がＲ２本、11・14・17がＬ２本、13・19・20がＬ２本、13・19・20がＲとＬである。なお、11の軸縄はＲの無節縄文と思われる。15・16・18は網目状に構成される土器である。附加条は、15がＬ縄２本、16・18がＬ縄２本、Ｒ縄２本である。15は、同一の原体で施文方向を変えることにより、網目状を構成している。16・18は条の走行に規則性が認められないため、２つの原体で施文していると思われる。なお、軸縄の圧痕は認められない。

5　類（図44―21～33、図46―１）

組紐を施したもので、他の縄文と組み合わせて施文した例はない。施文は横位施文を基本とするが、21は斜位に施されている。図46―１は、平縁の単純な深鉢形を呈する土器である。口唇部は角頭状を呈する。文様は、器面全体にＲＲＬＬの組紐を施し、その上に半截竹管による深い平行沈線４本を単位とする施文帯（以下施文帯と略記する。）で構成される。施文はまず、口唇下と胴部中程に施文帯を横位に廻らして口縁部文様帯を区画し、その間に「鉤手」状の幾何学文を連結しながら、交互に配して文様を構成している。また、空白のできる部分には三角形区画文をあてはめて、全面を空白なく埋めている。21・25は共に平縁を呈する口縁部破片である。21は直立ぎみに開口する形態を呈し、口唇は先細りである。25は若干内湾ぎみに開口し、口唇が「く」の字状に外反する形態をとる。口唇は平坦である。23・24・29は、コンパス文を施す例である。コンパス文は、半截竹管で施文するもの（23・24）と櫛状工具で施文するもの（29）とがあるが、２群のコンパス文に比べて縦長に間伸びしている。また、29は鋸歯状に施文されている。原体は、21・26がＲＲＬＬ、25・29・32がＬＬＲＲで、他は判読できない。

6　類（図45―19～21）

結束第１種を施文するもの。３点ともＲＬとＬＲで結束羽状縄文を構成する。20は、０段３条縄を使用しており、他に比べて薄手でしっかりした土器であり、縄文も整然と撚られている。

7　類（図45―１～３・６～18）

単節縄文を施文するもの。１・14・17は口縁部破片である。１は平縁で、口唇部は丸味をもった先細りとなる。14は波状口縁で、口唇部は内削ぎ状を呈し、鋸歯状の小突起が付けられる。17は平縁で、口唇部は丸味をもつ。７・13は上げ底の底部破片である。８は０段多条のＲＬとＬＲで菱形を構成する。10・14は０段多条ＲＬの縄文を縦横に施文して羽状を構成する。11～13・15は、０段３条のＲＬとＬＲで羽状を構成する。17・18は０段３条ＬＲを縦横に施文して羽状を構成する。その他の縄文は、１～３が０段３条ＲＬ、６・７がＬＲ、９がＲＬである。

8　類（図45―４・５・16・22～34）

無節縄文を施文するもの。22・24・25は口縁部破片である。22・24は平縁で、口唇部は22が先細り、23は平坦である。25は小波状口縁で、口唇は丸味を持つ。縄文は4・5・23・25〜27・30・31・33がL、22・28・29・32・34がRである。16・24はRとLで羽状を構成する。

9　類（図46―2・3）

貝殻背圧痕文を施したもの、および底部である。2は、底部から直線的に開口する深鉢形土器である。口縁部を欠損している。器面は凹凸が激しく、器形は歪んでいるが、焼成は良好で、堅緻である。文様は、胴上半に貝殻背圧痕文を施し、以下に単節LRとRLを半々に施して、大きな羽状を構成している。縄文は堅い繊維で撚られているため、節は丸い形状となって現われてこない。底部は平坦な平底である。焼成は良好である。3は若干上げ底の底部である。器壁が非常に厚く、端部が外側に突び出して稜を形成している。焼成は不良である。

以上、本住居跡から出土した土器は4類が黒浜式、1類は関山I式が主体を占める。2・3・5・9類は関山II式の古い段階に比定されるものと思われる。

(2) 埋　甕　遺　構

1号埋甕炉（図47）

調査区の南半部、C―19グリッドで5号土壙の西側に5m程離れて検出された。ローム面で精査した段階で土器の上端が現われ、掘り形断面精査の段階で炉壁面が検出され、炉と判明した。炉の平面プランは不正楕円形で、長径は1m、短径0.7m程と思われる。断面形態は擂鉢状で、底面が楕円形の平坦面をなす。北東壁面の底面に近い部分で、火熱を受けて赤色硬化した面が検出された。この炉壁面は底面から5cm程立ち上って、それ以上の部分を欠き、又掘り形壁面の西側及び東南側には見られない。土器は胴部のみで上部と下半を欠いており、底面から約5cm程浮いた状態でプラン中央からやや西南寄りに埋置される。覆土は3層が確認され、下層は焼土粒を若干混じえる黄色土でローム粒を主としている。上層は土器の内側と外側に分けられ、同一の茶褐色土が堆積し、土器内側には焼土、灰の量が多い。形態上から埋甕炉の可能性が高いが、6号土壙以外は周囲に床面やピットの検出がなく、屋外施設であった可能性が強い。断面の観察から、検出された炉壁面を使用した段階と、その後土器を埋置して使用した段階の2段階に利用されたものと考えられる。

土器は口縁部及び胴下半部を欠くが、同一個体と思われる口縁部破片が下層の茶褐色土層から出土している。器形は口縁部が外反し、頸部で括れて胴部が強く張る深鉢形を呈すると思われる。文様は沈線のみで描かれている。称名寺式の文様モチーフも一部認められるが、大半は波状沈線化しており、胴下半部では全て垂直線になる。文様には規則性が認められず、全体の構成は不明

といわざるを得ない。以上の所見から本例は堀之内Ⅰ式の古い段階に比定されよう。なお本例は炉としての使用による二次的火熱を受けており、一部色調が赤変している。

破損部分について、口縁部に比べ胴下半部は比較的凹凸が少なく、1ケ所を除いてはほぼ直線状に欠いている事から、あるいは故意に破壊した可能性も考えられる。

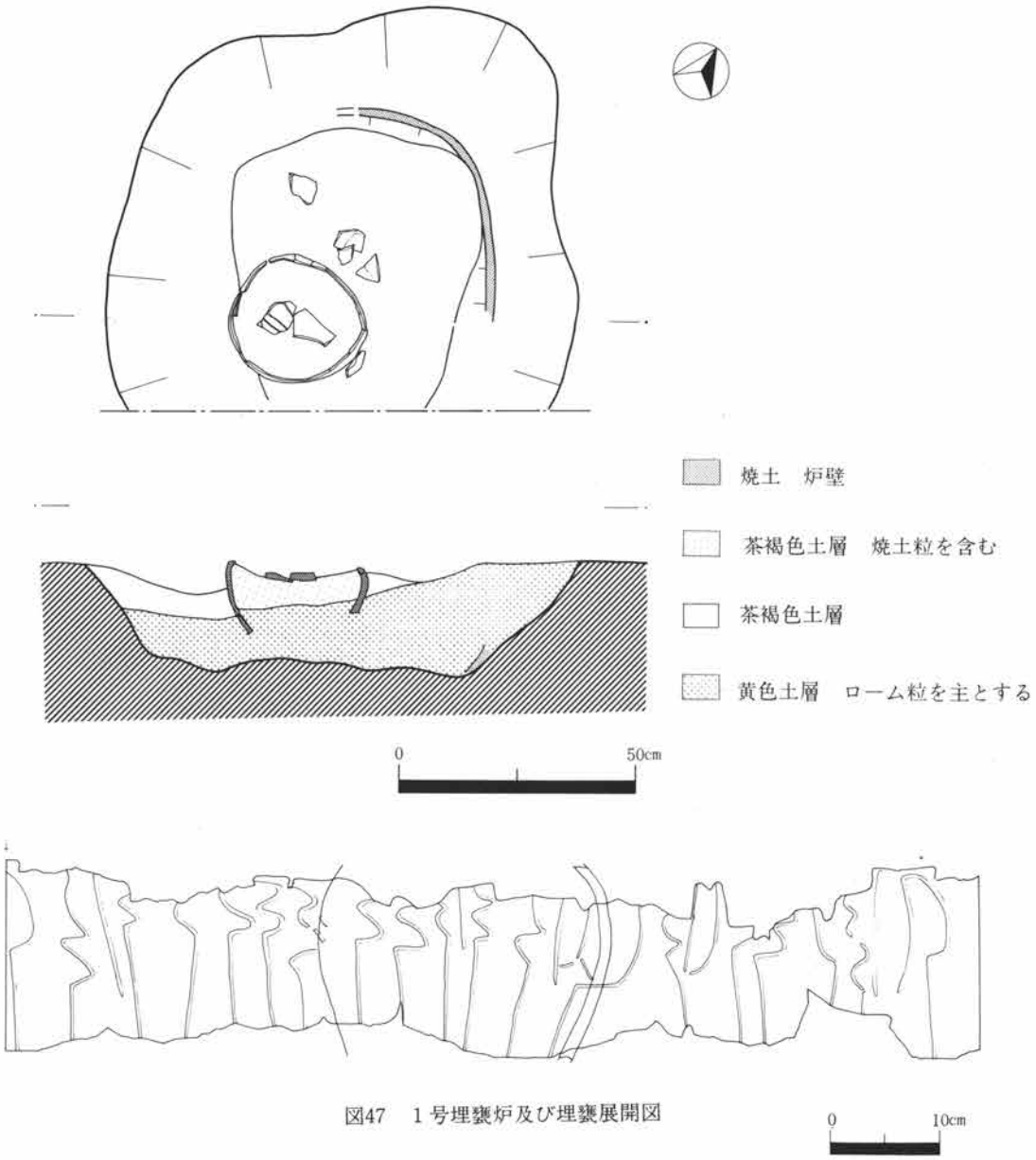


図47　1号埋甕炉及び埋甕展開図

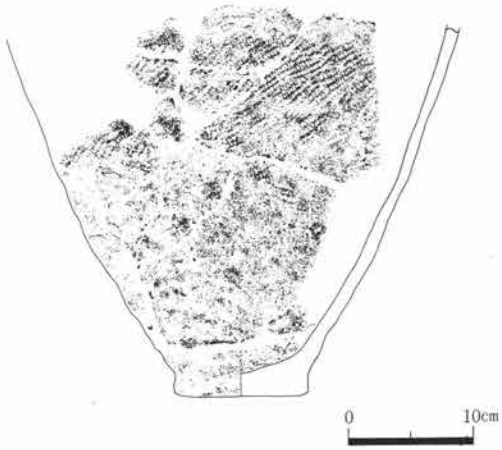


図48　2号埋甕

2号埋甕（図48）

B－6グリッドで検出された埋甕で、掘り形がほとんど認められないため、地山であるロームを土器の大きさに掘り込み、そのまま本土器を埋置したものと思われる。口縁部～胴上半部を欠いている。埋甕内にはローム土粒を多量に含む黄色土が堆積している。埋甕内からの遺物はなく、又その内外において焼土や灰等の炉を想定させるようなものは認められなかった。又周辺にピットや床面等も検出されなかった事から、おそらく屋外施設と考えられる。

土器は深鉢形の胴下半部で、器面には縄文ＬＲが全面に施され、その他の文様は見られない。器面の整形は粗雑であり、焼成も不良である。あるいは土中埋置のため、器面が荒れて軟化したとも考えられる。しかしながら二次的火熱を受けた痕跡はない。胴部の張り等の形状から、加曽利Ｅ４式かと思われる。

(3)　土　　壙

1号土壙（図49）

E－22グリッドで検出された。平面プランはほぼ円形で、規模は直径約1.4mを測る。断面形状は上半を欠いているため不詳であるが、おそらく筒状をなすものと思われる。底部は浅い皿状で、壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。遺物は底面に近い覆土中から剝片石器が１点出土している。

2号土壙（図49）

F－21グリッドで検出された。平面は不整長方形で、長軸2.1m、短軸1.4mを測る。断面形状は舟底状で、西側に比べ東側が緩い立ち上がりを示す。覆土は黒褐色土を主とし、ロームブロックを若干含む。東南端で４号土壙と重複するが、土層断面の観察からは重複の状況は不明瞭で、両者の先後関係は不明といわざるをえない。遺物は土器、石器が各２点づつ出土している。

3号土壙（図49）

F－19グリッドから検出された。平面プランは楕円形で、規模は長径が1.4m、短径1.1mを測る。断面形状は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をもってやや外方に開くもので、検出

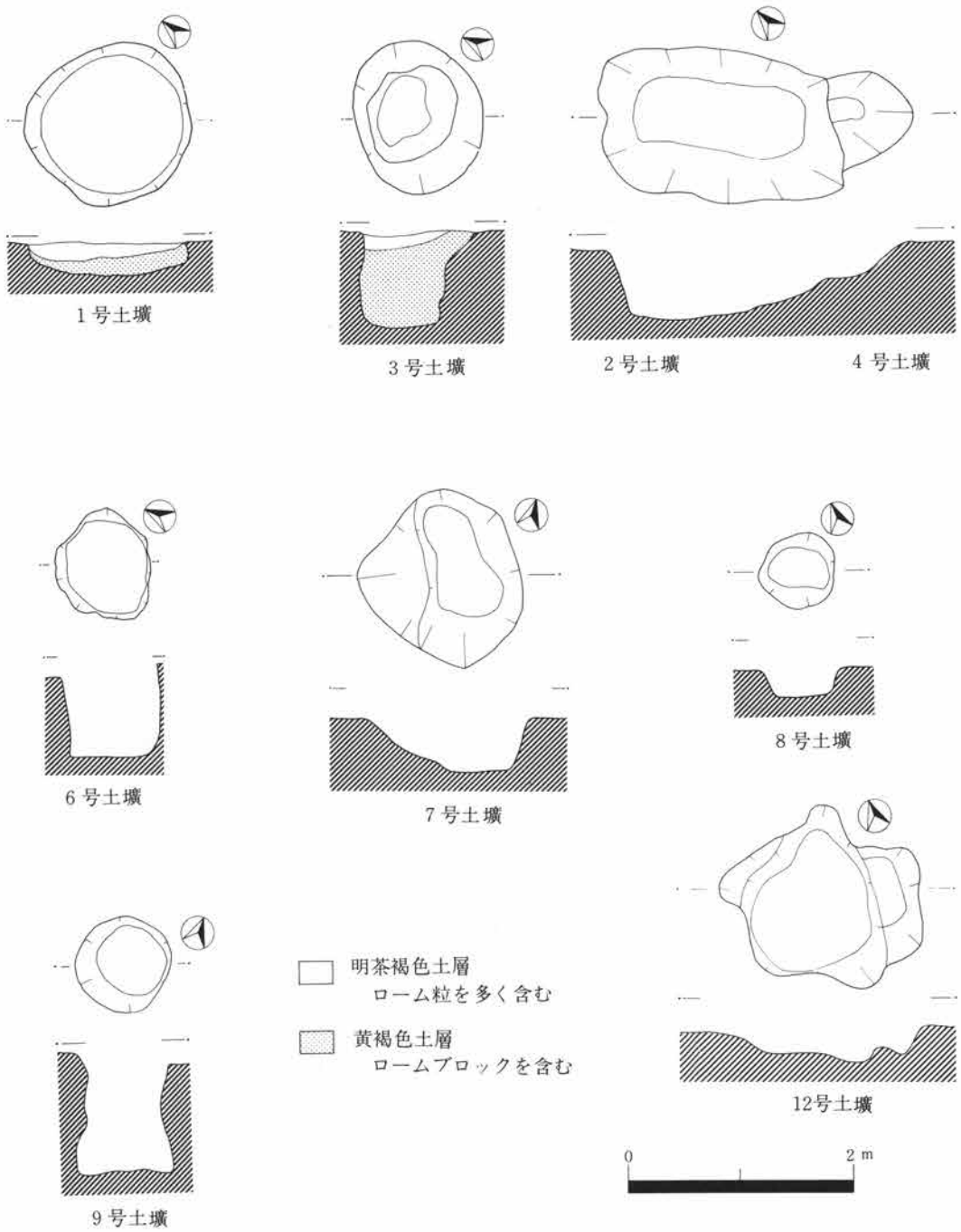

1号土壙
3号土壙
2号土壙
4号土壙
6号土壙
7号土壙
8号土壙
9号土壙
12号土壙
明茶褐色土層
ローム粒を多く含む
黄褐色土層
ロームブロックを含む
0
2 m

図49　土　　壙 (1)

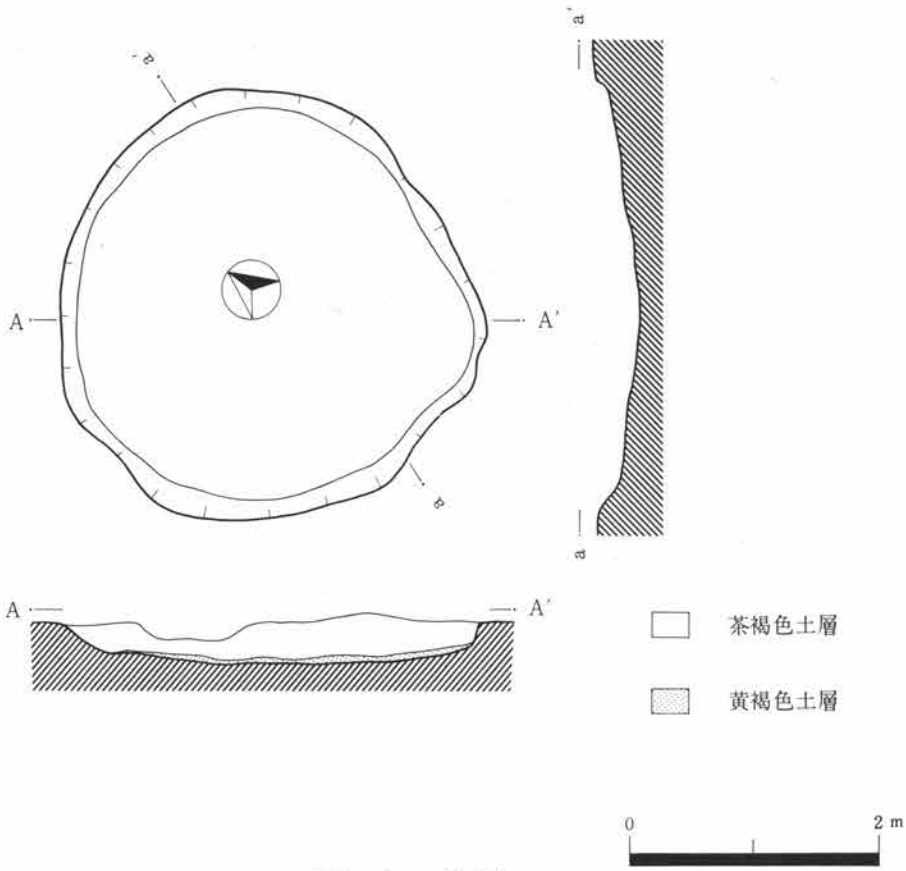


図50　土　　壙 (2)

面から底面までの深さは0.9mを測る。覆土はロームブロックを多く含む黄褐色土が主で、人為的な埋土である可能性も考えられる。出土遺物は土器２点である。

５号土壙（図50）

E―20･21グリッドで検出された。平面プランはほぼ円形で、直径約3.5mの規模をもつ。断面形状は浅い皿状で、壁の立上がりは緩やかである。覆土は上下の２層に分けられ、ほとんどは上層に堆積する茶褐色土が占める。遺物は中期の土器片が主で、下層の黄褐色土層中から集中して出土する。埋没の始まる直後の流れ込み、あるいは廃棄と考えられる。

６号土壙（図49）

D―20グリッドで検出された。近世以後の溝によって切られている。平面は不正楕円形を呈し規模は１m×0.8m程を測る。断面形状はほぼ垂直に掘り込まれた筒形で、底面は平坦でほぼ水平に近い。覆土には明茶褐色土層が堆積している。出土遺物は土器片13点と石器１点である。土器は後期を主体としており、５m程西方に隔たる１号埋甕炉との関連が考えられる。

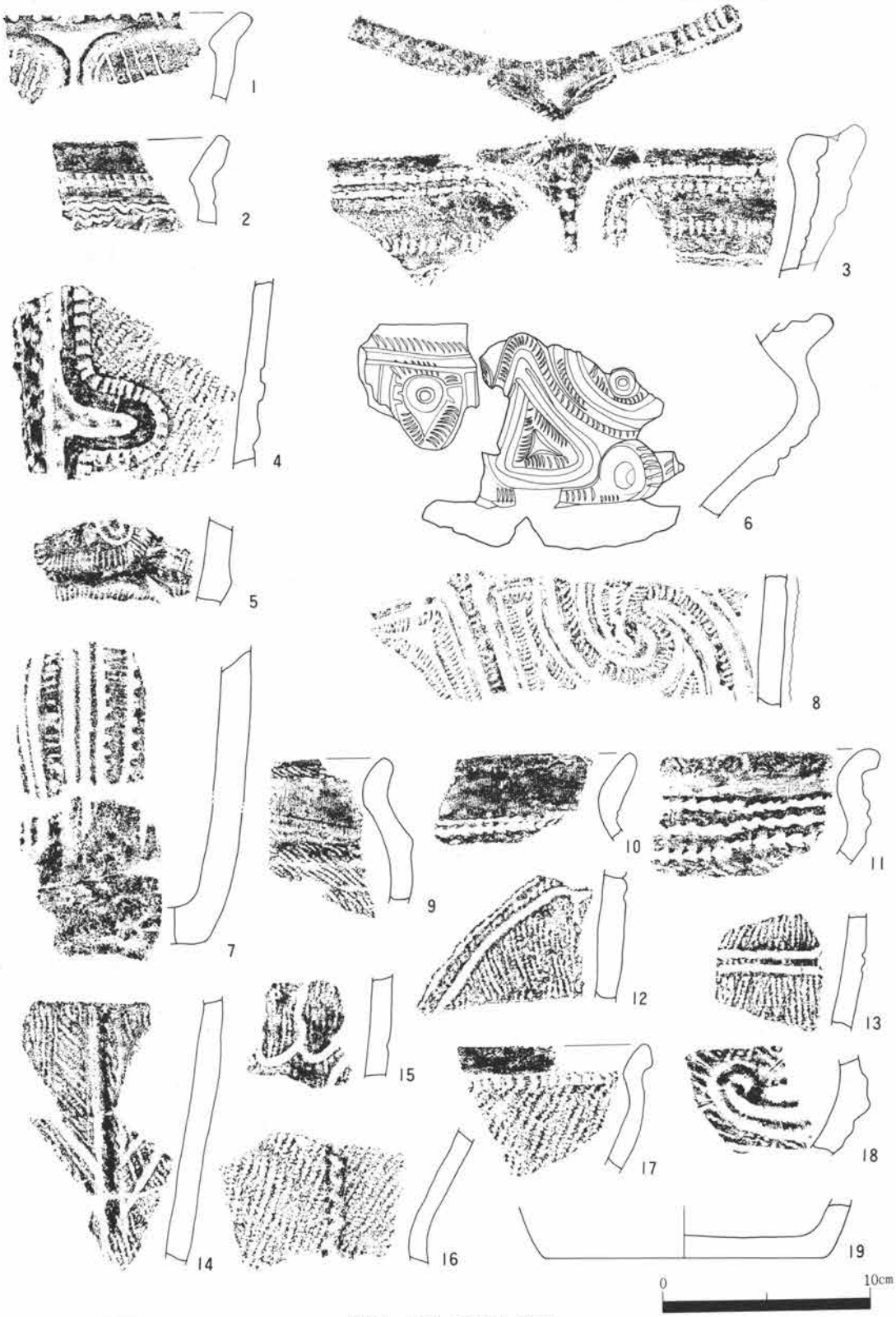


図51　5号土壙出土遺物

図52　土壙出土遺物（1）

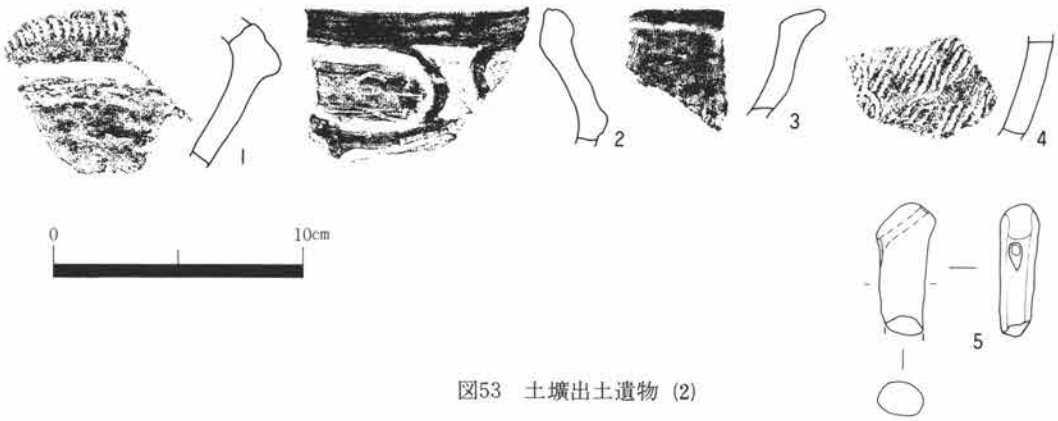


図53　土壙出土遺物 (2)

7号土壙（図49）

A－9グリッドで検出された。1.6m×1.4m程の不正円形プランで、平面形が不定形である事から遺構として捉え得るものかどうかは疑わしい。覆土は茶褐色土で、中期の土器片が2点出土している。

8号土壙（図49）

C－8グリッドで検出された。直径0.7m、深さ0.3mの円形ピットである。茶褐色土が堆積しており、中期の土器片5点が出土している。

9号土壙（図49）

C－8グリッドで8号土壙に隣接して検出された。直径0.9m、深さ1.1mの円形ピットで、断面形状はややオーバーハングする筒形を呈する。底面はほぼ平坦である。明茶褐色土が堆積し上位から中期の土器片4点が出土している。

12号土壙（図49）

B－3グリッドで検出された直径1.8m前後の不定形で、掘り込みも浅く、凹凸が激しい。ロームブロックを含む黒褐色土が堆積し、土製品1点が出土している。人工的な遺構というより木根痕に近いものと思われる。

覆土の質や出土品から本土壙と7号土壙の2基を縄文時代の項で扱ったが、既述の如く遺構として疑しい点があるため、他の土壙とは異質なものと考えたい。

土壙出土遺物（図51～54）

土壙出土の遺物は全て縄文時代のものと思われ、少量のため一括してここで扱う。

1号土壙から石器が1点出土している(図54－1)。小形の台形剝片で、c面下部に残る打瘤を

調整し、上部にも3回の調整を施し、鋭い両側縁をそのまま残している。

2号土壙からは土器片2点（図52―1・2）と石器2点（図54―2・3）が出土する。土器はともに沈線で文様を描く称名寺II式土器である。石器は両者とも打製石斧で、2は分銅形の変形、3は短冊形と思われる。2はc面の一部に自然面を残すが、全体的に丹念に調整が施されている。上部はわずかに欠損し、a面中央部から下部にかけての凸部、及びc面の自然面に磨耗が認められる。又a面右側縁は分厚い調整を施し、中央部に若干磨耗痕が認められる。3は上半部を欠き、全形を知り得ないが、残存部a面に自然面をそのまま残している。c面における調整は比較的細かく、刃部を丸くつくり出している。

3号土壙からは土器片が2点出土した（図52―3・4）。両者共、細い沈線で文様を描き、縄文を充塡するものである。縄文原体は共にRLである。

5号土壙からは中期中葉の土器が主に出土している（図51）。1・3は阿玉台式土器の口縁部破片である。1は平縁を呈し、口唇部は「く」の字に外反して内側に稜をもち口唇端には刻みを施す。口縁部は隆帯による楕円区画文で構成される。区画内には隆帯にそって1列のペン先を廻らし、その内に同ペン先文を4条施している。3の口縁形態は1に近似するが、やや狭くなっている。また、楕円区画文は口唇部と一体化し、幅を広げるとともに、楕円区画文間に縦位の隆帯を付けて小突起を形成している。文様は、隆帯の内側に角押文を2条廻らし、区画内には幅広の押

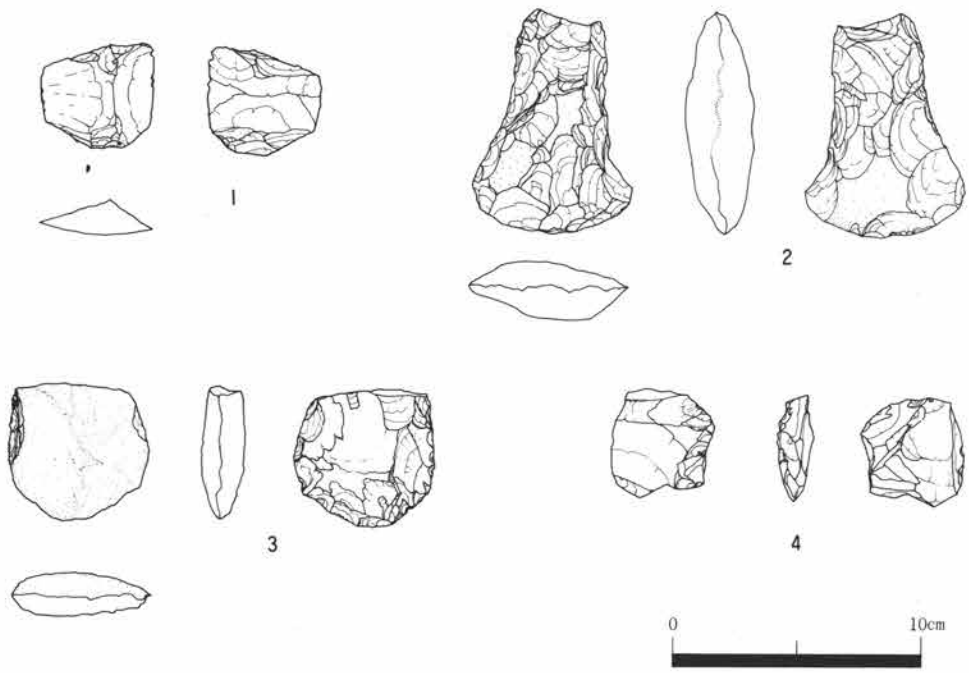


図54　土壙出土遺物（3）

引文と波状沈線を横位に施している。1・3共に胎土には多量の金雲母を含む。

2・4～7は勝坂式土器である。2は、口縁部形態が1と酷似するが、口唇下に無文帯を有し幅広の押引文が施される。押引文下には、波状沈線が2条施文される。4は、2条の隆帯を垂下させ、隆帯にそって幅広の押引文が施される。縄文はＲＬである。5は隆帯で区画文を構成する土器である。隆帯の両側は、幅の広い押引文1条で縁どられる。6は、口縁部がキャリパー状を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部文様帯は、隆帯による三角形の区画文で構成され、区画の接点にはつまみ状の小把手が付けられる。区画内には玉抱き三叉文あるいは三叉文が陰刻される。7は隆帯で胴部文様を縦区画する深鉢形土器の底部破片である。隆帯の両側には半截竹管による断面「カマボコ」状の隆線を2条施し、その側面を刺突文で枠どっている。8も隆帯で胴部文様を縦区画する土器である。区画内には、同隆帯による抽象文の変形したものをあてはめる。各隆帯は「カマボコ」状の隆線で枠どられ、その内には三叉状陰刻文を施し空白部には刻みを施す。なお、隆帯には全て刻みが施される。9～11は、口縁部が内湾し、口唇で強く外反する口縁部破片である。3点とも口唇下に無文帯を持つ。9は無文帯下に弱い隆帯を1条廻らし、以下に縄文ＲＬを施している。10・11は無文帯下にペン先状押引文を2～3条廻らしている。11の縄文はＬＲである。12～15は大木系の土器と思われる。文様は2条を単位とする押引文で構成される。縄文はＬＲである。16はＲＬの縄文地に、帯状沈線を1本垂下させる土器である。17は口唇下に無文帯をおいて幅広の爪形文を1条廻らせる口縁部破片である。縄文はＲＬである。18は隆線で渦巻文を描く口縁部破片である。縄文はＲＬである。19は大形の底部である。

6号土壙からは後期土器片13点（図52―5～17）と石器1点（図54―4）が出土している。5～9は、断面三角形の微隆起線で文様を構成する土器である。5・6は直立口縁を呈し、口縁部に幅広い文様帯をもつ。7は口縁部に微隆起線を2条平行して施しその間に2列の円形刺突文が施される。縄文は、5・8がＲＬ、7・9がＬＲである。10・11は沈線で曲線的な文様を描き、沈線間を縄文で充塡する。10は口唇が「く」の字状に内折する口縁部である。12・13は沈線区画内を列点で充塡する土器である。12は横位の隆帯が施される。14・15は口唇部に文様帯をもち、それ以下を無文帯とするものである。口縁部は両者共やや外反気味である。14は口唇部に円形刺突文を施し、幅広の無文帯を挟んで、充塡縄文帯を横位に施している。15は口唇部に充塡縄文帯を施すものである。縄文は共にＬＲを用いている。16は注口部分、17は底部破片で共に文様はみられない。

以上の土器は5～9が加曽利Ｅ4式、10～11が称名寺1式、12・13が同2式、1・4・15が堀之内Ｉ式にそれぞれ比定されよう。

石器は小形の台形剝片（図54―4）で、a面右側縁に丹念な調整が施される。a面から3回の小打撃を加え、c面から2回の小打撃、更に上部に見られる1条の打撃によって丸ノミ状の刃部をつくり出している。

7号土壙からは土器片2点（図52―18・19）が出土している。18は隆帯による2～3条の懸垂

文と、1条の波状懸垂文が施された胴部破片である。19は隆帯による平行する2条の懸垂文が施された胴部破片である。縄文は18がＲＬ、19がＬの撚糸文である。

8号土壙からは土器片5点（図52―20～24）が出土している。20は半截竹管による2条の平行押引き文が施された口縁部破片である。胎土に金雲母、石英粒を多量に含む。21は強く内湾する口縁部破片である。口縁には隆帯による楕円区画文が施される。地文は縦位の条線である。22は沈線による波状懸垂文を施した胴部破片である。縄文はＲＬである。23は外傾する無文の口縁部破片である。口唇部端は尖り気味で、その直下内外面に稜をもつ。24は頸部に無文帯をもつ土器である。無文帯下には2条の沈線を廻らし、そこから懸垂文が垂下される。縄文はＲＬである。

9号土壙から土器片4点（図53―1～4）が出土している。1・2は口縁部が「く」の字状に内折する浅鉢形土器の破片である。1は口縁屈曲部の稜の上にそって爪形の刺突を廻らす。2は口縁部に隆帯による楕円区画が施される。3は口縁が「く」の字状に外反するものである。4は半截竹管で波状沈線を施すものである。縄文はＲＬを用いる。

12号土壙からは用途不明の土製品（図53―5）が出土している。棒状の形態をもち、上端が若干肥厚して、斜方向に貫通孔が穿たれる。

土壙内出土遺物の概要は以上であるが、1・2・4号の各土壙から出土した石器の計測値、石質等については一括して以下の表に記す事にする。

表11　土壙出土石器一覧

No.	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
図54―1	剝片	1号土壙	4.5	4.0	1.3	28	サヌカイト	
図54―2	打製石斧	2号土壙	8.6	6.4	2.7	136	〃	
図54―3	〃	〃	(5.4)	(5.1)	1.7	(69.5)	硬質砂岩	上半部欠損
図54―4	剝片	6号土壙	4.3	4.0	1.5	27.5	サヌカイト	

(4)　遺構外出土遺物

縄文土器

本遺跡からは前述の如く、早期～後期の土器が多量に出土しており、遺構外の暗褐色土層中からの出土品が主体を占める。これらを便宜的に12群に分け、それらを更に細分して述べたい。

第1群土器（図55―1）

撚糸文系土器である。今回の調査では1点のみ出土した。器面に節の比較的大きなRの撚糸をまばらに施文し、その後ナデを加えている。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好である。稲荷台式に比定されよう。

第2群土器（図55―2～4）

早期前半の沈線文系土器群を一括した。2は縦位及び斜位の沈線で文様を構成する。3は数条の横位及び斜位の沈線で構成される土器で、斜位の沈線間には押引き状の刺突が施される。4は本群に属す土器の尖底部である。3点共に焼成は良好である。2・3は胎土に大粒の片岩粒を多量に含む。本群土器は、田戸下層式に比定されよう。

第3群土器（図55―5～29、図56、図57）

早期後半の条痕文系土器群を一括した。少片のみの出土であるが、その分布は調査区のほぼ全体に亘って認められた。本群土器は、内外面に条痕が施され、胎土に繊維を含むことを基本的特徴とするが、そうでないものも一部含んでいる。以下、5類に分けて説明する。

1　類（図55―5・6・8～14）

野鳥式土器を一括した。器形は底部から直線的に開口する単純な深鉢形と、胴部中位で「く」の字状に折れ曲がるもの（13）とがある。文様は直線的な区画文で構成され、区画内は斜位あるいは縦位沈線で充塡される。文様の区画は細隆起線によるもの（8～11）と沈線によるもの（12～14）とがある。また、細隆起線に刻みを施すもの（8・9）もある。条痕は内外面共に認められ、比較的幅の広い施文具が用いられている。施文の方向は、外面が横位または斜位、内面が斜位または縦位である。5・6は本類に属すると思われる尖底部破片である。条痕は認められない。胎土には全て少量の繊維が含まれ、焼成も良好である。なお図55―7は4類で扱ったが、本類の可能性も考えられる。

2　類（図55―15）

鵜ケ島台式土器を本類とした。小片1点のみである。胴部に2段に形成された段部には、刺突を施した隆線を廻らせている。条痕は比較的幅の狭いものを、表裏共に横位に施している。胎土には少量の繊維を含み、焼成はあまり良好ではない。

3　類（図55―16～29、図56）

器内外面に条痕だけ施される土器を本類とした。器形は単純な深鉢形を呈し、屈曲を示す例はほとんどみられない。口縁部片は3点検出されたが、2点は波状を呈する。底部は平底を呈するものが1点出土している。以下A、B2種に類別される。

3A種（図55―16～29、図56―1～23）

アナダラ属の貝殻あるいはそれに類似する施文具で条痕を施したもの。胎土に繊維を多量に含

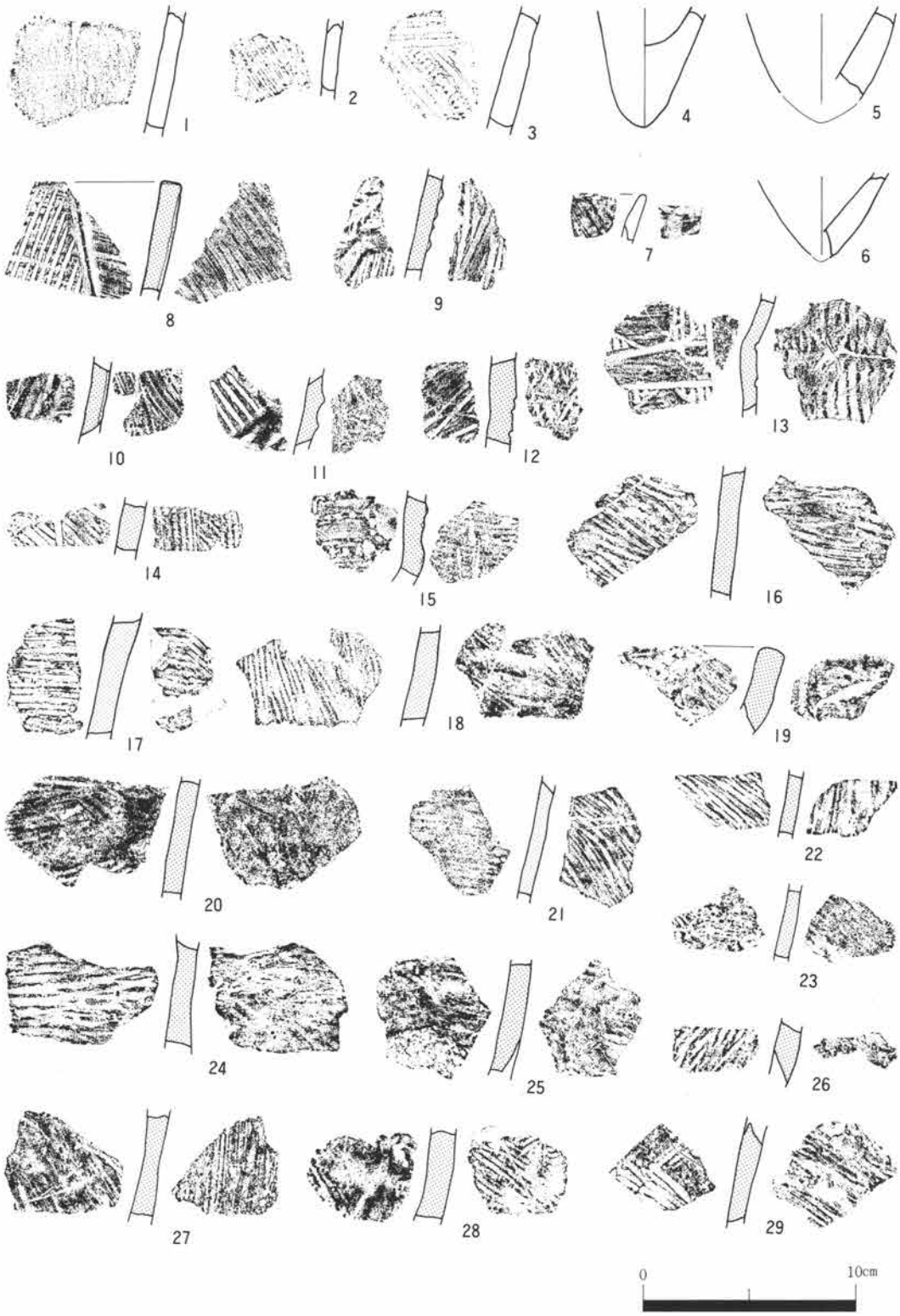


図55　遺構外出土遺物 (1)

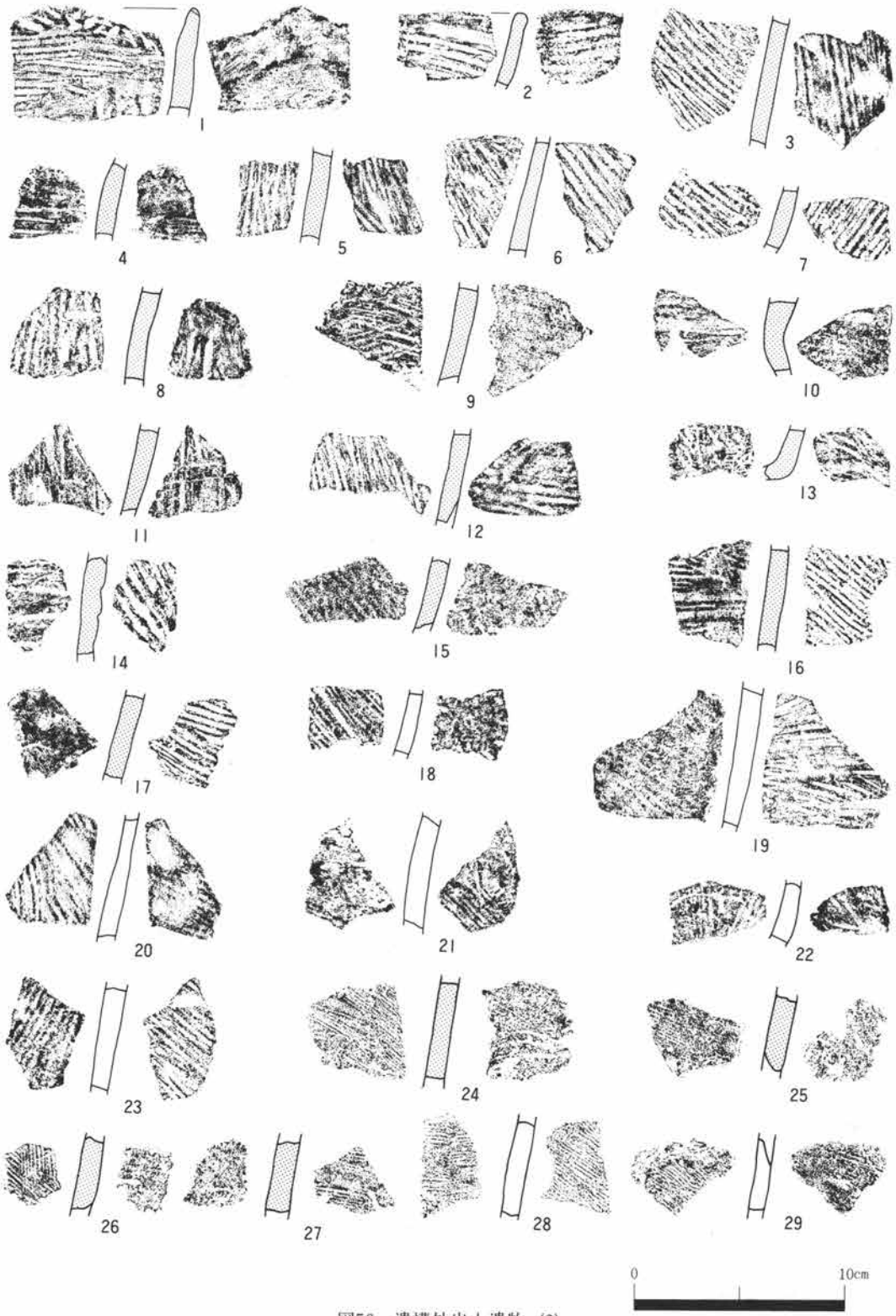


図56　遺構外出土遺物 (2)

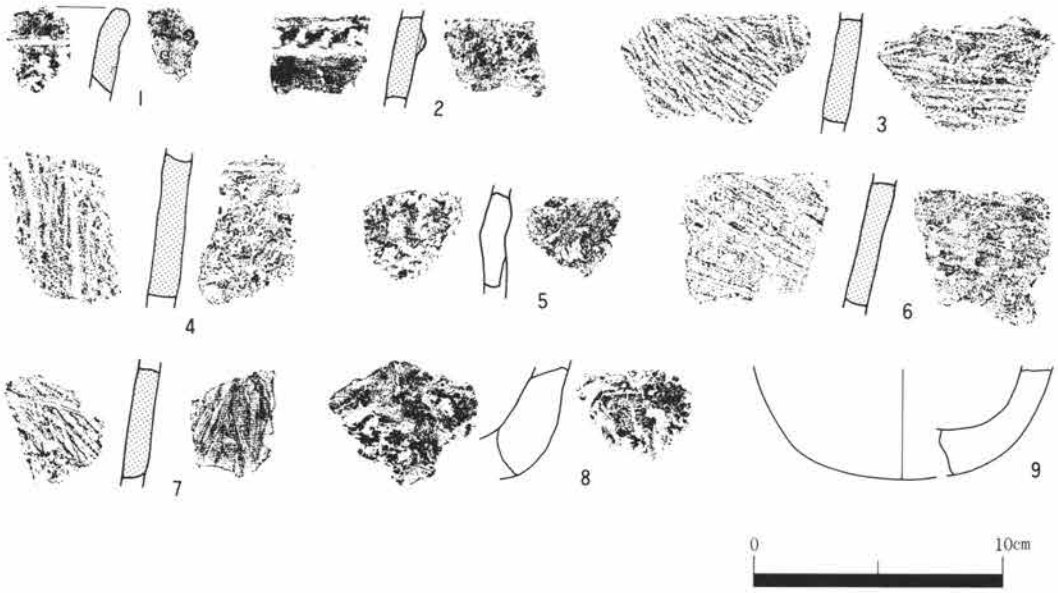


図57　遺構外出土遺物（3）

むのを特徴とするが、ごく少量のもの（図56―７～17）、含まないもの（図56―18～23）もある。また、条痕施文の後になでを加えたものもいくつか認められるが、意図的なものか否か判断できない。図55―19は波状口縁を呈する土器で波頂部には平坦面が形成されている。図56―１も波状口縁を呈する土器である。口唇部には刻みが施される。条痕は外面では口縁部が横位、以下が縦位に施されており、口縁部文様帯が意識されている。内面は上半に指頭圧痕が認められ、条痕は不鮮明である。図56―２は平縁の土器である。条痕は内外面共に横位に明瞭に施される。図56―13は平底の底部片である。条痕は底面にまで及んでいる。図56―17・18は裏面が無文となっている。

３Ｂ種（図56―24～29）

刷毛状の条痕を施したもの。24・25・27および28・29は同一個体である。Ａ類に比べて器面の整形がゆきとどいており、焼成も良好でしっかりとしている。刷毛状条痕は両面に施され、方向は斜位に統一されている。胎土には少量の繊維が含まれる。26は内面が無文であり、胎土に片岩粒を多量に含む。

４　　類（図55―７）

器外面に擦痕を残す薄手の土器である。器壁が３～５㎜と薄く、胎土に繊維を含まない。擦痕は外面のみに斜位に施され、内面は指頭圧痕のみである。口唇部は角棒状を呈する。色調は黄褐色で良く焼きしめられている。

以上の特徴から、本土器は東北地方に分布する槻木下層式土器であろうと思われる。

５　　類（図57）

胎土に片岩質の砂粒を多量に含み、茶褐色を呈する土器を一括した。１は口縁部が若干外反し

口唇部は平坦面をなす。文様は口唇下に1条の沈線を廻らし、それにそって刺突が施される。胎土には少量繊維を含むが、器面に条痕は認められない。2は隆帯を持つ土器である。隆帯上には半截竹管による爪形文が施される。胎土に繊維を含むが、条痕は認められない。4は外面に縦位、内面には横位の条痕をまばらに施した土器である。胎土には繊維を含む。5は外面に指頭圧痕を施した土器である。条痕は認められず、繊維を含まない。3・6・7は両面に条痕を施した土器である。内面に指頭圧痕を残す。胎土に少量の繊維を含むが、良く焼き締められてしっかりしている。8・9は無文の底部破片である。他に比べて器壁が厚く、丸底状を呈する。器面は、8は凹凸がはげしいが、9は良く整っている。焼成も良好である。繊維は含まれない。

以上のように本群土器はいくつかのバラエティに富んでおり、数型式に亘る土器を含んでいるものと思われる。特に5類の胎土に少量の繊維と多量の片岩粒を含む土器が、どのような在り方をするのか。また、隆帯を持つ土器・丸底を呈する土器の位置付けなど、今後検討すべき内容を含んでいる。

第4群土器（図58）

前期初頭に位置すると思われる一群で3類に分類される。いずれも胎土に繊維を多量に含む。

1　類（1・2）

口縁部に文様帯を有するもの。1は口縁部に1.5cm幅の肥厚帯を有し、そこにRの撚糸による圧痕で口縁部文様帯を構成し、以下にLRの縄文を施す。2は頸部に2本の隆線を廻らす破片である。

2　類（3～15）

縄文のみを施した胴部破片を一括した。本類土器は多条RLの縄文を用いて縦位の羽状縄文を構成し、裏面に条痕文を施すことを特徴としている。3はLRの縄文を構成し、裏面に条痕文を施すことを特徴としている。3はLRの縄文を縦位に、RLの縄文を横位に施文して羽状を構成し、裏面に縦位、斜位の条痕文を施す。4は縄文が明確ではないが、裏面に縦位、斜位の条痕文を施す。5は条痕文を縦位施文した後にRLの縄文を縦位に施文し、内面には縦位、斜位の条痕文が施される。6は0段3条RLの縄文を羽状に施文し、裏面に縦位の条痕文を施す。7は5と同様に縦位の条痕文を施した後に0段3条RLの縄文を縦位に施文し、裏面には横位の条痕文を施す。8は0段3条RLの縄文を縦位施文し、裏面には斜位の整形痕が認められる。9は0段3条RLの縄文を縦位、横位に施文して羽状を構成し、裏面は縦位の条痕文を施した後になでを加えている。10～12は0段3条RLの縄文で9同様に羽状を構成しているが、裏面は荒れているため観察不可能である。13は12と同一個体である。14はRLの縄文を縦位にランダムに施文し、裏面はきれいに整形されている。15は0段3条の縄文を縦位に施文し、裏面は整形痕を明瞭に残す。

3　類（16）

LRの縄文を縦位に施文した尖底土器の底部破片である。

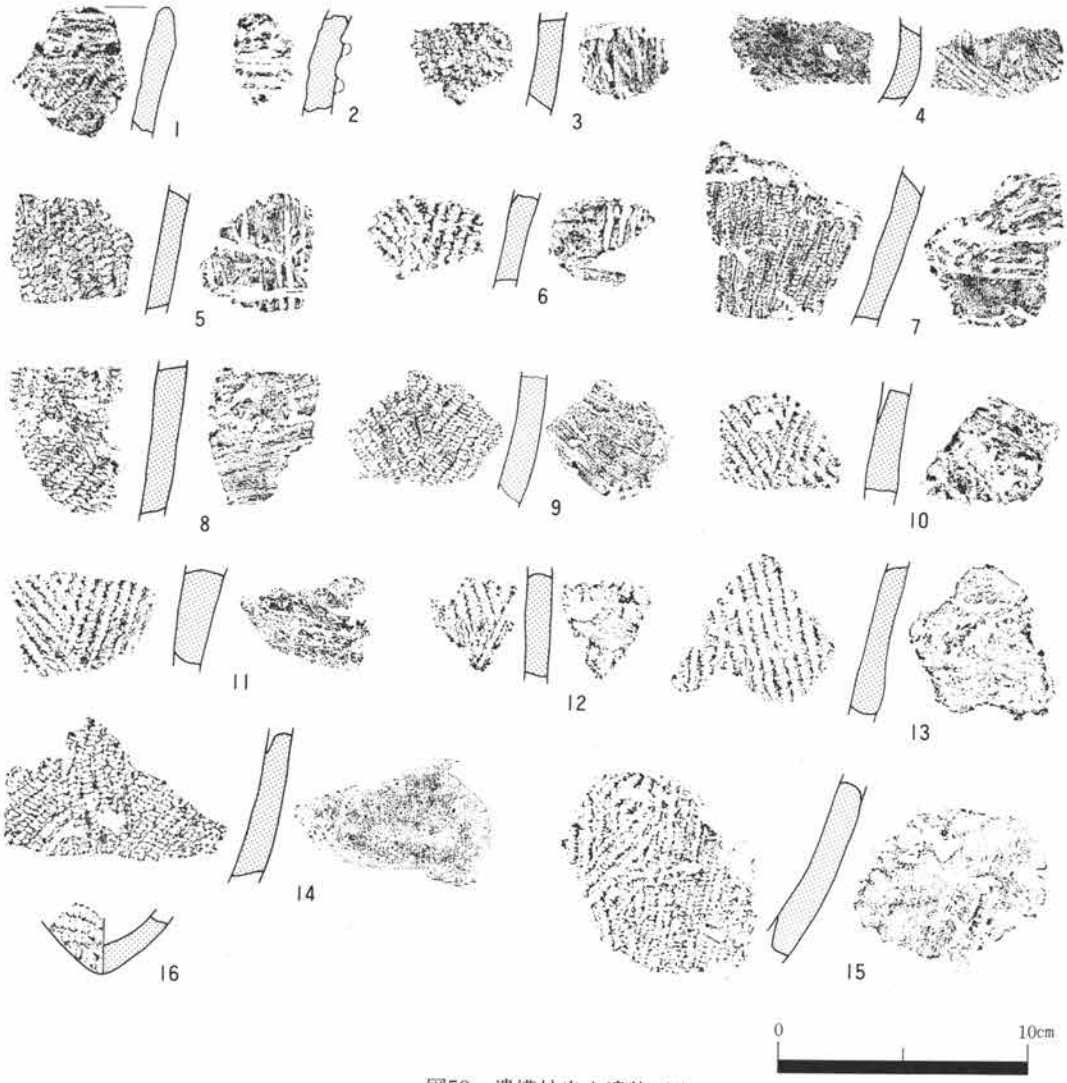


図58　遺構外出土遺物 (4)

第５群土器（図59、図60）

関山式土器を一括する。関山式土器は、縄文土器の中で最も縄文のバラエティに富んだ土器であり、その施文は横位帯状施文による多段構成を基本としている。縄文はループ縄文、正反の合撚による縄文、又は組紐による縄文を主体とし、ループ縄文、正反の合撚による縄文はいずれも横位に多段に施文され羽状を構成するものが多い。また、これらの縄文はほとんどが０段多条を用いている。胎土には繊維を多量に含むが、器面は良く研磨されており、光沢を帯びるものもある。以下７類に分類した。

１　　類（図59―１～５）

口縁部文様を持つ土器を本類とした。口縁は平縁のもの（１・４）と波状口縁のもの（３）とがあり、口唇部は全て内削ぎ状を呈する。文様は半截竹管による平行沈線で構成され、沈線間に

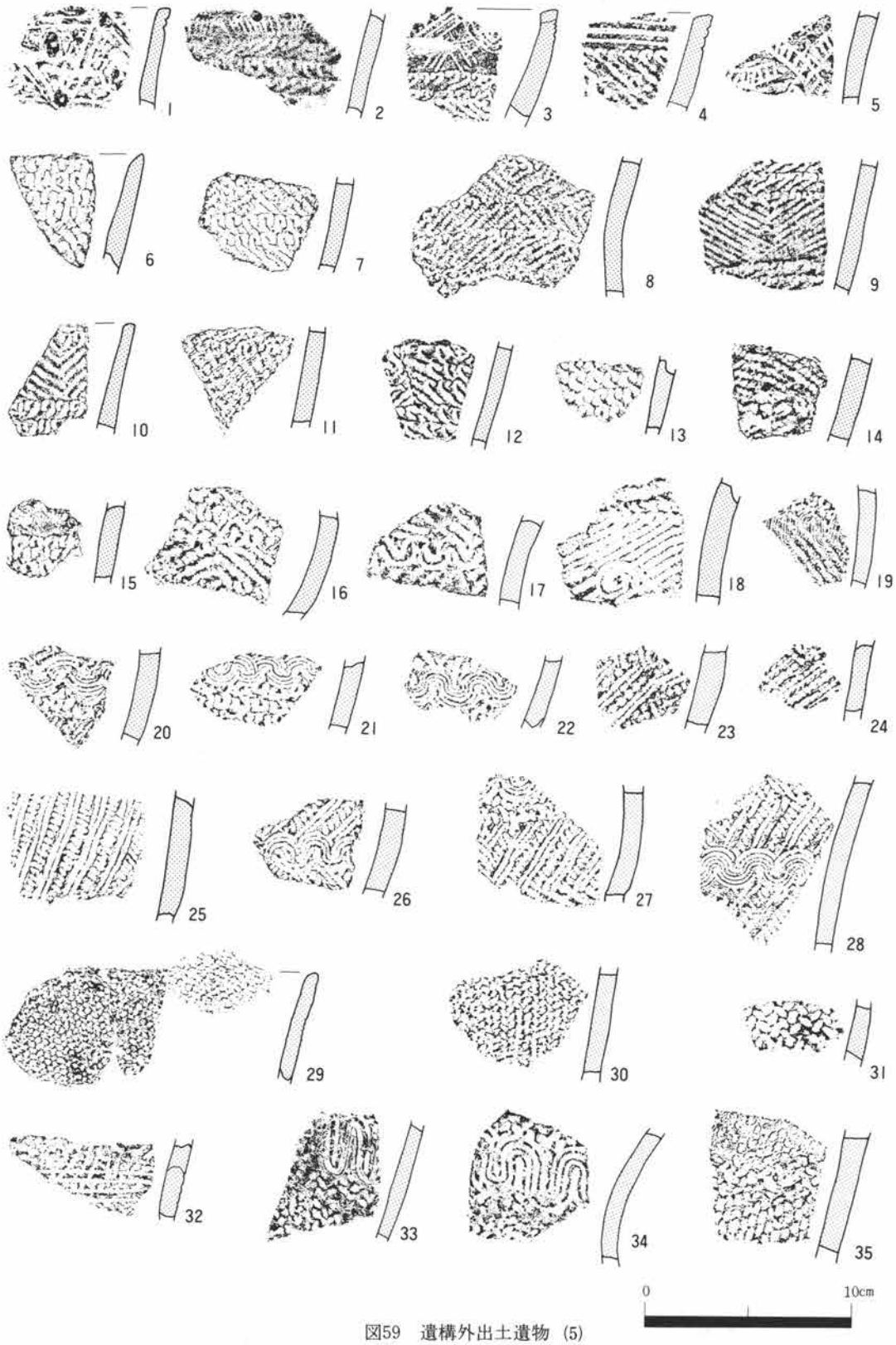


図59　遺構外出土遺物 (5)

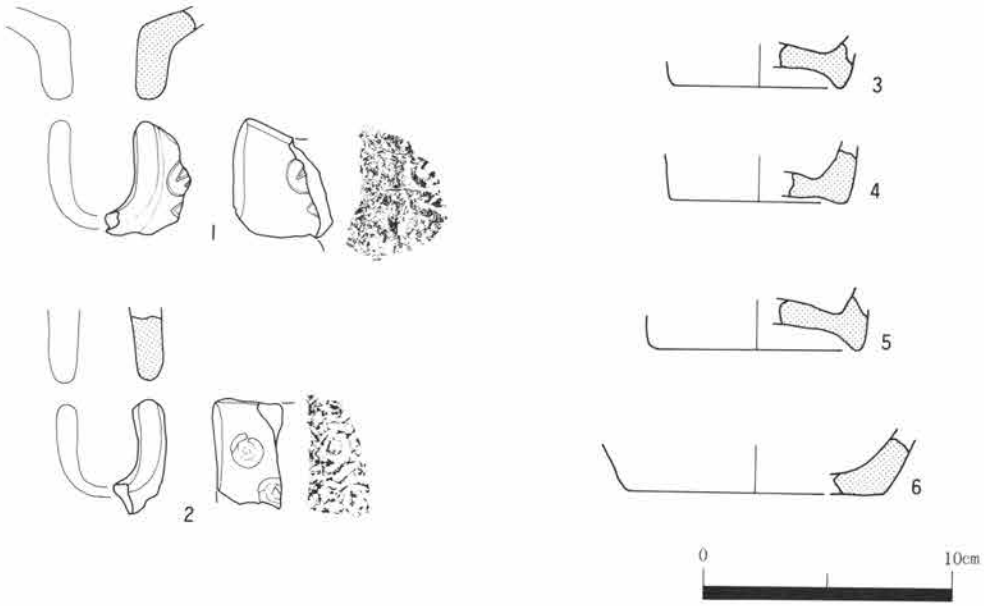


図60　遺構外出土遺物（6）

刻みを施したものもある（2・5）。1は半截竹管で鋸歯状の文様を構成する土器で、接点および区画内に貼付文が施される。地文はＲＬの縄文である。3は波状口縁を呈する土器で、口唇部には鋸歯状の装飾が付けられる。胴部は0段多条のＲＬとＬＲのループ縄文により多段施文される。4は口唇下に2条の平行沈線を廻らし、以下に0段多条ＲＬのループ縄文が施されている。5は沈線間に刻みが施された土器である。

2　　類（図59―6～22）

ループ縄文により文様が構成されるものを一括した。ループ縄文は関山式土器に施される縄文の中で最も一般的な縄文であり、各種文様と併用される場合が多いため、本類の土器は必ずしもこの文様だけで構成されるわけではない。また、ループ縄文は必ずループ部分を上にして施文される。ループ部分を多段に施文する場合はしばしば見られるが、その場合同一撚りのものと違う撚りのものを交互に施文するものとがある。6は口縁部にループを4段に施文する土器である。7・9・10・16はループの多段施文帯と撚りの異なるループ縄文による縦位羽状文帯とを交互に施文して文様構成をする。8は撚りの異なるループ縄文を上下左右とも交互に施文して、縦・横位の羽状を構成する。11～13・21・22はループを多段施文する土器である。17～20は構成がわからない。12～16はループ縄文の上にコンパス文様を施文する土器である。コンパス文は、半截竹管によるもの（16・17）と櫛状施文具によるもの（19～22）とがある。18は半截竹管でコンパス文以外の文様を描く土器である。

3　　類（図59―20・23～28）

正反の合撚の縄文を施す土器を一括した。本類土器はＲ撚りとＬ撚りの2種類の原体で羽状あ

るいは菱形状を構成するものと、他種の縄文と組み合わせて帯状施文するものとがある。23〜25は、L$\left\{\begin{array}{l}\mathrm{R}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{L}\\\mathrm{L}\end{array}\right.\\\mathrm{L}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{R}\\\mathrm{R}\end{array}\right.\end{array}\right.$を施した土器である。20•26〜28は櫛状施文具によるコンパス文を施文した土器で縄文はR$\left\{\begin{array}{l}\mathrm{L}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{R}\\\mathrm{R}\end{array}\right.\\\mathrm{R}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{L}\\\mathrm{L}\end{array}\right.\end{array}\right.$とL$\left\{\begin{array}{l}\mathrm{R}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{L}\\\mathrm{L}\end{array}\right.\\\mathrm{L}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{R}\\\mathrm{R}\end{array}\right.\end{array}\right.$である。

4　類（図59—29〜34）

組紐を施文した土器を一括する。他の縄文といっしょに施文される例は検出されていない。29は口縁が小波状を呈する土器である。口唇部は丸味を帯びた内削ぎ状を呈する。32は半截竹管状工具で直線的な文様が施される。33・34は櫛状工具によるコンパス文が施される。コンパス文は5号住居跡図44—23同様、縦長に施文される。原体は29・30がＲＲＬＬ、他は判読できない。

5　類（図59—35）

前々段合撚（異節）の縄文を施文したもの。1点のみ確認できた。原体はL$\left\{\begin{array}{l}\mathrm{R}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{L}\\\mathrm{R}\end{array}\right.\\\mathrm{R}\left\{\begin{array}{l}\mathrm{L}\\\mathrm{R}\end{array}\right.\end{array}\right.$である。

6　類（図60—1・2）

片口付の土器である。片口部の破片2点が確認された。1は比較的短い片口部で、半截竹管状工具で文様が施文されている。縄文は組紐と思われるが、判定できない。2も半截竹管状工具により円形文が施文されている。縄文は不明である。

7　類（図60—3〜6）

底部を一括した。3〜5は上げ底状を呈する。6は底面が平坦で、立ち上がりは他に比べて傾斜を持っている。

第6群土器（図61、図62、図63—1〜19）

黒浜式土器を一括する。胎土に繊維を含むが、関山式土器のようにサンドイッチ状に含まれてなく、器表裏面に表われている。縄文の種類は少なく、単節、無節を主体に羽状あるいは菱形縄文が構成される。又付加条縄文が多用される。撚糸文も用いられるが例は少ない。施文は関山式と比較して、施文が幅広くなり、粗雑なものが多い。縄文以外の文様要素としては、平行沈線、爪形文などがあり、まれに隆帯を伴う土器もある。以下3類に分けられる。

1　類（図61—1）

単軸絡条体回転文で口縁部文様を構成する土器である。器形は口縁部が若干外反する深鉢形で、口縁には4単位の小突起が付けられる。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯とに分けられる。口縁部文様帯は、小突起下に円形刺突を縦列させて4単位の割り付けを行い、その間に原体Ｌの撚糸を対角線状に施して文様構成している。割り付けに用いられる円形刺突は、諸磯ａ式土器の場合と同様に撚糸施文の後に施されている。胴部文様帯は、ＲＬとＬＲの縄文を交互に施文して菱形を構成するものと思われる。

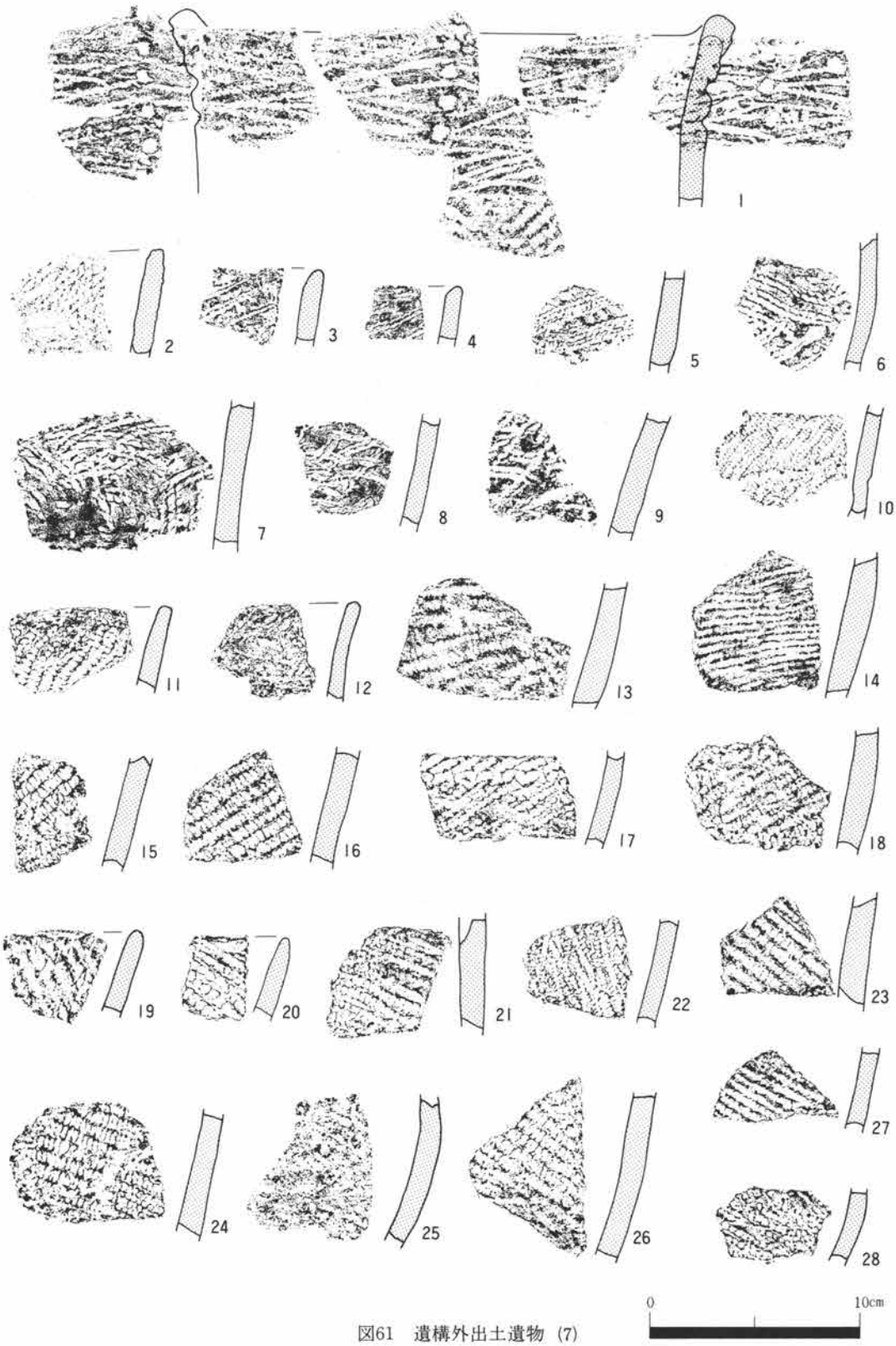


図61　遺構外出土遺物（7）

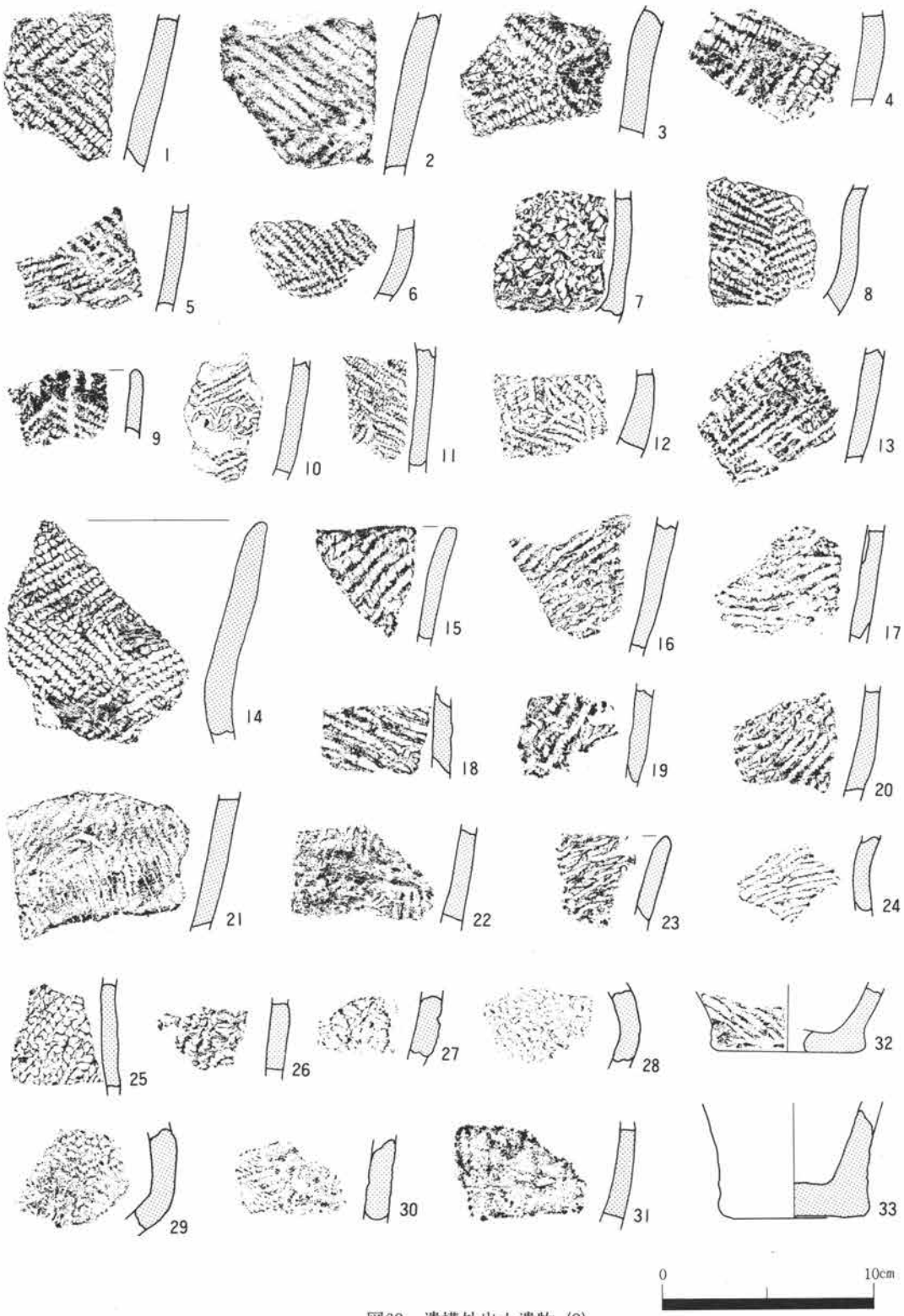


図62　遺構外出土遺物 (8)

2　　類（図61―2～28、図62―1～29）

縄文のみを施文する土器を一括した。以下A～Dの4種に分けられる。

2A種（図61―2～9）

附加条縄文を施すもの。2～4・6は無節縄2本を単位として巻き付けた原体を施文した土器である。施文は横回転を基本としている。2は重複施文されており、一部の条が縦位になる。6はL縄とR縄を交互に施文して菱形を構成するものと思われる。5はR縄4本を単位として付加した例である。7～9は2本を単位とする附加条で網目状を構成する。7は回転方向を変えて網目状を構成し、一部条を縦位に施す。附加条はL2本、R2本である。8・9は各々巻き付け方向の異なる2つの原体によるものか、一つの縄に右巻き、左巻きしたものか、判読できない。附加条は、8がR2本、9がR2本、L2本である。なお、軸縄の圧痕は3～6で若干認められるが、判読できない。

2B種（図61―11～28、図62―1～8・12～14）

単節縄文を施すものは関山式土器に比べて、施文帯の幅が広く、施文も整っていない。原体は0段3条やループ縄文など、関山式からの要素も認められるが、数は少なくなる。図61―17・18はループ縄文を施す土器である。図61―13、図62―1～8は羽状縄文を構成する土器である。図62―12～14は菱形縄文を構成する土器である。結束縄文は認められない。原体は図61―11～18がLR、図61―19～28がRLの縄文である。なお、図61―13・15・16・21・23・24・26、図62―1～3は0段3条縄が用いられている。

2C種（図62―15～22・24）

無節縄文を施すもの。全てLの縄文を用いており、羽状を構成するものはない。18は縦位施文である。21は細沈線が施される。

2D種（図62―23）

直前段反撚の縄文を施すもの。原体LLのもの1点のみである。

2E種（図62―25～33）

その他のもの、および底部を一括した。25～29は原体が複雑で判読できない。30は貝殻背圧痕を施す土器である。31は無文土器である。32・33は底部で、32はRの縄文が施される。

3　　類（図63―1～19・21）

口縁部に縄文以外の文様を施す土器を一括した。1は刺突文を施す口縁部破片である。図では判りにくいが、小波状を呈する土器で、口唇には刻みが施される。2・3は隆帯を伴う土器である。3は波状を呈する口縁部破片である。4～10・21は半截竹管による平行沈線で文様を描く土器である。6は頸部が「く」の字状に屈曲する。11～19は爪形文を施す土器である。爪形文には、幅広の施文具を器面に垂直に立てて軽く施文するもの(11～13)、幅狭の施文具をねかせて施文するもの（14)、幅広の施文具をねかせて深く施文するもの（16～19）とがある。原体は、2が0段多条RL＋Rの附加条縦施文、3がRL、10がRLとLR、18がRLのループ縄文、19がLRの

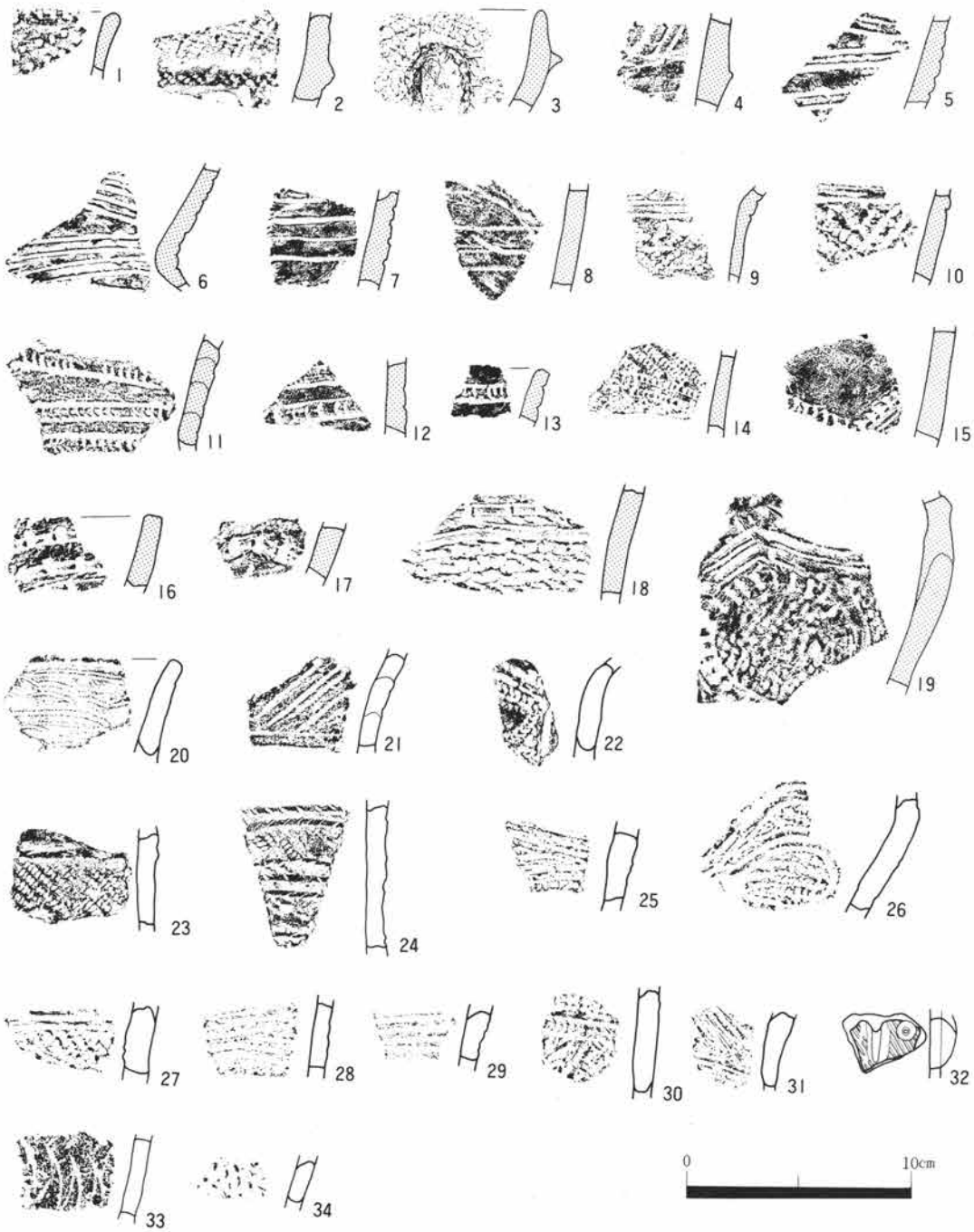


図63　遺構外出土遺物 (9)

縄文である。

第7群土器（図63―20～34）

前期後半の土器群を一括した。20は櫛歯文を施す土器である。22は幅の狭い爪形文が施される。25～29・31は半截竹管による平行沈線で直線あるいは曲線的な文様を施す土器である。23・24は浮線文土器である。30は幅の広い爪形文が施される。32は集合沈線を施し、その後にボタン状の貼付文を付加する土器である。33は貝殻腹縁による波状文が施される。34は沈線区画内に貝殻腹縁の波状文が施される。地文は23・25～27・31がＲＬ、24がＬＲの縄文である。

以上の土器は20・22が諸磯ａ式、23～31が諸磯ｂ式、32が諸磯ｃ式、33が浮島式、34が興津式土器に各々対比できよう。なお、34は胎土が砂質で黄白色を呈する点で霞ケ浦周辺の当該土器と極似しており、搬入品の可能性がある。

第8群土器（図64～図67、図73―11～14）

中期中葉の阿玉台、勝坂式土器を一括した。以下２類に分けて説明する。(1)

１　　類（図64、図65）

阿玉台式土器を一括する。以下Ａ～Ｉの９種に分ける。

１Ａ種（図64―１～６）

１列の押引文で文様を表出する阿玉台Ib式土器である。１～３・６は角押文で文様を表出する土器である。口唇部は外側に折れ曲がり、口唇裏面に稜を形成する。文様は隆帯で口縁部に区画文が構成され、隆帯の内側に１列の角押文が施される。１は区画内に孤状の文様が施文される。２は区画内に２列の角押文で鋸歯状文が施文される。また、口唇部には刻みが施される。３は口唇部が角棒状を呈し、刺突が施される。６は区画内に爪形文が施される。４・５は細いペン先状の押引文で文様を表出する土器である。口唇部は丸味を帯び、明瞭な稜を形成しない。区画の方法は前者と同様であるが、区画内には連続する孤状の文様が施文される。また、４は口唇部に刻みが施される。なお、２～６は胎土に多量の金雲母・白色砂粒を含む。

１Ｂ種（図64―７～19）

２列の押引文で文様を表出する阿玉台II式土器である。全て、胎土には多量の金雲母・白色砂粒を含む。７～11は角押文で文様を表出する土器である。８は波頂部に円盤状の把手をもつ口縁部破片である。把手側面にも２列の角押文が施されている。10・11は半截竹管による平行角押文である。13～16は細いペン先状の押引文である。13・16は波状口縁の土器で、口唇部が角棒状を呈す。13は口唇裏面に稜を持ち、口唇上には刺突が加えられる。口縁部は楕円区画文で構成され、区画内には13が爪形文、14・15が同一工具による斜位の押引文が、16は同一工具による波状文が施される。なお、15・16は半截竹管による平行押引文である。17～19も半截竹管による平行押引文であるが、施文はくずれており、爪形文に類似するものである。

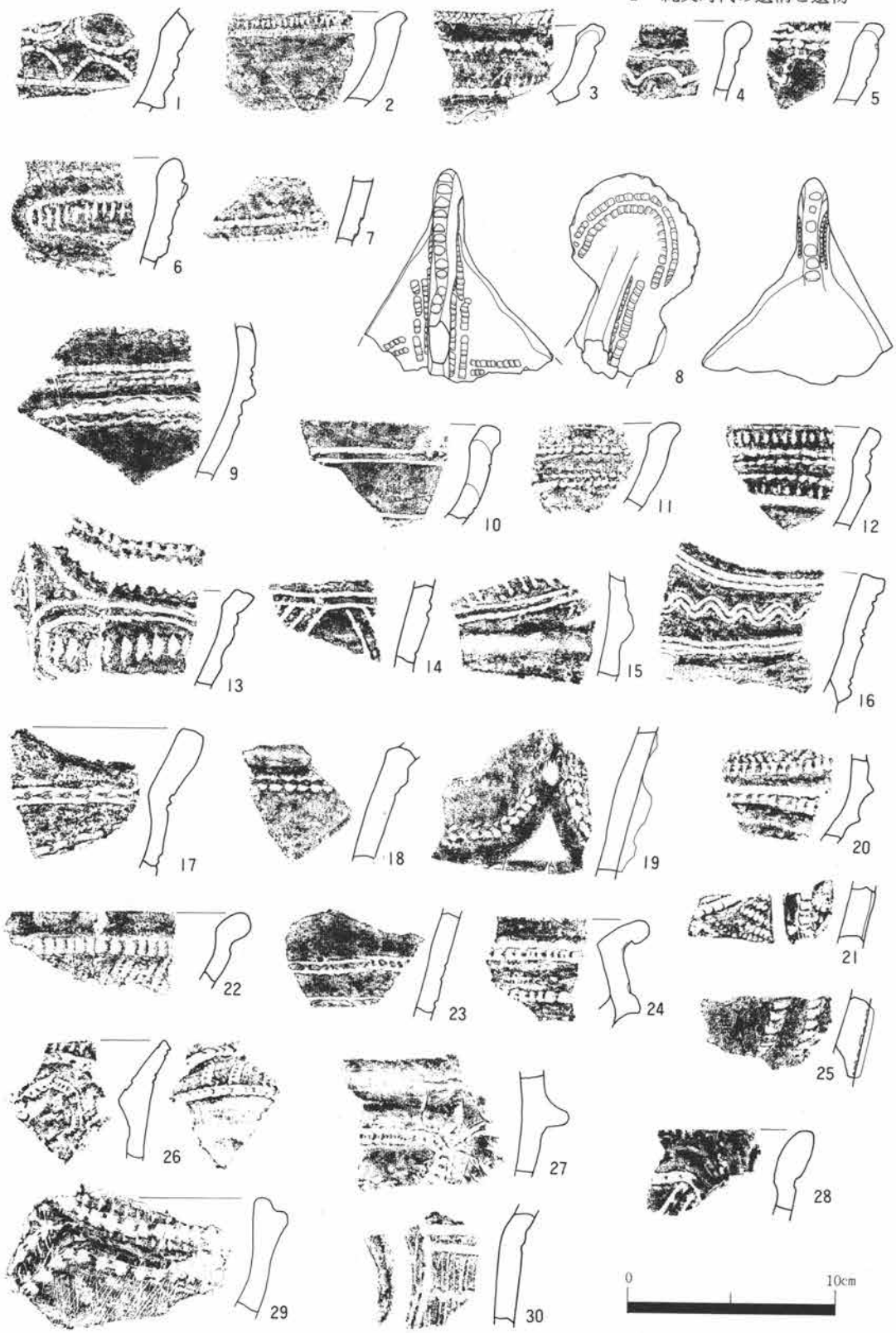


図64　遺構外出土遺物 (10)

1C種（図64—20～29）

隆帯にそって爪形文が施される阿玉台Ⅲ式土器である。口唇部は丸味を帯び、裏面の稜も不明瞭となる。施文方法には、半截竹管の凸面で施文するもの(20～22)、凹面を押し当てて平行線を引きながら施文するもの（23・26・27・28)、ヘラ状工具で施文するもの（24・25・29）がある。これらのうち、20・22の施文方法は勝坂2式と同様であり、また縄文が施文される点でも異質の一群である。縄文は、20・22がRL、21がLRである。29は条線が施される。

1D種（図64—30）

隆帯にそって平行沈線が施される阿玉台Ⅳ式土器である。地文には条線が施され、文様は隆帯と沈線で構成される。

1E種（図65—1～3）

押圧文と、それに添う1本の沈線が施される一群である。沈線は部分的に押引き状に施されている。胎土には多量の金雲母・白色砂粒を含む。阿玉台Ⅰb式土器の胴部破片であろう。

1F種（図65—4・5）

一本単位の鋸歯状沈線が施される一群である。胎土に多量の金雲母・白色砂粒を含む。5は押圧を施した懸垂隆帯を伴う。阿玉台Ⅰb式あるいはⅡ式土器の胴部であろう。

1G種（図65—6～15）

半截竹管による平行沈線で施文する一群である。胎土に多量の金雲母・白色砂粒を含む。施文は横位に波状平行沈線を施すもの（8～11）とそうでないものとがある。10は波状文とともに同工具による角押文が施される。阿玉台Ⅱ式の胴部破片であろう。

1H種（図65—16～27）

爪形文が施される一群である。胎土には26・27を除いて他は全て金雲母・白色砂粒を多量に含む。16～18は口縁部破片である。16・18は口唇部が丸いが、17は角棒状を呈し、裏面に稜を持つ。19は口縁部が外反する円筒状の深鉢形を呈すると思われる。頸部には刻みを施した隆帯がめぐり、その直上に爪形文が施されている。胴部には平行する2条の爪形文が廻らされる。17・20・21も断面三角形の隆線が施されている。26・27は爪形文を横位に等間隔に重畳施文する土器で、胎土には大粒の片岩粒を多量に含む。以上の土器は阿玉台Ⅱ式あるいは同Ⅲ式に比定されると思われる。

1I種（図67—10～12、図73—14）

浅鉢形土器を一括した。図67—10は裏面に2列の角押文を廻らす口縁部破片で、口唇部には刻みが施されている。11は口縁部が「く」の字状に内折する土器で口縁部には幅広の爪形文が施される。12は胴下半部の破片である。文様は2本の角押文を垂下させ、その両側に同角押による鋸歯状沈線を施し、区画内を刺突で充塡している。図73—14は頸部で折れ曲がって直立ぎみに立ち上がる口縁部破片で、文様は口縁部に渦巻状の隆帯が施される。なお、図67—10・12、図73—14は胎土に金雲母を多量に含む。以上のうち、図67—10、12は阿玉台Ⅰb式に比定されよう。

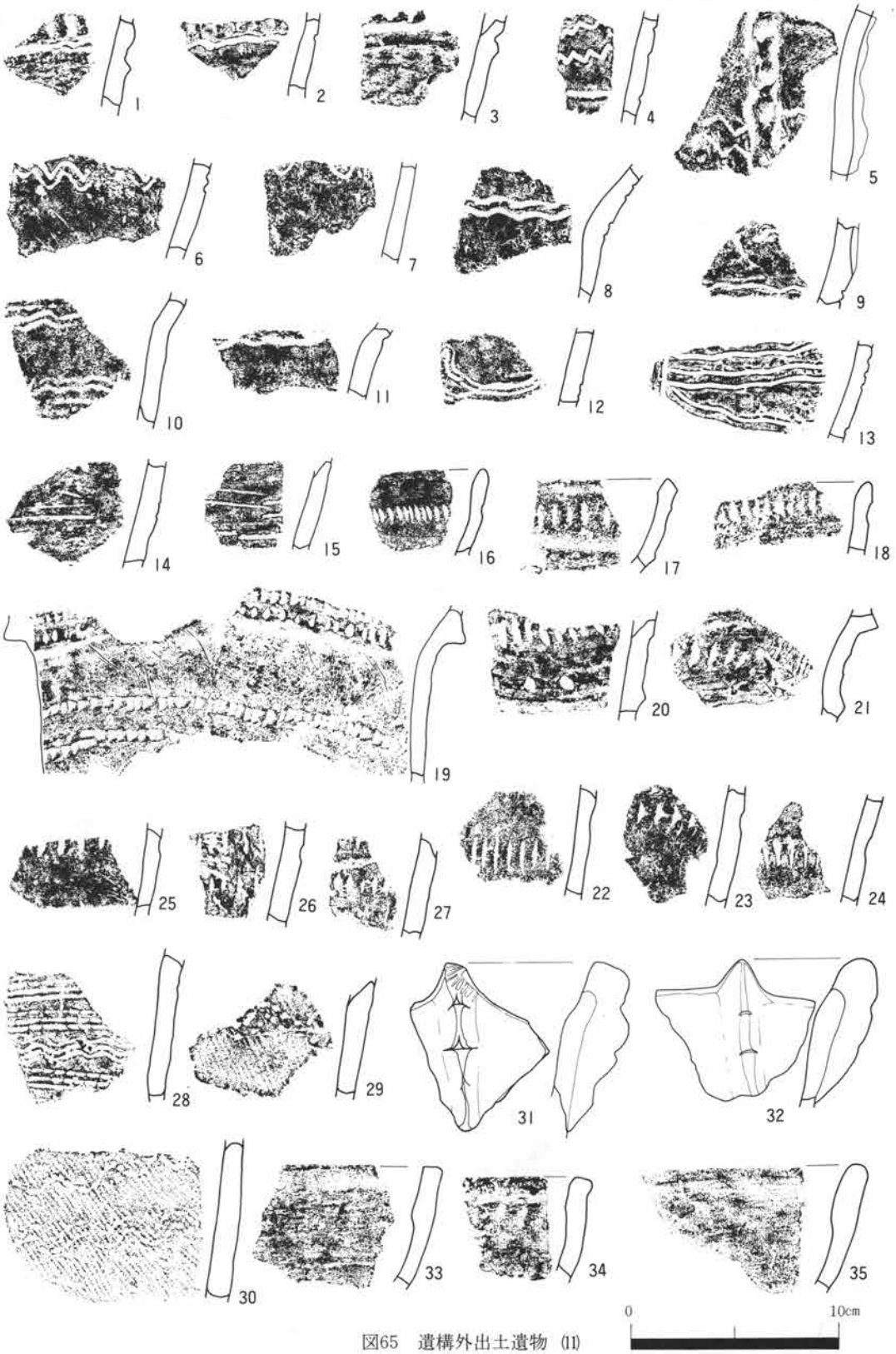


図65　遺構外出土遺物 (11)

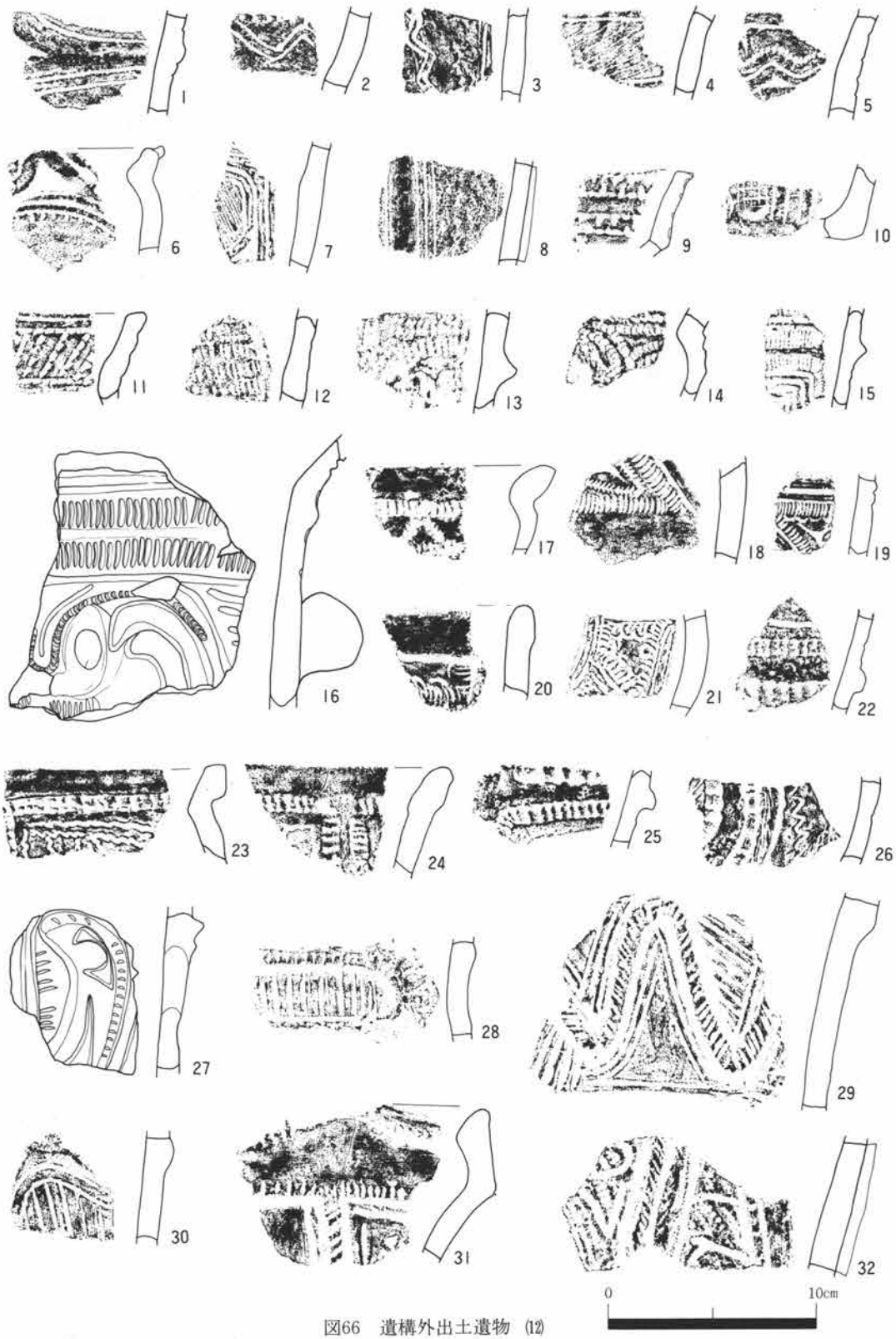


図66　遺構外出土遺物 (12)

1 J種（図65—28～35）

その他を一括した。28は3条の櫛歯状押引文を平行あるいは波状に重畳施文した土器である。胎土には白色砂粒を多量に含み、焼成は良好である。29・30は縄文RLを地文に、半截竹管による平行押引文を波状に施す土器である。胎土には金雲母・白色砂粒を多量に含む。31・32は棒状の貼付把手を持つ無文土器である。把手には山形の段が認められる。31は胎土に金雲母を多量に含む。33～35は無文土器の口縁部破片である。胎土には金雲母・白色砂粒を多量に含む。

2　類（図66、図67—1～4、図73—11～13）

勝坂式土器及びその直前に位置すると思われるものも一括した。

2 A種（図66—1～10・27）

勝坂1式あるいはその直前に位置すると思われるものを一括した。胎土に大粒の片岩粒を含むものが多い。1～7・10は半截竹管による平行沈線で文様を施す土器である。1は三叉状陰刻文が施される。2・3は波状沈線を施す土器である。5・6は平行沈線にそって刺突文を施す土器で、5は三叉状陰刻文が施されている。6は口縁部に波状隆線が施される。8は懸垂隆帯にそって平行沈線が施される。9は口縁部に交互陰刻による鋸歯文を2条施した土器である。10は区画内を格子目状沈線で充塡する底部破片である。27は三叉状陰刻文を施した幅広の貼付文を持つ土器で、貼付文にそって沈線が施される。

2 B種（図66—11～18）

押引文で区画文を構成する勝坂1式土器を一括した。1種同様に胎土に大粒の片岩粒を含むものが多い。11は頸部で「く」の字状に外折する口縁部破片である。文様は1本を単位とする角押文で口縁部文様帯が区画され、区画内は斜位の同角押文で充塡される。12・13はキャタピラ文で文様を構成する土器である。13は隆帯を伴う。14はペン先文で文様を構成する土器で、胎土には金雲母・白色砂粒を多量に含む。15は隆線で文様を区画する土器である。隆線の両側にはキャタピラ文が施され、区画内は角押文で充塡される。16は頸部で「く」の字状に外折する円筒状の深鉢形土器の破片である。頸部下には沈線とキャタピラ文が施され、胴部には大きなつまみ状の把手が付けられる。隆帯は中程につまみ状の把手が付けられ、隆帯にそってペン先文が施される。胎土には金雲母・白色砂粒を多量に含む。17・18はキャタピラ文で三角形の文様区画をする土器である。18は区画内にペン先文がめぐらされ、三叉状陰刻文が施される。

2 C種（図66—19～26）

隆帯にそってキャタピラ文を施す勝坂2式土器を一括した。キャタピラ文は、ペン先文から変化した波状沈線と半截竹管による刺突文とがあるが、前者は胎土に多量の金雲母や白色砂粒を含み、口唇下2cm程の所で「く」の字状に外折して内側に稜を持つのに対し、後者は胎土に金雲母を含まず、口縁も直立する。おそらく前者は阿玉台式からの強い影響を受けた土器かあるいは阿玉台式土器に含まれるものと思われる。

2 D種（図66—28～32、図67—1～4）

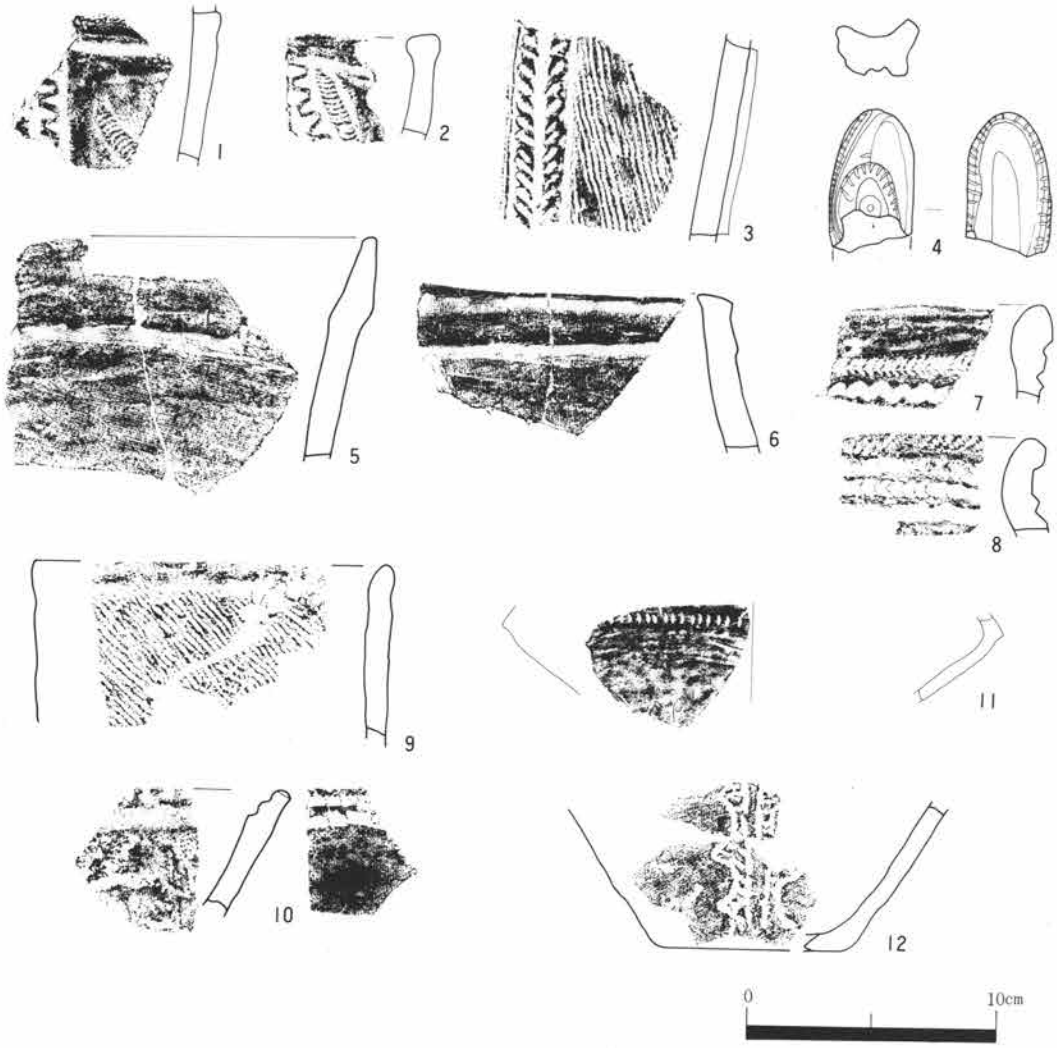


図67　遺構外出土遺物 (13)

勝坂３式土器を一括した。28～30は横帯区画文で構成される土器である。28・30は楕円区画、29は三角形の区画で、区画内は平行沈線で充塡される。31・32は縦帯区画の土器であろう。31は口縁部が無文となる。32は三角形の区画が施され、区画内には沈線で文様が描かれる。また、全面に縄文ＬＲが施される。１・２は鋸歯文が施される土器である。３は刻みを施した隆帯２本を懸垂する胴部破片で、Ｌの単軸絡条体回転文が施される。４は蛇状の把手部である。

２Ｅ種（図73―11～13）

11は胴部が張る形態を呈し、口唇部は外折している。器面は、内外面共に整形が粗い。12は口唇部に稜をもつ浅鉢で、口唇裏面には幅広の肥厚帯を形成している。又肥厚帯には若干の塗彩が認められている。13は口縁部が「く」の字状に内折する浅鉢で、口縁部には隆帯による三角形の区画文が施される。以上の土器は勝坂式後半期に比定されよう。

２Ｆ種（図67－５～９）

その他を一括した。５・６は無文の口縁部破片である。ともに口縁部に肥厚帯をもつ。塗彩は認められない。７は口唇裏面が肥厚する口縁部破片で、口唇下に無文部をおいてペン先文を１条廻らし、その下に波状の押引文を施している。８は口唇部が外反する口縁部破片で、口唇部にはＬＲの縄文が施される。文様は７と同様である。９は円筒状を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。口唇下に若干の無文帯をもち、胴部には縄文Ｌが施される。

第９群土器（図68～図73）

中期後半の加曽利Ｅ式土器およびそれに併行する土器群を一括する。以下９類に分類した。

１　　類（第68図）

加曽利Ｅ１式土器を一括した。小破片のみで器形を説明できる資料はないが、口縁部がキャリパー状を呈し、胴部が円筒状の深鉢形を呈すると思われる。文様は口縁部に集中し、隆帯あるいは半截竹管によるＳ字文や、蕨手状の初源的な渦巻文で構成される。また、地文は縄文と撚糸文の両者が見られる。なお、13～16・22～25は同一個体である。

１～４は内湾する口縁部の破片である。１・２は口唇下に１条の隆帯が施される。４は口唇下に半截竹管による平行線を１条廻らせる。５は口縁部に隆帯で円形の区画をし、その中に押引文を施している。６は口唇部に刻目を施す土器である。内側に１条の沈線を廻らし、そこから垂直に沈線を施している。７はＳ字状の貼付文を施した口縁部破片で、地文には縦位羽状縄文が施されている。８は３条の平行沈線で楕円区画文が施される。９～17・21は２条あるいは３条の平行隆線で文様が構成される。18は幅の広い貼り付け帯で渦巻文を描く土器である。19・20は１条の隆線で文様が構成される。20～25は２条単位の半截竹管による平行沈線で文様を描く土器である。18・21は蕨手状の初源的な渦巻文が施された口縁部破片である。縄文は、１・６がＲの撚糸文、９・10がＬの撚糸文、その他はＬＲの19を除いて全てＲＬの縄文である。

２　　類（第69図－１～８）

加曽利Ｅ２式土器を一括した。文様は渦巻文が主体となる。文様表出には隆線が用いられ、隆線の両側を沈線で枠どることによって、文様効果をあげている。１・３は隆線区画内を沈線で充塡する土器である。５は渦巻文を連結しながら胴部文様を構成する土器である。８は口縁部文様帯が口唇部までせり上がった例である。口縁は平縁で、口唇部には１条の沈線が廻らされ、把手状の渦巻文が付けられるが、欠損している。胴部には、２条の沈線間に波状沈線を垂下させる懸垂文が施される。地文は、４・８がＬＲ、２・５・６・７がＲＬの縄文である。

３　　類（第69図－９～23）

加曽利Ｅ３式土器を一括した。本土器は、磨消縄文の採用をもって加曽利Ｅ２式土器と区分される。９～12は口縁部に文様帯を持つ深鉢形土器の胴部破片である。11は幅の狭い磨消無文帯を垂下させる胴部破片である。9・10・12は幅の広い磨消無文帯を垂下させる胴部破片である。13～23

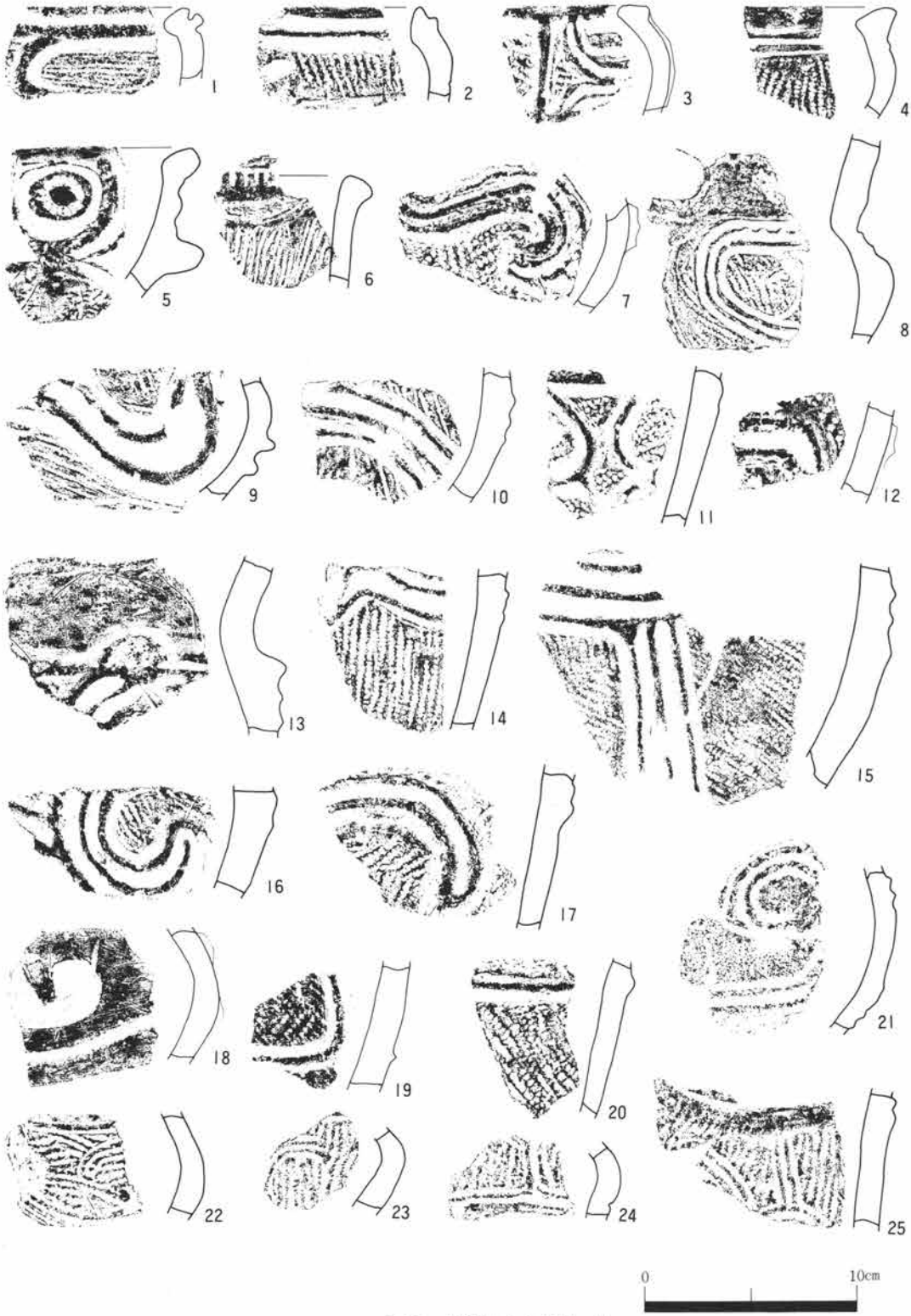


図68　遺構外出土遺物 (14)

は口縁部文様帯を消失した段階の土器である。13・15・21は平行する2～3条の幅広沈線で渦巻状の文様を描く土器である。14・16～20・22・23はアーチ状の区画文で文様を構成する土器である。16～20は口唇部直下に円形刺突文が1列施される。縄文は、15・16～23がＬＲ、21が0段3条ＲＬ、他はＲＬである。

4　類（図70、図71、図73―9）

加曽利Ｅ4式土器を一括した。ここでは微隆起線文土器の出現をもって3式土器と区分した。図73―9、図70、図71―1～12は微隆起線で文様を区画する一群である。器形は口縁部が内湾し、頸部が括れて胴部が張り出すもの（図70―3・12)、胴部が大きく張り出し、口縁部でいったん括れて口唇部が外反するもの（図70―10）があるが、本遺跡での主体は、底部から直線的に開口する深鉢形である。口縁部は、波状を呈するもの（図73―9、図70―6）もみられるが、平縁のものが圧倒的である。口唇下に幅広い無文帯を持ち、1条の微隆起線を廻らせて胴部を区画する。これは、本土器型式の大きな特徴である。図73―9は各波頂部を孤状の微隆起線で連結し、以下に縄文ＬＲを施す。図70―2では口縁部無文帯に縦位の隆帯を施し、接点に円形刺突文が施される。図70―3・5・6は口縁部無文帯下を2本の微隆起線で区画する土器である。微隆起線間には2列の円形刺突文が施される。6は波状口縁の土器である。波頂部には、渦巻状の隆帯が橋状把手状に施される。図71―1～12は胴部破片である。文様は、直線的なものと曲線的なものとがある。縄文はＬＲが21点、ＲＬが2点である。

図70―4、図71―13～20は沈線で文様を区画する一群である。文様は全て曲線的に構成される。15・16・18・20は同一個体である。文様は、沈線区画の無文帯でＪ字状に構成されるものと思われる。無文帯先端には円形の貼付文が付される。縄文は、図71―14～17・19・20がＲＬ、図70―4、図71―13・18はＬＲである。

5　類（図72)

大木式土器と思われるものを一括した。以下Ａ～Ｅの5種に分けられる。

5Ａ種（1～10)

縄文を地文とし、押引文を施す土器である。押引文には、角押状のもの（1・3・4・6・7・9・10)、細いペン先状のもの（2・5)、幅の広いもの（8）とバラエティがある。1・3は口縁部が丸く張り出し、口唇部が「く」の字状に外折する深鉢形土器の口縁部破片である。口縁は4単位の小波状を呈すると思われる。「く」の字状に折れ曲がる口唇部は無文化される。1は口唇下に2条の角押文を廻らし、その直下及び頸部付近に波状沈線を施して口縁部文様帯を区画し、区画内には渦巻文が施される。3は隆線で区画文が構成され、隆線にそって角押文が施される。また口唇には縄文ＲＬが施されている。5・6は沈線と押引文で文様が描かれる。7は角押文を施した把手である。内外両面には、つまみ状の突起が付けられる。8は波状隆線や渦巻文が施された大形把手の破片である。9・10は隆線で懸垂文が施される土器で、隆線にそって角押文が施される。縄文は1～3・9・10がＲＬ、4～6がＬＲである。なお、1・6は胎土に金雲母を多量に含む。

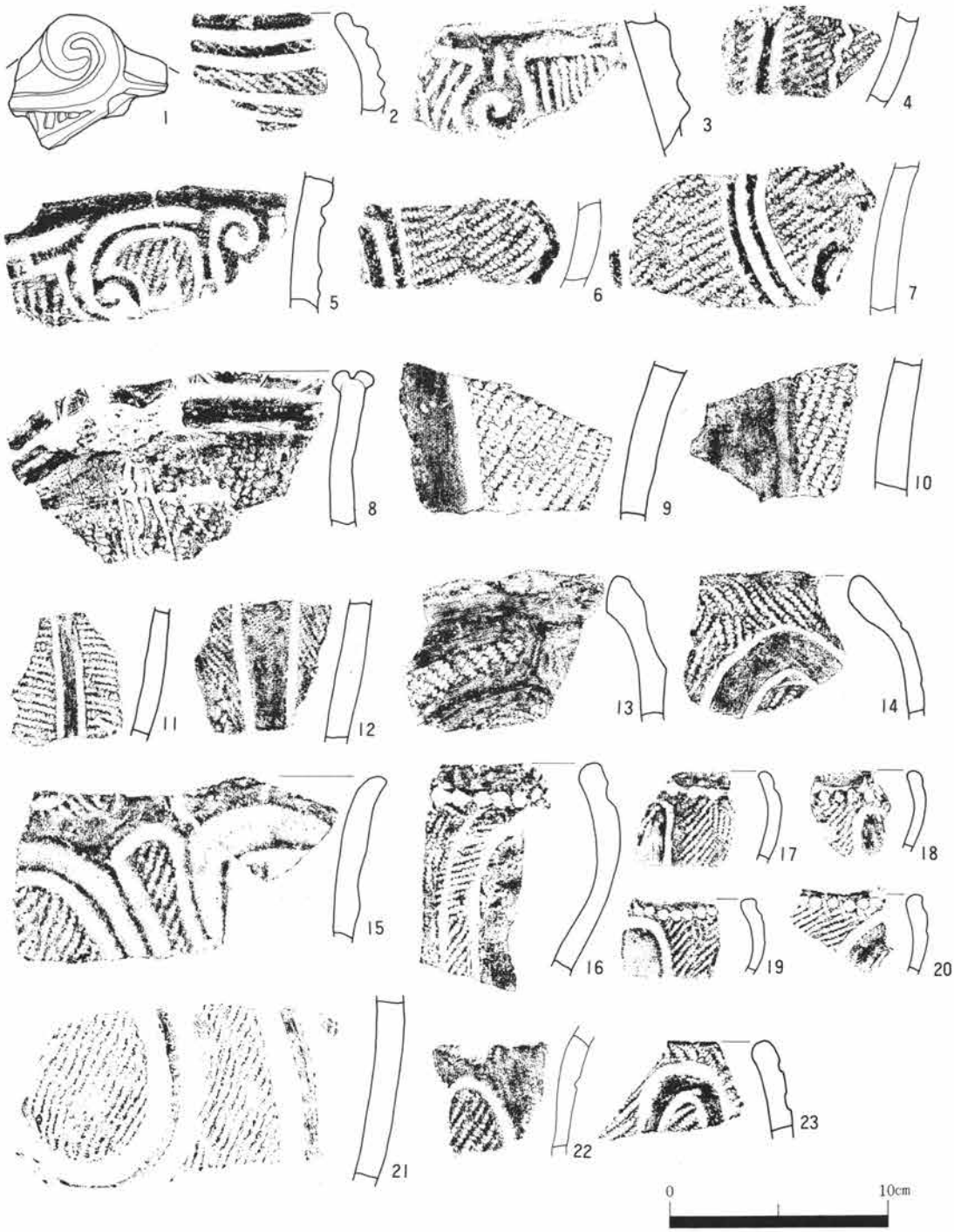


図69　遺構外出土遺物 (15)

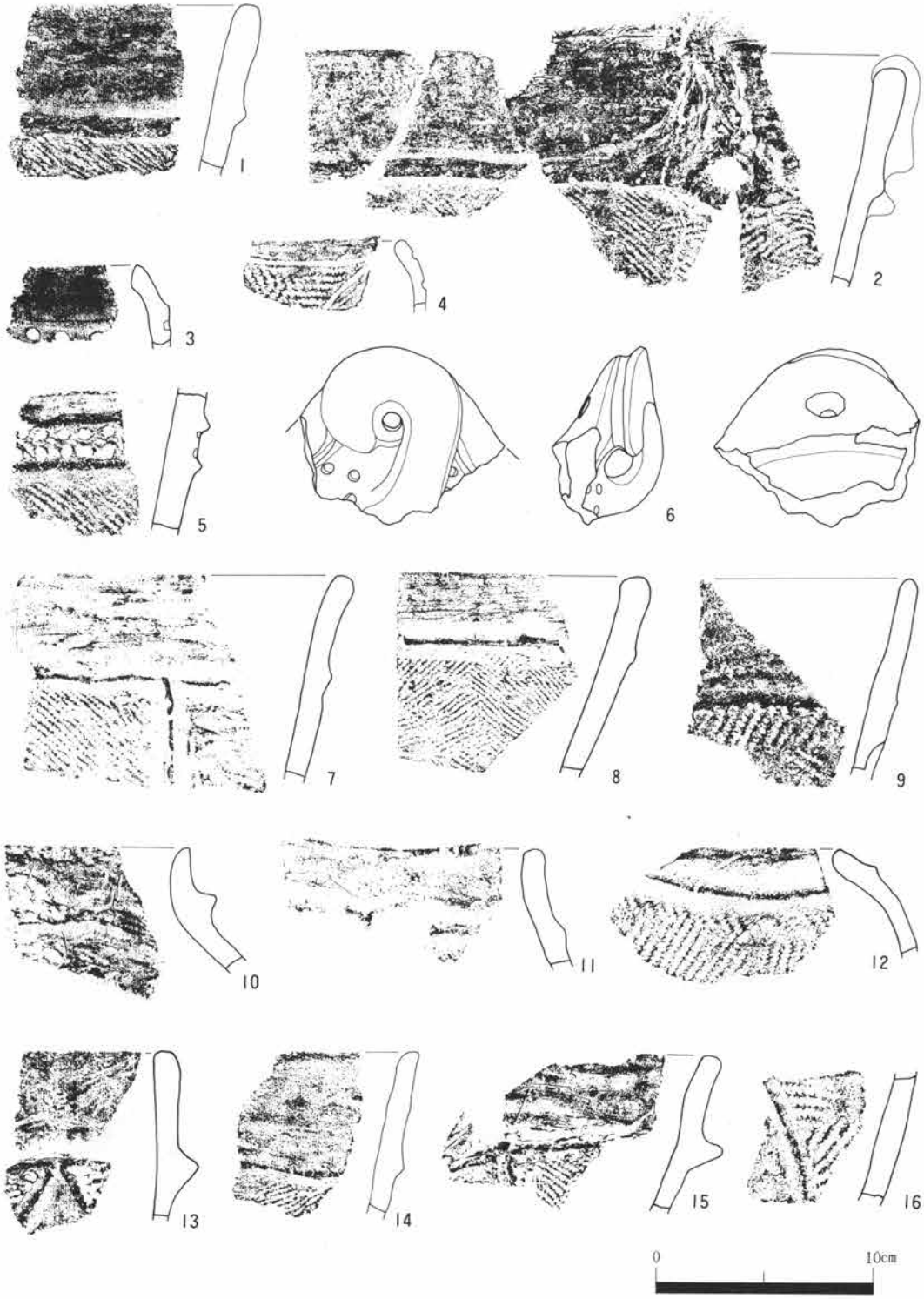


図70　遺構外出土遺物 (16)

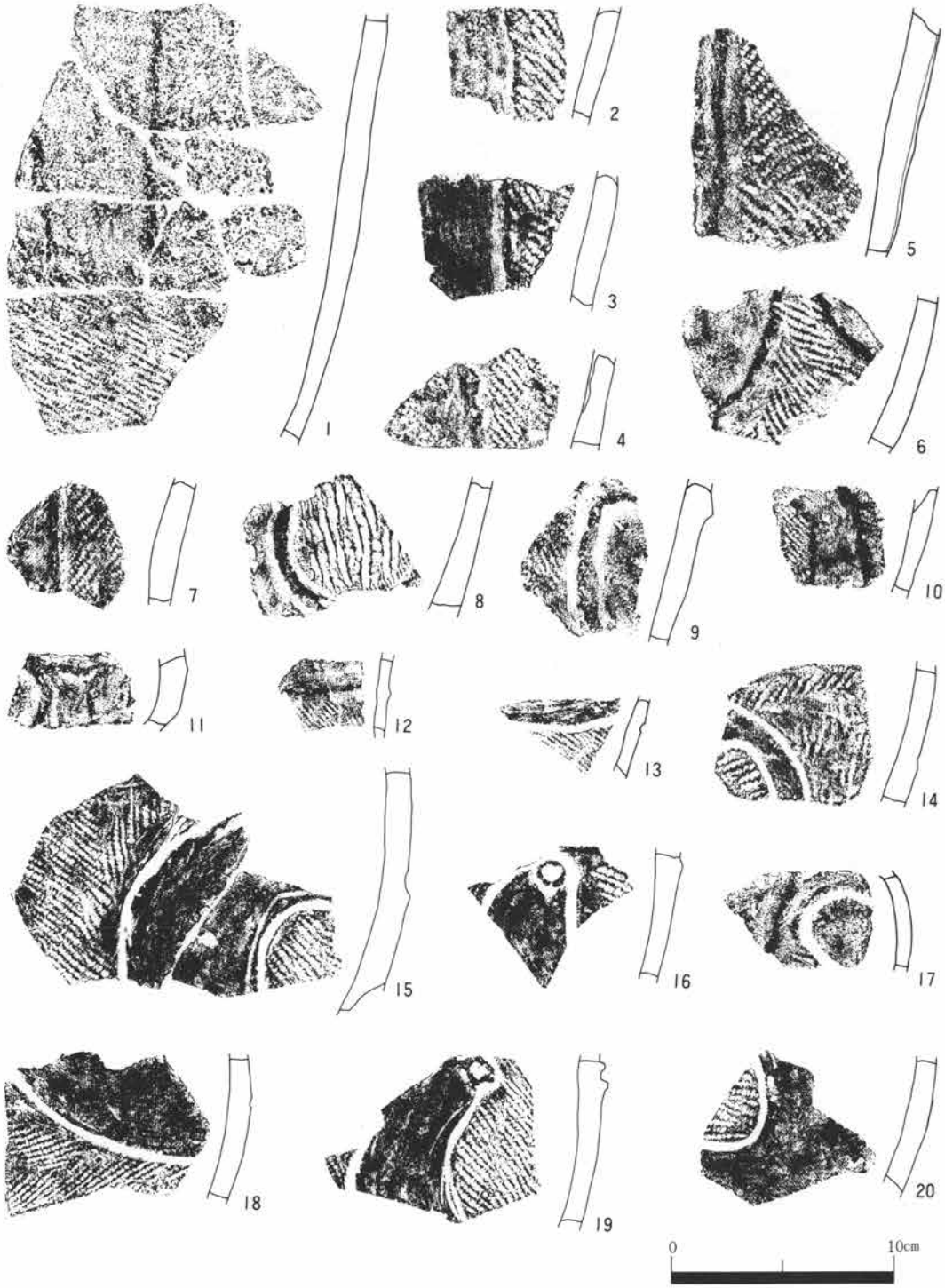


図71　遺構外出土遺物 (17)

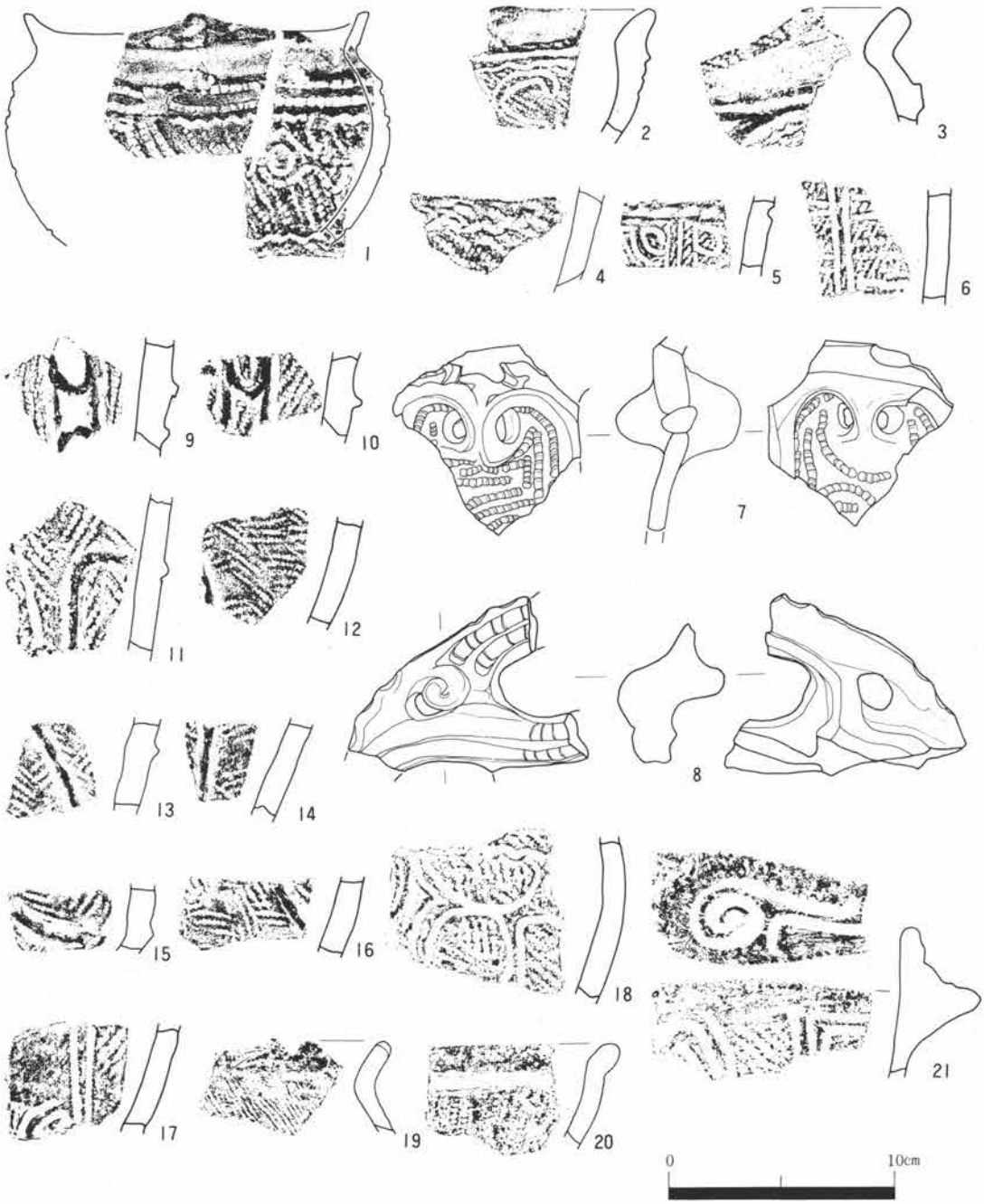


図72　遺構外出土遺物 (18)

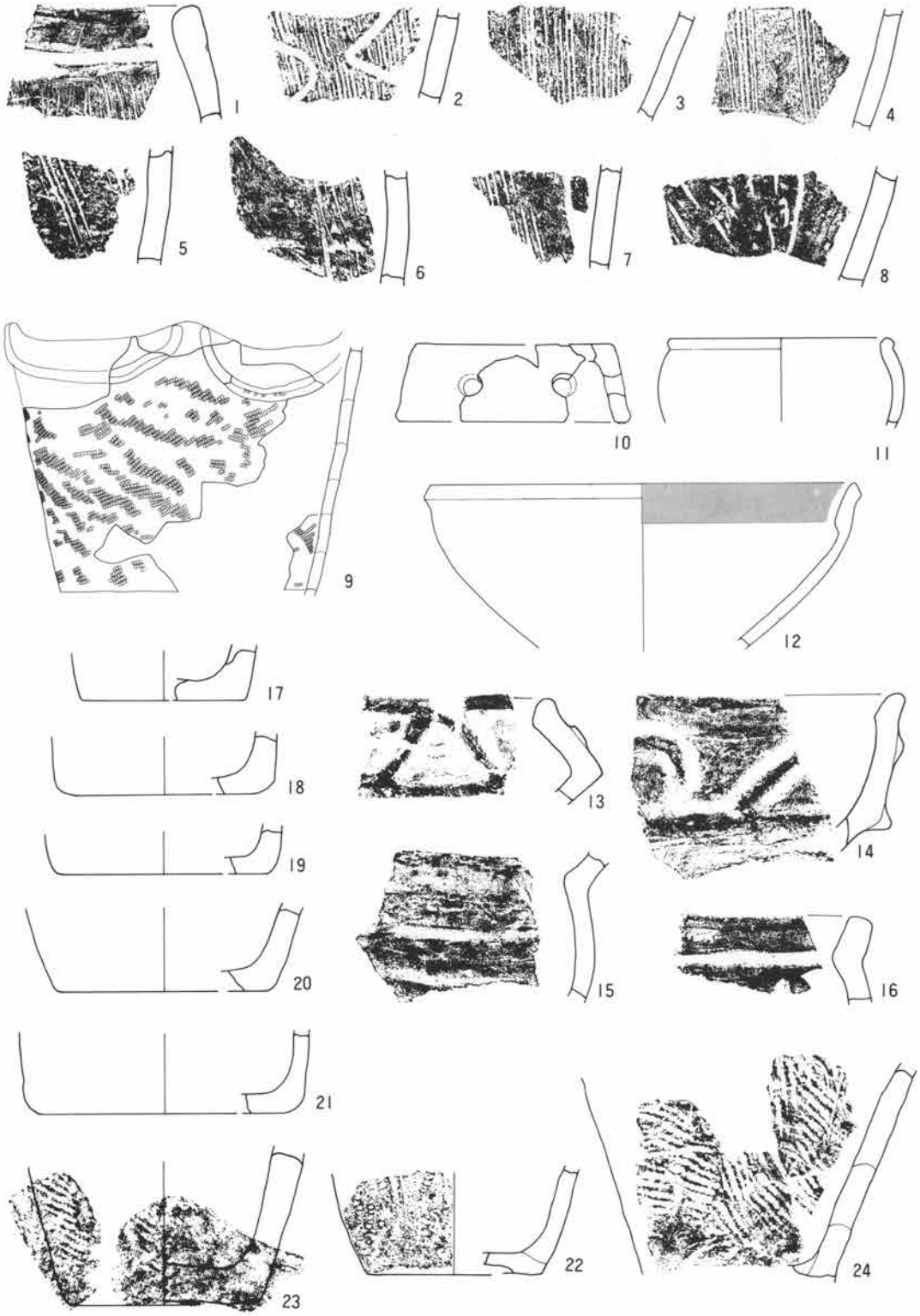


図73　遺構外出土遺物 (19)

5 B種（11～16）

縦位の羽状縄文を地文に隆線で文様を描く土器を一括した。羽状縄文はＲＬとＬＲを交互に縦位に施文して構成され、その上に貼付隆線によるアーチ状の区画文が施される。

5 C種（17・18）

沈線で文様を描く土器である。縄文は17がＬＲ、18がＲＬである。

5 D種（21）

大木８ｂ式土器である。一点だけ出土した。口縁部は突帯状にせり上がり、沈線で渦巻文が施される。胴部文様は縄文ＬＲを地文に、２本あるいは３本の沈線で構成される。

5 E種（19・20）

その他を一括した。19は口縁部が「く」の字状に外折し、小波状を呈する土器である。口縁波頂部は山形を呈し、胴部には縄文Ｌが施される。20は口唇が「く」の字状に外折する土器で、口唇下に１本の沈線が施され、以下に縄文ＲＬが施文される。

以上、５類土器は細片の資料であるが加曽利Ｅ式土器とは明らかに異なる系統の土器である。Ａ種の押引文やＢ種の羽状縄文は、栃木県や福島県の大木８ａ式にしばしば認められる手法である。また、１の器形も同地域の大木７ｂ～８ａ式土器に類例が認められる。以上のことから、５Ａ・Ｂ種は大木８ａ式に比定できよう。又５Ｃ・Ｅ種もそれに伴うものと思われる。

6　　類（図73―１～８）

条線を施した土器を一括した。１は口唇下に無文帯をおいて１条の沈線を廻らし、以下に条線が施される。２は条線を地文に、波状沈線を懸垂させている。６～８は懸垂無文帯を伴う土器である。８は列点状の沈線が施される。加曽利Ｅ３式に伴うものと思われる。

7　　類（図73―10）

台形土器である。孔は体部中程に一列に廻るらしい。加曽利Ｅ３式に伴うものであろう。

8　　類（図73―15・16）

浅鉢形土器である。共に口縁部直下が「く」の字状に屈曲する形態を呈する。塗彩は認められない。

9　　類（図73―17～24）

底部を一括した。比較的厚手の作りであり、胴部の張り出すものは少ないようである。加曽利Ｅ式土器の前半のものであろう。

第10群土器（図74～図79）

称名寺式土器を一括する。称名寺式土器はＪ字状文と矢印状文を主な文様モチーフとして、器全体に一連の文様構成をとるが、今回の調査ではその全体を伺いうる資料は得られていない。ここでは以下の４類に分けられる。

1　　類（図74、図75）

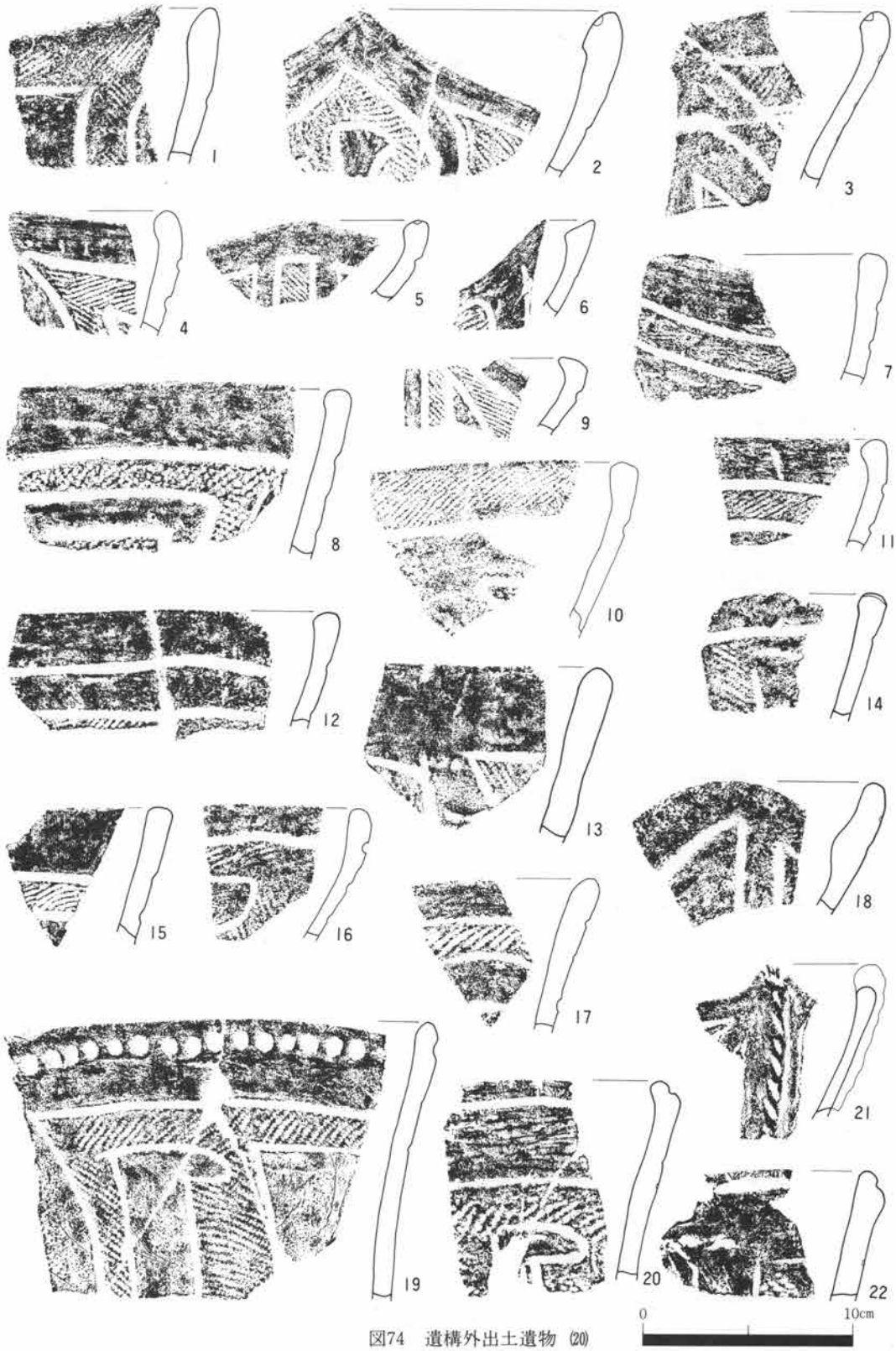


図74　遺構外出土遺物 (20)

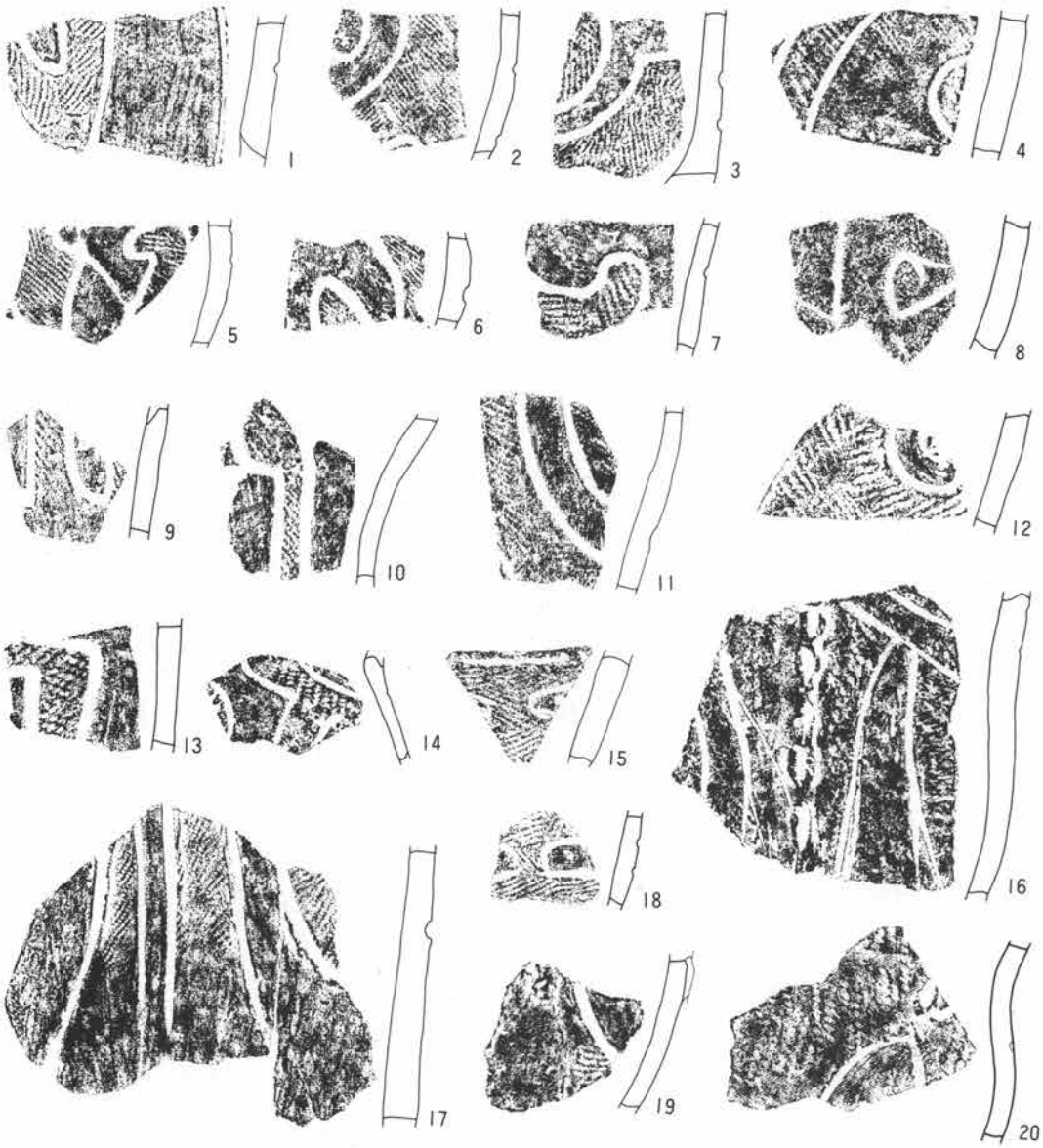


図75　遺構外出土遺物 (21)

0　10cm

沈線間を縄文で充塡するものを一括した。

器形は、口縁部が外反し頸部が括れて胴部が張り出す深鉢形を呈すると思われる。口縁は平縁のもの（図74―８・10～17・19・20・22）と波状を呈するもの（図74―１～７・９・18・21）とがあり、後者は口唇部裏面に稜をもつものが多く、又波頂部裏面に刺突あるいは沈線を施すものもある（２・３・５）。文様は口縁部に無文帯を置き、Ｊ字状文と矢印状文で一連の文様を構成するものを基本とする。１・18は口縁部に縄文帯を廻らして文様を連結するもので、18は裏面に幅

広の肥厚帯がみられる。10は口縁部に縄文帯を廻らす土器であるが、その下に無文帯を設けている。12は口縁部の無文帯に1条の沈線を廻らせている。21は口縁に小突起を持ち、そこから刻みを施した隆線を垂下させて、文構を区画している。19・20・22は頸部が若干括れる器形を呈し、口唇直下に沈線あるいは押圧を廻らし、その下に幅広く無文帯を設けている。文様モチーフは粗大化、直線化し、縦長に間伸びする傾向が伺える。図75は胴部破片である。図75—16はくさり状の隆線を垂下させる土器で、文様には乱れが生じている。縄文は、図74—13・14、図75—1・14がRL、他はLRである。これらの土器は、図74—1～18、図75—1～3・5～11・13～15・19が称名寺1式の新らしい段階に、その他は称名寺2式にそれぞれ比定されよう。

2　類（図76）

沈線間を刺突で充塡するものを一括した。口唇部は、丸棒状を呈するもの（1・2・17）と裏面に段を有するもの（4）とがあり、前者は口縁部に幅広い無文帯を持つ。この特徴は、1類19・20と共通しており、器形の点でも一致する。また、無文帯下には刻みを施した隆帯を廻らして無文帯を区画している。文様は、1類同様J字状文と矢印状文による文様構成を主体としているが、そうでないものも数点認められる。1～11はJ字状文と矢印状文により文様を構成し、沈線間に一列の刺突を施している。12～14も同様であるが、刺突は区画内を充塡するように施される。18・19も沈線間に一列の刺突が施されるが、文様は他と異なる。21・22は沈線区画内に櫛歯文を施した土器である。以上の土器は称名寺2式に比定されようが、18・19は掘之内I式に入れた方がよいかもしれない。

3　類（図77、図78）

沈線のみで文様構成するものを一括した。図77は口縁部破片である。口縁部は平縁のものと波状口縁（7・10）とがあり、後者は口唇部が「く」の字状に内折する。また、7は円孔を施した突起が付けられる。平縁には、口唇に円形押圧文あるいは沈線が施されるもの（1～6・8・9・11・12）と、無文のもの（13～19・21）とがある。20は波状口縁を呈すると思われる。いずれも口縁部に無文帯を持つ。図78は本類の胴部破片である。称名寺3式に比定されると思われる。

4　類（図79）

把手部分を一括した。1・2・4・9は橋状を呈する把手である。1・4は裏面に孔があけられ、それをとり囲むように沈線が施される。1は側面にも刺突および沈線が施される。3は「8」の字状の貼付文が施される。6・8は断面形が半円状を呈する把手である。6は孤状の貼付文が施され、口唇には沈線が施される。8も貼付隆線で文様が描かれ、口唇に沈線が加えられる。7は幅の広い板状の把手であろう。文様は沈線を伴った隆線で描かれる。口唇にはやはり沈線が加えられる。

第11群土器（図80）

堀之内式土器を一括する。以下2類に分けて述べる。

1　類（1～19）

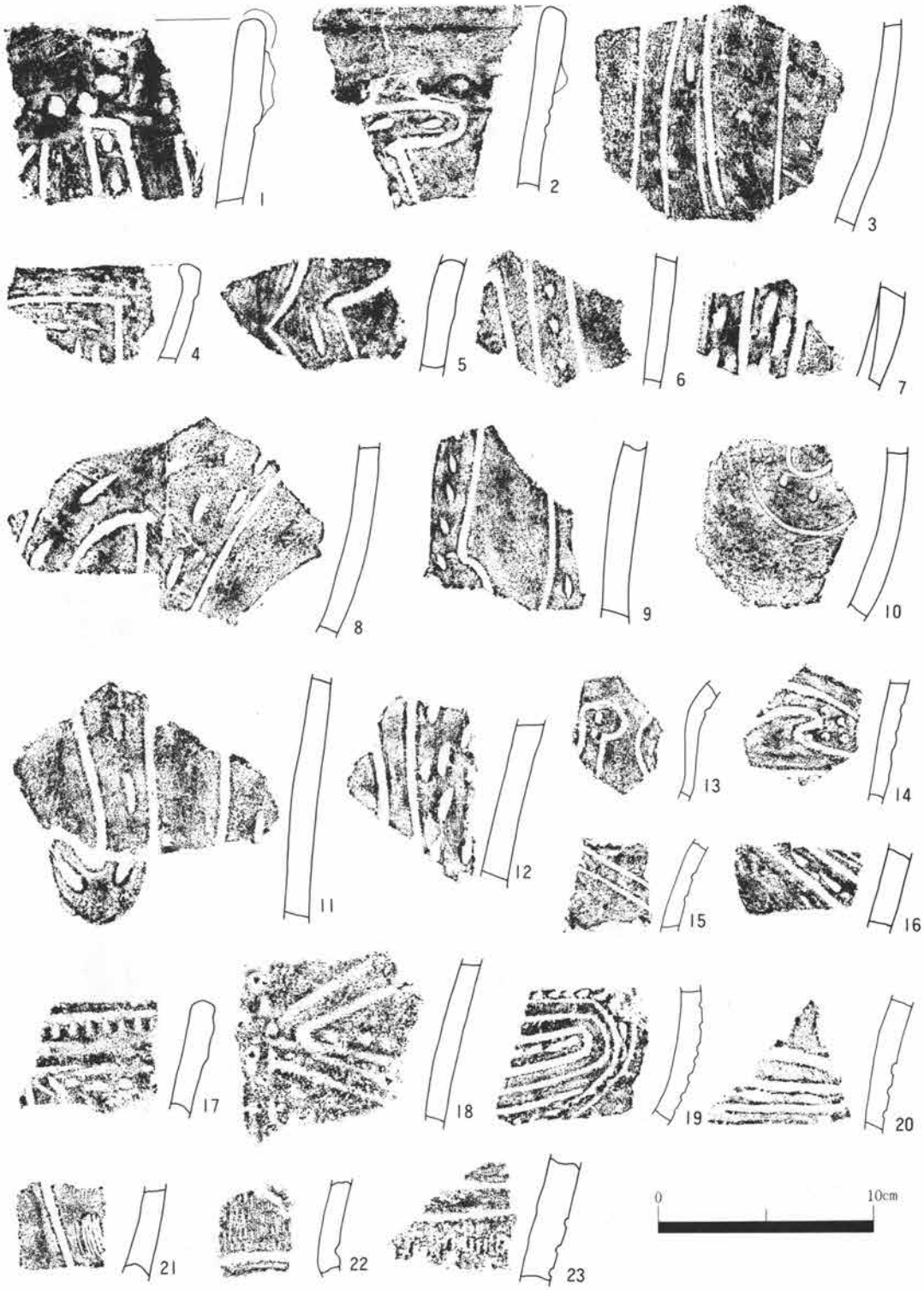


図76　遺構外出土遺物 (22)

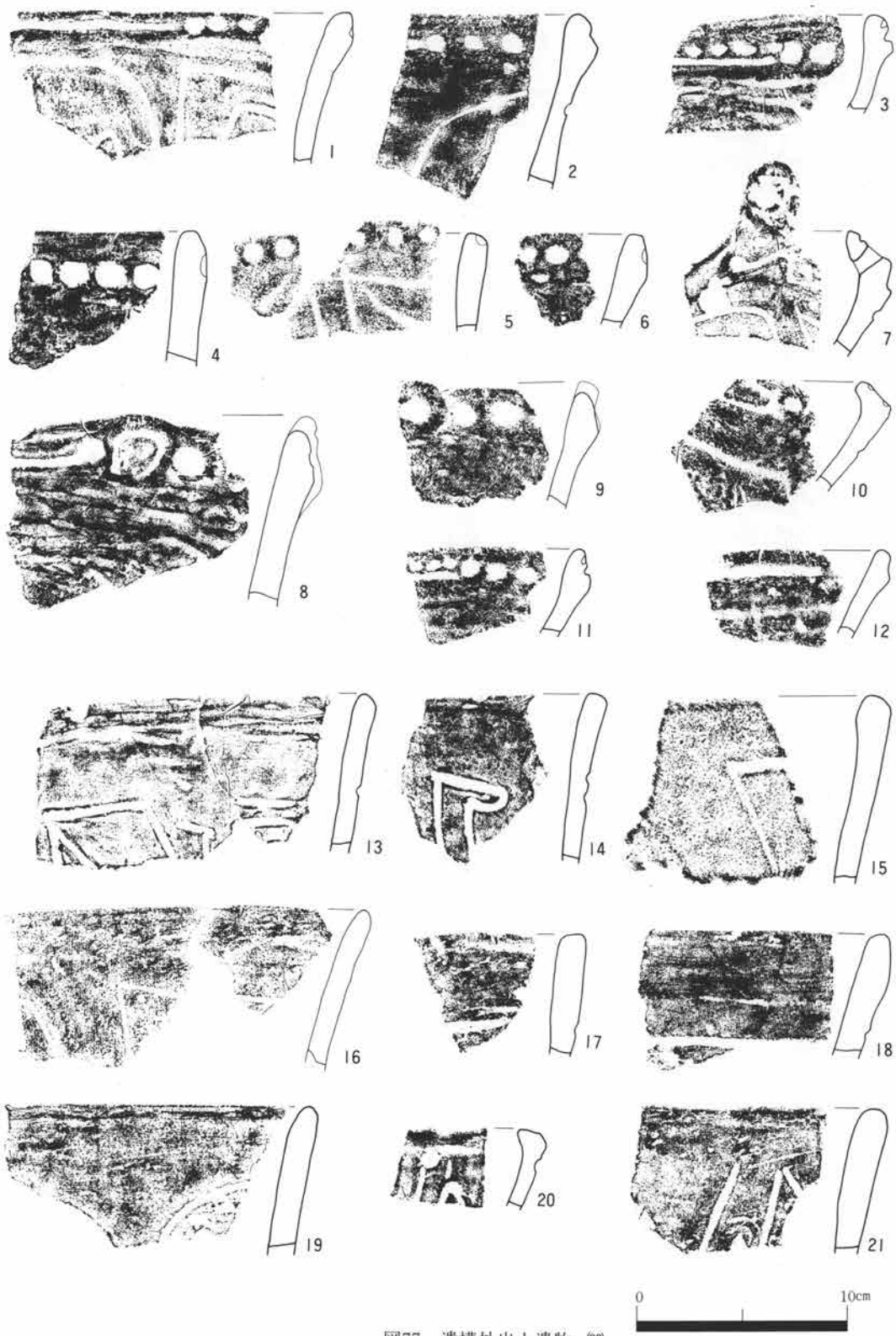


図77　遺構外出土遺物 (23)

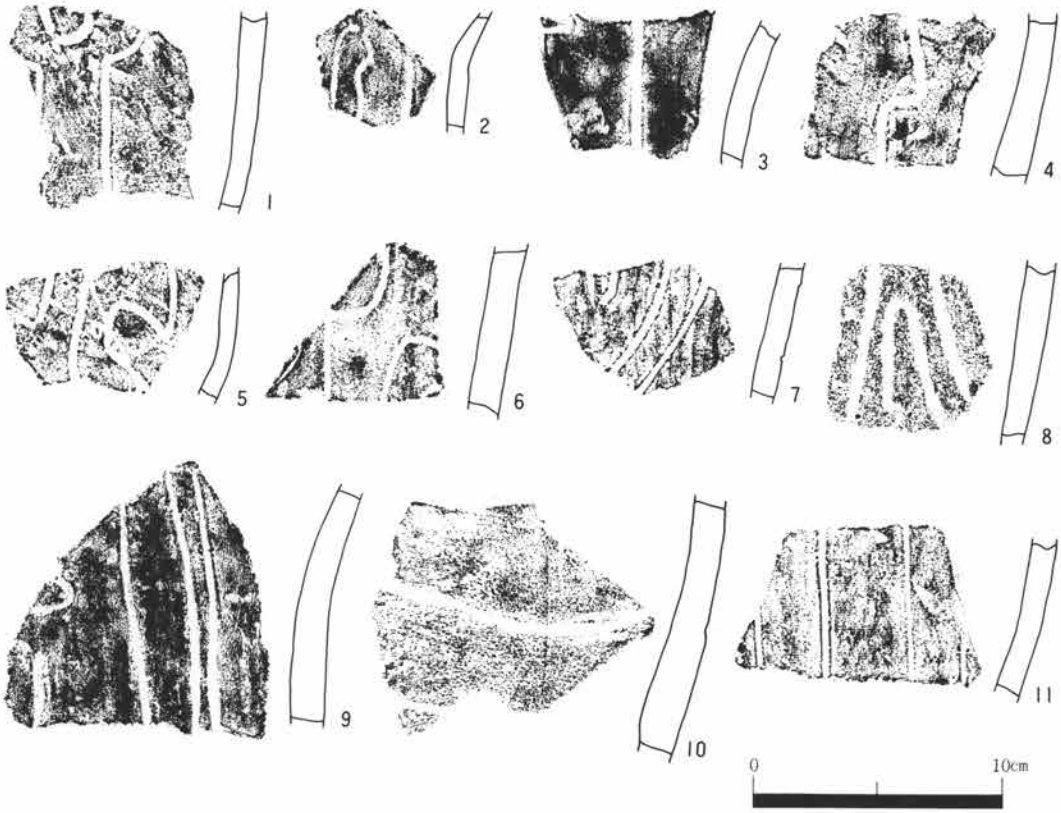


図78　遺構外出土遺物 (24)

堀之内Ⅰ式土器を一括した。器形は、口縁部が若干外反し頸部がゆるやかにすぼまるものと、頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部が外反するものとがある。いずれも、口縁部を無文化する特徴を有し、まれに隆線を垂下させる。また、口唇部に文様帯を持つ例が多く、しばしば小突起が付けられる。1～4は口唇部文様帯を持つ例である。1は「8」の字状の貼付文が付される。沈線間を充塡する縄文はＬＲである。2は沈線による渦巻文が施されている。5は波状口縁の土器で、波頂部表裏両面には、凹みが形成されている。6・7も波状口縁の土器で、口縁部には隆線による懸垂文が施される。11・12は頸部が「く」の字状に屈曲する土器で、同一個体である。頸部には「8」の字状の貼付文が施される。文様は2本の沈線を単位として構成される。小さなＪ字状文が特徴的である。13・14も頸部が「く」の字状に屈曲する土器である。頸部には円形の貼付文が施される。文様は磨消縄文帯で構成されるが、11・12同様、小さなＪ字状文が施される。縄文は共にＬＲである。15はＬの撚糸文を地文とし、沈線で文様が施される。17は頸部が「く」の字状に内折する鉢形土器と思われる。文様は隆線で区画文が施され、縄文ＬＲが施される。18は底部から直線的に開口する波状口縁深鉢形土器口縁部破片である。口唇部には沈線が加えられ、波頂部から波状沈線を垂下させる。器面には縄文が施されているが、磨滅がひどく原体は確認できない。19は沈線区画内に波状沈線を垂下させる土器である。縄文はＬＲである。

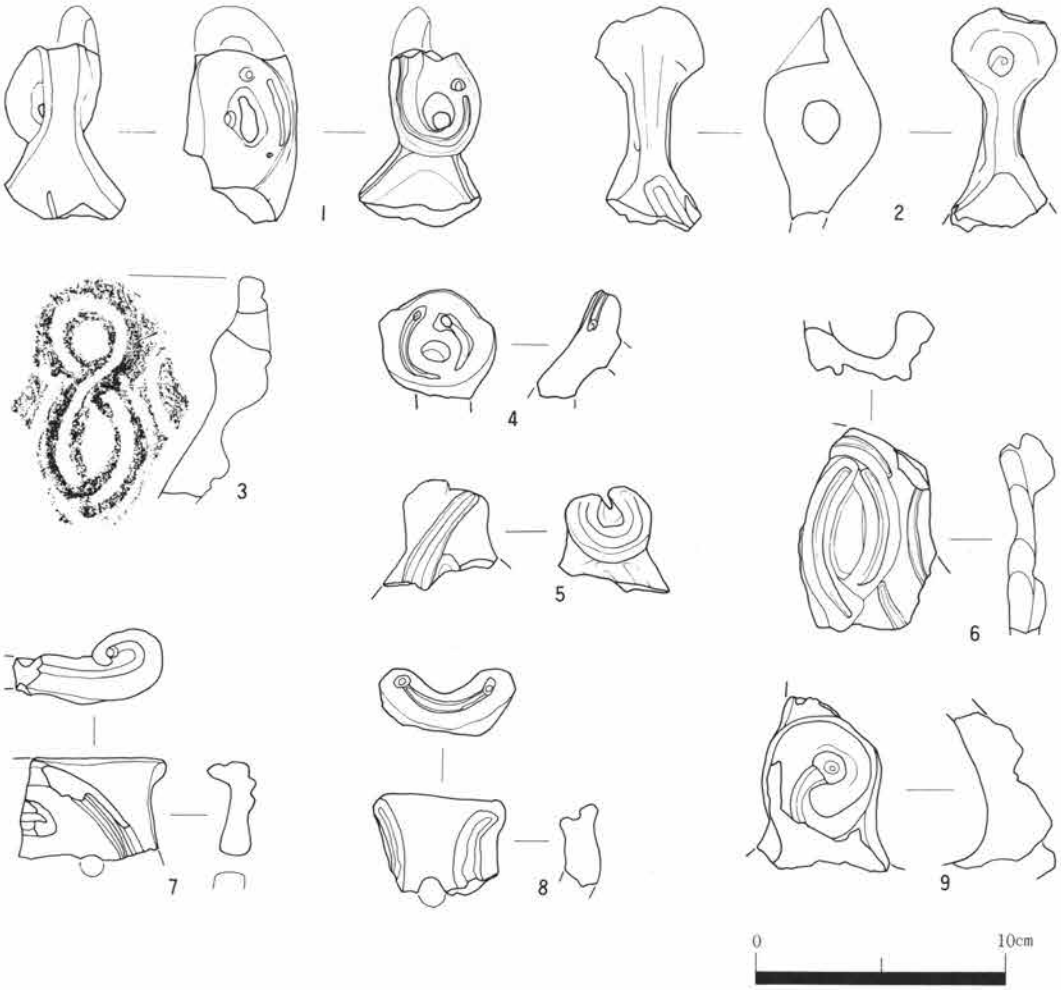


図79　遺構外出土遺物 (25)

2　　類（20）

堀之内Ⅱ式土器である。文様は充塡縄文帯で構成される。口唇下には刻みを施した隆線が施され、「8」の字状の貼付文が施される。縄文はＬＲである。

第12群土器（図81）

後期の、その他の土器を一括した。以下５類に分類できる。

1　　類（1～3）

櫛状工具で条線文を施したもの。1・2は斜格子文が施される。3も同様の構成を意図されているが、1・2に比べて、粗く施文されている。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は不良である。第10群2・3類に伴うものと思われる。

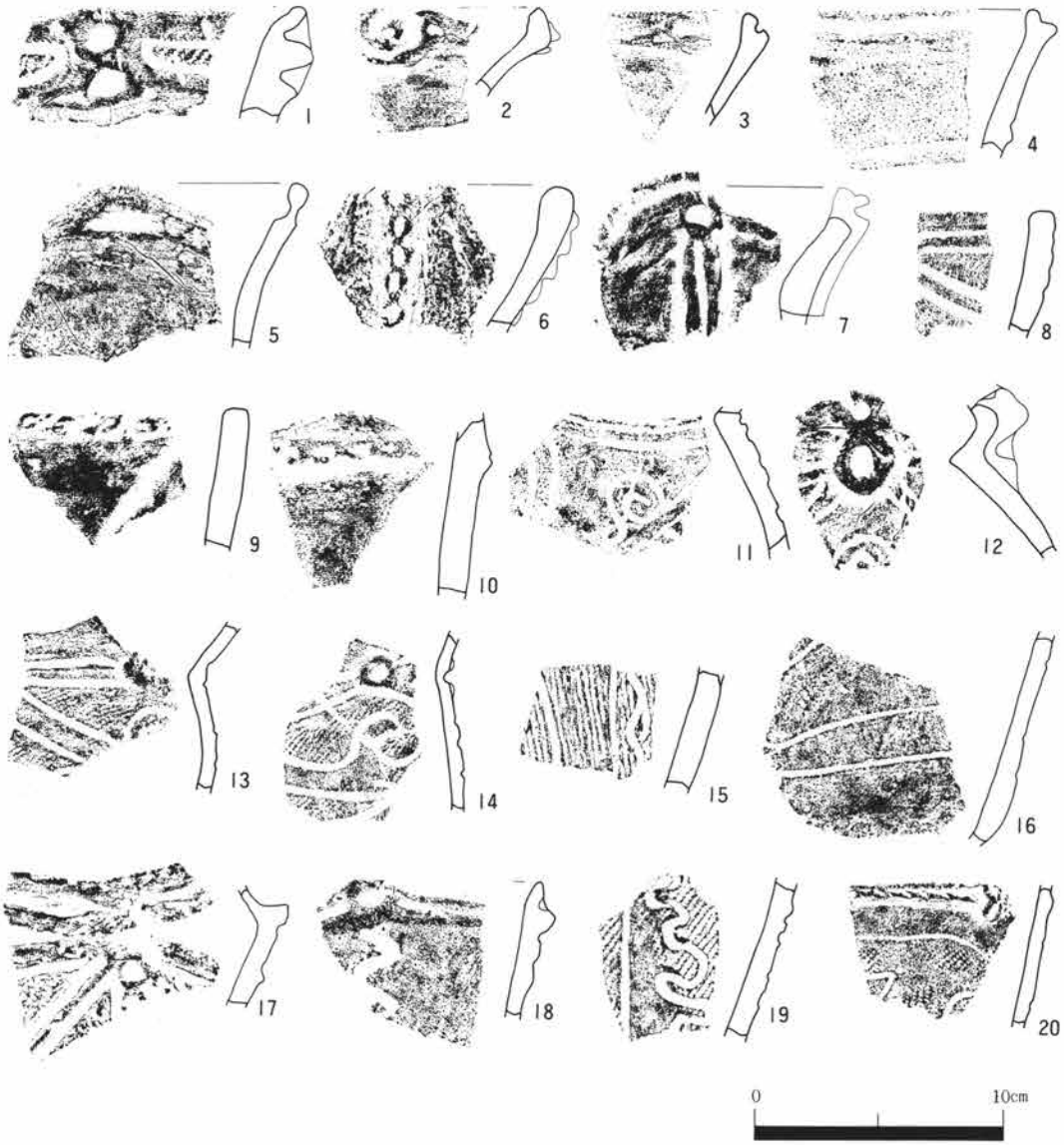


図80　遺構外出土遺物 (26)

2　類（4）

浅鉢形土器である。口縁部が「く」の字状に内折し、口唇部が小さく外折する器形を呈する。文様は、口縁部に太い沈線による円形文と長方形の区画文で構成される。又円形文には刺突が施される。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は不良である。本類土器も第10群2・3類に伴うものと思われる。

3　類（5・6）

無文の鉢形土器である。5は内湾する4単位の波状口縁を持つ鉢形土器である。口縁部は外削ぎ状に成形され、波頂部で稜を形成する。器面は内外面ともに丁寧に研磨され、光沢を帯びる。

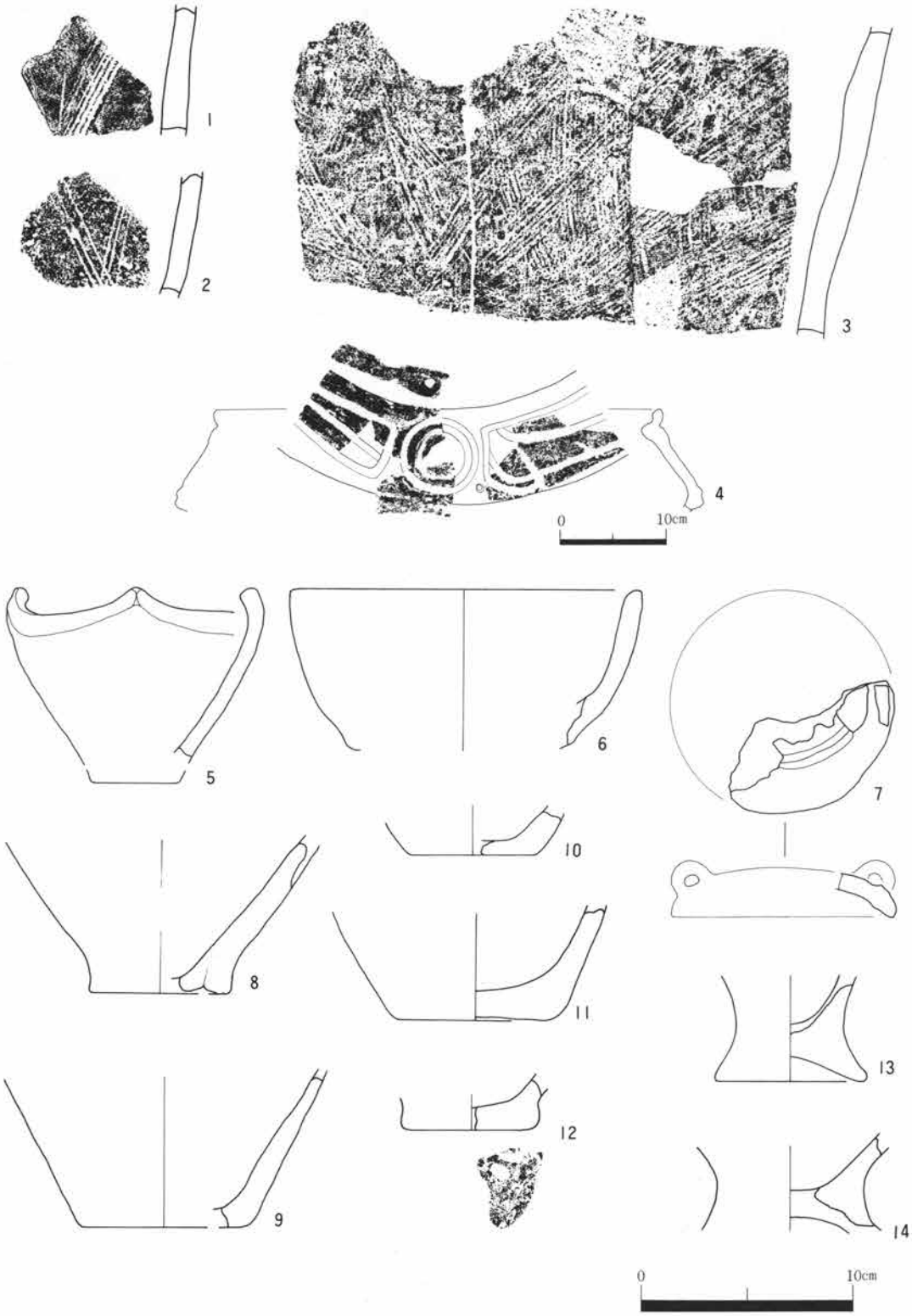


図81　遺構外出土遺物 (27)

6は埦形の土器である。器面は良く整形されているが、研磨は施されない。共に焼成は良好で、特に5は焼き締められている。

4　類（8～14）

底部を一括した。いずれも底が薄い作りになっており、焼成はあまり良くない。8・12は端部が若干張り出す形態を呈する。また、12は底部に植物種子の圧痕が認められる。13・14は端部が強く外反する上げ底の底部である。

5　類（7）

蓋形土製品である。断面形が上げ底状を呈し、2つの小さな把手が付くものと思われるが、欠損している。また、把手をつなぐように、外周にそって1本の隆線が施される。整形・焼成ともに良好であり、内側は研磨されている。

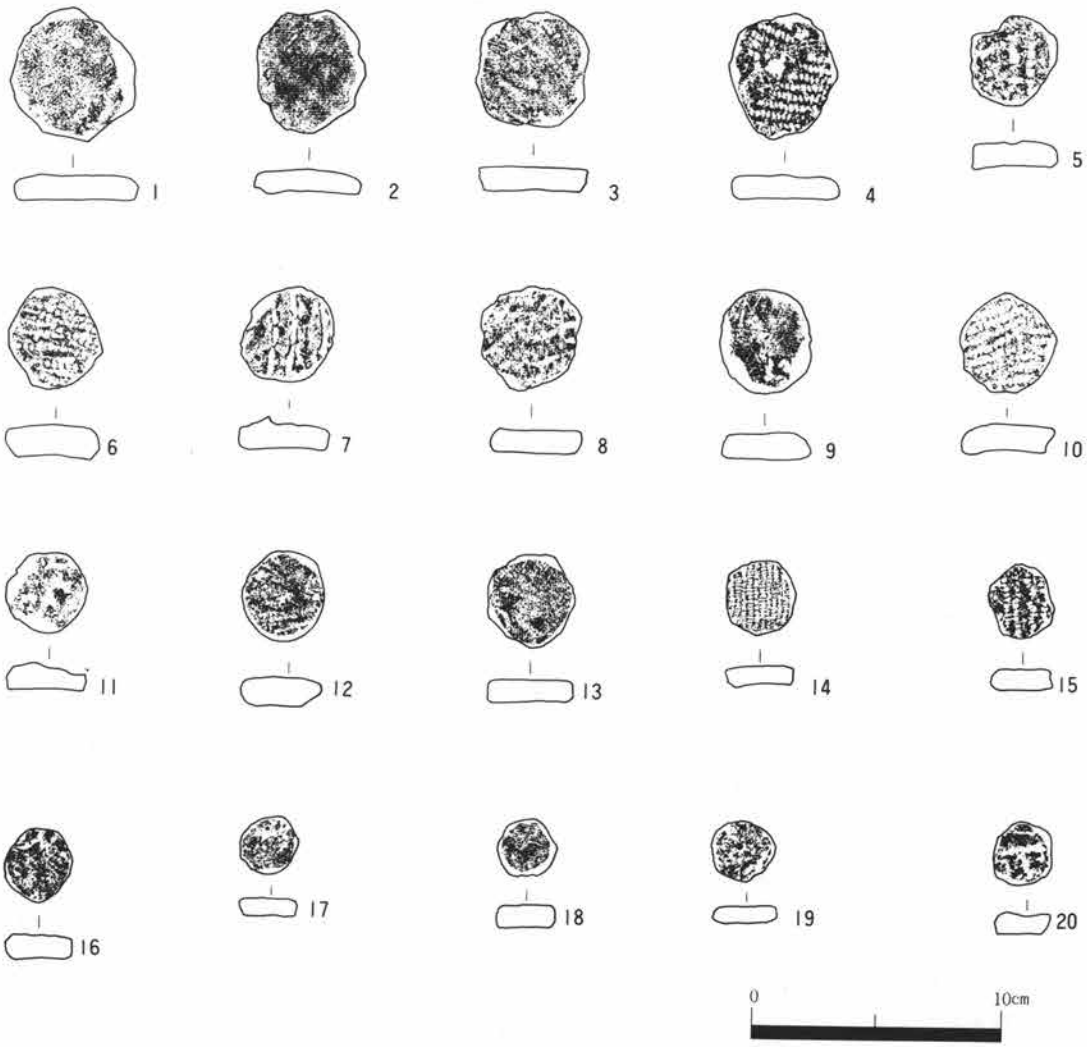


図82　遺構外出土遺物 (28)

土製円盤（図44）

全計20点が出土した。全て土器破片を利用したものである。本地点出土の土器や土製品類は磨滅が著しいため、欠損品は確認できなかった。重量・施文等は一覧に一括した。大きさは5cmのものから2～3cmのものまでバラエティがあり、重量も3gから28gとばらつきがある。時期的には胎土に金雲母を多量に含む阿玉台式期が約半数を占める。その他いずれも薄手で焼成の良好な土器が使用されている。

表12　土製円盤一覧

No.	重量(g)	混和材および施文	時　期	No.	重量(g)	混和材および施文	時　期
図82—1	25	不　明	不　明	図82—11	11	金雲母・白色砂粒 押圧文	阿玉台II式
〃 2	23	金雲母・白色砂粒	阿玉台式	〃 12	15	金雲母・大粒の片岩	阿玉台式
〃 3	28	不　明	不　明	〃 13	14	金雲母・白色砂粒	〃
〃 4	26	縄文 RL	不　明	〃 14	8	縄文0段3条 RL	不　明
〃 5	13	石英粒　2列の角押文	勝坂1式	〃 15	6	2列の波状押引文	勝坂1式
〃 6	20	縄文 RL	不　明	〃 16	7	不　明	不　明
〃 7	17	金雲母・白色砂粒 2列の角押	阿玉台II式	〃 17	3	石英粒	不　明
〃 8	17	〃　爪形文	阿玉台式	〃 18	5	不　明	不　明
〃 9	20	〃	〃	〃 19	3	金雲母・白色砂粒	阿玉台式
〃 10	17	縄文 RL	不　明	〃 20	3	〃　押圧文	阿玉台II式

石　　器

遺構外出土の石器は37点が出土している。器種としては磨製石斧1点、打製石斧12点、凹み石9点、石鏃4点、その他の石器4点である。石質としては、安山岩系、砂岩系、チャートなどで、小形の石器にはチャート、硅岩などの硬い石質の石材を使用している。

打製石斧（図83—1～8、図84—1～4）

打製石斧は従来の基本的分類に対比すると、分銅形、撥形、短冊形の三種が出土している。分銅形は図83—1～4、撥形は図83—5～7、短冊形は同図8に比定できよう。また、図84の1及び2は全体的に楕円形に近く、あえて対比するならば短冊形の変形として考えられる。又同図3は石斧よりも、石槍としての分類が合理的であろう。

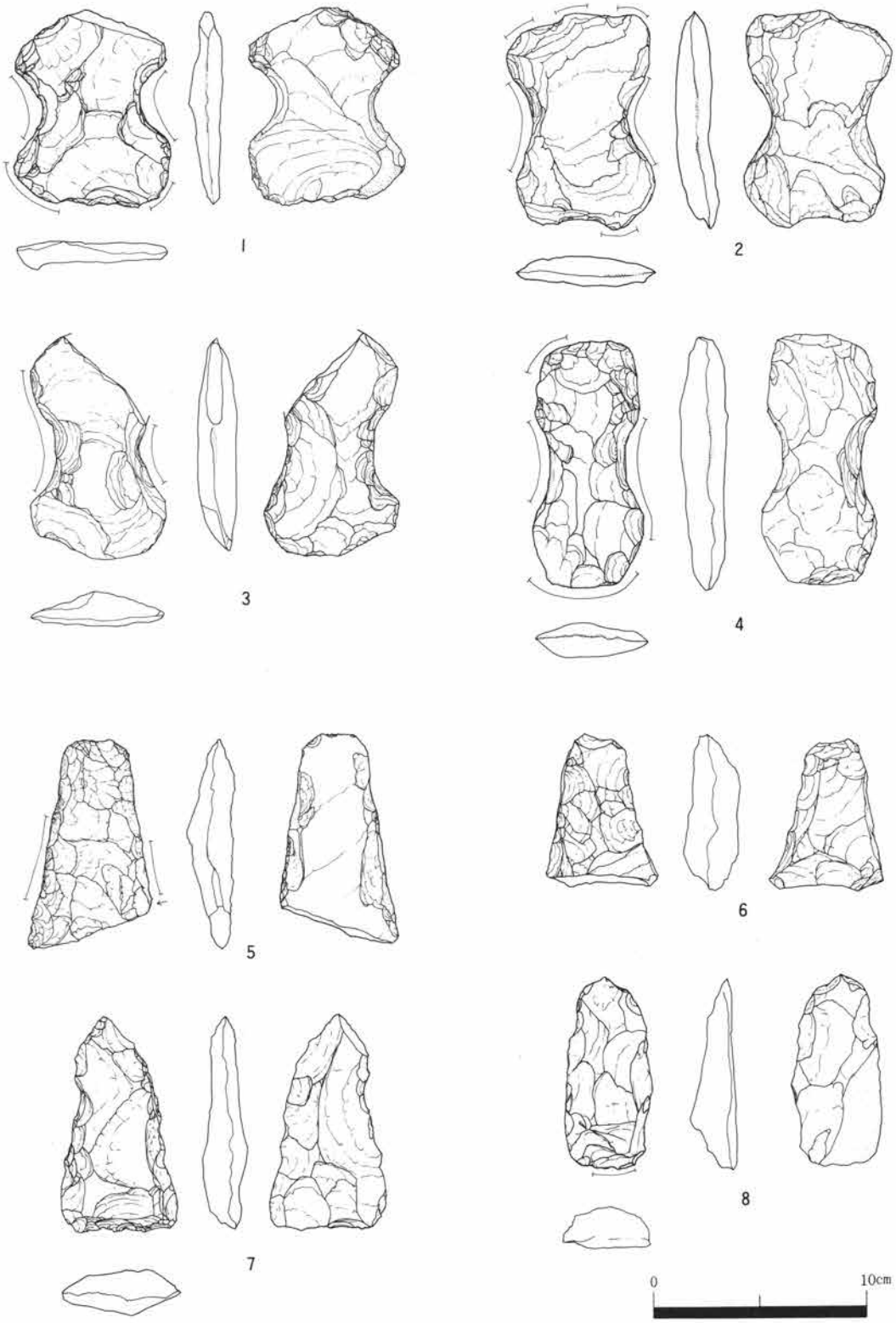


図83　遺構外出土遺物 (29)

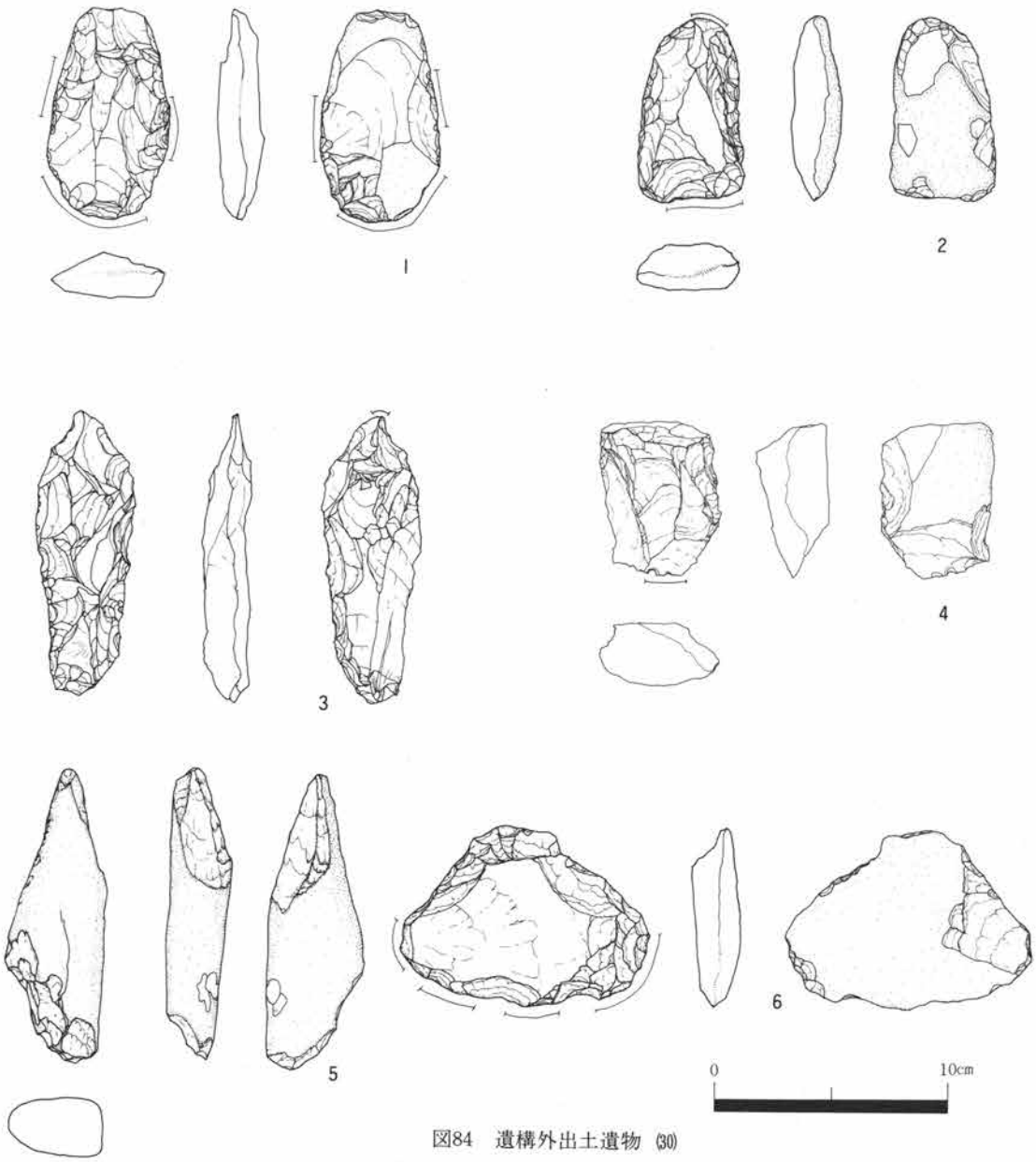


図84　遺構外出土遺物 (30)

分銅形の中で、図83―1は安山岩系（サヌカイト）の石材を使用している。大きい剝離面をもつ石片の中央に、丹念な調整を加え、抉入部を作り出している。抉入部及び、その間の凹部周辺に磨耗痕が観察できる。さらに、c面右下部から抉入部にかけて、a面上端の欠損部凹部にも同様の痕跡が認められる。下部刃部に観察できる弧状の部分に細かい剝離が認められるが、これは使用の時における痕跡と考えられる。その剝離痕は下からの打撃によるものと考えられる。

図83―2は砂岩系の石材を使用している。剝離痕、磨耗痕も不明瞭である。抉入部は丹念に調

整され、1に比べてやや浅い弧状を呈す。下部刃部に1と同様の状態を認めることができる。

図83―3は第1号住居跡内出土であるが、本遺構は後述にある古墳時代初頭の住居跡であるため、ここに記述する。石質は2と同様のものである。抉入部も2と同様の調整を施している。図の上部は欠損しているため、全体の形状は不明であるが、下部刃部の稜は鋭い。

図83―4は細かい気泡の多い安山岩系（サヌカイト）を用いている。他の分銅形に対して縦長であり、抉入部もゆるやかな弧状を示している。全体的に不明瞭な剝離痕である。a面右側抉入部は丸味をもつが、左側は稜が観察できる。a・c面上部刃部周辺に部分的に磨耗痕を認めることができる。

図83―5～7は撥形に分類できる。5は砂岩系の石材を使用している。下部が欠損し、刃部の状態は不明である。大きな剝離面が両面に認められるが、両側縁は稜を消すため丹念に調整を加えている。

図83―6は安山岩系（サヌカイト？）の石材を使用している。a面側縁の剝離は調整のためのものであるが、c面の剝離は上部を除いてそれ以前のものである。b面の裏面はc面の剝離面を切断している。この面は平坦のままである。又、下部は欠損している。この欠損面を観察すると、c面側からの圧力によって欠損したと考えられる。5、6とも上端部が直線的に調整されている。

図83―7は5、6と異なり、尖頭状になる撥形である。石質は頁岩である。全体的に大きな剝離面によって形成され、a面側縁に細かい調整が加えられている。磨耗痕は観察できない。a面刃部に認められる細かい剝離によって片刃の刃部が直線的に形成されている。この細かい剝離は使用中に生じた使用痕であろうか。

図83―8、及び図84―1、2は全体形が楕円状を示す短冊形の石斧で、やや小形である。

図83―8は安山岩系（サヌカイト）の石材で、c面は大きな剝離面をもつ。刃部はa面側縁に階段状剝離によって片刃に調整されているが、全体的に磨滅し、凸部における磨耗は確認できない。刃部の形状のみを考えるならば、83―7と同様である。

図84―1は安山岩系（サヌカイト）を石材として使用している。全体的に楕円形に整えられているが、c面は大きな剝離面をもつ、同面上部及び、右下部に自然面を残す。a・c下部刃部周辺に磨耗痕が観察できるが中央凸部にもわずかながら同様な痕跡が認められる。

図84―2も安山岩系（サヌカイト）を使用し、1は上部端が直線的であるのに対して、丸味をもつもので、逆に刃部は直線的である。この刃部も図83―7と同様にa面側に細かい剝離痕が認められ、やや弧状を呈している。

図84―3は緻密な安山岩系（サヌカイト）を石材としている。細かいながらも階段状剝離の粗雑な調整を施し、凸レンズ状に断面を作り出している。前述のように形状から機能的に石槍としての分類が適当であろう。しかしながら、尖頭部の調整は全体的な調整と同様に粗雑である。c面上部にわずかながら磨耗痕が観察できる。又、同面最大幅部中央稜に同様の痕跡が認められる。

図84―4は打製石斧の一部分、あるいは未成品の欠損であろう。a面は階段状剝離を主とする

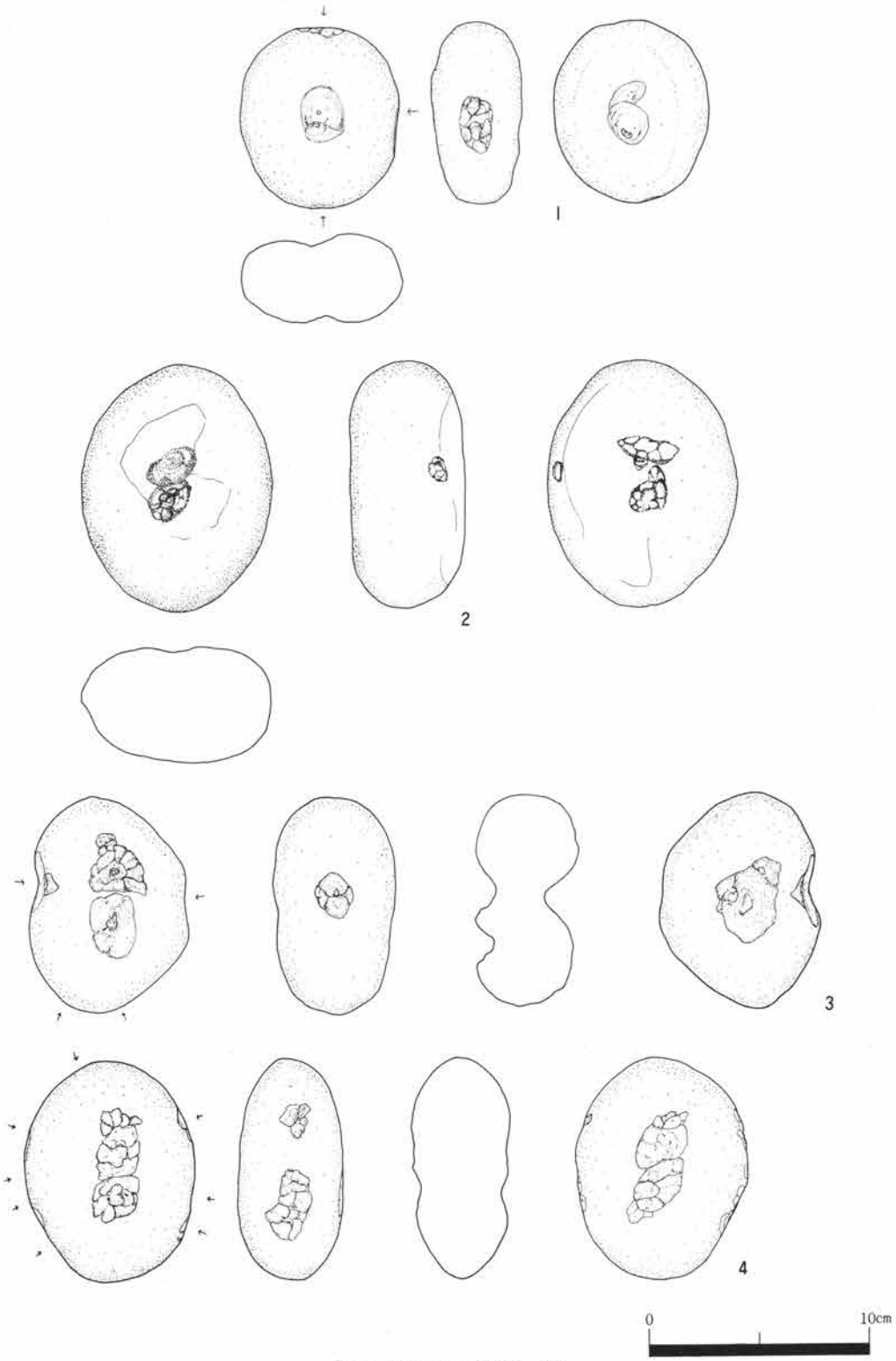


図85　遺構外出土遺物 (31)

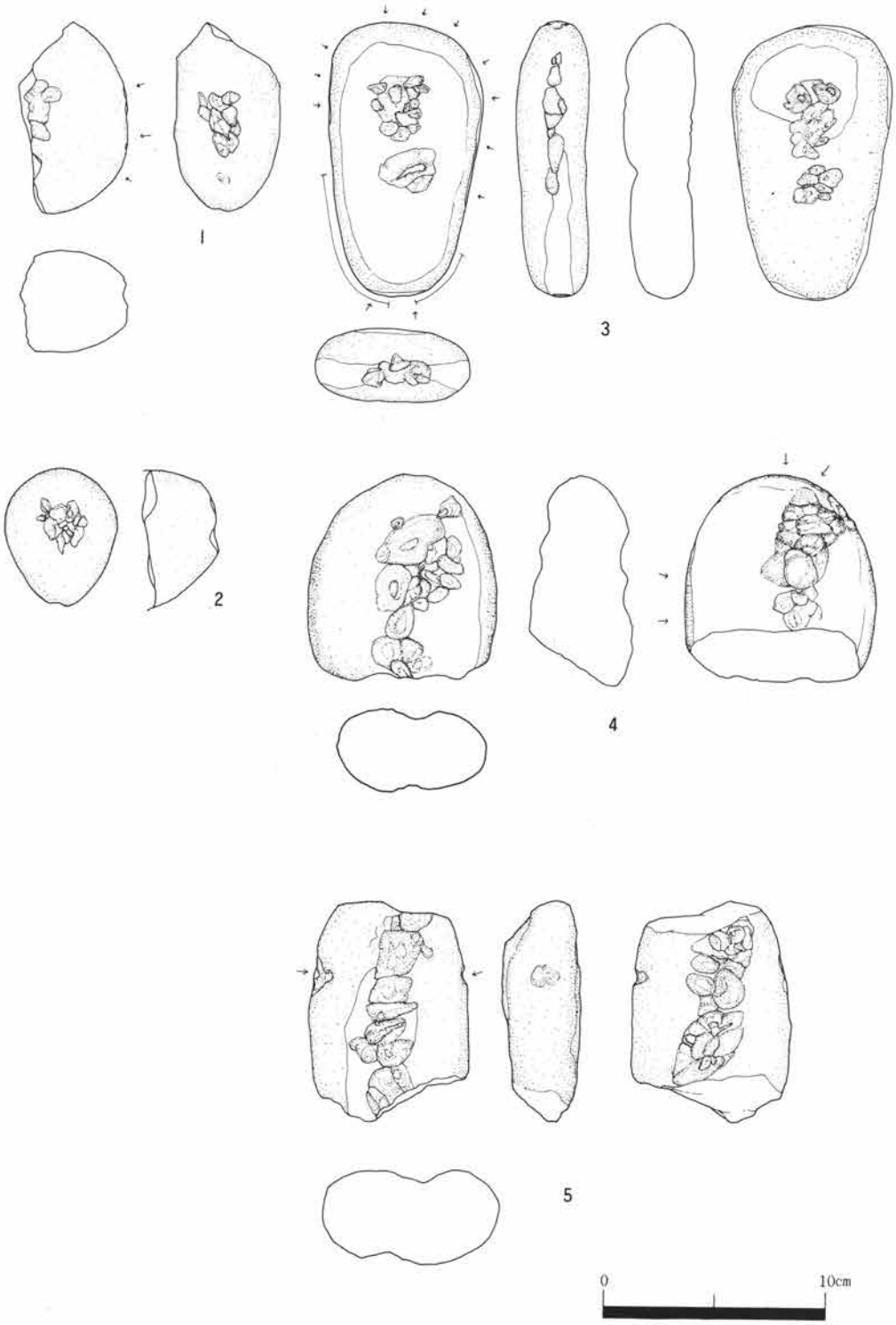


図86　遺構外出土遺物 (32)

面によって構成され、c面には自然面及び、大まかな剝離面が残されている。又、a面下部剝離面に残されているフィッシャーから、同面右側上部からなんらかの打撃が加えられ欠損したものである。石質は安山岩系（サヌカイト）である。

図84―6は石斧としての分類には不適当であるが、打製石斧的な刃部の調整から、一応、この分類に記載したものである。砂岩質系の石材であるため、リング等の方向は不明瞭である。全体形を低い三角形状に調整し、c面には自然面が大きく残され、その面からの打撃によって、形状、及び刃部が形成されている。機能的には上部を握り、上下運動により、対照物を切断するものであろう。

磨製石斧（図84―5）

本遺跡出土の磨製石斧は1点のみである。上下部を欠損し、磨製石斧とは明確に断定できないが、d面右側の整形、及びc面右側上半部の磨製的な面、全体的に滑らかな面を形成していることから、定形磨製石斧とは異なり、磨製石斧を想定した、調整の容易な河原石を選択し加工したものであろう。

凹 み 石（図85、86）

凹み石の凹みの形状や状態から次のように分類できる。

1類　凹みが浅く、一定の箇所に集中している。

2類　凹みが深く、時にはロート状を呈すものがある。やはり一定箇所に集中する。

3類　凹みの底面が直線的に形成される。

以上の3類である。

又、従来の研究成果から、凹み石の使用痕には磨痕によるものと、打痕によるものの二通りあることが確認されている。前者をAとし、後者をBとして、本遺跡の凹み石を分類してみたい。

1―Aに分類されるものは図85―1である。キメの粗い硬砂岩質の河原石を使用している。c面にみられる凹みは1―Bかと思われる。

次に1―Bは図85―2である。重量のある砂岩質の河原石を使用している。

2―Aに分類できるのは図85―3である。安山岩系の粗い石質の石材を使用し、ロート状の凹みを形成し、特に凹み底部は磨耗が激しい。

2―Bは図85―4、及び図86―2である。やはり砂岩系の石材でやや粗い石質をもつ。凹みはそれほど深くはない。図86―2は凹み底面が平坦になる。

3―Aに分類できる凹み石はない。

3―Bに対比できるものは図86―3及び4である。従来の丸味をもつ河原石と異なり、扁平な河原石を使用している。3は1―Bもみられるが、その特徴は3―Bに近いものである。4は明瞭に3―Bに分類できるもので、両面にわたり連続的に凹みが並ぶものである。

以上が明確に分類できるが、図86―5は、2―Bが1箇所、3―Bが2箇所をもつが、c面上部の凹みは3でもやや深いものである。

石　鏃（図87―1～4）

石鏃の石材はすべてチャートを使用している。凹基無茎鏃である。1は鋭い先頭をもつ二等辺三角形を呈し、基部は浅い弧状を呈する。2はやや不整形の三角形で基部も粗い調整である。3は二等辺三角形を呈し、深い弧状の基部をもつ、4は未成品と考えられるほどの粗い調整である。形状は2に類似する。

その他の石器（図87―5～8、図88―1～7）

図87―5は河原石に第1次の打撃を加え、薄手の石片を剝ぎ取り、c面側から全辺に調整を加え、片面調整の石器を作り上げている。同図6は欠損であるが、5と同様の石材を利用し、同手法によって全辺に調整を施していることから、同型の石器として考えられる。5は砂岩質系（硬質砂岩）で、6は安山岩系（サヌカイト）の石材を用いている。

図87―7はチャートを石材として用い、全体をゆるやかな弧状になるよう調整を加えている。a面側からの観察から、上半部は左側側縁部から右側側縁部に向かって薄く、下半部はこの逆の調整を施している。又、上下側辺も調整によって鋭い。石器全体としても全周の辺は鋭い稜によって構成されている。上述のようにa面側に凹凸があり、c面側は平坦である。

図87―8は安山岩系（サヌカイト）を石材とし、粗い調整によって、楕円形状の石器に調整されている。しかし、全側縁部に細かい調整は施されていない。この種の石材には、磨耗痕あるいは使用痕が他の石材に比べて観察し易いものであるが、認められない。

次に図88―1は石核として分類したものである。黒色のチャートで、大小四面を構成している。一定方向からの剝離痕はなく、剝離面も一定の面積ではないが、石鏃を製作し得る面積をもっている。本遺跡出土の石鏃は先述のように、すべてチャートを石材としているが、本石核と同色は図87―2・4である。

図88―2は安山岩系（サヌカイト）の石片を使用している。この石片はa面側に粗い打撃を繰り返し、石核状のものから剝離した石片を、a面側から3回の調整によって、抉入状の刃部を作り出した石器である。擦痕、磨耗痕は認められない。

図88―3は安山岩系（サヌカイト）を石材としている。石片の鋭い一側縁を残し、これを刃部とし他に粗い調整を施した石器である。

図88―5は石片を調整した後に刃部の調整を行っている。すなわち同図3と同系統の石器である。石片の周辺を調整し、c面左側に調整を加え、刃部を形成している。石材は3同様である。

図88―4も同図3同様の手法で、a面左側縁は上下切断以前に形成された鋭い側縁を刃部としている。

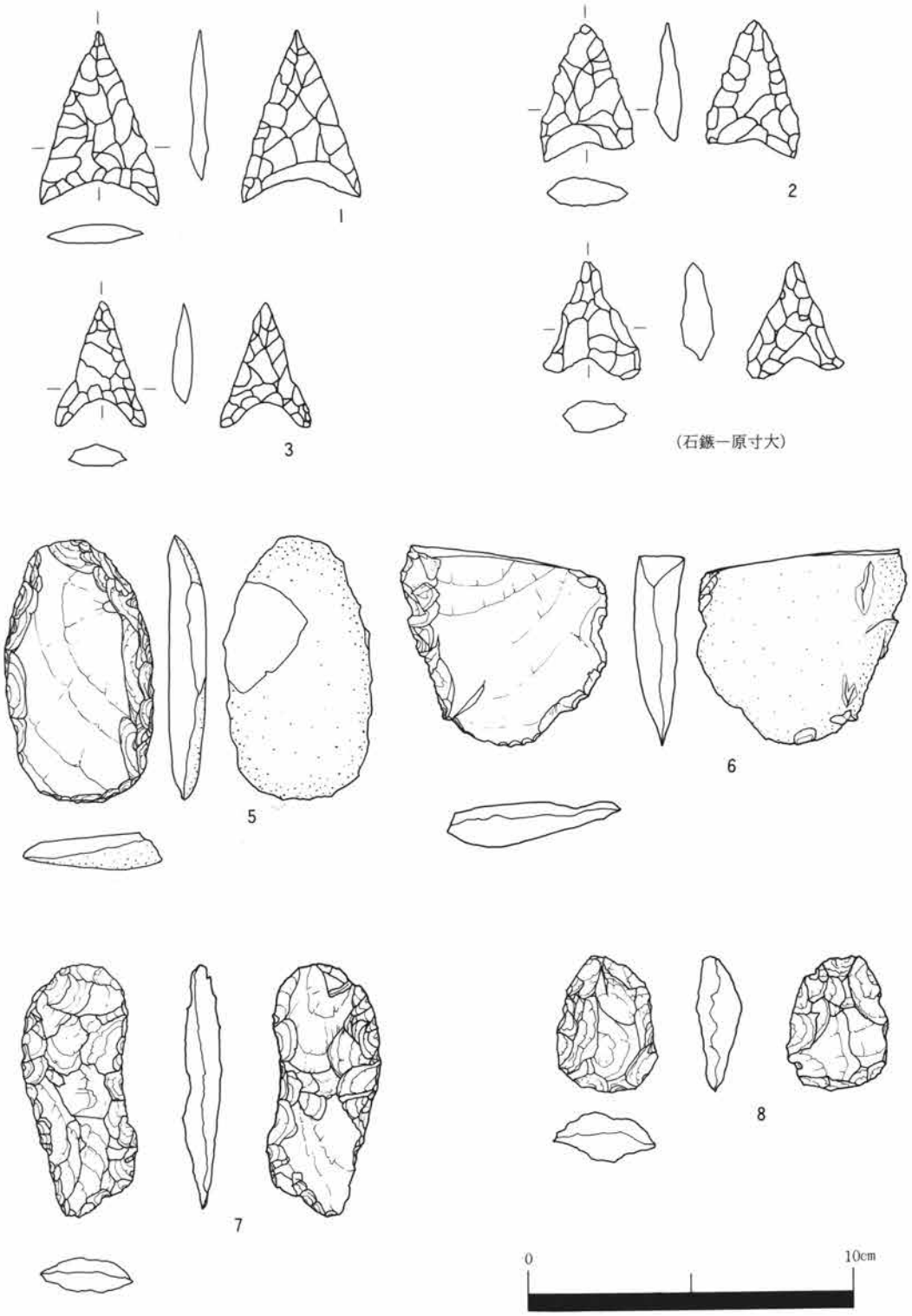


図87　遺構外出土遺物 (33)

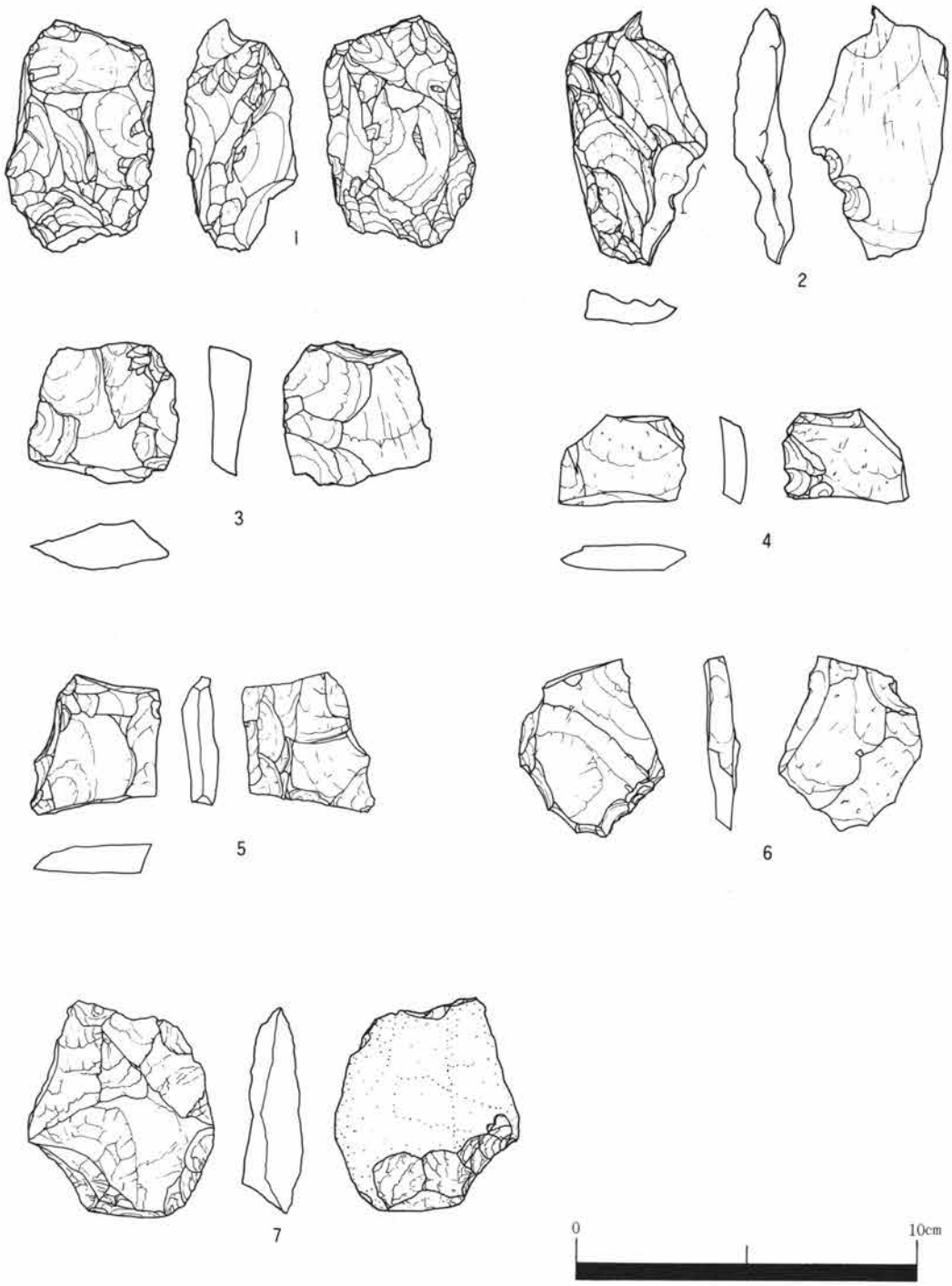


図88　遺構外出土遺物 (34)

図88－6も、同図5同様な手法によっている。周辺に石器の形を整える調整を加えて、c面下部左側から刃部調整を施しているものである。

図88－7は、硅岩を使用し、c面に自然面を残すが、c面下部の調整により、直線的な刃部を抉入状の刃部を形成させているものである。

遺構外出土の石器は以上であるが、各々の計測値等については下表にまとめる。

表13　遺構外出土石器一覧

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
図83－1	打製石斧	9.2	7.3	1.5	124	サヌカイト	
図83－2	〃	9.9	6.7	1.7	133.5	砂岩	
図83－3	〃	(10.0)	(6.4)	1.9	(132.5)	〃	一部欠損
図83－4	〃	11.6	5.2	2.4	160	サヌカイト	
図83－5	〃	(9.4)	(5.4)	2.1	(119)	砂岩	刃部欠損
図83－6	〃	(7.0)	(5.3)	(2.6)	(9.6)	(サヌカイト)	〃
図83－7	〃	9.9	5.5	2.2	101	頁岩	
図83－8	〃	8.9	4.2	2.1	70	サヌカイト	
図84－1	〃	9.0	5.2	2.0	103	〃	
図84－2	〃	7.7	4.5	2.1	85	〃	
図84－3	(石槍)	12.3	4.3	2.0	106	〃	
図84－4	打製石斧	(6.5)	(4.8)	(3.0)	(103)	〃	
図84－5	磨製石斧	(12.0)	(4.1)	(2.5)	(175)		
図84－6	(打製石斧)	7.5	10.6	1.9	176	砂岩	
図85－1	凹石	8.2	7.2	4.1	364	硬質砂岩	
図85－2	〃	11.2	8.7	5.2	694	砂岩	
図85－3	〃	9.8	7.2	5.5	355	安山岩	
図85－4	〃	10.0	7.8	4.7	454	砂岩	
図86－1	〃	(8.2)	(4.5)	(4.8)	(235)	〃	1／3欠損
図86－2	〃	(3.2)	(6.2)	(5.0)	(118)	〃	2／3欠損
図86－3	〃	12.3	7.0	3.3	396	〃	
図86－4	〃	(9.2)	(8.6)	(4.7)	505	〃	一部欠損
図86－5	〃	(9.8)	7.2	3.6	(309)	〃	両端欠損
図87－1	石鏃	2.6	1.8	0.3	1.06	チャート	
図87－2	〃	2.0	1.4	0.4	0.97	〃	
図87－3	〃	1.9	1.4	0.3	0.49	〃	
図87－4	〃	1.8	1.5	0.5	0.99	〃	
図87－5	掻器	7.1	4.5	1.2	55	硬質砂岩	
図87－6	〃	5.7	6.0	1.4	61	サヌカイト	
図87－7	〃	7.8	3.2	1.1	26	チャート	
図87－8	〃	4.0	3.0	1.4	15	サヌカイト	
図88－1	石核	6.8	4.2	3.2	95	チャート	
図88－2	(掻器)	7.5	4.0	1.5	37	サヌカイト	
図88－3	〃	4.2	4.2	1.4	29	〃	
図88－4	〃	3.7	2.6	0.7	10	〃	
図88－5	〃	3.8	3.5	0.9	21	〃	
図88－6	(掻器)	4.9	4.0	1.2	25	〃	
図88－7	剝片	5.9	5.3	1.6	51	硅岩	

〈註〉

（1）　阿玉台式、勝坂式の分類にあたってはそれぞれ西村正衛氏、鈴木保彦氏の分類基準を参考にした。

3　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代については、住居跡が3軒検出されている。

1号住居跡（図89）

B—11、12グリッドで検出された。他遺構に比べ、削平や攪乱をほとんど受けず、良好な残存状況を示す。重複する遺構はなく、単独の検出である。

平面形は正方形プランを呈し、一辺は約5.0mで、南東辺のみ4.5mと短い。主軸方向はN—58°—Eを測る。壁はやや外傾し、東南壁は他に比べて、直立気味である。高さは確認面から30cm前後を測るが、土層断面の観察から、当時は50cm前後であったろうと推定される。

土層は上位から黒褐色土層、暗褐色土層が堆積し、ピットと床面際のみローム粒を主とする黄色土層が堆積する。黒褐色土層はレンズ状の堆積状況を示し、中央では床面近くまで達している。

床面はロームをそのまま利用したもので、貼り床構造は見られない。ほぼ水平で平坦なものであるが、硬化した部分は中央の一部のみで、他は軟弱である。内部施設は炉とピット2基が検出された。炉は床面の中央部よりやや東寄りに構築され、規模1.5m×1.2m程の不正楕円形を呈する。断面形状は浅い皿状で、最深部は床面より10cmの深さを測る。又炉のプラン内、やや南寄りに焼土が集中して検出されており、この部分が主に使用されたと思われる。この焼土範囲の北際に火熱を受けた痕跡のある炉石と思われる円礫片が出土したが、炉上面よりやや浮いた状態であったため、原位置は不明である。ピットは東南壁際に、南方コーナー部より1m程離れて2基が構築されている。P1は隅丸長方形で、規模は0.95m×0.5mを測る。深さは0.3mで壁を20cm程抉っている。P2はP1に重複するように構築され、0.5m×0.5mの方形を呈するものである。深さは10cm程で、平坦な底面である。P1とP2は同じ黄色土が堆積し、又並列して位置するところから、あるいは断面が段状を呈する1基のピットである可能性がある。性格は形態、規模、位置等から貯蔵穴に類する施設と思われる。その他の施設は検出されず、又柱穴も認められなかった。なお炉の中央部を通って、北西から南東へ住居プランの軸と平行に径5cm前後の炭化材が断続的に検出されたが、覆土の状況や遺物から焼失住居とは考えにくいので、これが住居の上屋材であったかどうかは不明である。

遺物は床面及び暗褐色土層から出土している。床面上から出土したものはすべて大小の破片であり、横転や逆転している事、離れた部分から出土したものが同一個体として接合できる事等から、使用時のまま放棄されたのではなく、住居廃絶時に廃棄されたものと考えられる。黒褐色土層からは床面上のものと同時期の土器片が出土しているが、いずれも小破片で、床面上出土土器と接合、又は同一個体と思われるようなものはない。

出土した遺物は古墳時代初頭の土器が主で、その他に十王台式系と思われる土器片、紡錘車形土製品が出土している。なお、十王台式系土器片は、数個体分の破片が認められるが、そのうち

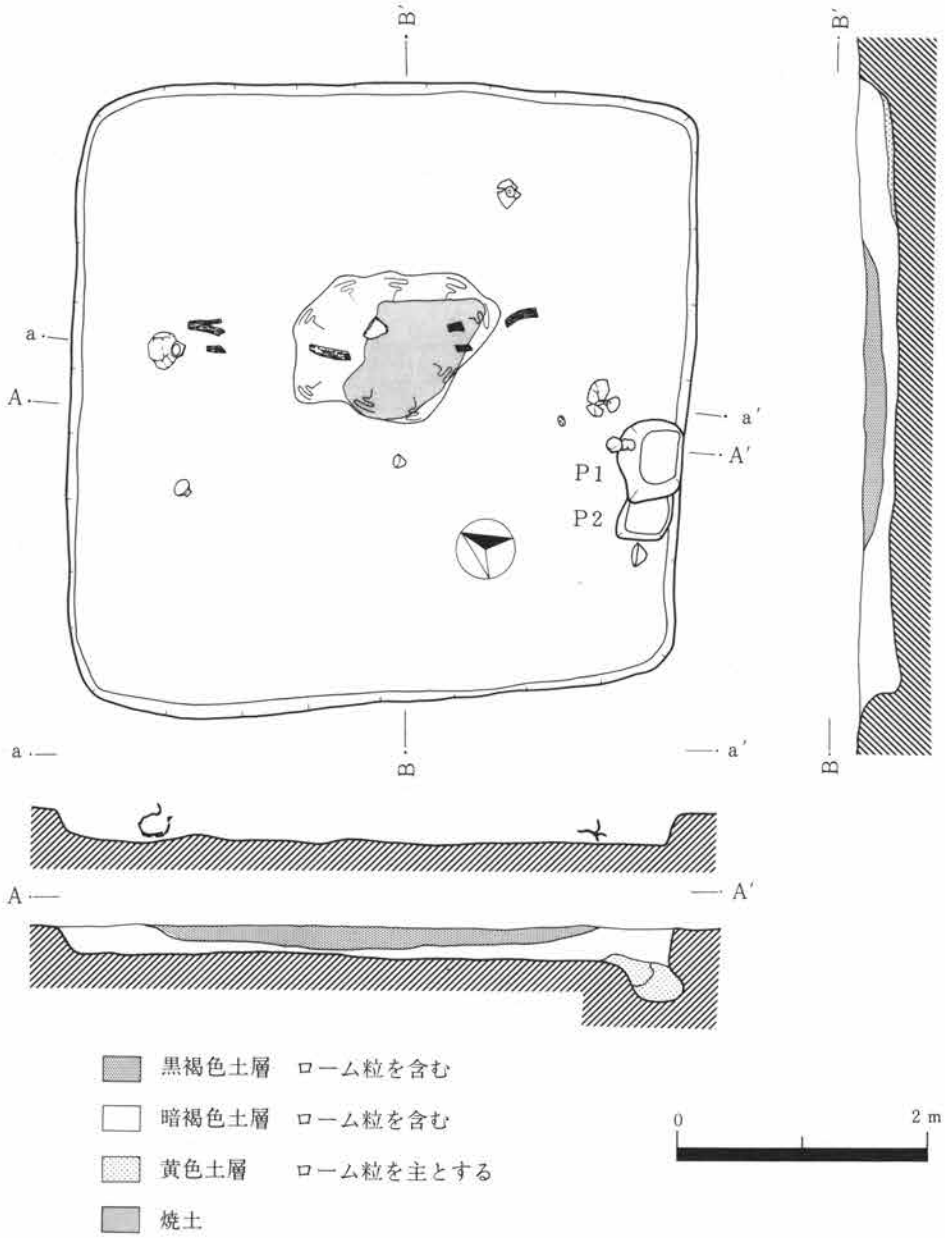


図89　1号住居跡

最も大形の破片（図91―9）は床面上で古墳時代初頭の大形土器片と重なって出土しており、本住居跡に伴う共伴遺物として扱う事ができる。

以上述べたように、床面上出土遺物から本住居跡の時期は古墳時代初頭期と考えられる。

1号住居跡出土遺物（図90～92）

本住居跡出土遺物は古墳時代初頭のものが主体であり、器種は壺、甕・鉢・高杯、その他紡錘

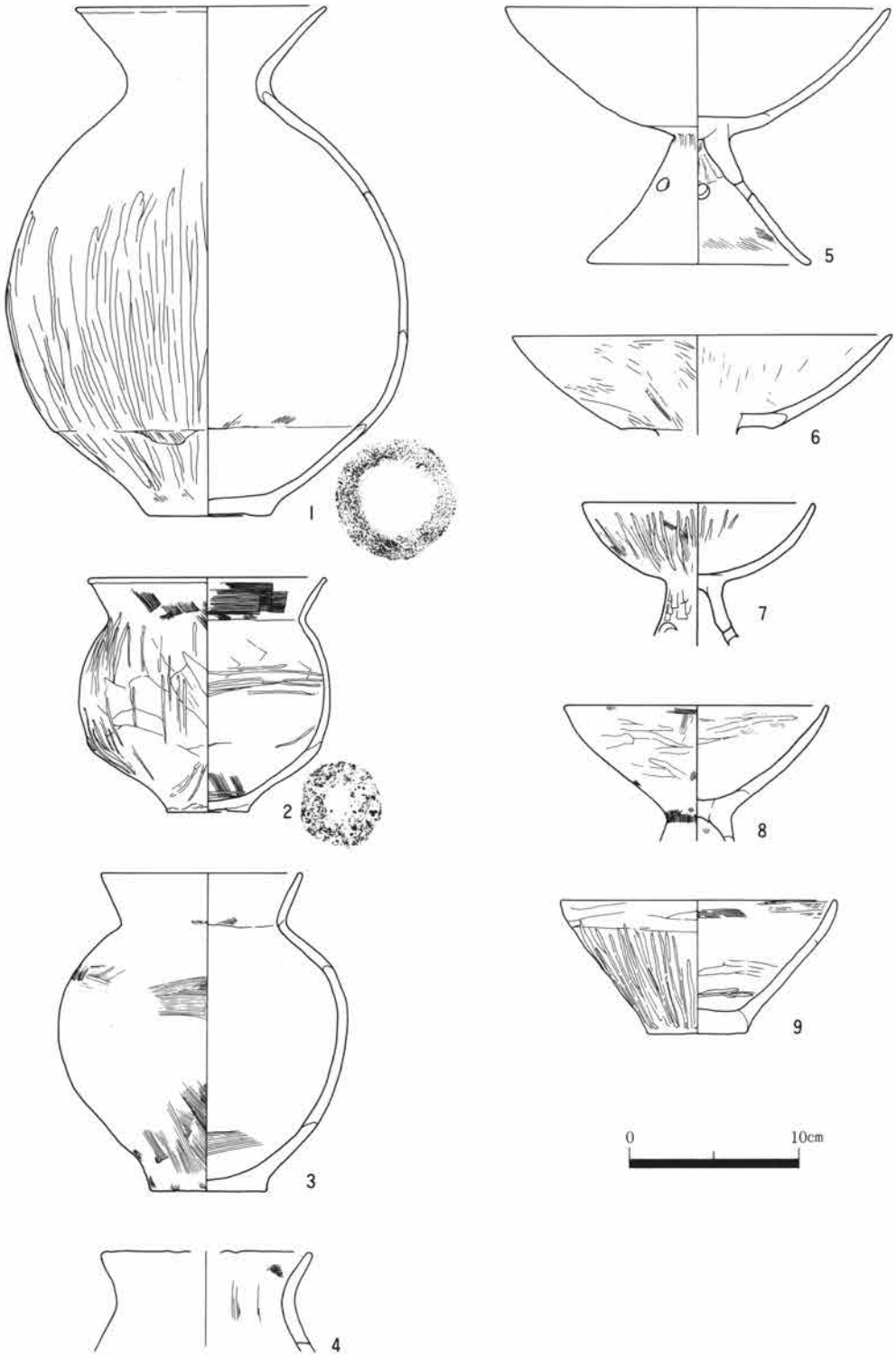


図90　1号住居跡出土遺物 (1)

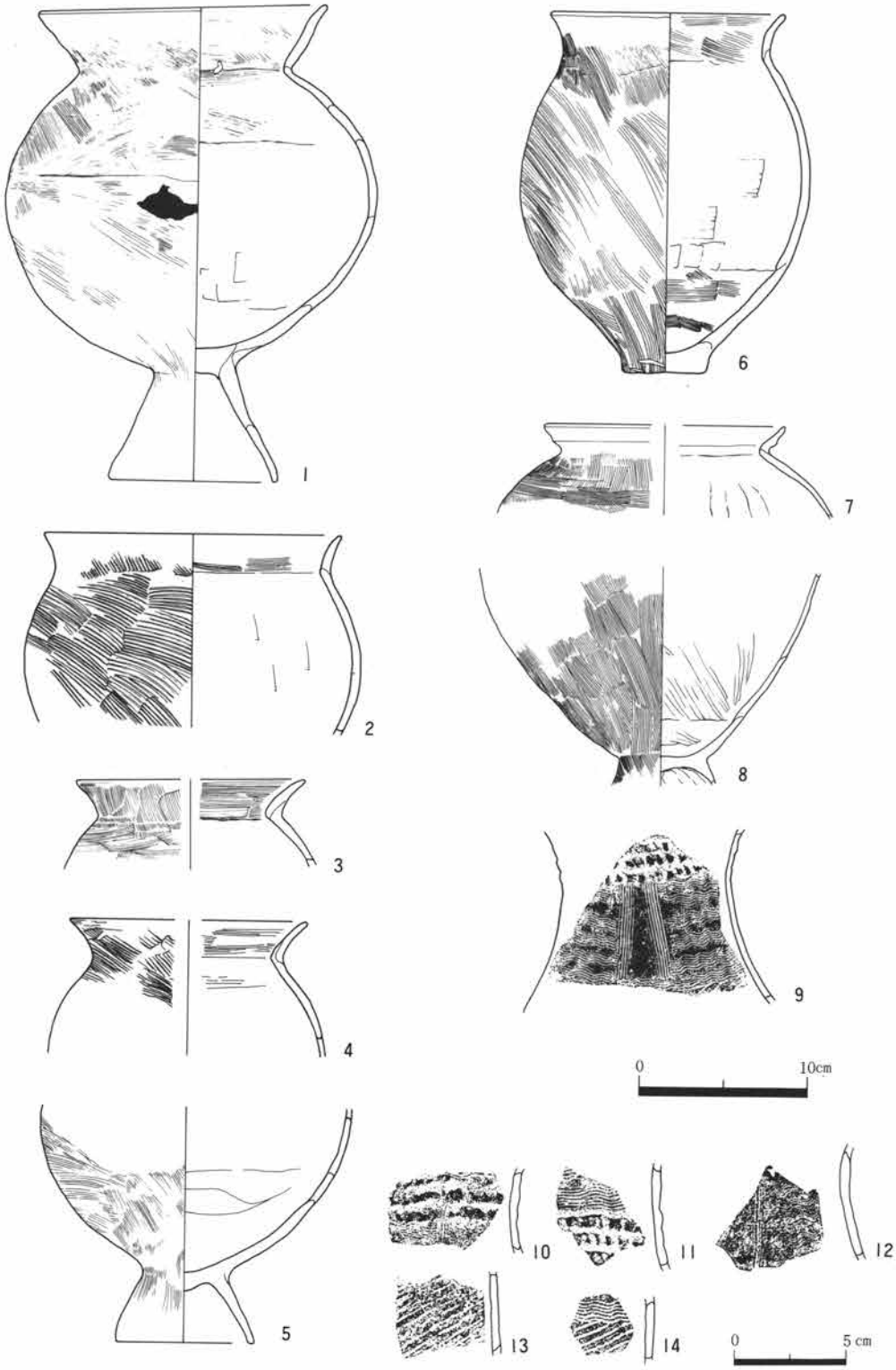
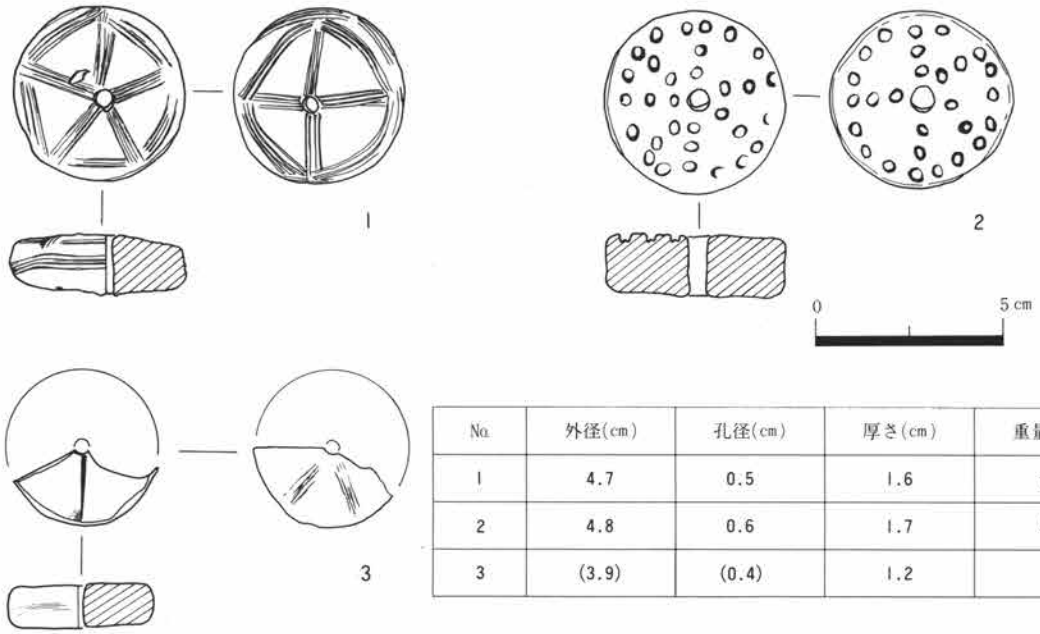


図91　1号住居跡出土遺物 (2)



No.	外径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	4.7	0.5	1.6	32
2	4.8	0.6	1.7	46
3	(3.9)	(0.4)	1.2	

図92　1号住居跡出土遺物 (3)

車形土製品が揃っており、小形器台と小形坩等の小形品を除いて、ほぼ当該時期の代表的な構成を示している。特徴としては所謂「石田川」式の代表器種であるS字状口縁台付甕が少なく、むしろ五領式のものに近似する点、破片ながら十王台式系を含む点等があげられる。

表14　1号住居跡出土遺物一覧

No.	器種	出土位置	法量(cm)	技法上の特徴	色調と胎土	備考
図90—1	壺	床面	a 14.6 b 23.6 h 29.7 c 7.2	外面は刷毛目整形の後縦位の箆研磨。口辺内外面はなで調整。内面は底部に刷毛目を残し、全体をなで調整。底部は浅い凹み底。胴下半接合部は段をなす。外面はエンゴベを施した可能性あり。	淡褐色 小砂粒を含む比較的精良な土。	完形品。器面はやや荒れる。
図90—2	広口壺	床面	a 14.1 b 14.8 h 13.7 c 4.8	外面は箆削り整形の後縦位の粗い箆研磨。口辺内外面及び底部内面に刷毛目を残す。胴内面は箆削り後箆研磨。底部は浅い凹み底。	赤褐色。 砂粒を含むやや粗い土。	完形品。
図90—3	〃	覆土上層	a 11.9 b 13.0 h 18.4 c 6.8	内外面共細かい刷毛目整形後、なで調整。肩部に箆研磨が部分的に見られる。底部は箆なで。	砂粒を含むやや粗い土。	
図90—4	〃	〃	a (12.3)	箆状具による縦位のなで整形。	明褐色。 砂粒少ないやや精良な土。	口辺1/4破片。口辺内面の一部に炭化物が付着する。

図90－5	高　杯	床　面	a　22.7 h　15.0 c　13.2	刷毛目整形後内外面は縦方向の篦研磨。脚部の接合は粘土塊による。脚部内面上位に篦削りが残る。	明褐色。 砂粒少ない精良な土。	脚の一部を欠く。円孔は脚中位に3ケ所。
図90－6	〃	〃	a (22.4)	粗い斜方向の刷毛目整形後、縦位の篦研磨。	黄褐色。 砂粒を含むやや粗い土。	杯1/2破片。一部に黒斑あり。
図90－7	〃	〃	a　13.7	杯部内外面は縦方向の粗い刷毛目整形後縦方向の篦研磨。脚部外面上半は指なで後篦研磨。脚部内面上半は指なで整形。下半は横方向篦削り。	淡赤褐色。石英、雲母等を含む比較的精良な土。	円孔は3ケ所と思われる。脚下半を欠く。
図90－8	〃	〃	a　15.6	杯部は内外面共刷毛目整形の後横方向の粗い篦研磨。杯部と脚部の接合は粘土塊充填により、外面は刷毛目を残し、内面はなでを施す。	赤褐色。砂粒を含むやや精良な土。	脚部を欠き、円孔の有無は不明。
図90－9	鉢	〃	a　16.3 b　7.8 c　5.8	口辺内外面を指なでし、体部外面は縦方向、内面は横方向の篦研磨。	赤褐色。砂粒を含むやや精良な土。	完形品。内面に炭化物が薄く付着する。
図91－1	台付甕	〃	a　17.2 b　22.0 h　27.9 c　10.1	口辺から胴部にかけて外面と口辺内面に細かい刷毛目整形を施し、胴部内面は篦削り後丁寧ななで調整。脚部はなでの後調整はなされない。	暗褐色。大砂粒を含む粗い土。	完形品。胴中央部外面に煤が付着する。
図91－2	(台付甕)	〃	a (17.7) b (20.0)	外面は斜方向の粗い刷毛目、口辺部内面は横方向の細かい刷毛目を施す。胴部内面は横方向の篦なで。	明褐色。砂粒を含むやや粗い土。	1/3破片。
図91－3	(〃)	〃	a (13.7)	口辺部外面は縦、胴部外面は横方向の刷毛目を施す。胴部内面はなで調整。	明褐色。小砂粒を多く含む粗い土。	1/5破片。
図91－4	(〃)	〃	a (14.2)	外面は斜方向、口辺部内面は横方向の粗い刷毛目整形。胴部内面はなで調整。	灰褐色。大砂粒を多く含む粗い土。	1/6破片。
図91－5	台付甕	〃	b (18.5) c　8.2	外面は斜方向の刷毛目整形。胴部内面は篦削り後底部付近をなで調整。脚部内面は整形時のなでを施す。	明褐色。 小砂粒の多いやや粗い土。	上半を欠く。胴下半部は火熱を受け赤変する。
図91－6	甕	〃	a　14.0 b　17.2 h　21.2 c　5.1	外面は全体を斜方向の刷毛目整形。口辺部内面と胴下半内面を横方向の刷毛目整形。胴部内面は横方向の篦なで。口辺部内外面は横なで調整。	暗灰褐色。砂粒を含むやや粗い土。	完形品。
図91－7	S字甕	〃	a　14.3	肩部外面の上位は縦方向、下位は斜方向、その後横方向の鋭い刷毛目を施す。胴部内面に指頭押圧痕を残し、なめし皮状のものを用いたなで調整。口辺部は指なで。	暗褐色。 砂粒を多く含む粗い土。金雲母を含まず。	1/4破片。外面に煤が若干付着する。
図91－8	〃	〃		胴部～脚部外面に斜方向の鋭い刷毛目を上下5段程に施す。内面は細かい篦なでを施す。脚部内面は縦方向の指なで。	暗褐色。外面黒色。砂粒を多く含むが金雲母は含まず。	上半と脚部を欠く。図91－7と同一個体の可能性あり。

図91－9	甕	床　面		内外面をなで調整し、外面に6本単位の櫛描文を施し、上半は段状に粘土帯を廻らし、押圧を加える。胴部に附加条縄文を施す。	暗褐色。砂粒を多く含むやや粗い土。	頸部1/5破片。十王台式系土器と思われる。
図91－10	〃	〃		段状の粘土帯を廻らし、指頭による押圧を加える。	暗褐色。砂粒を含む。	口辺部破片。十王台式系土器と思われる。
図91－11	〃	〃		上位に横方向の櫛目波状文、下位に段状の粘土帯を廻らし指頭押圧を加える。	暗褐色。砂を含む粗い土。	口辺部破片。十王台式系土器と思われる。
図91－12	〃	〃		櫛描懸垂文と横方向の波状文を施す。	明褐色。砂粒の多い粗い土。	頸部破片。胎土、焼成が他と異なる。十王台式系土器と思われる。
図91－13	〃	〃		附加条縄文を施す。	暗褐色。砂粒を含む粗い土。	胴部破片。
図91－14	〃	〃		上位に6本単位の櫛描波状文を横方向に、下位は附加条縄文を施す。	赤褐色。砂粒の少ないやや精良な土。	胴部破片。十王台式系土器と思われる。

2号住居跡（図93）

2号住居跡は、1号住居跡から東方向に12m程離れてH－12グリッドで検出された。4×3.7m程の規模で長方形プランを呈すると思われる。西側は、後世の削平のために床面、壁、共に失っている。

壁の立ち上がりは、残りのよい東側コーナー部で10cm程の高さである。又、この東側コーナー部分は、近世と思われる楕円形土壙によって切られている。

床面は掘り込んだ地山面を、そのまま利用しており硬質ではあるが、小さな凹凸が多い、内部施設は、炉、貯蔵穴と2基のピットが検出された。炉は中央から、やや北寄りに設けられ地床炉で掘り込みはなく、若干、硬化している。規模は、径25cm程の円形で比較的小さいものといえる。貯蔵穴は、1×0.8m程の規模で隅丸長方形のプランを呈している。断面は浅い台形状で、深さは床面から15cm程である。ピットは、北側コーナーと南側コーナー寄りに2基検出された。径は15cm程で、深さは2基とも床面より30cm前後の浅いもので、ほぼ垂直に掘り込まれている。位置としては、柱穴と考えられるが他の2基が検出されないため、断定はしかねる。

出土遺物は破片が多く、ほとんど覆土からの出土であるが、図示した台付甕（図94－1）は完形品で、壁に倒れて潰れた状態で出土している。又、床面や覆土中から上屋構造のものと思われる炭化材が多く検出された。遺存度が悪いため明確ではないが、板材や細い丸太材などが認められる。特に北側コーナー付近の壁際で、径3cm程の丸太材が直立した状態で検出された。これは、位置的に階段施設とは考えにくいため、壁の崩落防止の板張り様の施設を連想させるものである。

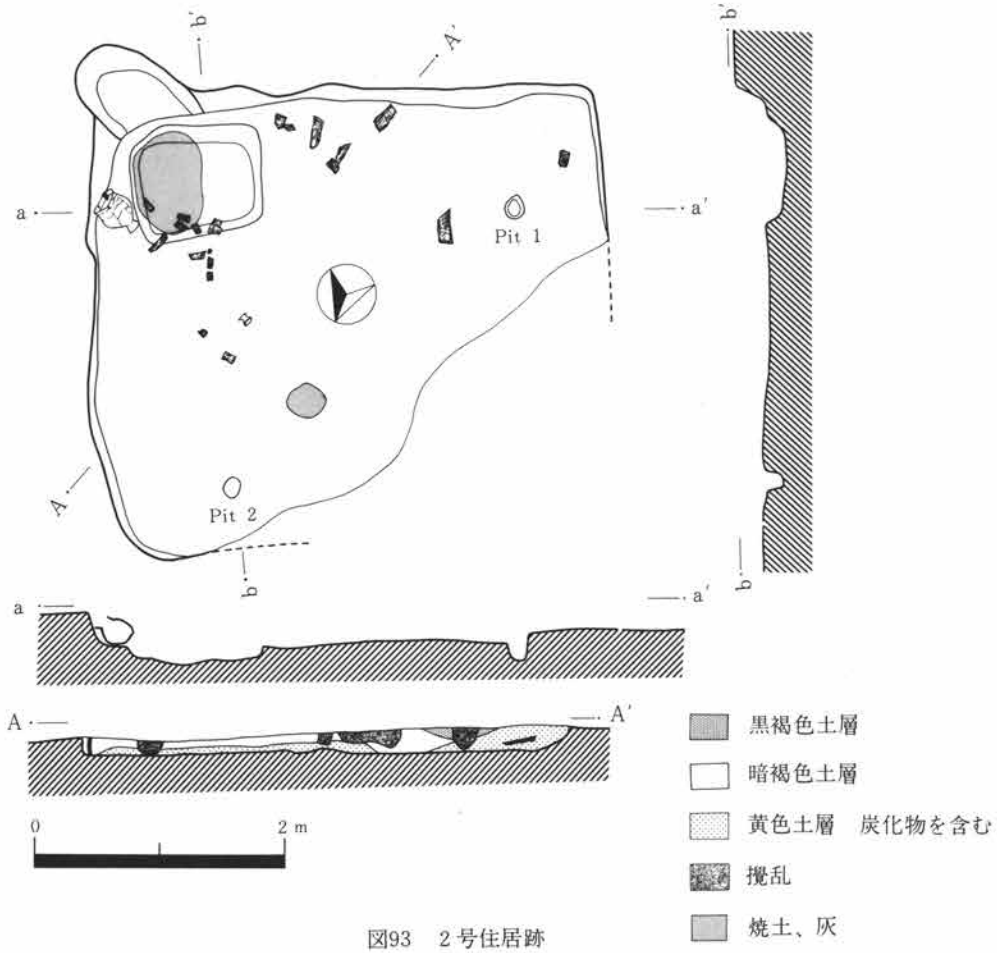


図93　2号住居跡

こうした状況から、本住居跡は火災、あるいは遺物の少ない事から廃棄時に上屋を故意に焼いた可能性が考えられる。又貯蔵穴の東半には焼土、灰が堆積しており、付近の壁が焼けて崩落した事を物語っている。

2号住居跡出土遺物（図94）

本住居跡からは古墳時代初頭の土器が出土しており、1号住出土遺物とほぼ同時期と思われる。

表15　2号住居跡出土遺物一覧

No.	器種	出土位置	法量(cm)	技法上の特徴	色調と胎土	備考
図94－1	台付甕	床面	a 19.6 b 24.3 h 31.7 C 10.2	胴部外面は斜方向、脚部外面は縦方向の細かい刷毛目整形。口辺部内面は横方向の刷毛目。胴部内面は丁寧ななで。脚部内面は横方向篦削り後横方向の刷毛目を施す。胴下半に接合痕を残す。	褐色。細砂粒を含むやや粗い土	完形品。

図94—2	台付甕	床　面		脚部外面は縦方向の刷毛目整形後縦方向の篦なで調整。内面は横方向の刷毛目整形。胴部との接合は粘土塊充塡による。	赤褐色。砂粒の少ないやや粗い土。	脚部上半欠損。
図94—3	高　杯	覆土下層		器表は篦研磨か。	黄褐色。精良な土。	器表は荒れている。
図94—4	〃	〃		放射状の篦研磨。	褐色。精良な土。	
図94—5	甕	床　面	a (16.5)	外面は斜方向の細かい刷毛目整形。口辺部内面は横方向刷毛目。胴部内面は横方向の篦なで。	暗褐色。小砂粒を含むやや粗い土。	口辺部4/5破片。
図94—6	坩	覆土下層	a　15.8 b　13.1 h　13.1 c　5.5	口辺部、胴部外面に斜方向の篦削りを施し、頸部は細かい刷毛目を施す。口辺部外面は縦方向、胴部は横方向の篦研磨。口辺部はなで調整。	明褐色。精良な土。	口辺、胴部の一部を欠く。

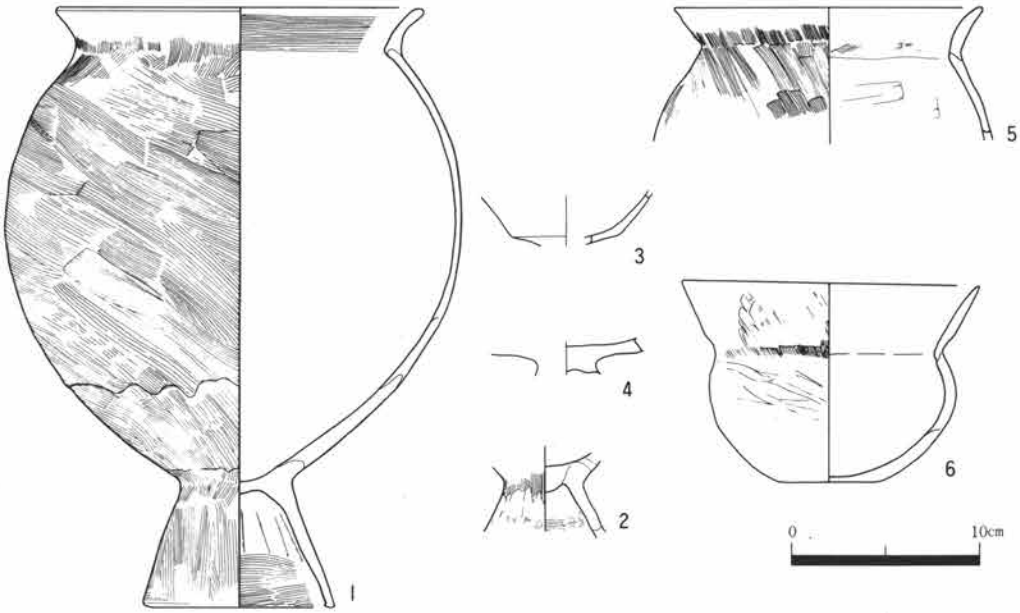


図94　2号住居跡出土遺物

3号住居跡（図95）

3号住居跡は、1号住居跡から南東方向に8m程離れてB—15、16グリッドで検出された。規模は、4.9×3.9m程の長方形で北西側の壁は黒色土を掘り込んで構築されているため、軟質でプランも明確ではない。

壁は20cm程の高さで残っており、崩落が激しく当時の壁面と思われる部分は少ない。床面はほぼ水平でレベル差は少ないと思われるが、全体にかなり軟弱であり検出は困難であった。北西部分の床面は、地山がロームではなく自然堆積の黒色土であり、硬度に若干差があるように思える。

内部施設は貯蔵穴と炉が検出された。炉は中央から南東側の壁に寄った位置に設けられており、規模は、径約30cm程で円形のプランを呈している。焼土量は、少ないが床面と同レベルで硬化している。又、構築のための掘り込みは検出されなかった。炉から南方へ１m程離れて壁際に焼けた礫が検出されたが、その出土位置から炉石かどうかの判断はつけ難い。貯蔵穴は、南東側の壁に沿って東側コーナーから50cm程離れて構築されている。規模は、0.8×0.6m程の隅丸長方形プランを呈している。深さは、床面より25cm程である。柱穴は、床面下まで調査したが検出されず、壁外においても柱穴と思われるピットは認められなかった。

出土遺物はすべて小破片で覆土の中位から出土しており、外部からの流れ込みの可能性が強い。

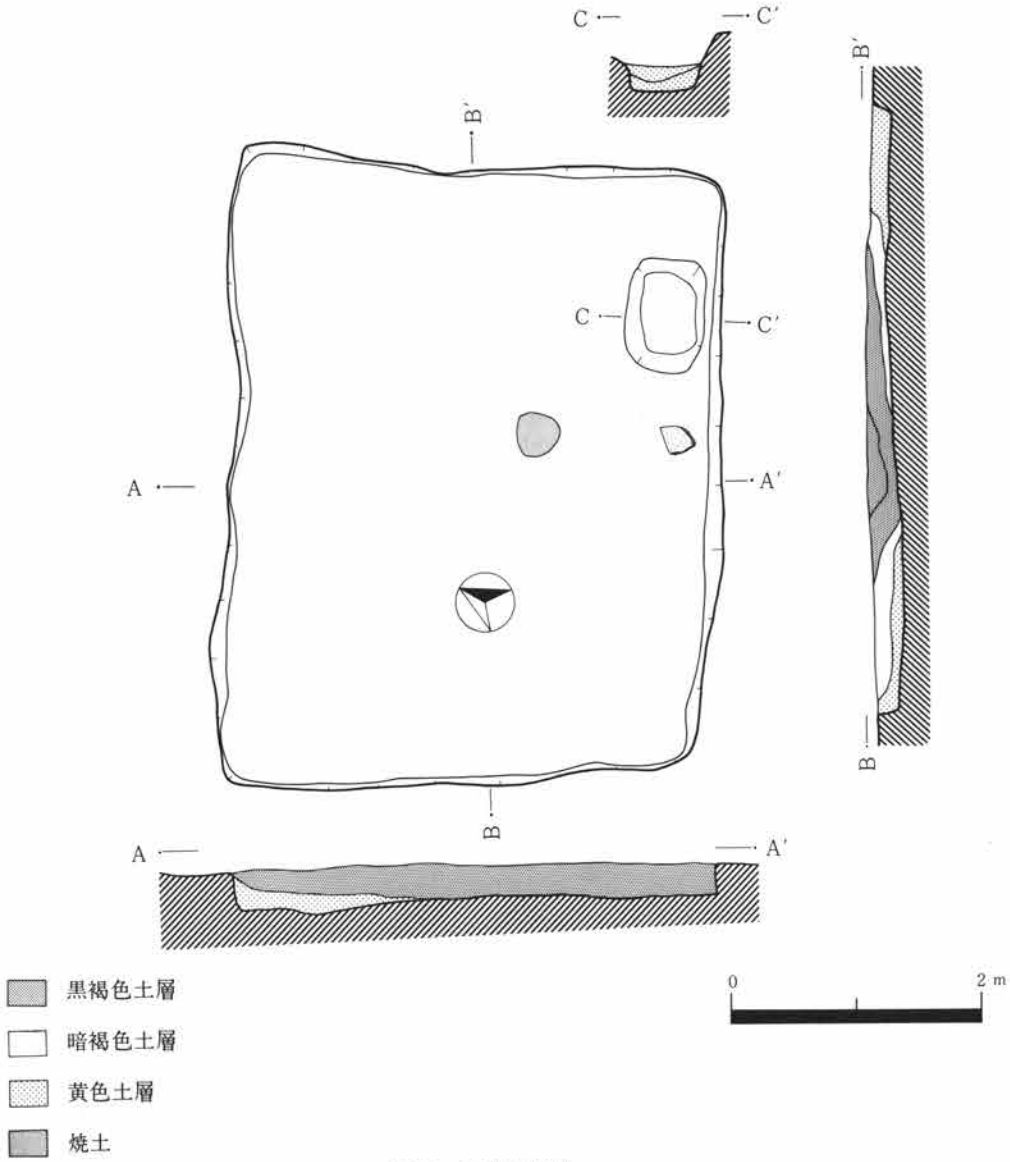


図95　３号住居跡

3号住居跡出土遺物（図96）

全て覆土中からの出土で、破片が主である。器種構成は少量のため推定せざるをえないが、単口縁の甕（3、4）や高杯（7）等から1号住居跡と同様の内容を持つと思われる。特に1の折返し口縁をもつ壺や無文の小形甕（4）など南関東的な土器に器形の近似するものが存在する事は注目される。

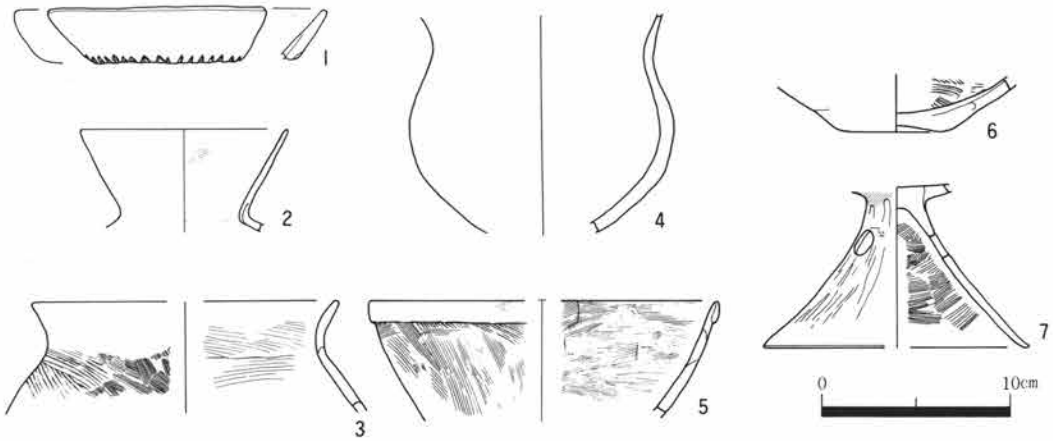


図96　3号住居跡出土遺物

表16　3号住居跡出土遺物一覧

No.	器種	出土位置	法量(cm)	技法上の特徴	色調と胎土	備考
図91—1	壺	床面	a (16.6)	内外面共横方向刷毛目整形の後、指なで。外面口辺下端に櫛歯状具により刻目を施す。	灰黄褐色。砂粒を多く含む粗い土	丹彩した可能性がある。口辺部1/4破片。
図96—2	(坩)	覆土	a 11.1	内外面共篦研磨と思われる。胴部内面なで。	黄褐色。砂粒を若干含む精良な土。	内外面共剝離が激しい。口辺部破片。
図96—3	(台付甕)	〃	a (16.4)	頸部内外面に斜方向の刷毛目整形。口辺部指なで。	褐色。砂粒を多く含む粗い土。	口頸部1/2破片。
図96—4	台付甕	〃	b (14.2)	内外面共指なで。	淡褐色。砂粒の少ないやや粗い土。	胴部1/3破片。
図96—5	鉢	床面	a (18.7)	口辺部は折り返しで、内外面共横方向の刷毛目を施し、外面はなで。体部外面は縦方向、内面は横方向の鋭い刷毛目整形。内面は粗い篦研磨を施す。	明灰褐色。砂粒の少ないやや粗い土。	体部1/3破片。堅緻な焼成。

図96－6	壺	覆　土	c　5.5	外面は粗い刷毛目整形を施す。	赤褐色。砂粒を多く含むやや粗い土。	底部破片。
図96－7	高　杯	〃	c　14.1	外面は縦方向の丁寧な篦磨き。内面は横方向の刷毛目整形。	明褐色。精良な土。	円孔は3ケ所。

4　その他の遺構と遺物

縄文時代、古墳時代の遺構の他に時期不明の土壙4基が検出されている。

10号土壙（図97）

B－6グリットで検出された。1.25m×1.0mのタマゴ形を呈し、断面は逆台形状で、深さは0.7mを測る。覆土はロームブロックを含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

11号土壙（図97）

C－3グリッドで検出された。2.4m×1.1mの隅丸長方形を呈し、断面は西辺で段状構造になり、最深部0.4mを測る。ロームブロックを含む黒褐色土が堆積する。庚塚遺跡で検出された長方形土壙と同類のものと思われる。

13号土壙（図97）

B－2グリッドで検出された。1.9m×1.5mの不正楕円形を呈し、断面は平坦な皿状をなすと思われる。覆土は黒褐色土で、遺物はない。

14号土壙（図97）

C－3、4グリッドで検出された。一辺3.4m程の正方形あるいは長方形プランを呈すると思われるが、東半を削平のため欠いている。底面は平坦で、確認面からの深さ約0.2mを測る。南西コーナーに2ケ所の張り出し構造がみられる。形態から住居跡の可能性も考えられるが、覆土が黒褐色だけである事、底面は硬化していない事、遺物が全くない事から、ここでは時期不明の土壙として扱った。

以上の他にC－19、20、21グリッドで検出された、長さ7m前後、幅0.8m程の溝状遺構（図38）は覆土の状況から近世以後の畑区画溝と思われる。

遺構外出土遺物（図98）

前述のとおり、遺構外出土遺物はその大半が縄文時代に属するものがほとんどで、それ以外のものは十数点を数えるのみである。その中でも特に器形や時期の明らかなものについて図示した。

1は小形甕形土器の上半部破片で、鬼高式かと思われる。

2、3は古墳時代初頭に属する高杯、小形器台の破片である。2の杯部外面には3ケの籾の圧痕が残されている。又3は小形器台としては本遺跡で唯一の明らかなものである。

4は全面を箆削りする底部破片で、鬼高期以後の甕形土器かと思われるが、確実ではない。

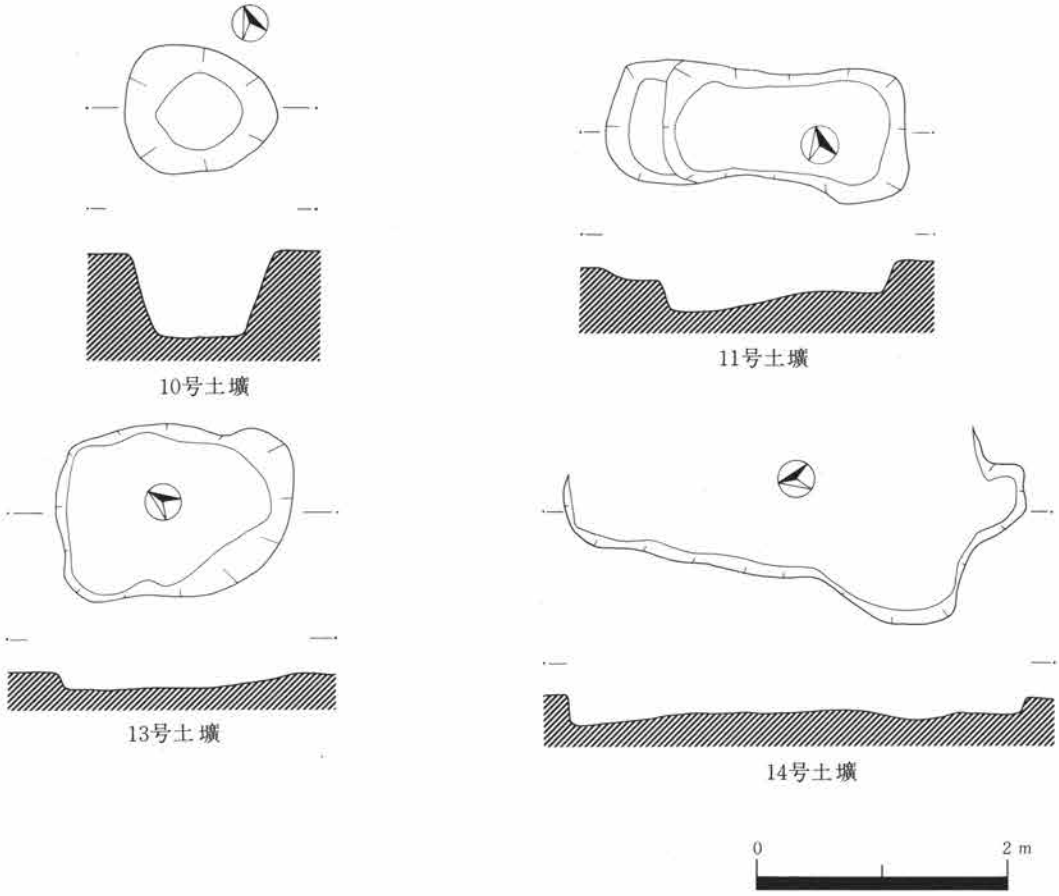


図97　土　　壙

5はかわらけの底部破片で、底面に糸切痕を残すものである。中世のものと思われるが、表採品のため本遺跡に伴うものかどうかは疑わしい。

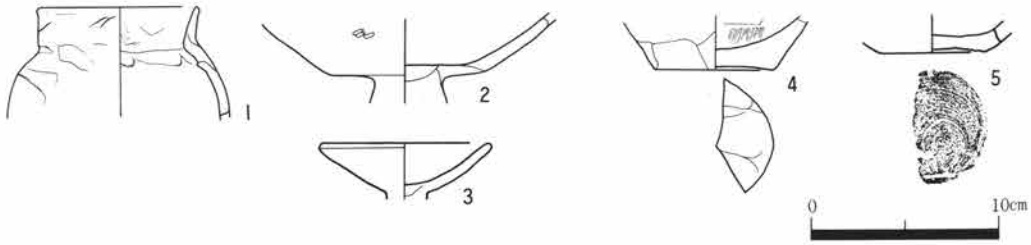


図98　遺構外出土遺物

表17　遺構外出土遺物一覧

No.	器　種	出土位置	法量(cm)	技　法　上　の　特　徴	色調と胎土	備　　考
図97－1	(甕)	表　採	a (8.6)	粗い篦削りで整形し、口辺部内外面は指なで。	灰赤褐色。砂粒の多い粗い土。	鬼高式か。1/2破片。
図97－2	高　杯	C － 21		内外面共放射状の篦研磨。杯部と脚部の接合は粘土塊の充塡。	黄褐色。砂粒の少ない精良な土。	杯底部1/3破片。杯部外面に籾圧痕が残る。
図97－3	器　台	F － 24	a　9.2	内外面共放射状の篦研磨。脚部との接合は粘土塊の充塡。	黄褐色。精良な土。	器受部破片。外面に黒斑が見られる。擦痕等の使用痕は認められない。
図97－4	(甕)	F － 24	c　6.4	外面及び底面は篦削り整形。内面篦なで調整。	淡褐色。砂粒を若干含むやや粗い土。	鬼高期以後のものと思われる。底部1/2破片。
図97－5	(杯)	表　採	c　5.7	左廻転轆轤成形。内面はなで調整。糸切痕を残す。	淡褐色。精良な土。	

5　結　　語

(1) 縄 文 時 代

遺構について

縄文時代の遺構は、前期関山式期の住居跡が2軒、明確に時期の判明する中期及び後期の土壙が1基づつ、中期と後期の埋甕遺構が1基づつ検出されている。出土土器の量からすれば、検出された遺構は予想外に少なかった。

関山期の住居跡である4、5号住居跡は、出土土器からはほぼ同時期の所産と推定されるが、その形態が前者は円あるいは楕円形で、後者は正方形をしており、明らかな形態差が認められる。関山期の住居平面形は比較的方形、長方形が多いようである。本遺跡例のように、同一遺跡内における、しかも隣接する住居跡同志が全く異なる形態をもつ事は、これが単に平面形の差にとどまらず、上屋構造の相違に関わる可能性が強い。これが同時性を有するものであったとすれば、同一集落内に複数の住居型式、つまり複数の住居形態採用の規範の存在を認めなくてはならないだろう。この形式差が各住居の機能差に基づくものなのか、あるいは技術が画一化されていなかったのかは不明であるが、単位集落における住居型式分析が構造技術の分析等を経て明確にされる事を期待したい。

埋甕は中期のもの（2号埋甕遺構）、後期のもの（1号埋甕炉）があり、特に堀之内Ⅰ式の1号は炉に伴うものである。調査においては後期の住居跡は検出されなかったため、これは屋外施設と見られるが、現地の地表土削平が深い事や検出時に埋甕の上端が攪乱されていた事から、かつてこの埋甕炉に伴う住居があり、それが削平されて床面以上を失ってしまった可能性も若干考えられる。その場合にはほぼ同時期の土器を出土する6号土壙も、距離的に隣接する事から、同一住居内の施設として機能していたと考える事もできよう。

土器について

本遺跡では、縄文時代草創期稲荷台式から後期堀之内Ⅱ式までの遺物および若干の遺構が検出された。土器のみから見れば、早期条痕文から前期諸磯C式、中期阿玉台Ⅰb式から後期堀之内Ⅱ式までの長きに亘って、何らかの生活とのかかわりが継続されていたことになる。しかし、土器のほとんどは小破片で保存状態も悪く、かろうじて器形や文様構成を復元できたものは数点にすぎない。出土した土器の位置づけ等については各項目の中で述べたが、遺構外出土遺物の4群土器について若干補足しておきたい。

検出された土器は、口縁部に文様帯を持つもの2点、縄文を施す胴部破片13点、縄文を施した尖底部1点の計16点の小破片であり、多くを検討できる資料とはいい難いが、ここで特に注目しておきたいのは、縄文を施した胴部破片と尖底部破片についてである。

縄文はＬＲ1点、不明１点以外の12点はＲＬを用いており、そのうち９点は０段３条縄を使用している。施文は、縦位施文を特徴としており、条を縦位に施すことを基本としている。また、同一原体を縦位、横位に施文して縦位の羽状を構成するものもある。また、約半数は内面に条痕が施されている。条痕は比較的間隔をあけて施文されており、方向は縦位のもの、横位のもののほか、不規則なものもある。なお、条痕の施されていないもののうち、数点については内面の荒れが激しく、その他の特徴の一致から、条痕の付く可能性は大である。尖底はほぼ同一の器厚で形成されており、内面に条痕は認められない。一点のみの出土であるが、15もそのカーブからして尖底になると思われる。

以上が本群土器の概要である。類例としては、埼玉県打越遺跡第２群土器第７類、足利遺跡第Ⅶ群土器第５類・第10類の一部、ゴシン遺跡（０―35）区出土土器、茨城県遠下遺跡[1]第５群土器等があり、０段多条縄文の縦位[2]施文例としては、福島県源平Ｃ遺跡[3]第Ⅲ群１類土器がある。足利遺跡[4]、遠下遺跡の縄文条痕土器は、横位多段施文による斜縄文あるいは羽状縄文[5]を主体としており、相異がある。また尖底部は足利遺跡で４点、遠下遺跡で２点出土しており、足利遺跡例は貝殻背圧痕文３点、縄文施文１点、遠下遺跡例は２点とも縄文施文である。遠下遺跡では無節縄文を横位に多段施文して羽状を構成し、内面に横位の条痕を施した平底の土器が出土しており、注目される。打越遺跡では条を縦位に施文したものが主体を占めており、内面に条痕の施された例も少数認められ本遺跡例との関連が見られる。また、報告者はこれらの土器が打越式（仮称）とともに出土するケースが多いことから、同型式の一要素としてとらえている。ゴシン遺跡例は、尖底を呈する砲弾形の土器で、口縁部を欠くものの、関東地方の縄文条痕土器の好例である。縄文は０段３条のＲＬを、条を立てるように縦位に施文され、内面には粗い条痕文が斜位に施されており、本遺跡例と最も近似した例である。又、近年長野県下でも縄文施文の尖底土器の好資料が得られており、本遺跡例との関連が注目される。

以上、不十分ながら４群土器の概要と類例について見てきた。その型式内容や位置づけについては、今後の資料増加を待たなければならないが、注目していきたい一群である。

(2) 古　墳　時　代

遺構について

本遺跡で検出された古墳時代の遺構は、住居跡３軒のみである。住居跡の形態は１号住居跡が正方形で２号住居跡と３号住居跡がやや長方形のプランを呈している。正方形プランは、東日本における古墳時代初頭の定型化した住居平面形態であるが、長方形プランに関してはあまり例を見ない。むしろ中部高地から北関東における弥生時代後期の住居跡に普遍的な形態である。しかし、この事からただちに弥生時代後期の住居形態に関する規範が影響を与えたもの、あるいは残存したものと考えるのは早計であろう。平面プランが近似していても本遺跡の２・３号住居跡の場合、柱穴位置が不明確であったり、残存部が少なく全形プランを知り得ない事などにより一般

的な弥生時代後期の住居形態との詳細な比較ができないため、どの程度の関連性をもつかについては明らかにしえない。従ってここでは、古墳時代初頭のほぼ同時期に、正方形と長方形の2形態の住居が存在していたものと推定するにとどめておきたい。

1号・2号・3号住居跡の位置関係はそれぞれ8～10m程の間隔をもって構築されており、主軸方位はほぼ同一である。特に1号住居跡と3号住居跡は並列している事から、その配置にはかなり意識を払ったものと思われる。出土遺物もほとんど差が見られない事から、この3軒の住居跡は同時存在の可能性が強いと考えられよう。

住居跡の構造については、さほど明確ではないが、貯蔵穴が南側壁際に構築されるのが特徴である。炉は床面の一箇所をそのまま用いており、掘り込みは見られない。1号住居跡の炉に見られる凹みは非常に浅いものであり、おそらく灰かきのために出来たものと思われる。又1号、3号住居跡からは火熱を受けた自然礫が検出されており、おそらくこれが炉石の役割りをはたしたものと考えられる。住居跡の床面であるが、3軒ともやや軟質で貼り床や段状施設等は見られなかった。床面硬度が使用頻度や使用期間に比例し、又貼り床が拡張のための建て替え時の床の補修であるならば、本遺跡の住居跡は極めて使用期間が短かく、又創建時のまま、あまり改変せずに廃棄されたものと想定される。(6)

土器について

本遺跡から出土した古墳時代の土器は、大部分が3軒の住居跡からのものであり、全て古墳時代初頭に位置付けられるものである。その中で特に豊富な器種を揃えている1号住居跡の一括遺物を主にして、本遺跡出土遺物の位置付けとその問題点について述べてみたい。

1号住出土土器の組成は、壺、広口壺、台付甕、甕、鉢、高杯である。この時代のものとしては、基本的な組成器種である小形器台や小形坩等の小形精製土器を含まない点が注目される。しかし3号住居跡からは坩と思われる口縁部破片、又遺構外ではあるが小形器台の器受部破片が出土しており、本遺跡に存在した事は確かである。そして1号住出土土器はあえてこれら小形精製土器に先行させるような内容は認められない事から、使用時には共存していた可能性が十分考えられる。

各器種に見られる特徴としてあげられるのは、台付、平底を問わず甕は単口縁のものが主体を占め、本地域を代表する所謂「石田川」式土器の表徴的存在であるS字状口縁台付甕形土器（以下S字甕と略す。）がほんの数片しか認められないという点である。たしかにここに見られる傾向は一遺跡内における一部の現象であり、遺跡全体の傾向として把握するのは危険だが、群馬県内において圧倒的な存在を示すS字甕がこれほど少数の出土量しか示さない事は、これがわずか3軒の住居跡に関する現象であったとしても、十分特筆すべき内容である事は確かである。

単口縁の甕は東日本で普遍的な存在として認められるが、本遺跡例のような刷毛目を施した台付甕については、その分布は、東海地方以東、とりわけ大平洋側に限られる。又この台付甕は長胴平底を基本形態とする北関東の弥生式土器から生成したとは考え難い。従って本遺跡に見られる単(7)

口縁台付甕の主体的な在り方は南関東や東海地方における当該期の土器との関連を無視しては語り得ない。あえていえば、これら南関東や東海地方における土器と同一系統にあると考えられる。

又甕以外の他の器種である壺、広口壺、高杯、鉢については後期弥生式土器の名残りを残すものが多く、新形態の器種は高杯（図90－5、6、7、図94－4、5、図96－7）と坩（図94－6、図96－2）のみであるといっても過言ではない。

本遺跡の存する太田市周辺における後期弥生式土器は、遺跡の存在自体が稀薄なため、その内容は不明な部分が多いが、樽式土器の主要分布圏外であり、むしろ粕川流域から渡良瀬川まで分布する赤井戸式の圏内に近い。従って上記の弥生式土器の名残りを強く持つ器種は赤井戸式の系譜を引くものと理解するのが最も安易であるが、甕をも含めた土器組成全体を考えた場合、これについても南関東や東海地方における後期弥生式土器との系統的な関連性は無視できない。しかしながらここに見られる器種はほとんど文様がなく、比較的単純な形態に弥生式土器的な製作技法を用いているだけなので、特徴的な部分を抽出して限定された地域の弥生式土器に系譜を求めるのは困難である。従ってここでは、単口縁台付甕の主体的存在を重視し、又本地域周辺に見られる南関東系土器の様相を考えあわせ、本遺跡出土土器は五領式に近親するものであると推測するにとどめておきたい。

本遺跡出土土器の編年的位置付けは古墳時代初頭に与えられる。具体的にはS字甕の特徴から梅沢氏の細分案によれば「石田川Ⅰ」期に相当するものと思われる。しかしながらこれはS字甕の変遷を軸とした細分案だけに、本遺跡[8]ではむしろ客体的な存在を示すS字甕のみをもって編年付けの根拠としなければならず妥当なものとは考え難い。一方本地域の太田市周辺では太田市石田川遺跡[9]、高林遺跡[10]、五反田遺跡[11]、二ツ山古墳墳丘下住居跡[12]等から当該期の良好な資料が出土しているが、これらとS字甕以外の器種、例えば高杯、壺を比較した場合、少なくともこれらに先行する積極的な根拠は見出せない。五反田遺跡の資料をもとに本地域の土師器波及期を三時期区分した梅沢氏によれば、その最初の段階は「石田川」式に先行する南関東系の土器が存在した事を推定されているが、その根拠と考えられる南関東的な壺は、本来的に「石田川」式とは別系統である事から、かならずしも[13]「石田川」式に先行するとはいい難い。少なくとも本遺跡例のような弥生的な壺や高杯等と新来の高杯、S字甕等との共伴事実は、両者が先後関係にあるのではなく、同時存在していた事を示唆する。従って本遺跡出土土器は、氏のいわれる南関東系土器に該当すると思われるが、その位置づけについては「石田川」式以前ではなく、「石田川」式の古段階に併行させるのが妥当と考えられる。

所謂南関東系といわれる土器群は、本遺跡の所在する太田市周辺地域ではなく、むしろ赤城山南麓の粕川流域を中心として主体的に存在するようである。又県西部地域においては「石田川」式に伴った客体的な存在が認められる。[14]しかしながらこれらは「石田川」式の強い個性と圧倒的な数量の陰に隠れがちで、従来において[15]かならずしも十分な検討がなされてきたとはいい難い。現在までこれら南関東系土器群の具体的な形態と組成、又細分された編年上の位置付けや分布等に

ついて解明された事はほとんどなかったと言っても過言ではない。従って「石田川」式との編年的関係や分布圏の関係等についても不明な点が多く、本地域（「石田川」式分布地域）におけるその存在意義も見過されがちであった。これら南関東系土器群の解明は、「石田川」式と五領式の編年上の関係をより明らかにするばかりでなく、関東地方の土師器波及のプロセスを解明する重要な課題である小地域間における相互影響関係を明らかにする重要な手がかりになると思われる。そのためには南関東系土器群の詳細な分析はもちろんの事、それと対比される「石田川」式の型式内容、つまり形態的特徴の抽出や基本的な組成の分析等の作業によって、「石田川」式の型式概念の明確化を図る事が早急に必要であろう。ともすれば極めて個性的な器形であるＳ字甕のみがクローズアップされてきた本型式を、再度型式学的な目で見つめ直す事は、「石田川」式のもつ本来の存在意義を明確にし、又五領式との具体的な比較を可能にするものと期待するのである。

なお、１号住居跡からは茨城県北部を中心に分布する十王台式あるいは、それに類似した十王台式系の土器片が数点出土しており、出土状況でも説明した通り、他の土器とは明らかな共伴関係にあり、使用時にも同時存在した可能性が強い。文様は櫛描きによる懸垂文と横位波状文の組合せ、及び胴部の附加条縄文のみであり、最も新しい段階のものと考えられる。

十王台式系土器の本県における出土例は比較的少なく、数例を数えるのみである。そのうち明確なものは単独あるいは土師器と共伴しており、又樽式との共伴例も聞くが、「石田川」式との共伴は今のところ認められない。共伴している土師器[16]例は本遺跡のものも含めて、南関東系のものであるが、これが十王台式との交渉における選択であるのか、あるいは南関東系と「石田川」式の時間差を示すものかは、資料が十分でないため明らかにはし得ない。しかし弥生式土器として把握される十王台式が、少なくとも土師器初源期まで存続していたのは主な分布地域である南東北～北関東東部での出土例から明らかである事から、「石田川」式との交渉も十分考えられ、いずれ両者が共伴して出土する例も出てくると予想される。

〈註〉

（１）『打越遺跡』　富士見市教育委員会　昭和53年
（２）『足利遺跡』　久喜市教育委員会　昭和55年
（３）『甘粕原、ゴシン、露梨子遺跡』　埼玉県遺跡調査会　昭和53年
（４）『日立市遠下遺跡調査報告書』　日立市教育委員会　昭和50年
（５）「源平Ｃ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ』　㈶福島県文化財センター　昭和55年
（６）石野博信「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探求　家』　社会思想社　昭和50年
（７）樽式、赤井戸式の甕は長胴で頸部のくびれの弱い平底のものを基本形態とし、台付甕は量的に非常に少ない。
（８）梅沢重昭「考察」『群馬県太田市五反田・諏訪下遺跡』　太田市教育委員会　昭和53年
（９）尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治『石田川』　昭和43年
（10）大塚初重・小林三郎「群馬県高林遺跡の調査」『考古学集刊』３－４　昭和42年
（11）（９）と同様
（12）『太田市米沢二ツ山古墳――およびその墳丘下発見の住居址」　群馬県教育委員会　昭和46年
（13）（９）と同様
（14）赤堀村鹿島遺跡、同今井南原遺跡、前橋市荒砥前原遺跡、同荒砥五反田遺跡等がある。
（15）高崎市上滝遺跡等がある。
（16）前橋市荒砥前原遺跡例。未報告。

Ⅵ　雷遺跡の調査

1　雷遺跡の概要

雷遺跡は休泊台地の北西端に位置し、休泊川の南流する西側の低地に突出する台地先端部分にあたる(図1、2、99)。標高は約37.0m～37.7mを測る。台地縁辺部は西側の低地を形成した河川により浸食を受けており、低地面とは約1.5mの比高をもつ崖となっている。休泊川は現在、この崖面より西方50m程の所を流れる用水となっているが、その流路から察するところ、かってこの低地を形成した河川の遺流であると考えられる。

本遺跡は調査に先行して表面採集を行なった際、縄文土器片、土師器片が認められ、又立地が上遺跡と同じ状況である事から遺跡の存在が推定された。しかしながら範囲確認のために幅3mのトレンチを設定し、調査を実施したところ、遺構は全く検出されなかった(図99)。又後述のように、本調査区ではローム土層が堆積しておらず、遺物包含層である黒褐色土層も砂礫まじりの軟質なものであったため、遺構面はないものと考えられ、全面調査は実施しなかった。

土層は上位から、灰黒褐色の表土層、黒褐色土層、暗灰色砂礫層、礫層が堆積しており、調査区の台地最深部であるB－20グリッドでは、表土層50cm、黒褐色土層20cm、暗灰色砂礫層18cmの厚さを測る。E－15、E－26グリッドはやや台地縁辺寄りであるが、B－20グリッドよりも厚い堆積を示している。又縁辺部のH－20グリッドでは表土層が60cm程の厚い堆積を示し、その下位の黒褐色土層はみられず、直接暗灰色砂礫層に達する。砂礫層、礫層は河川氾濫時の堆積と思われる。台地辺の表土層を排除したところ、崖線は現在のものよりもやや内側に入っており（図99の破線ライン)、黒褐色土堆積時の地形は、その後の削平を考えなければ、現在よりもかなり傾斜の強い、しかも凹凸の多いものであったと思われる。

遺物は縄文土器片が90数点ほど出土しており、そのほとんどが黒褐色土層からのものである。又土師器片も10数点出土したが、極めて小破片であり、時期や器形の判明するものはない。遺物の出土状況は、集中する箇所はなく、各地点で平均的に散在する。従って遺物分布状況からも遺構の存在を推測する事はできなかった。

一方本調査区西南側に展がる台地は、標高が調査区よりも1m程高くなっており、土層にはローム土の堆積が認められる。ここには中期を主とした縄文土器片、土師器片等が散布しており、ある程度遺構の存在が予想される。従って遺跡の主体はこの地域にあり、今回調査部分はその縁辺部にあたると思われる。出土した遺物は本地域に廃棄されたものか、あるいは若干ローリングを受けた痕跡のある事から、遺跡の一部が河川に浸食されて、その際に堆積したものと思われる。

2　出　土　遺　物

本遺跡からは縄文時代早期の土器１点および中期後半から後期後半にかけての若干の土器片が出土した。以下３群に分類して説明する。

第１群土器（図100－１）

早期後半の条痕文系土器である。胎土には少量の繊維とともに、砂粒および大粒の片岩を多量に含む。器内外面には明瞭な擦痕が施されている。焼成は良好である。

第２群土器（図100－２～４）

中期後半の加曽利Ｅ３式土器を一括した。ともに胴部破片で幅の広い懸垂無文帯を有する。３は縄文帯に波状沈線を垂下させている。縄文は２と４が０段３条ＲＬ，３がＲＬである。

第３群土器（図100－５～29）

後期中葉の土器群を一括した。本地点で最も多く検出された土器群である。５～15は堀之内II式土器である。器形は胴上半部がわずかに外反しながら開口する深鉢形を呈する。口唇部は「く」の字状に内折するものが多く、裏面には沈線が廻らされる（５・８）。口縁部には幅広く、無文帯が設けられ、しばしば１条の隆線が施される（７・９・10）。また、隆線には、等間隔の刺突文列が施される場合が多い。口縁部無文帯下には、沈線区画の充塡縄文帯で横位展開の文様が構成される。文様には、三角形の区画文を基調とする直線的なもの（11）と、曲線的なもの（12・15）とがある。縄文は全てＬＲである。器内面および外面無文部は研磨が施されており、焼成も良好である。

16～21は加曽利Ｂ式土器である。16は外反する口縁部破片で、口縁裏面に一条の沈線が施される。口縁部には押圧を施した隆帯が廻り、その下に沈線区画の充塡縄文帯が数条施される。縄文はＬＲ。17は全面が研磨された土器で、縄文ＬＲが施されている。18は裏面に多数の細沈線が施された土器である。19はＬＲを地文に横位、沈線を施す土器である。20は幅広い口唇上面に棒状貼付文を施した浅鉢形土器である。ループ状の沈線文様が内面に施され、器面には塗彩が認められる。21はＬＲを地文に、沈線で綾杉文が施される。

22～29は底部である。23～28は網代痕が付けられている。網代は平織のものを主とするが、26は繊維が太く編み方のパターンも異なる。

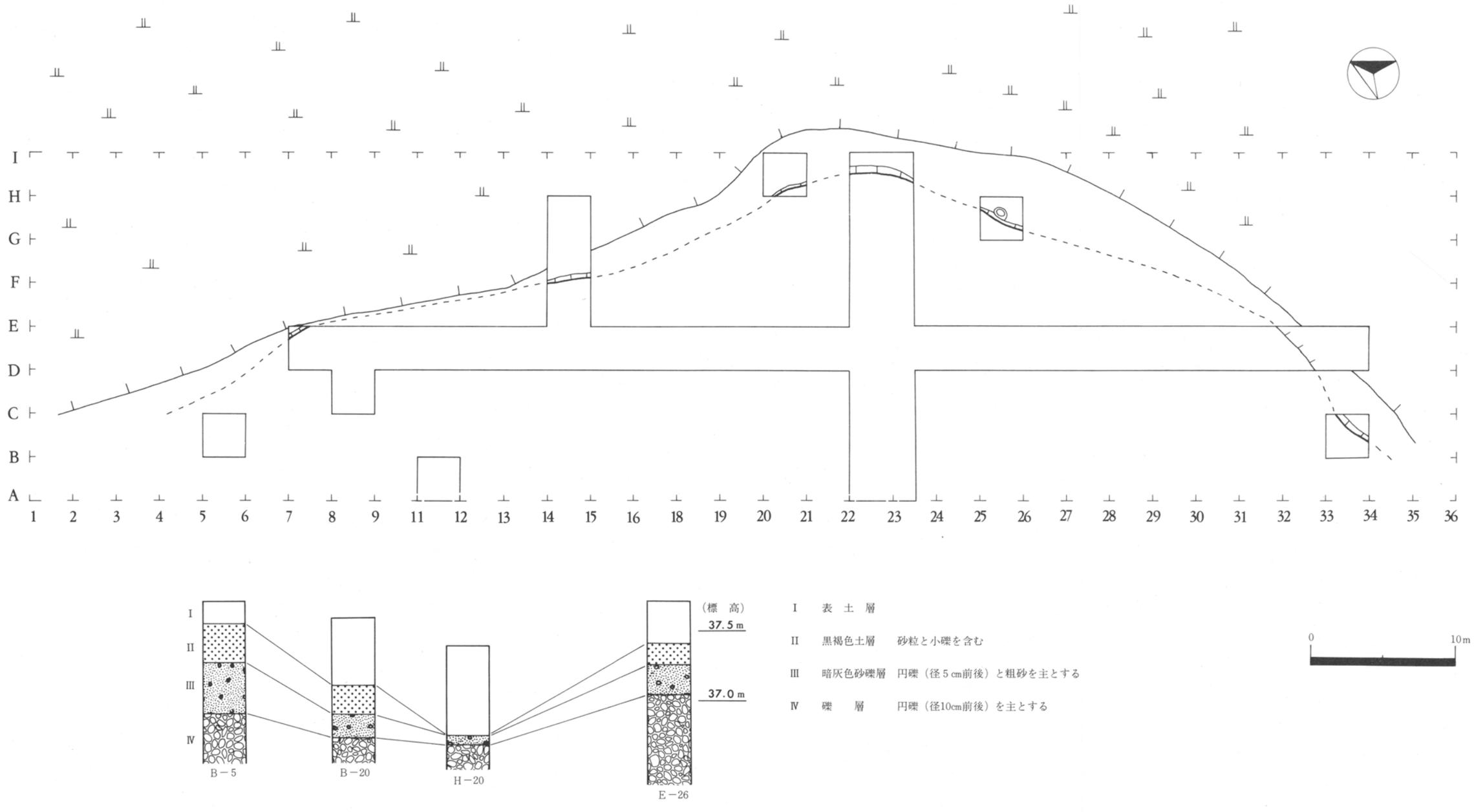

I
H
G
F
E
D
C
B
A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 11 12 13 14 15 16 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36
I
II
III
IV
B－5
B－20
H－20
E－26
（標　高）
37.5 m
37.0 m
I　表　土　層
II　黒褐色土層　砂粒と小礫を含む
III　暗灰色砂礫層　円礫（径５㎝前後）と粗砂を主とする
IV　礫　　層　円礫（径10㎝前後）を主とする
0
10m

図99　雷遺跡全体図

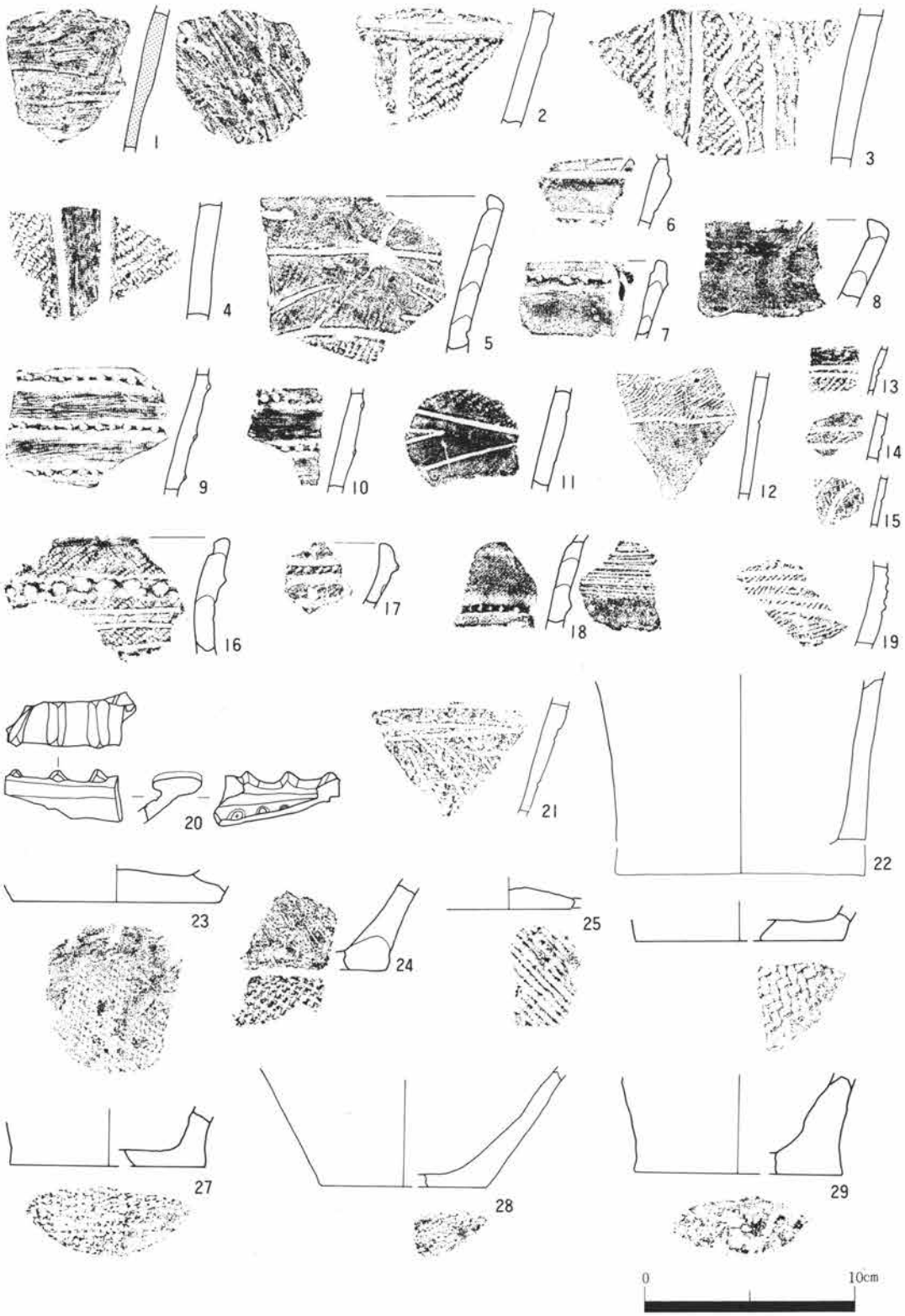


図100　雷遺跡出土遺物

写　真　図　版

庚塚遺跡　11号溝全景

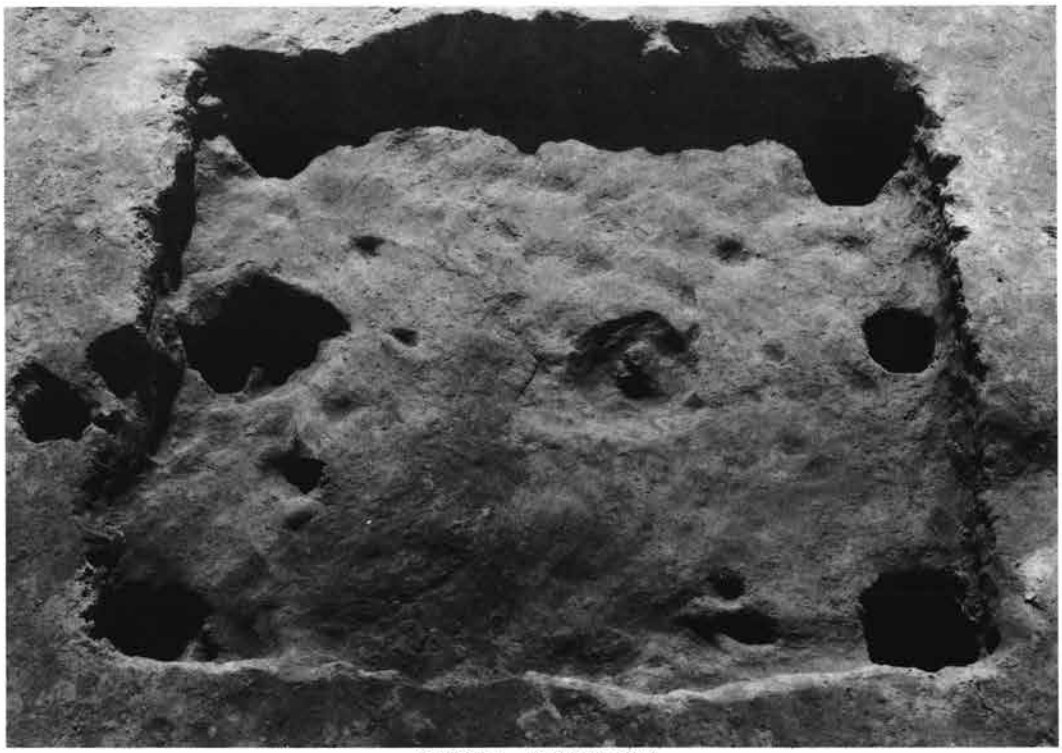
庚塚遺跡　11号溝断面

図版 2

庚塚遺跡　11号溝板碑出土状況

庚塚遺跡　11号溝遺物出土状況

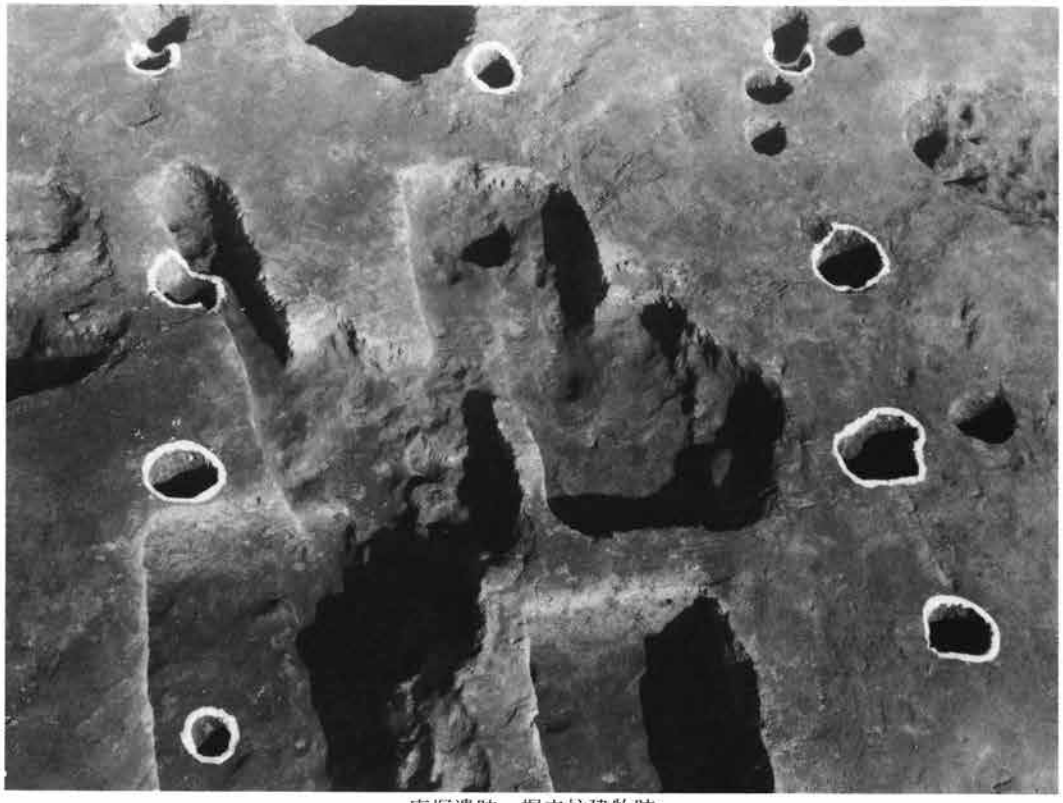
庚塚遺跡　方形竪穴遺構・43号土壙・44号土壙



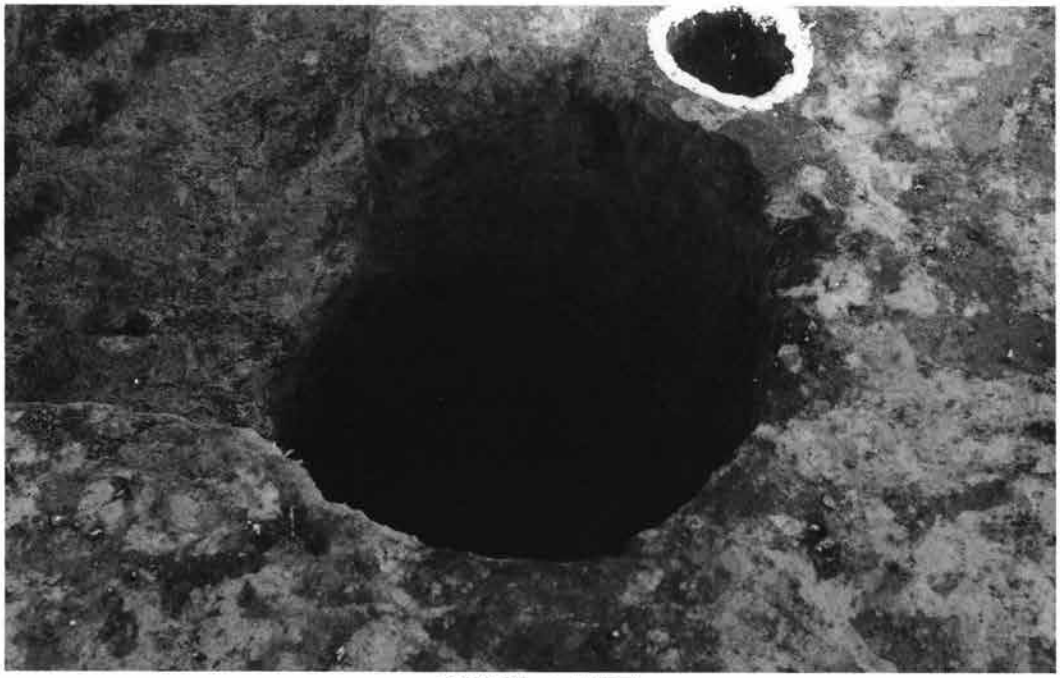
庚塚遺跡　方形竪穴遺構

図版 4

庚塚遺跡　竪穴遺構・掘立柱建物跡



庚塚遺跡　掘立柱建物跡

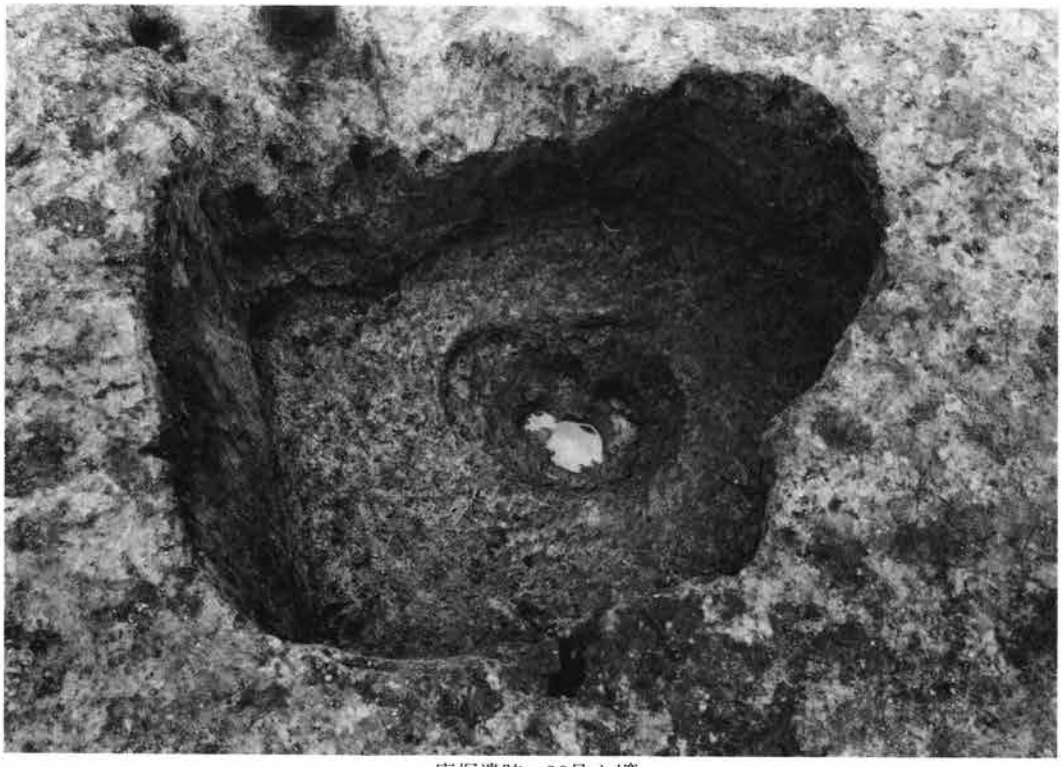


庚塚遺跡　1 号井戸

庚塚遺跡　3 号井戸

図版 6

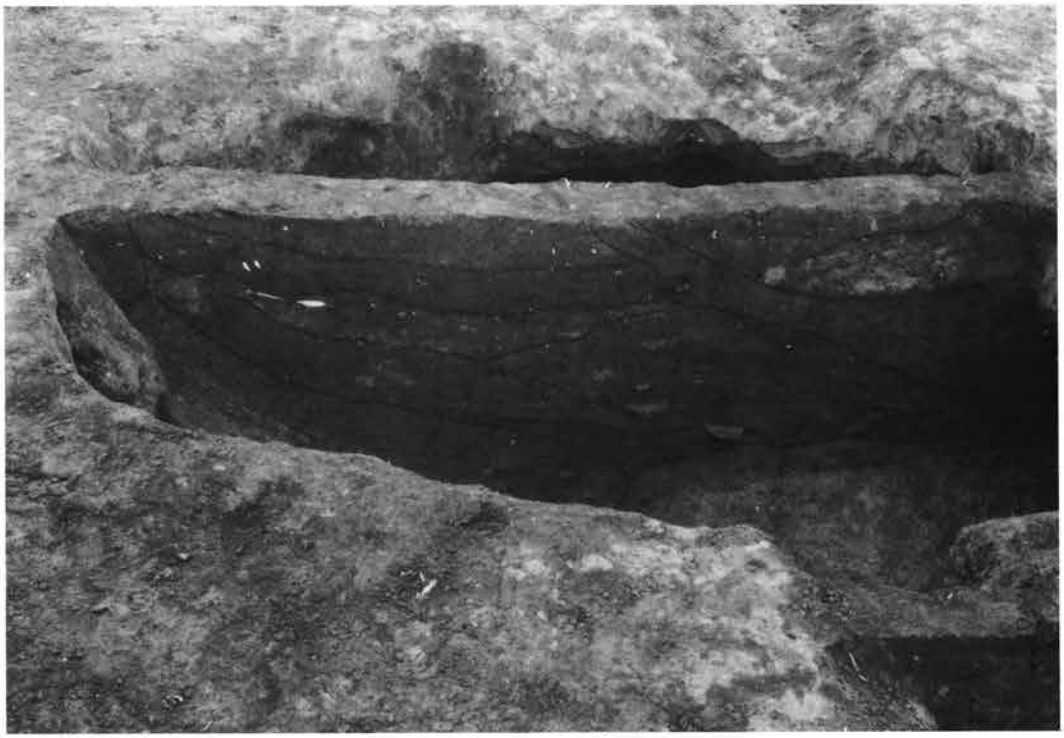
庚塚遺跡　7号井戸



庚塚遺跡　23号土壙

庚塚遺跡　7号井戸・23号土壙・24号土壙

図版8



庚塚遺跡　43号土壙断面

庚塚遺跡　43号土壙

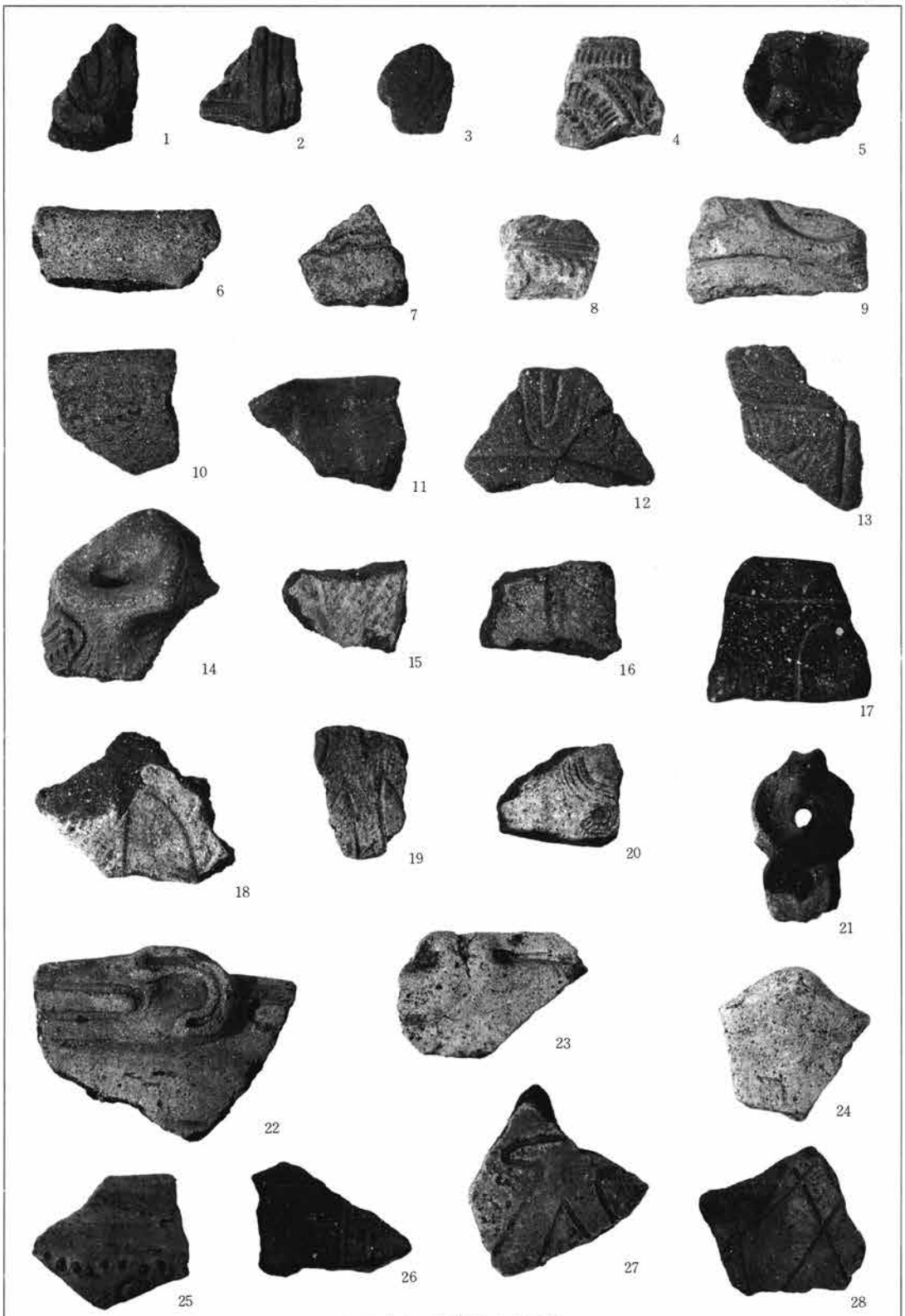
庚塚遺跡　16号土壙

庚塚遺跡　62号土壙

図版10

浄光寺堀跡

浄光寺五輪塔



庚塚遺跡　遺構外出土遺物

1

2

3

4

5

庚塚遺跡　11号溝出土石器

板碑　1

（下面）

（上面）　3

石臼

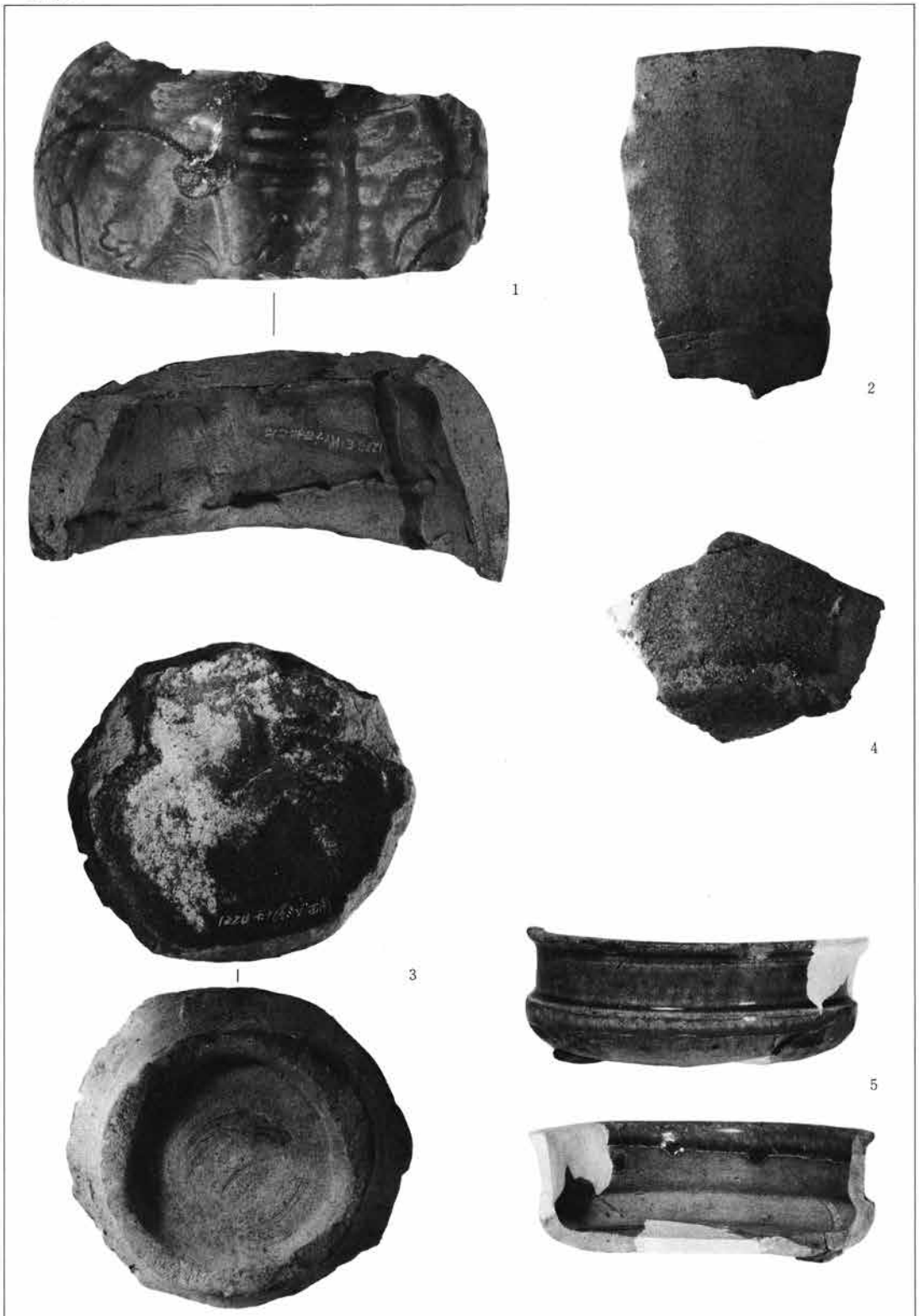
五輪塔　4

板碑　2

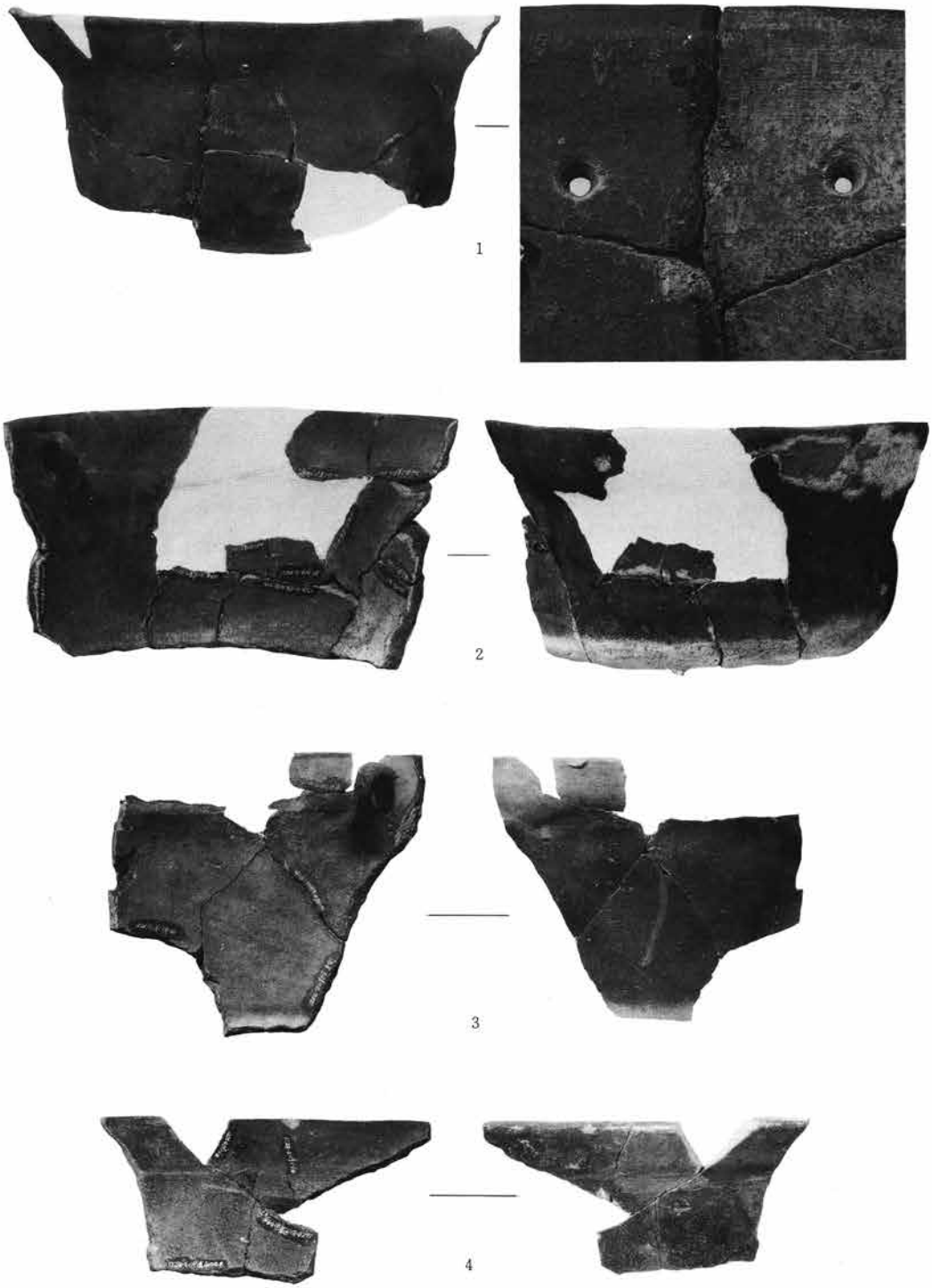
不明石製品　5

五輪塔　6

庚塚遺跡　石製品類



庚塚遺跡　11号溝出土遺物



庚塚遺跡　11号溝出土遺物

1

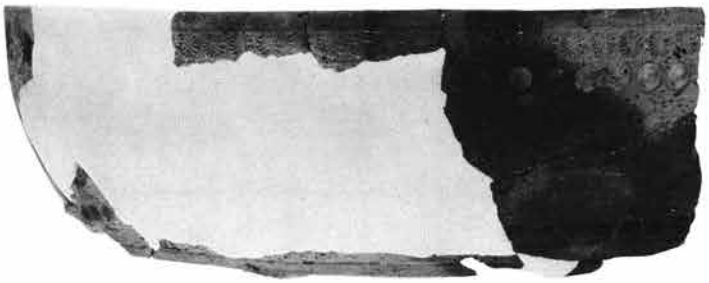
2

3

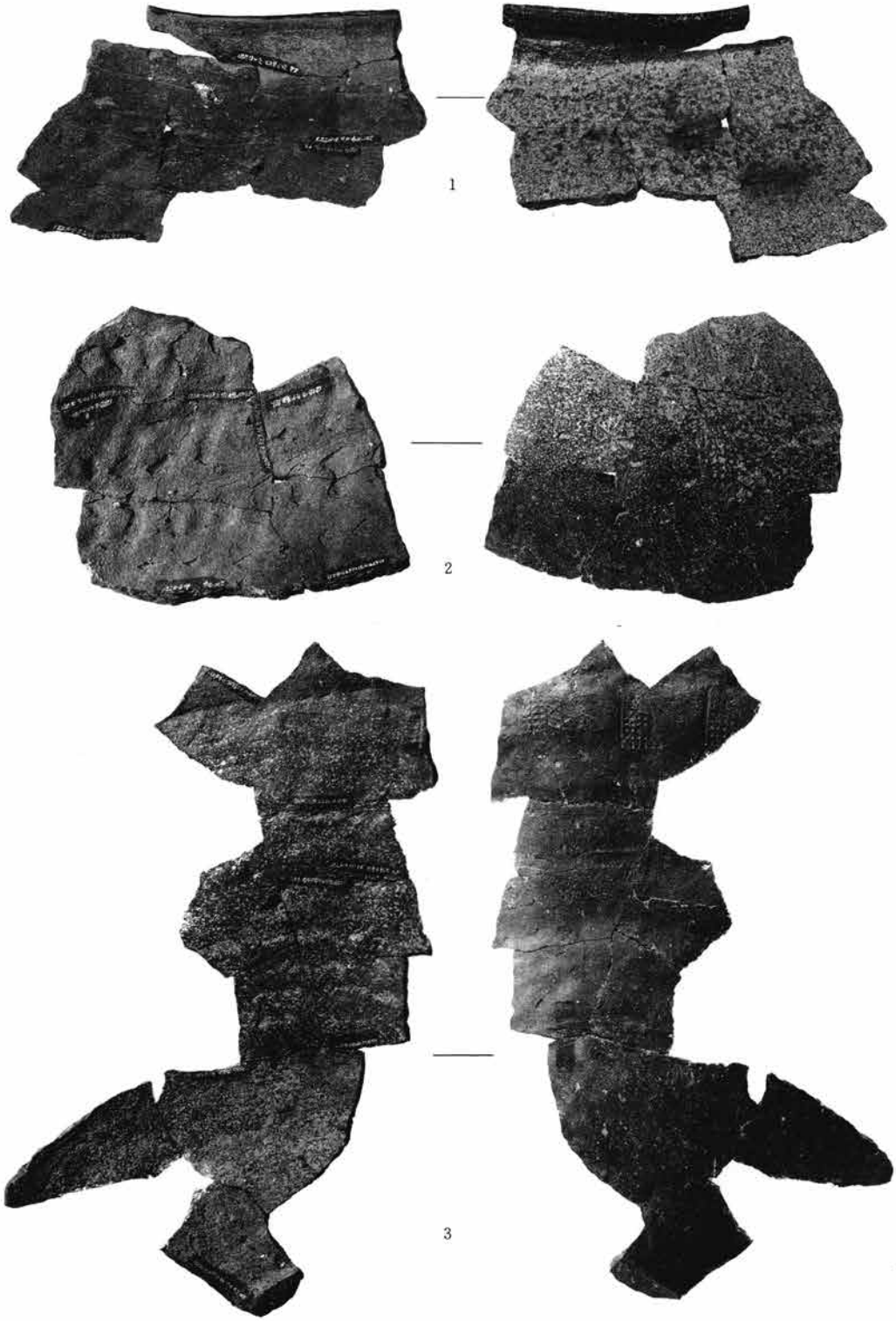
4

5

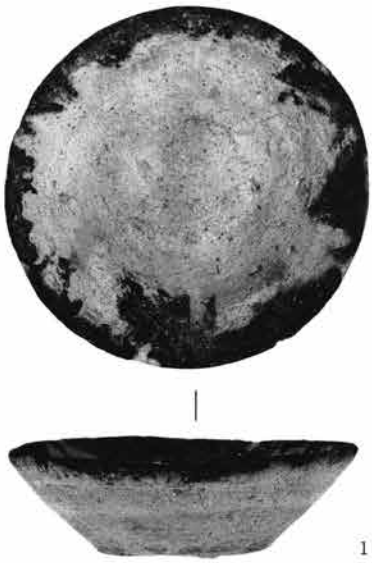
6


7

庚塚遺跡　11号溝出土遺物



庚塚遺跡　11号溝・43号土壙出土遺物



1

2

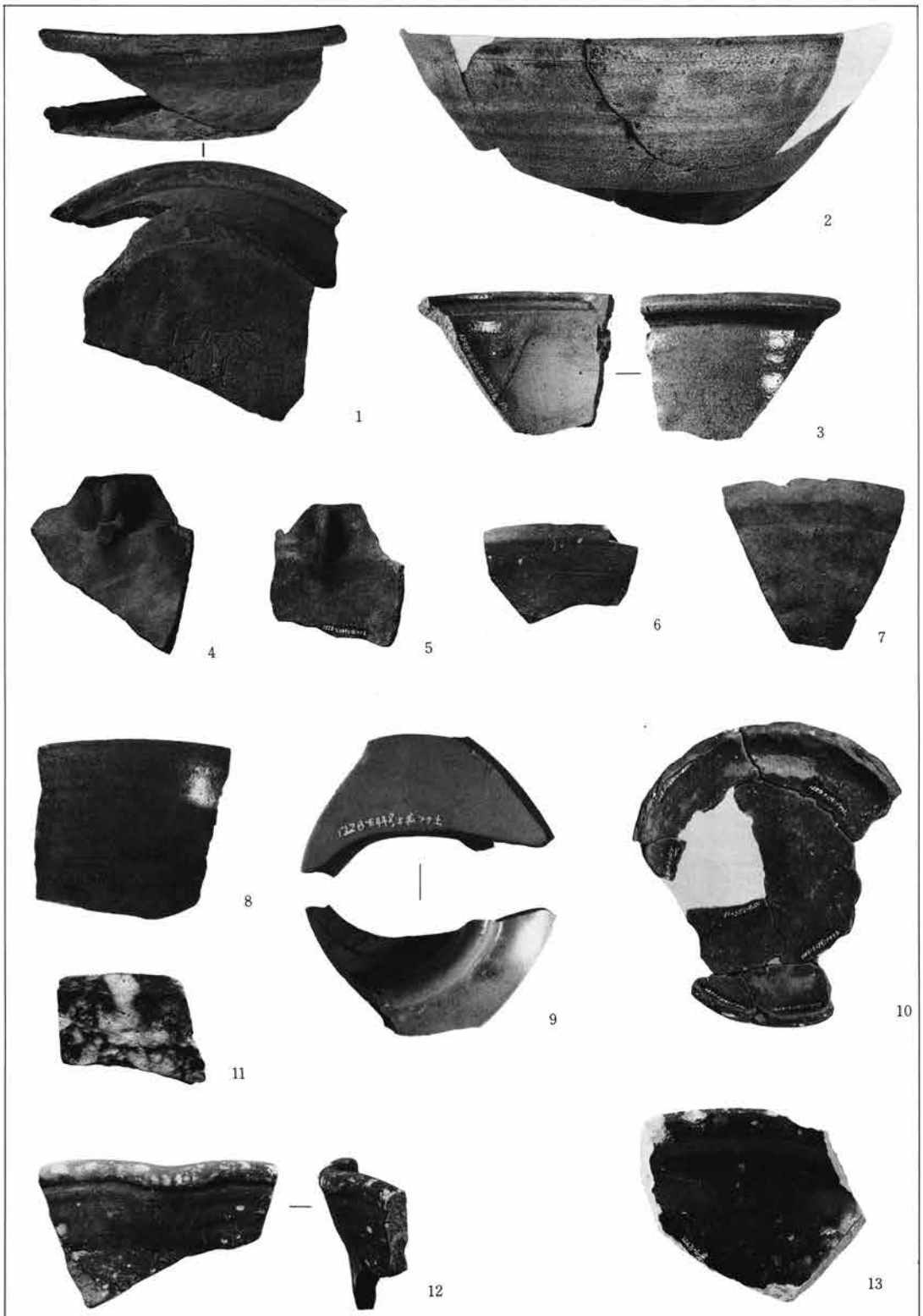
3

4

5

6

122号遺跡　庚塚遺跡　11号講出土遺物



庚塚遺跡　井戸・土壙出土遺物

図版20

上遺跡調査前状況　（南方ヨリ）

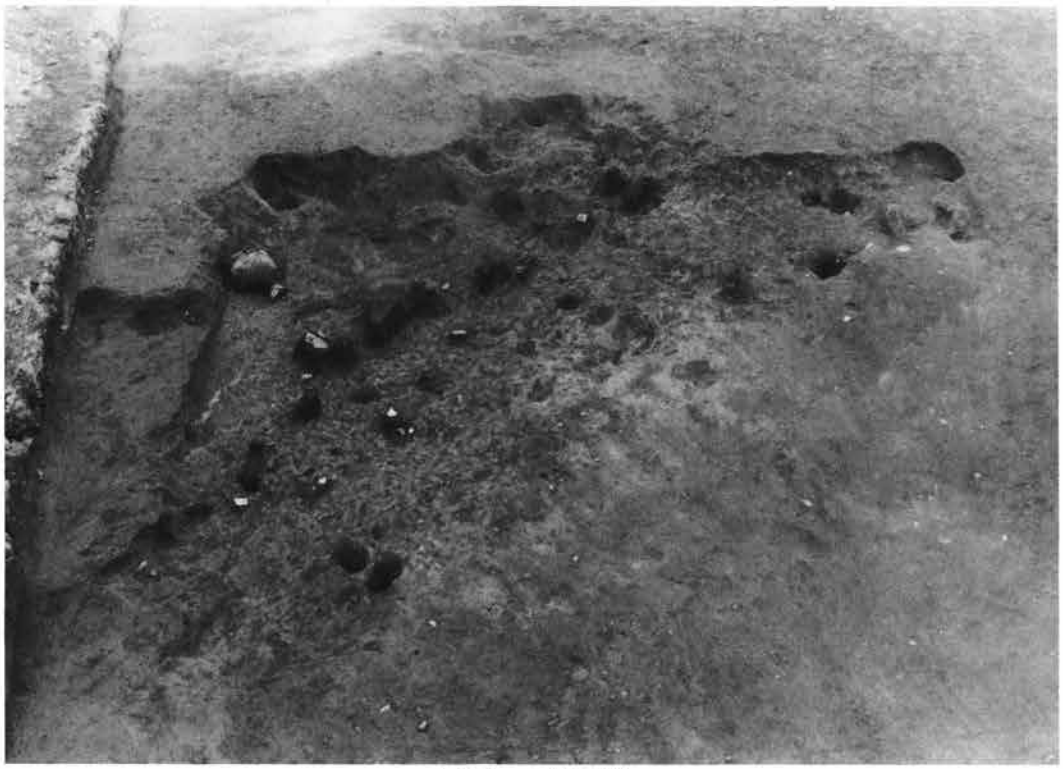
国道122号バイパス現状　（上遺跡）

上遺跡　1号住居跡断面

上遺跡　1号住居跡遺物出土状況

上遺跡　1号住居跡遺物出土状況

上遺跡　1号住居跡



上遺跡　2号住居跡

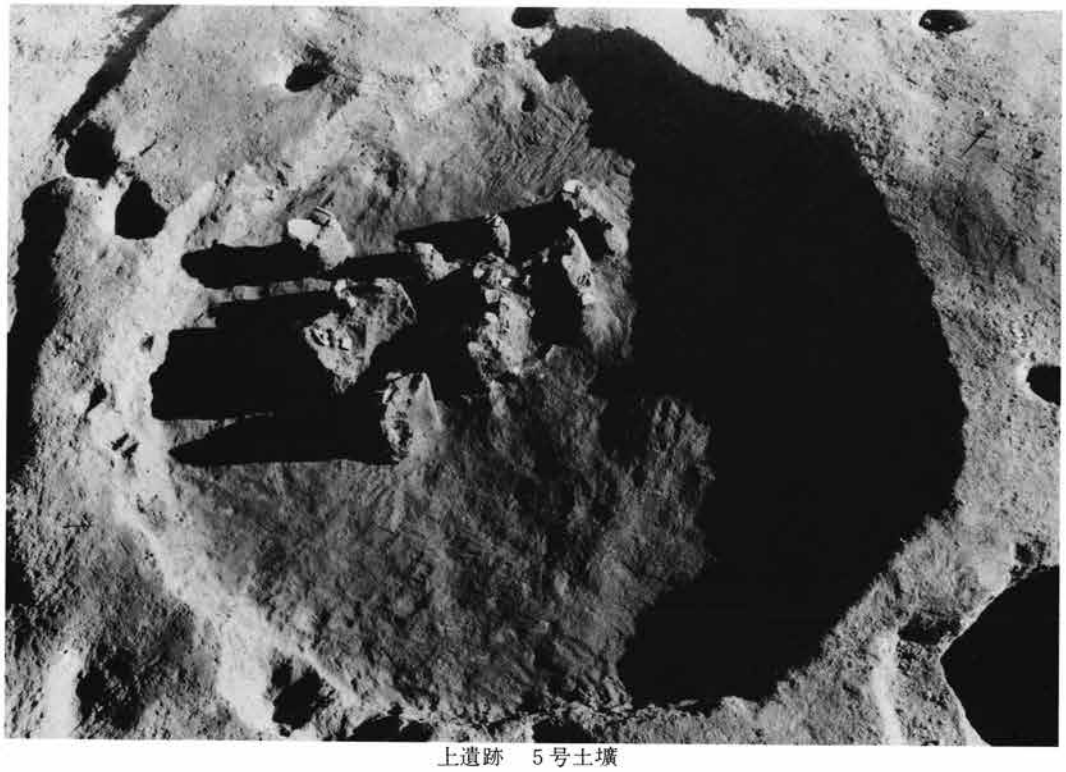
上遺跡　2号住居跡遺物出土状況

図版24

上遺跡　3号住居跡遺物出土状況

上遺跡　3号住居跡

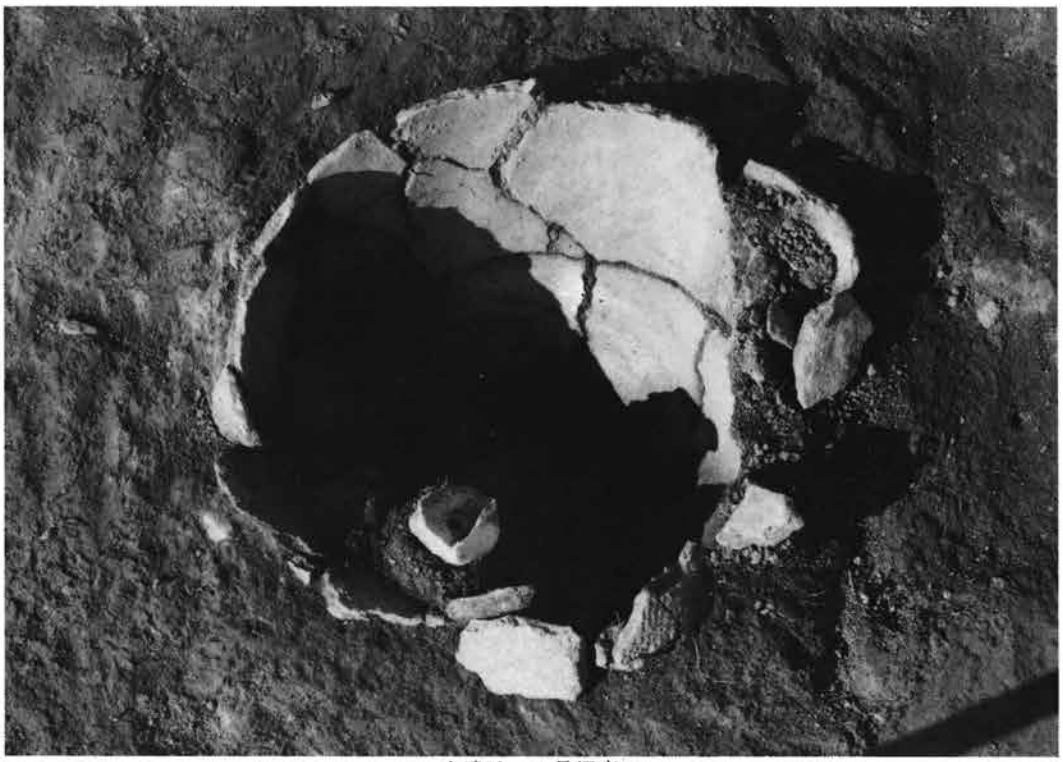
上遺跡　4号住居跡



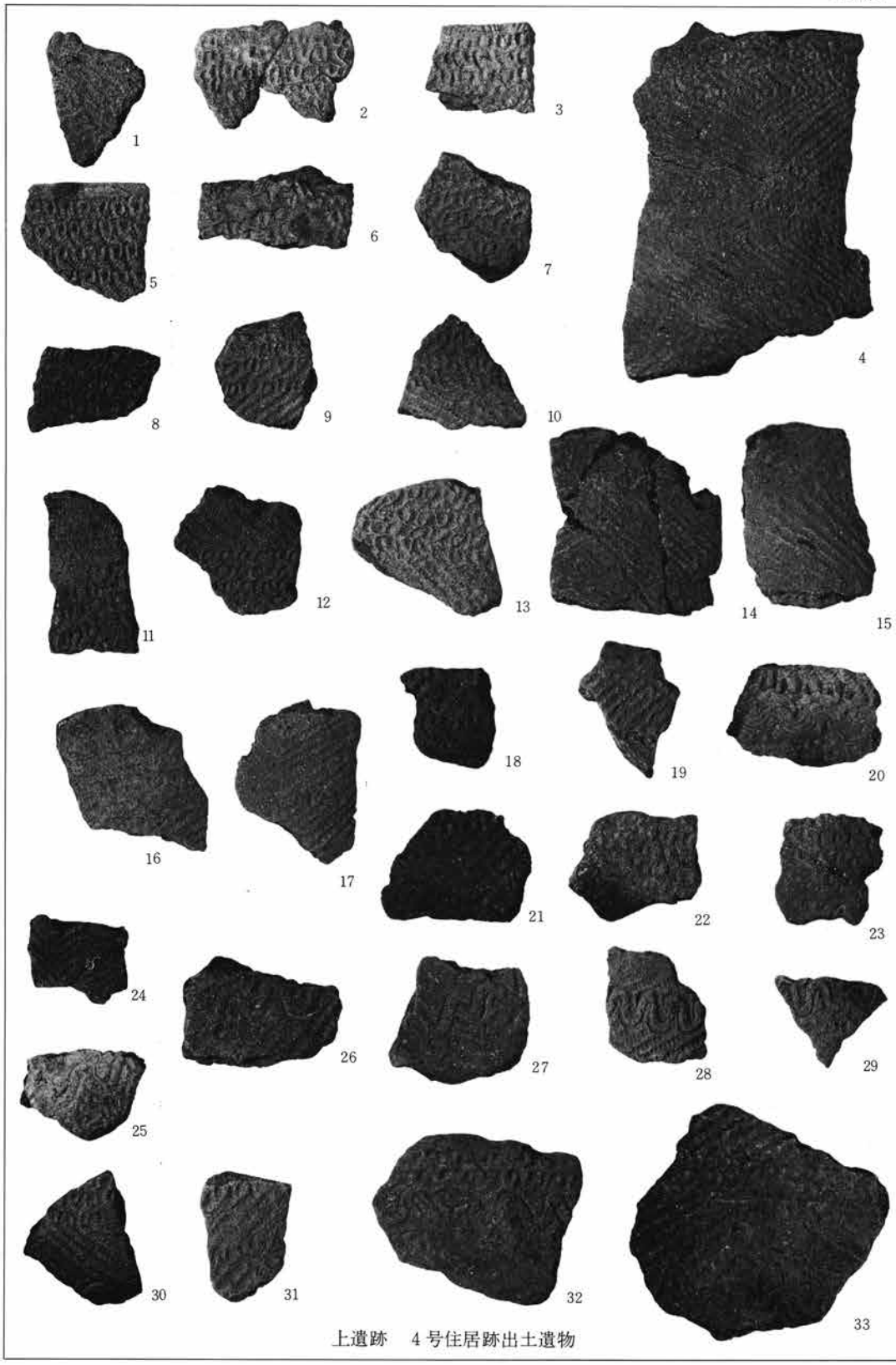
上遺跡　5号土壙

図版26

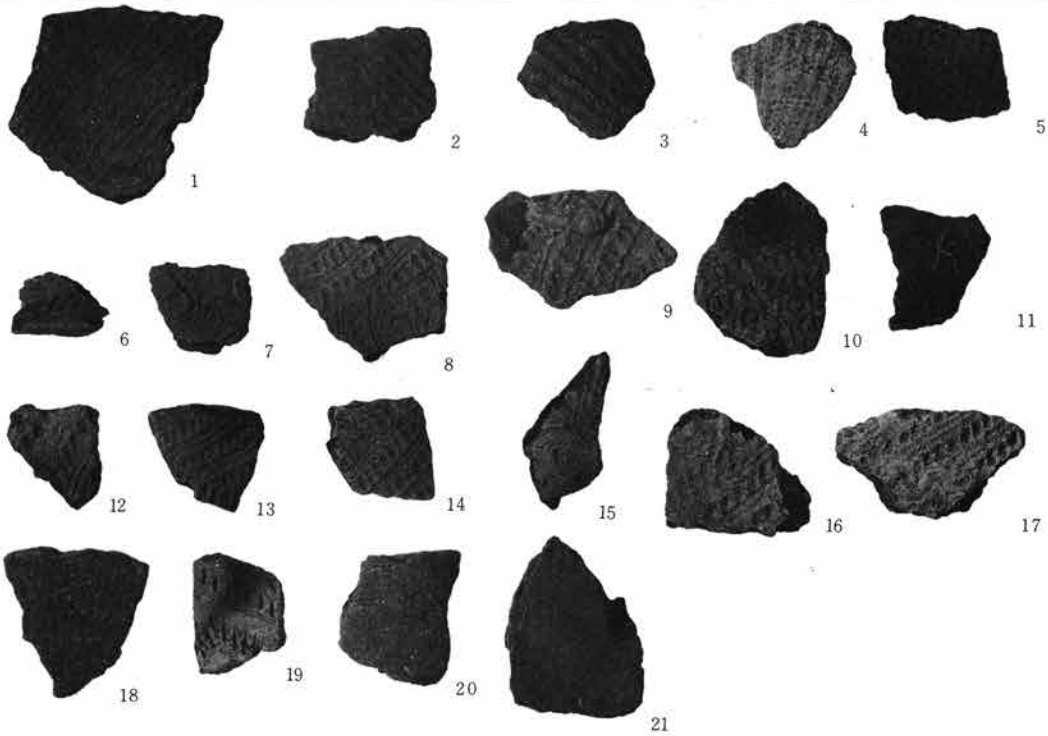
上遺跡　1号埋甕炉断面



上遺跡　1号埋甕



上遺跡　4号住居跡出土遺物



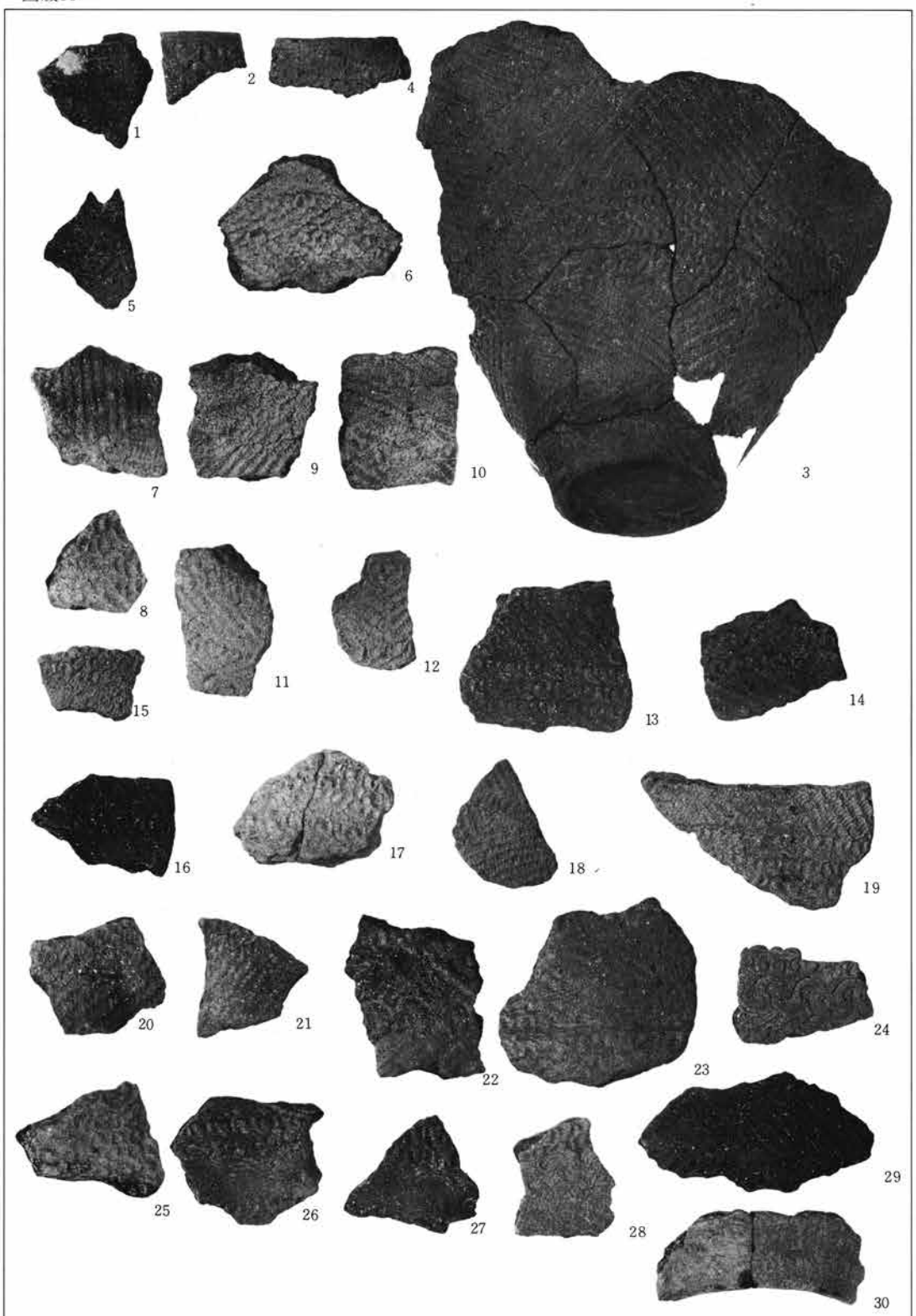
上遺跡　4号住居跡出土遺物

1

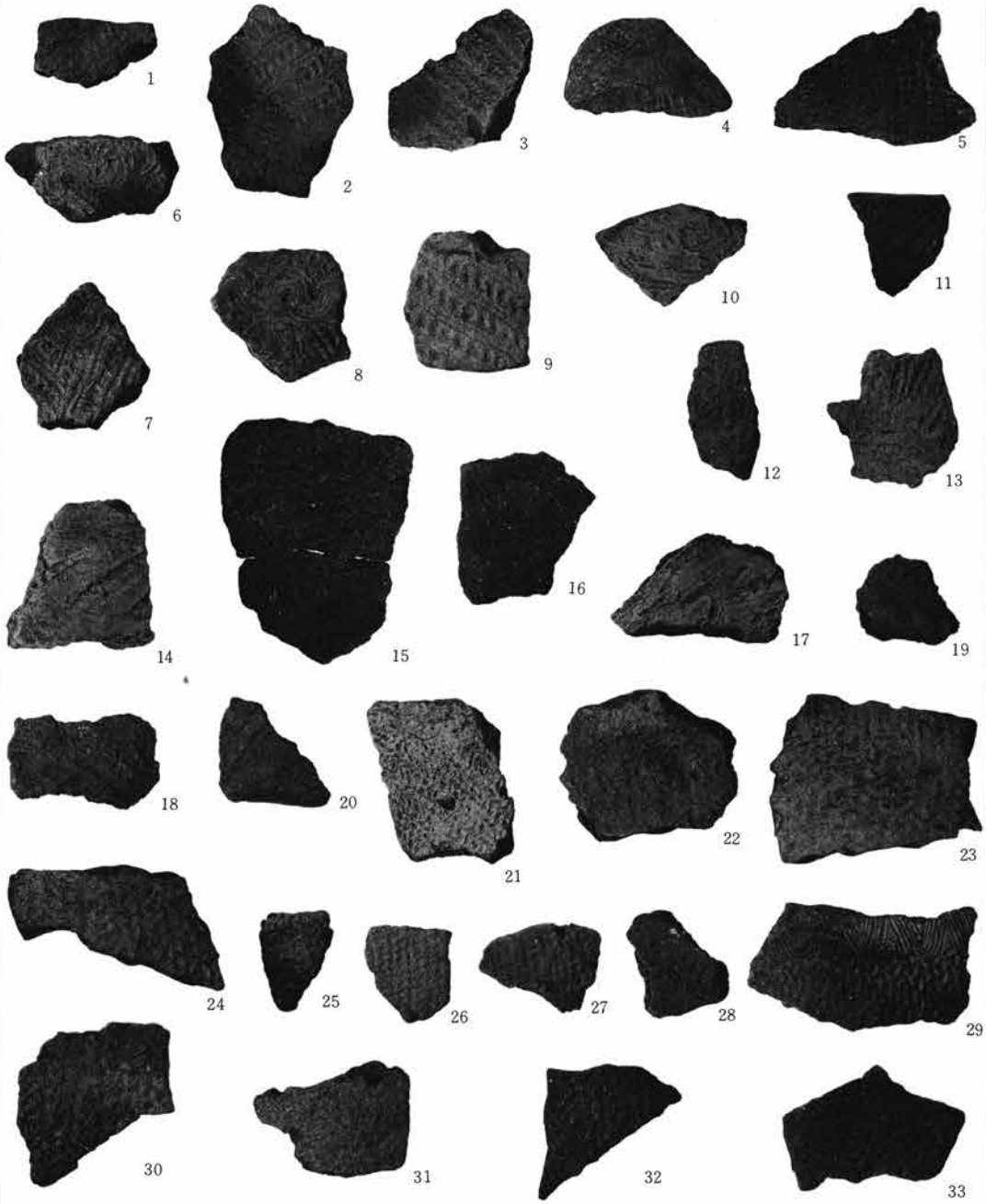
2

3

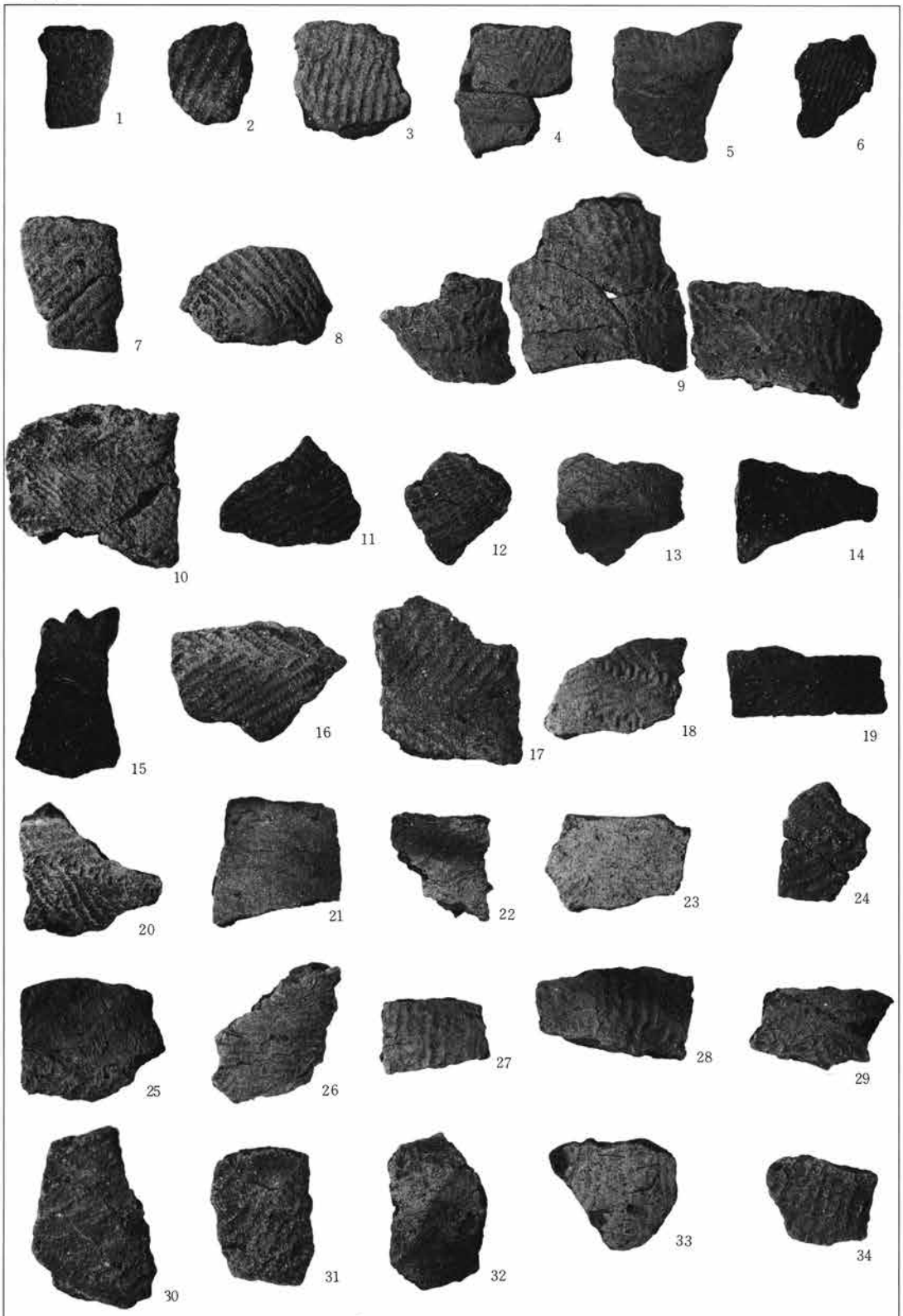
上遺跡　5号住居跡出土遺物



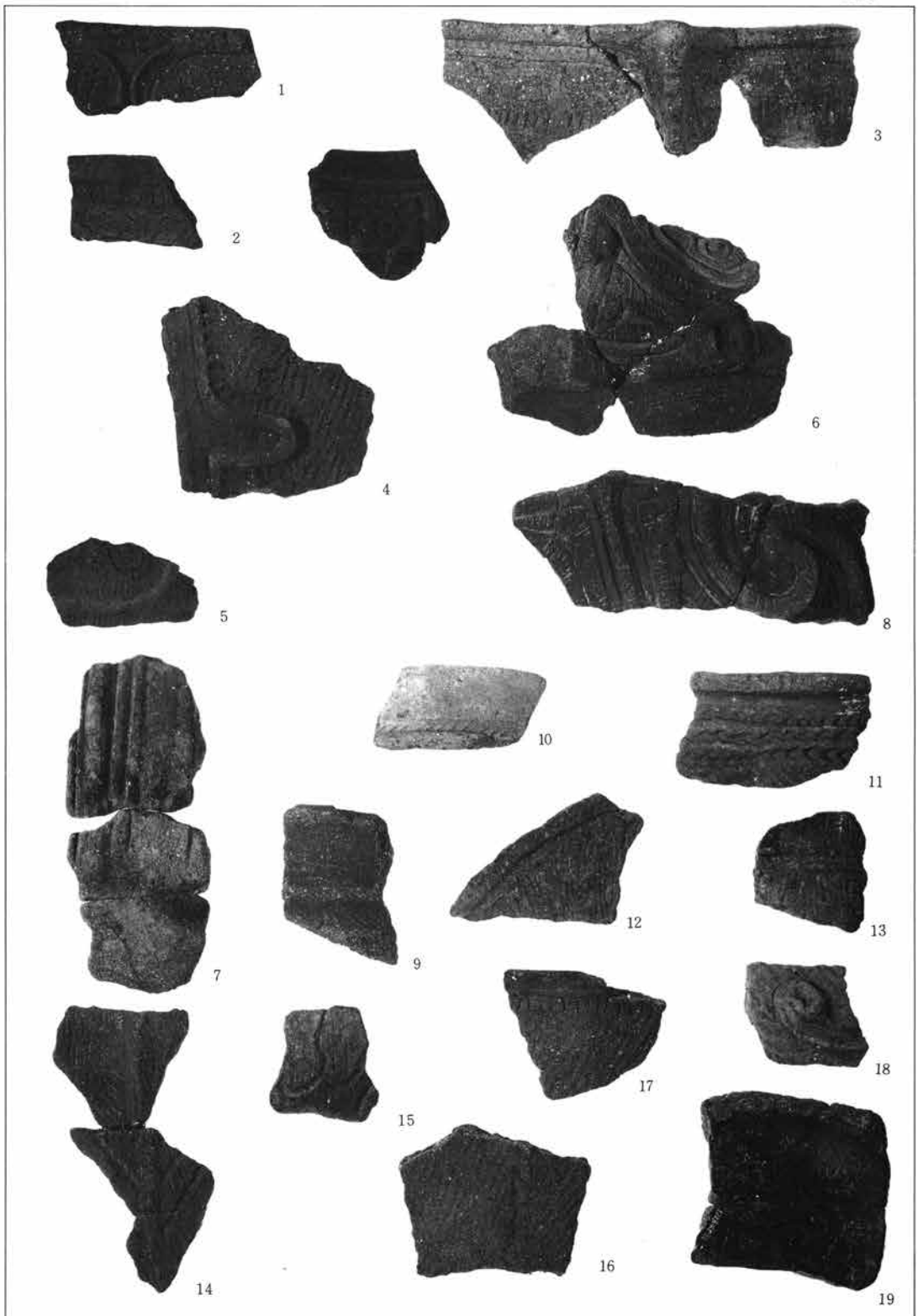
上遺跡　5号住居跡出土遺物



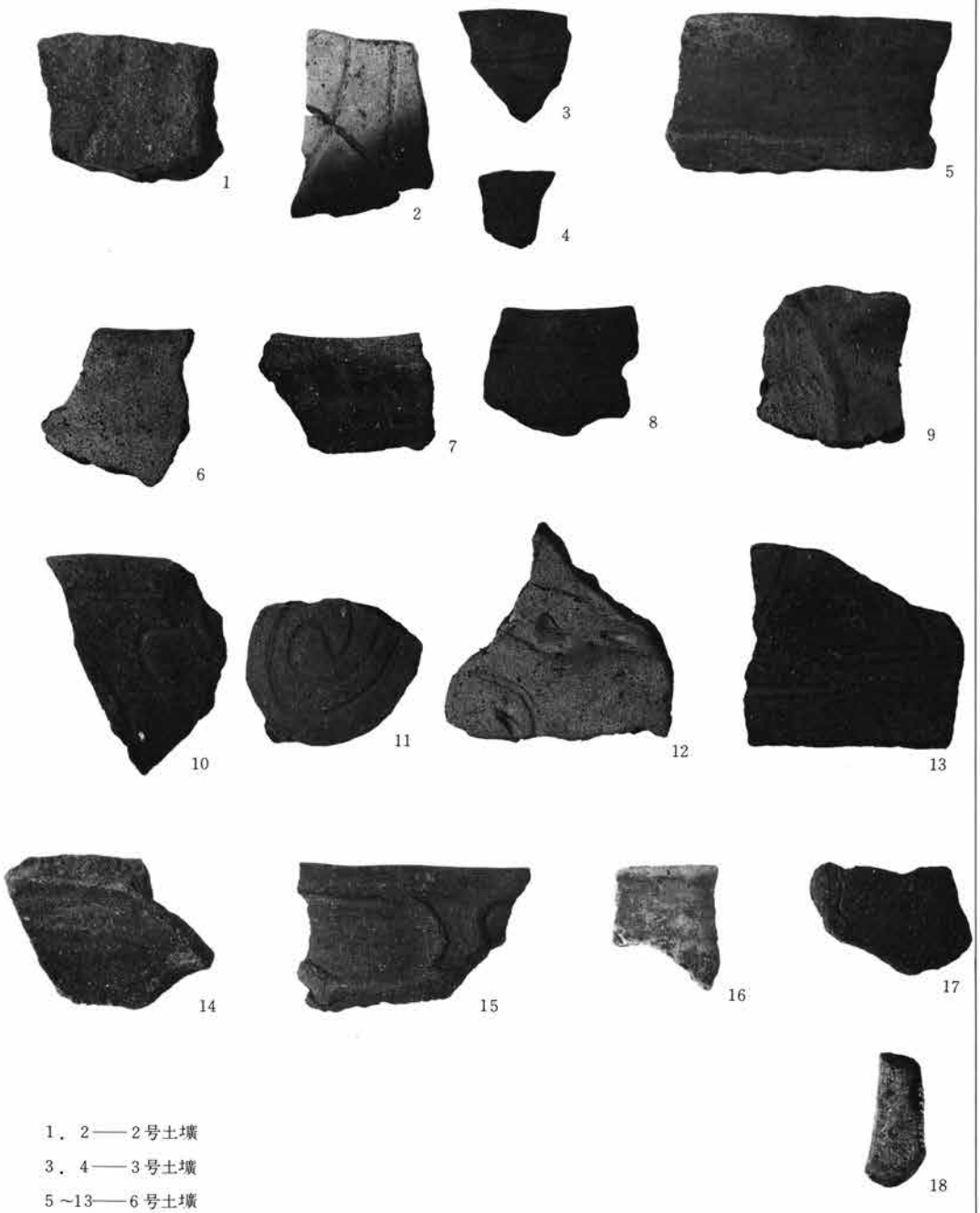
上遺跡　5号住居跡出土遺物



上遺跡　5号住居跡出土遺物

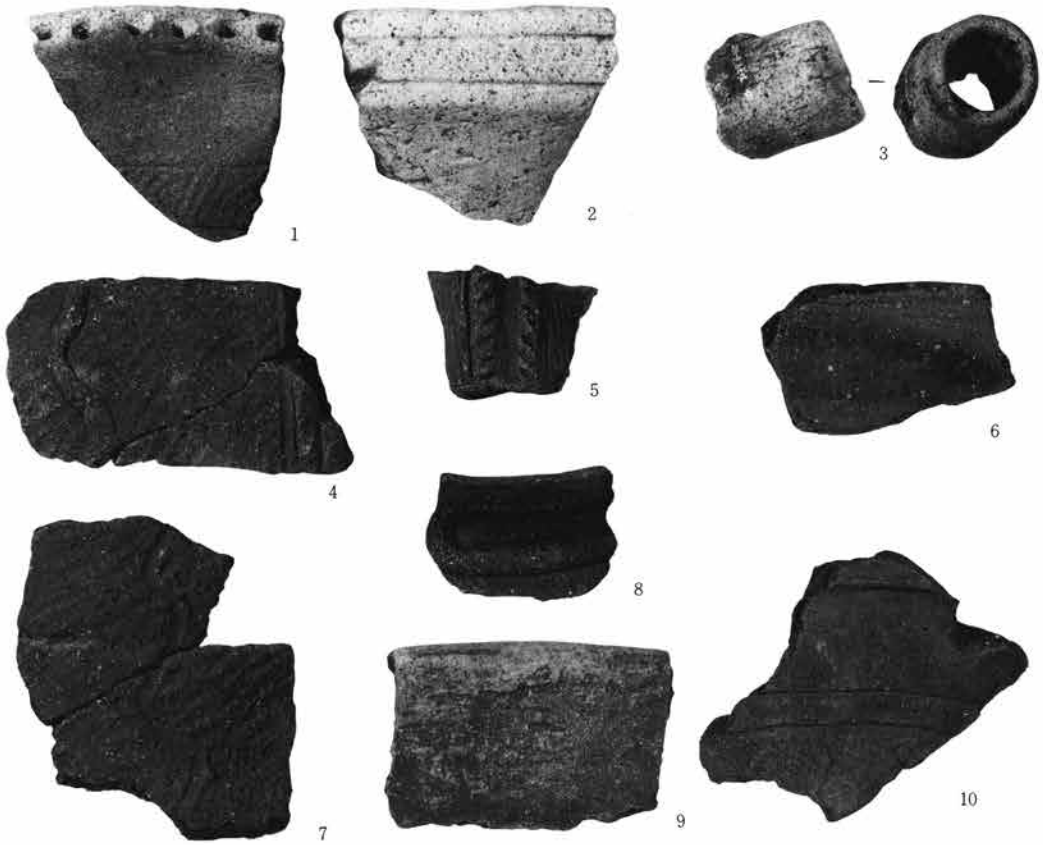


上遺跡　5号土壙出土遺物



1．2――2号土壙
3．4――3号土壙
5～13――6号土壙
14～17――9号土壙
18――12号土壙

上遺跡　土壙出土遺物



1～3――6号土坑

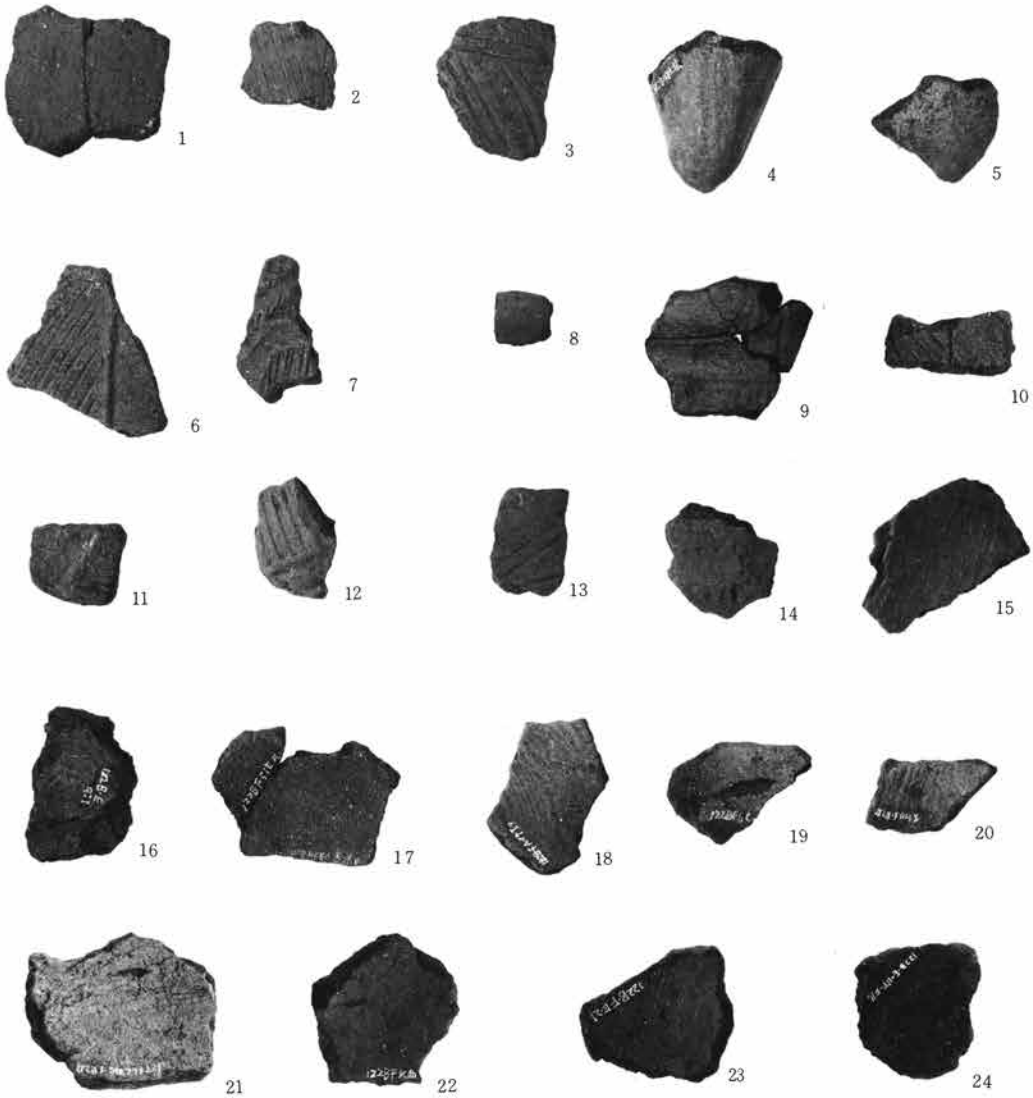
4～5――7号土坑

6～10――8号土坑

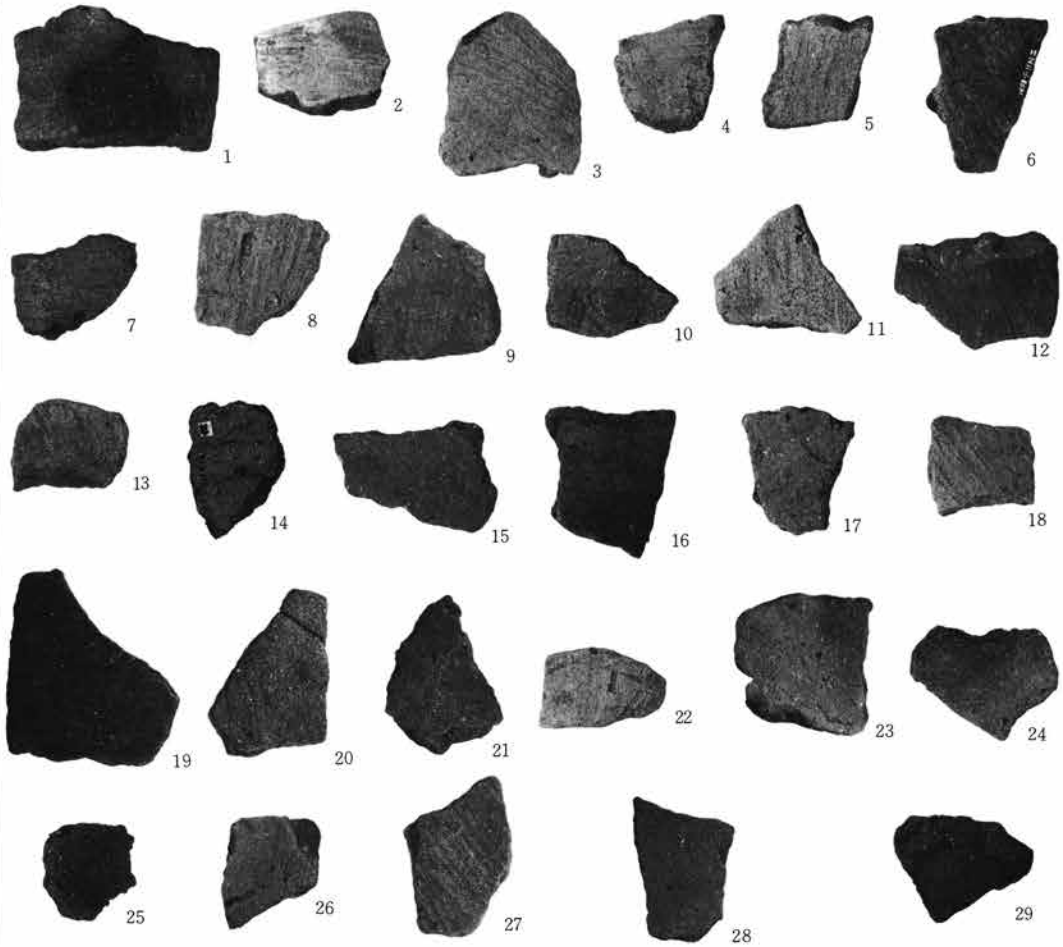
上遺跡　土壙出土遺物

上遺跡　1号埋甕土器

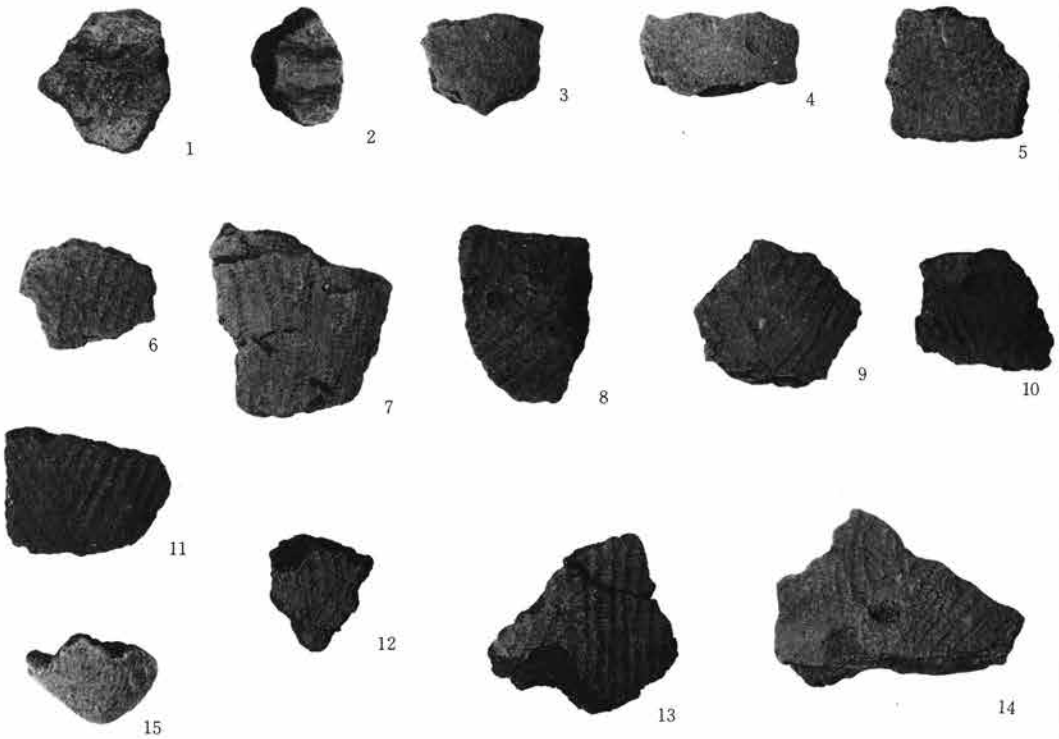
上遺跡　2号埋甕土器



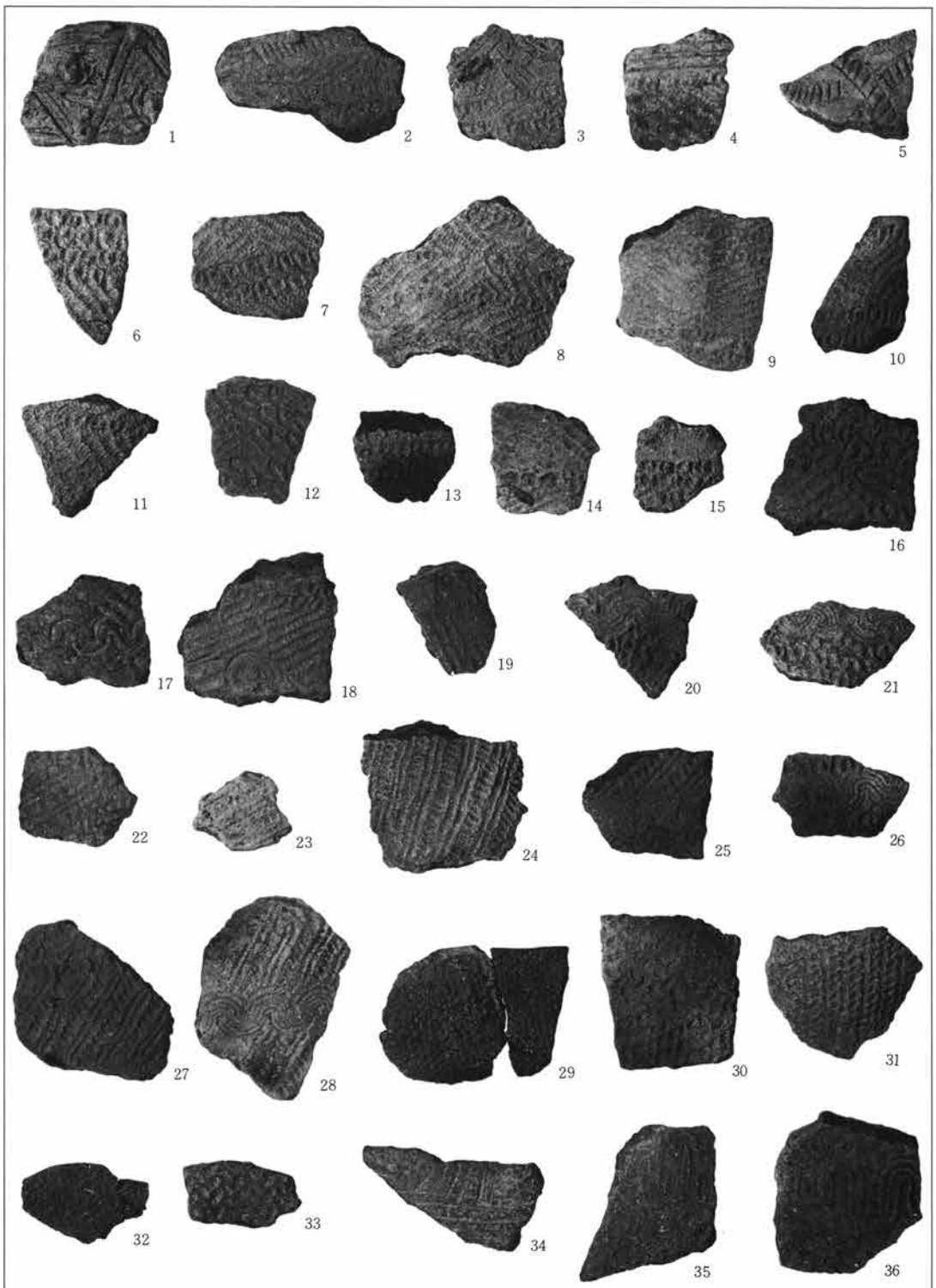
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第1・2・3群）



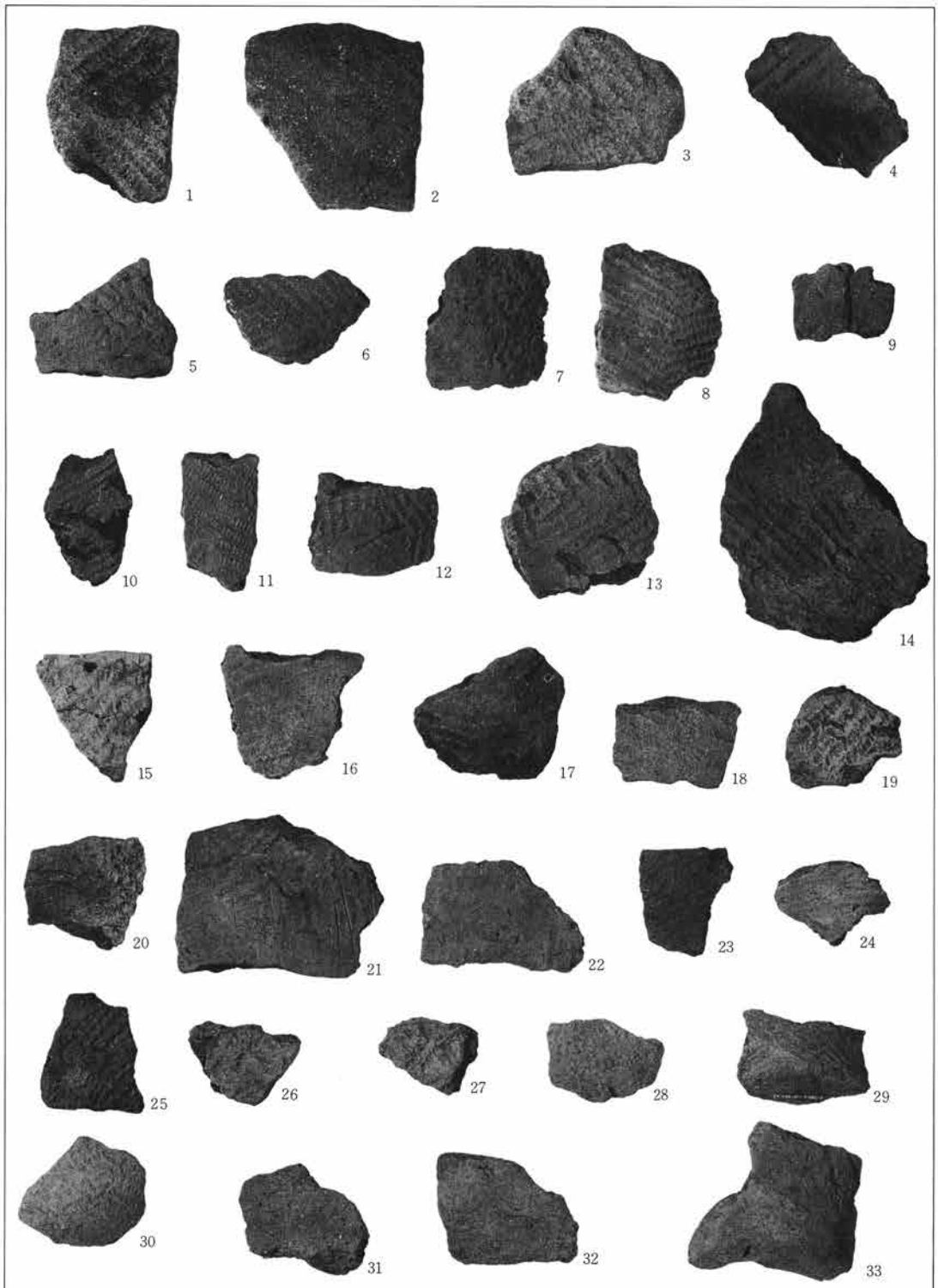
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第3群）



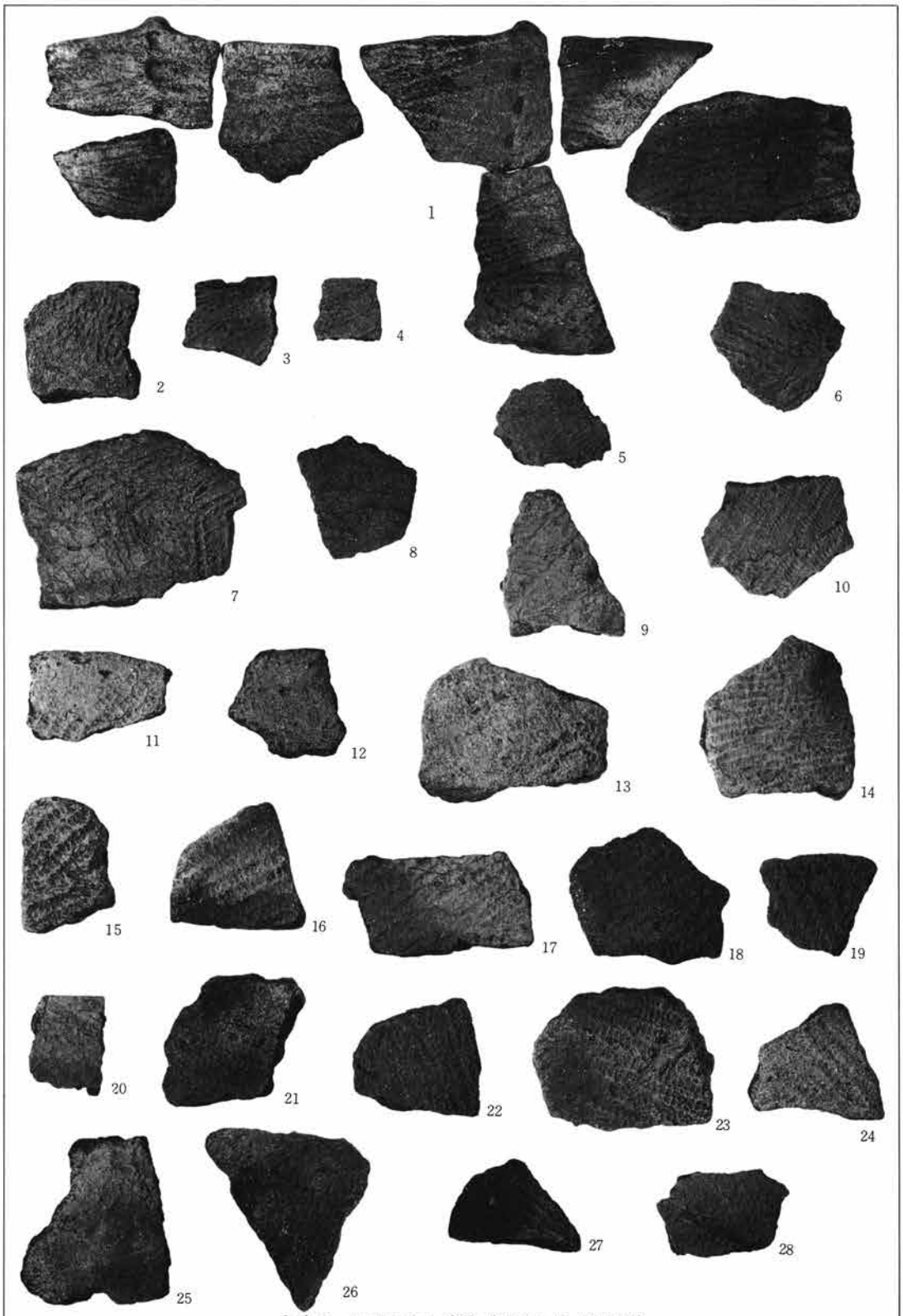
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第4群）



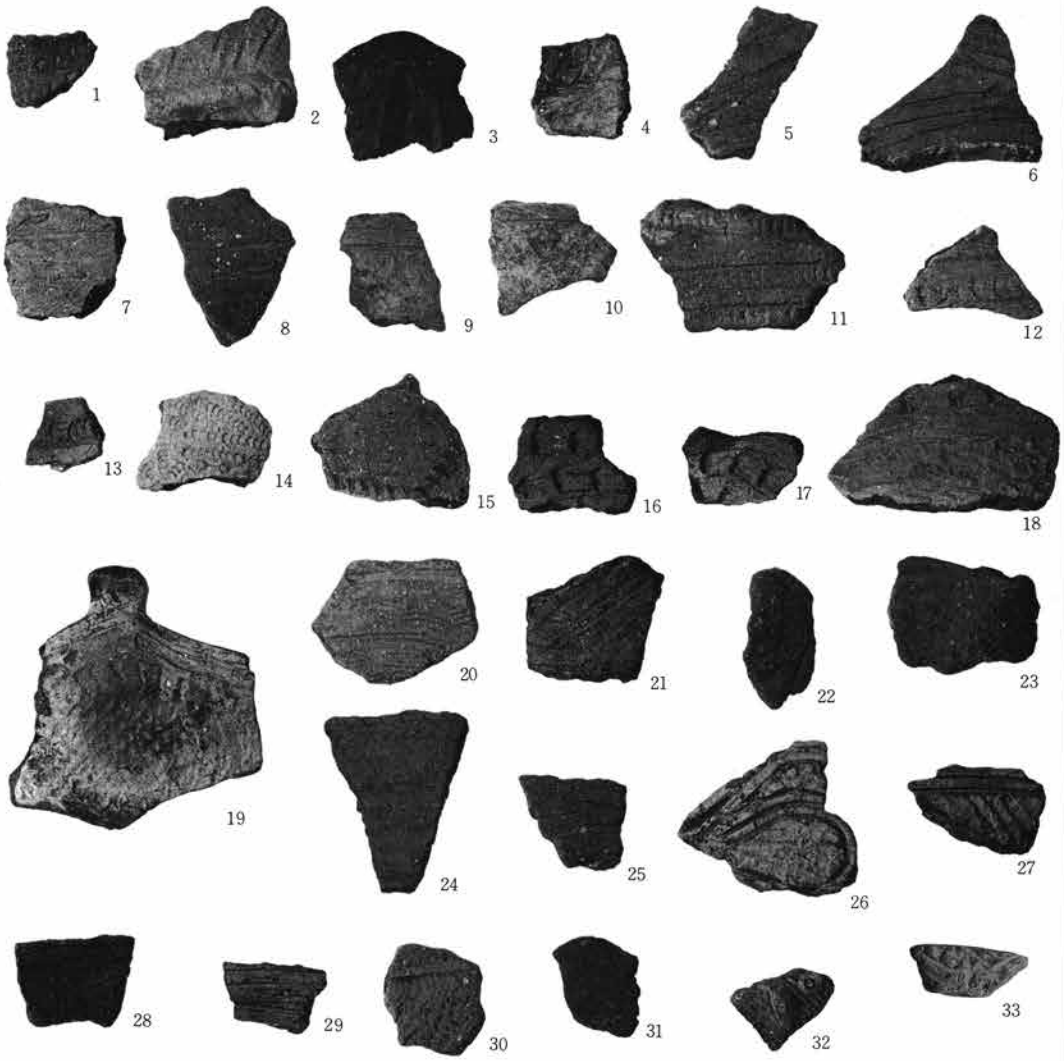
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第5群）



上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第6群）

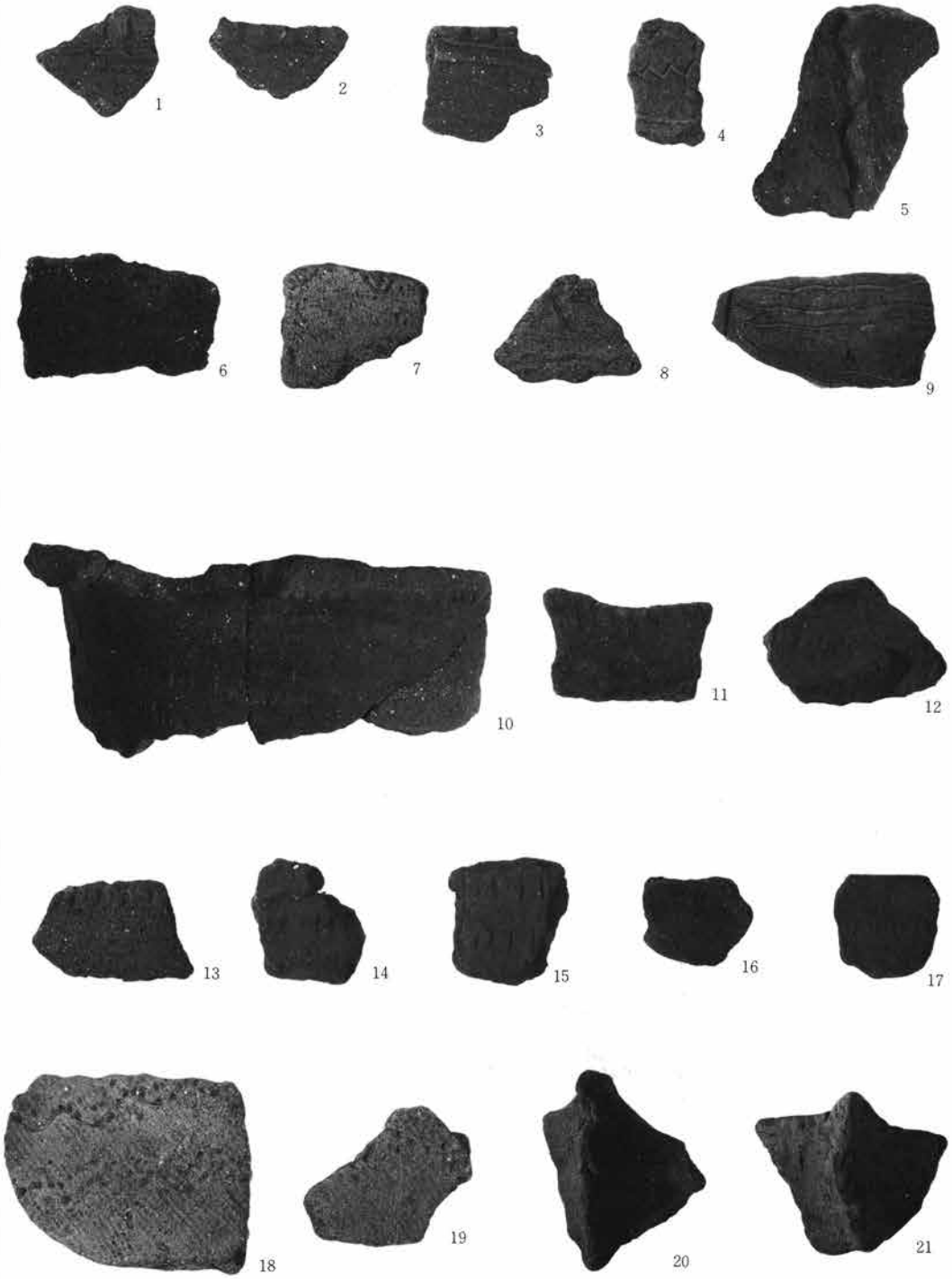


上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第6群）

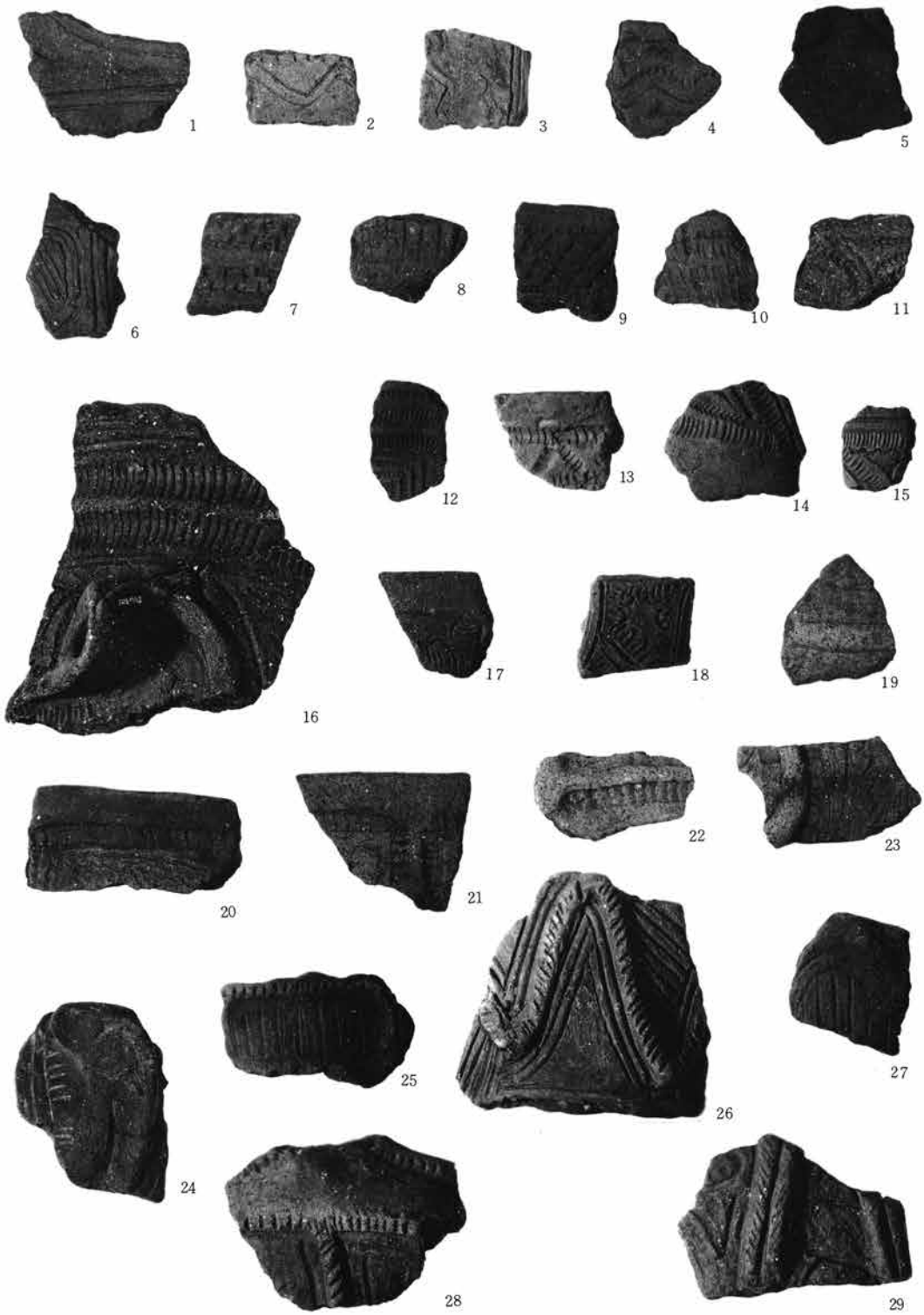


上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器第６・７群）

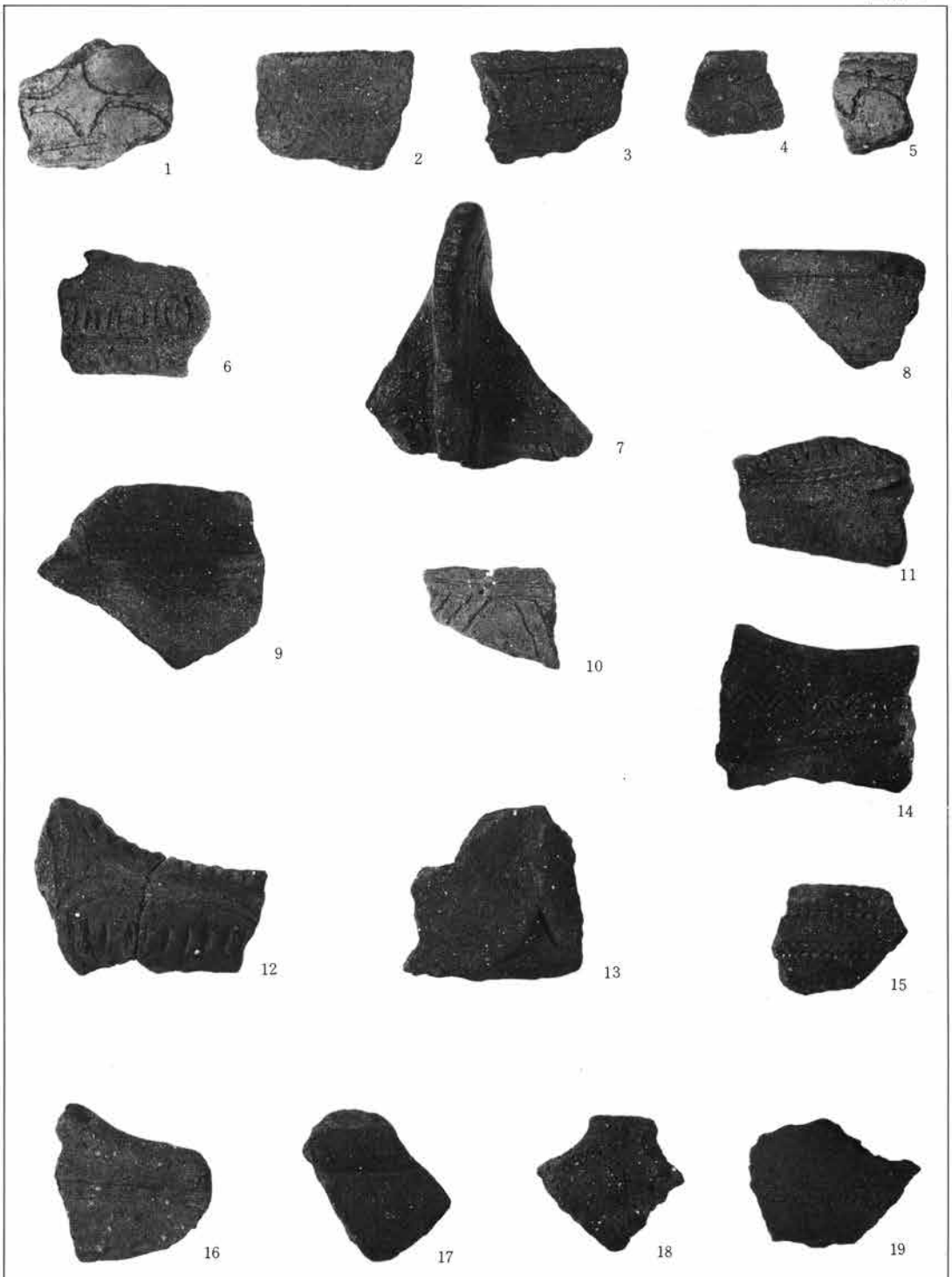
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第８群）



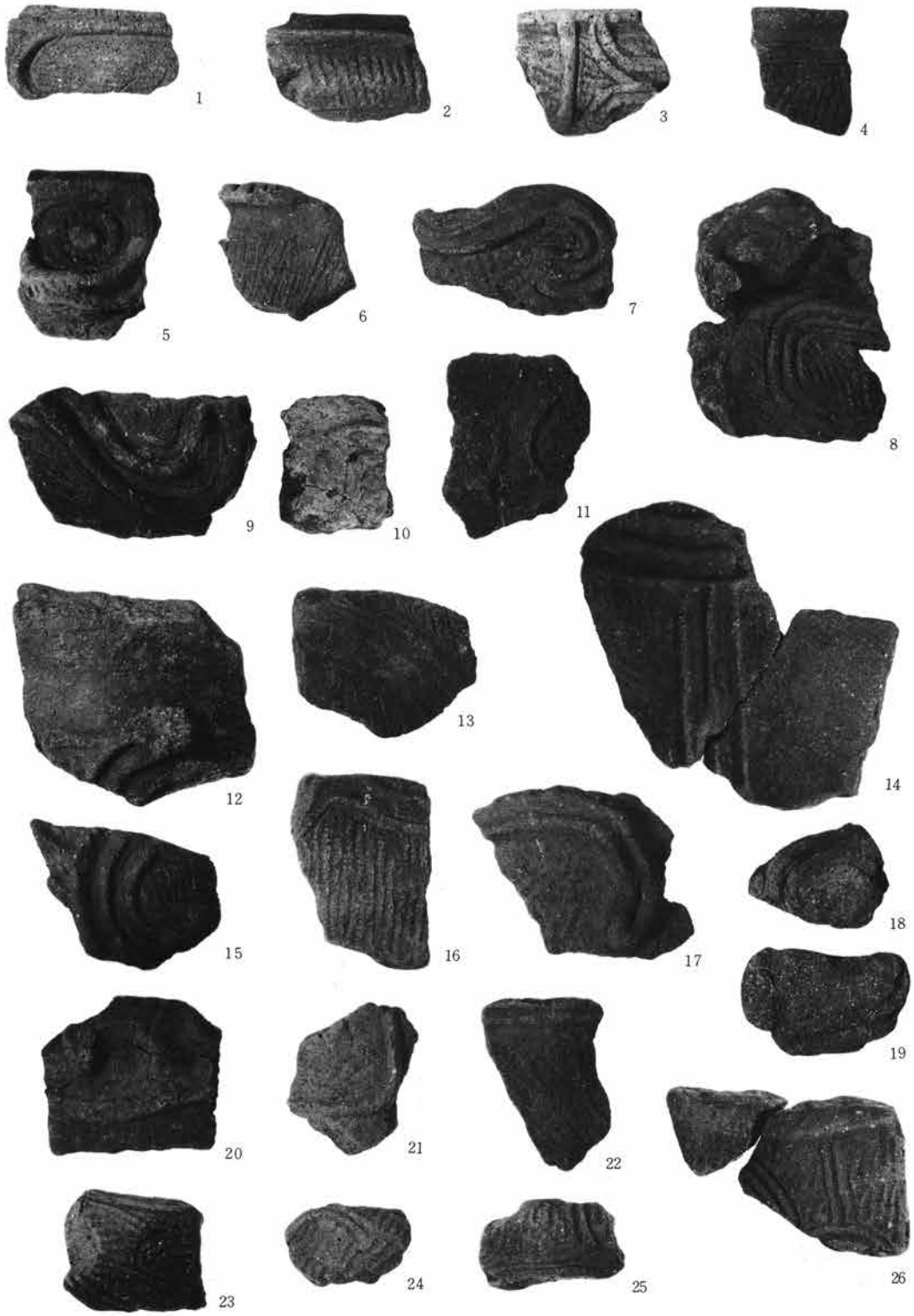
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第８群）



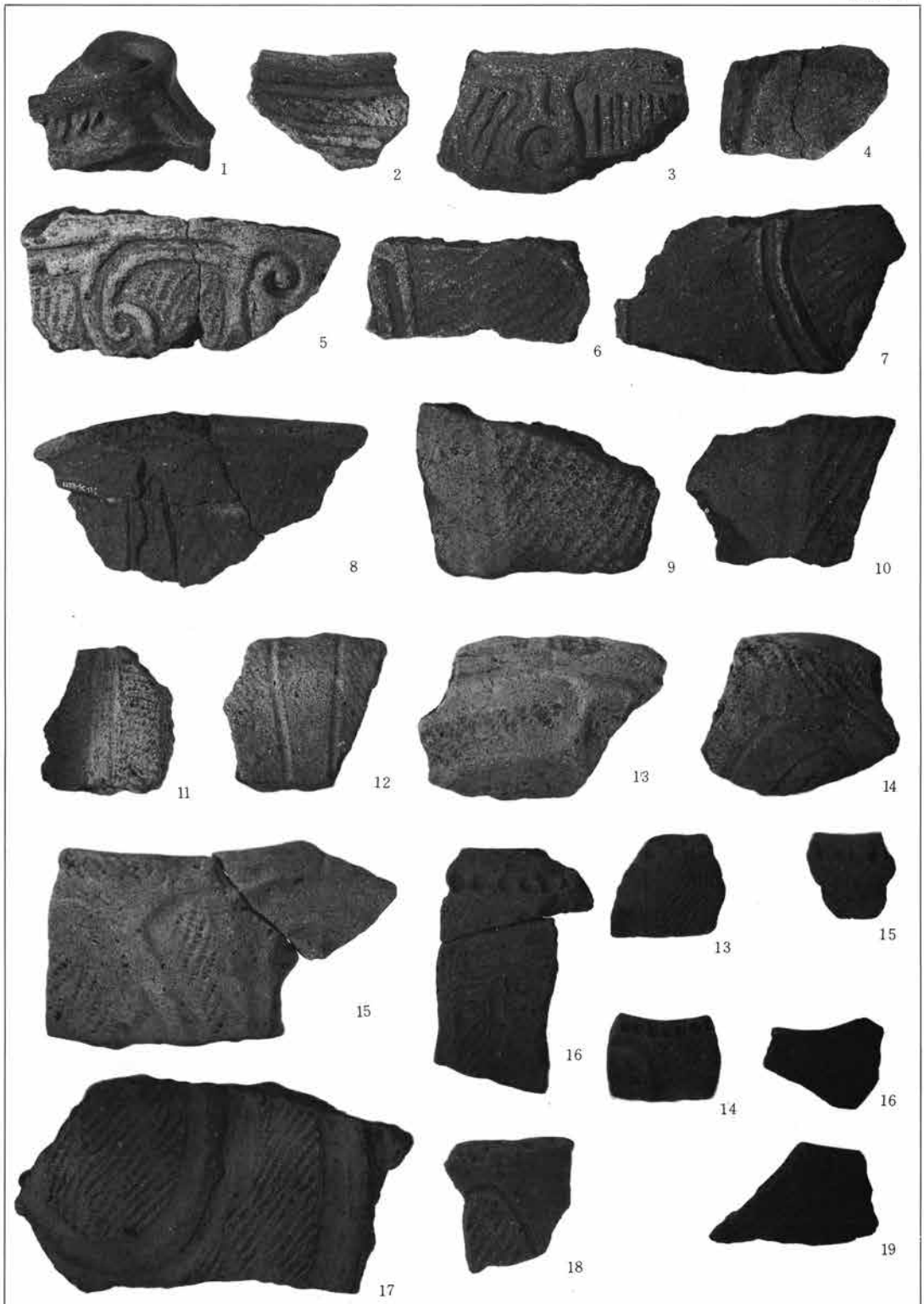
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第８群）



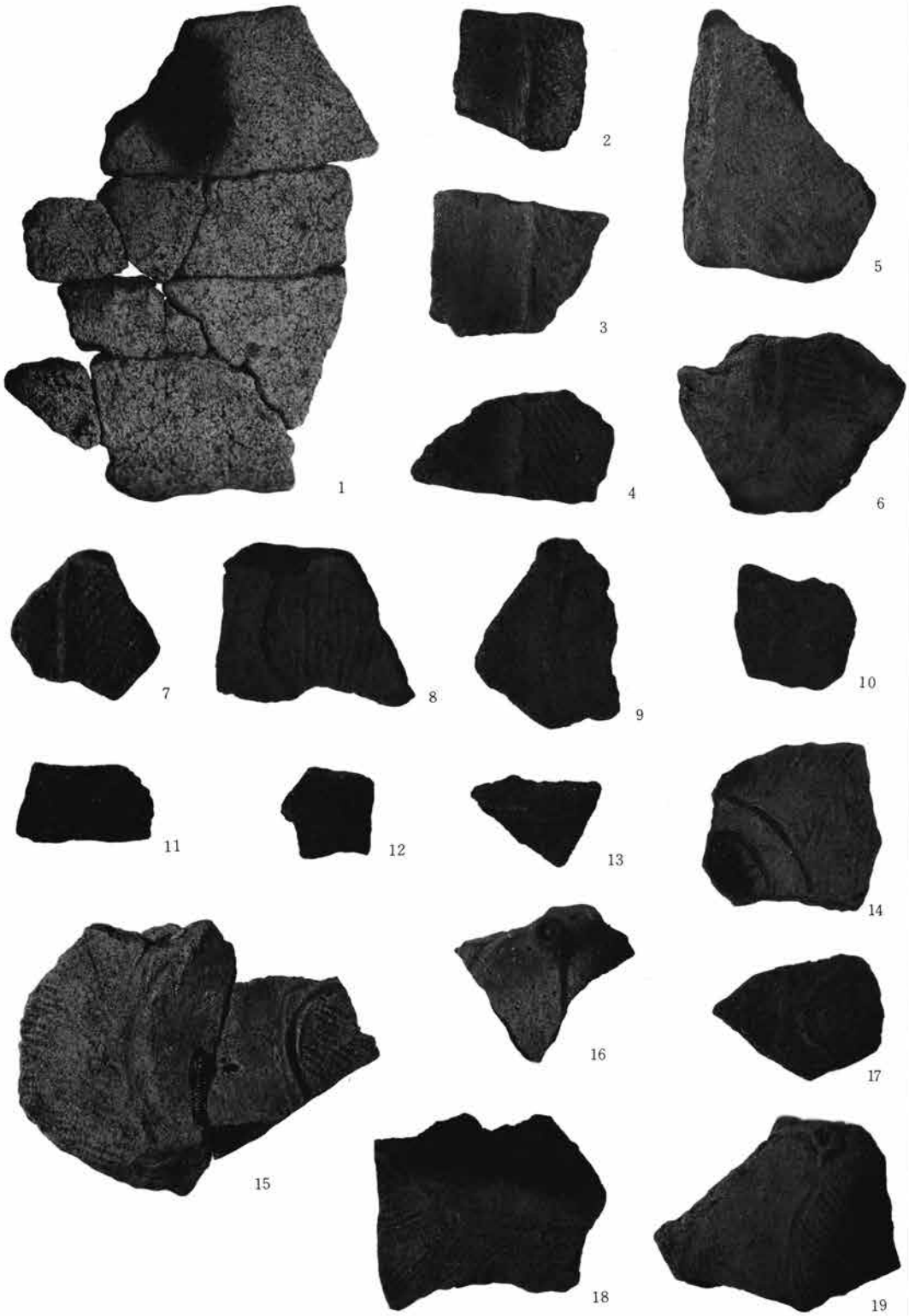
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第８群）



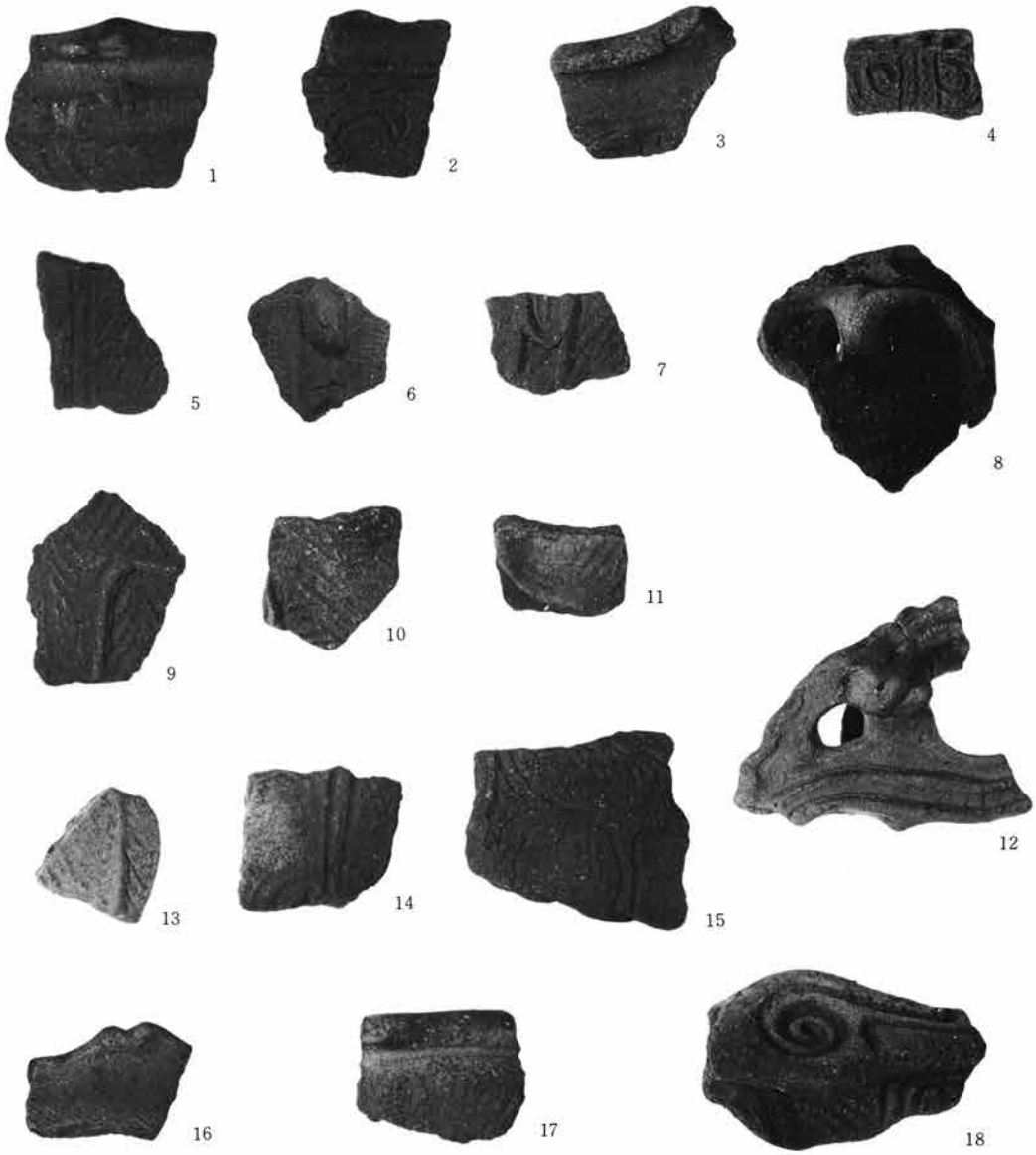
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第9群）



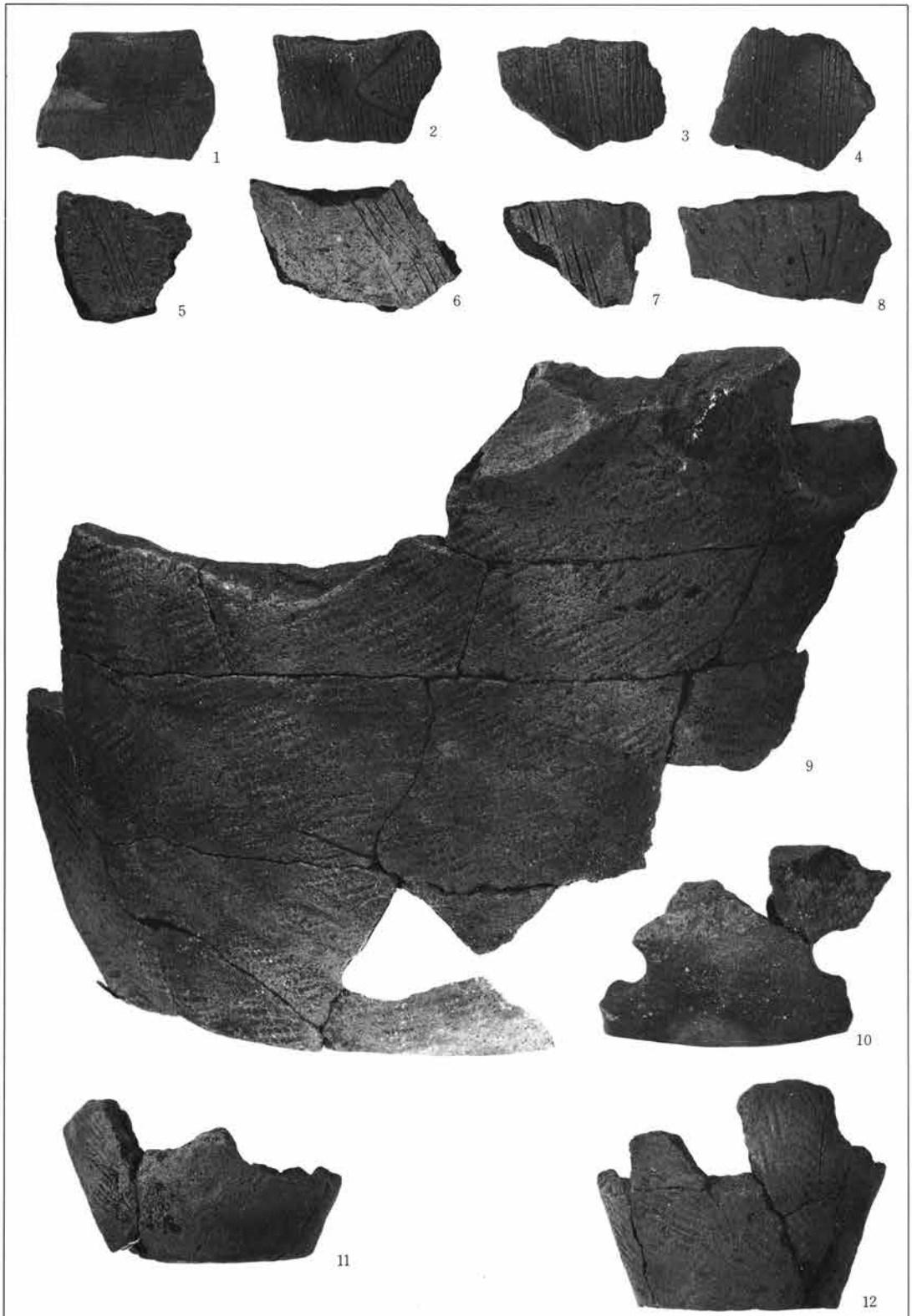
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第9群）



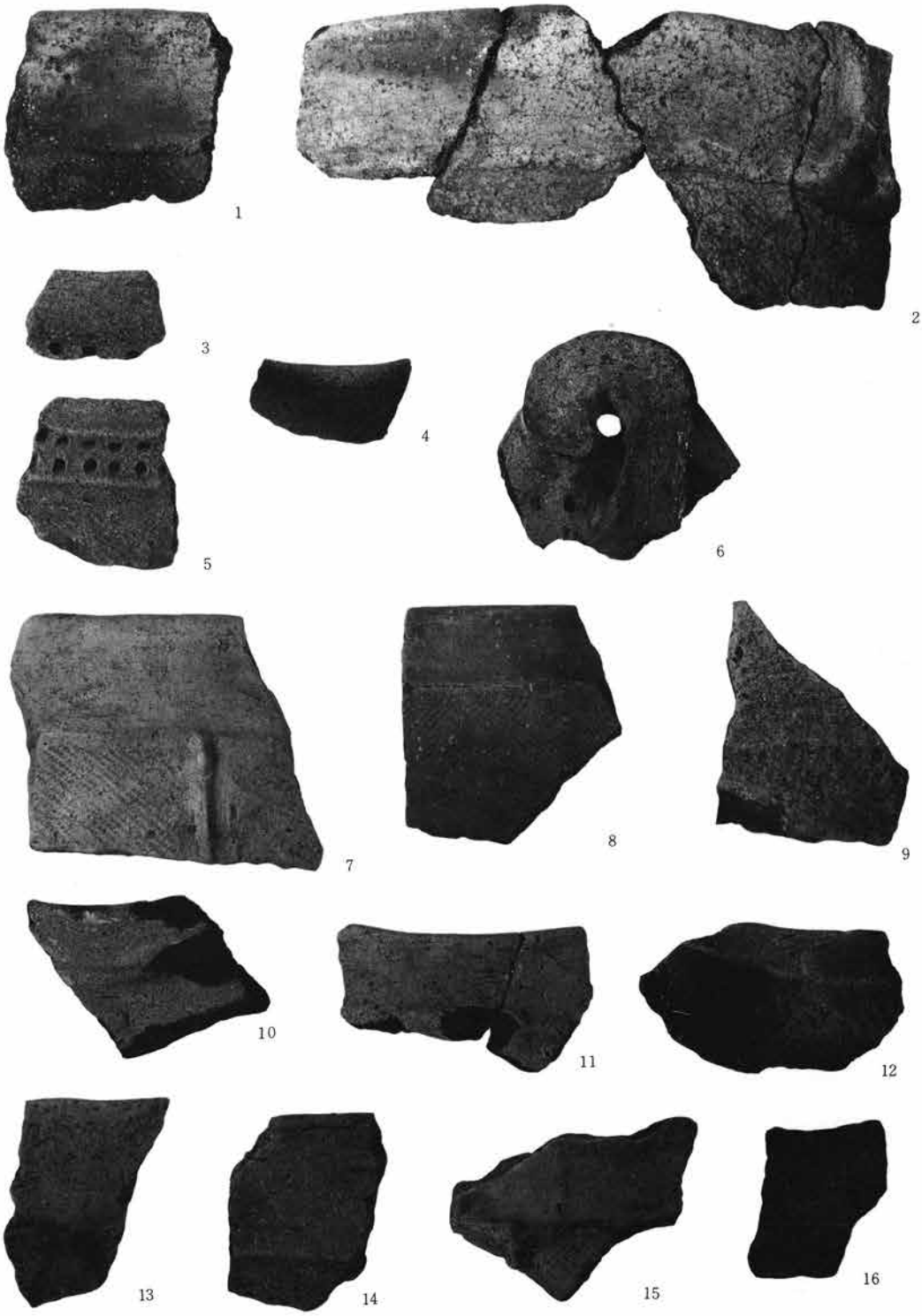
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第9群）



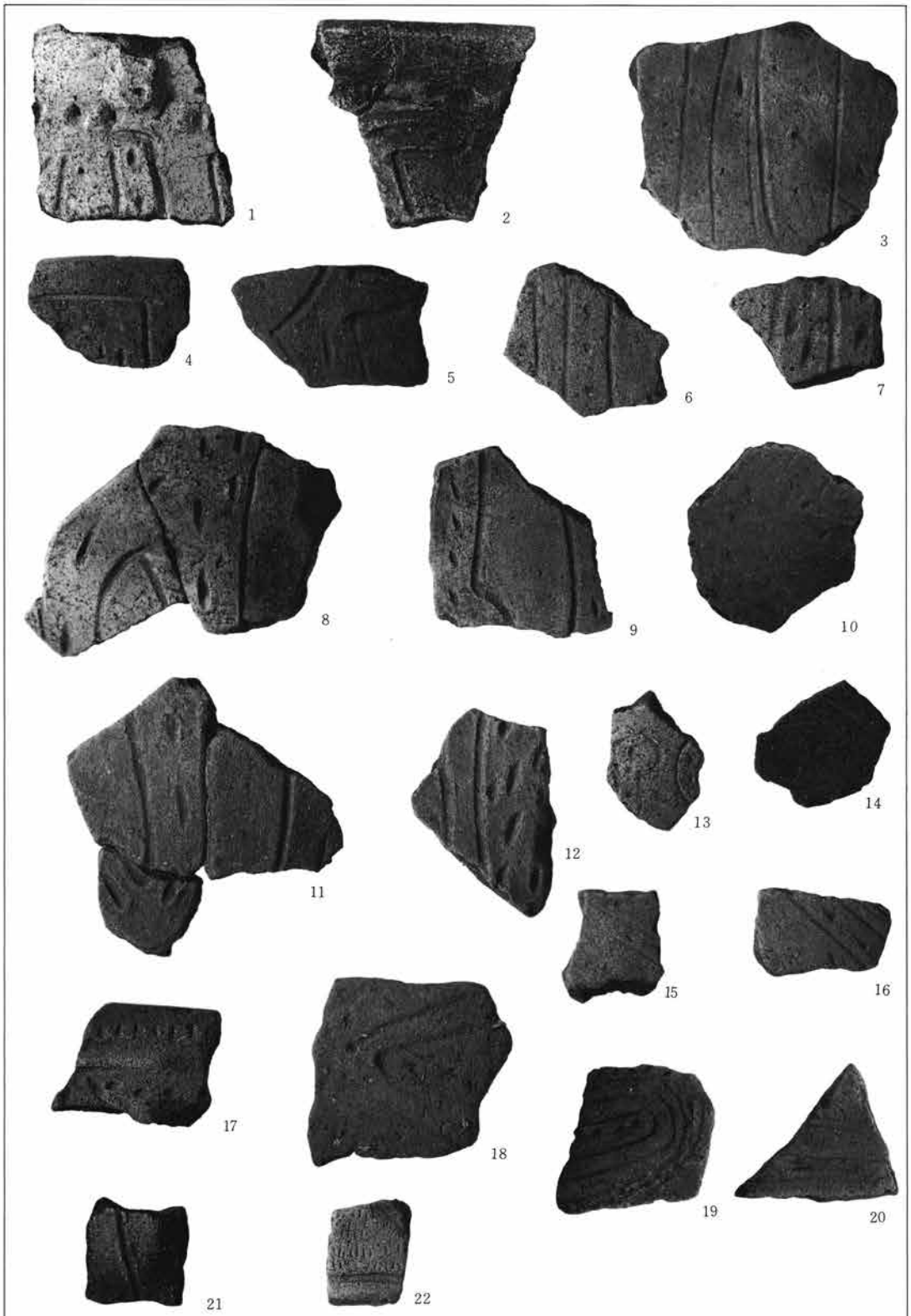
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第９群）



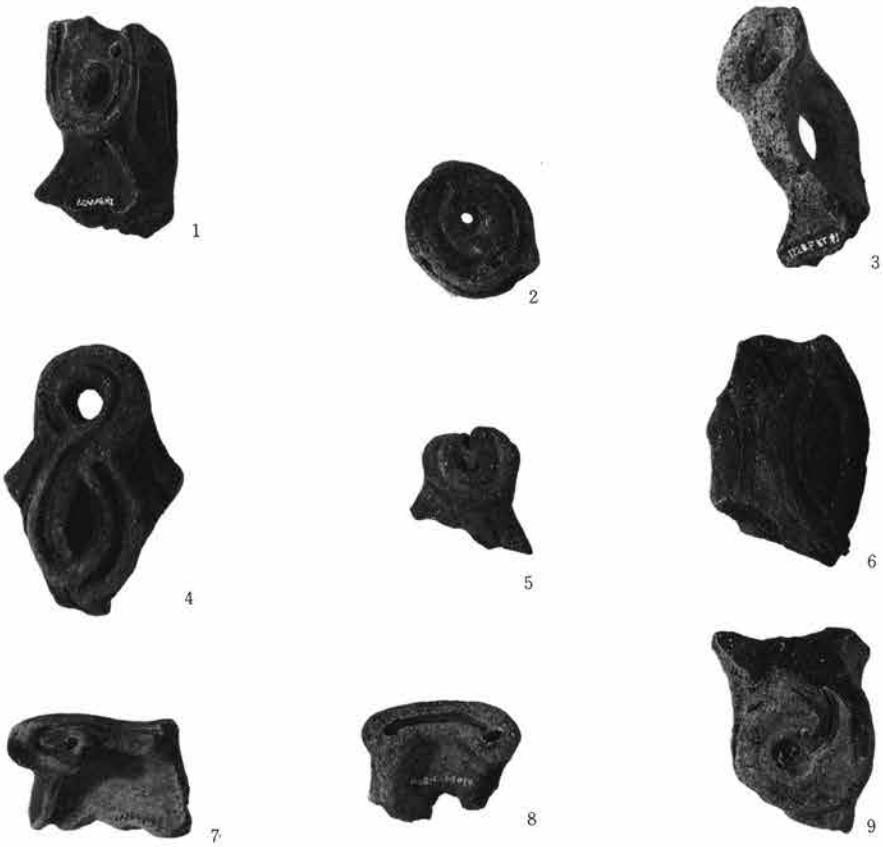
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器　第９群）



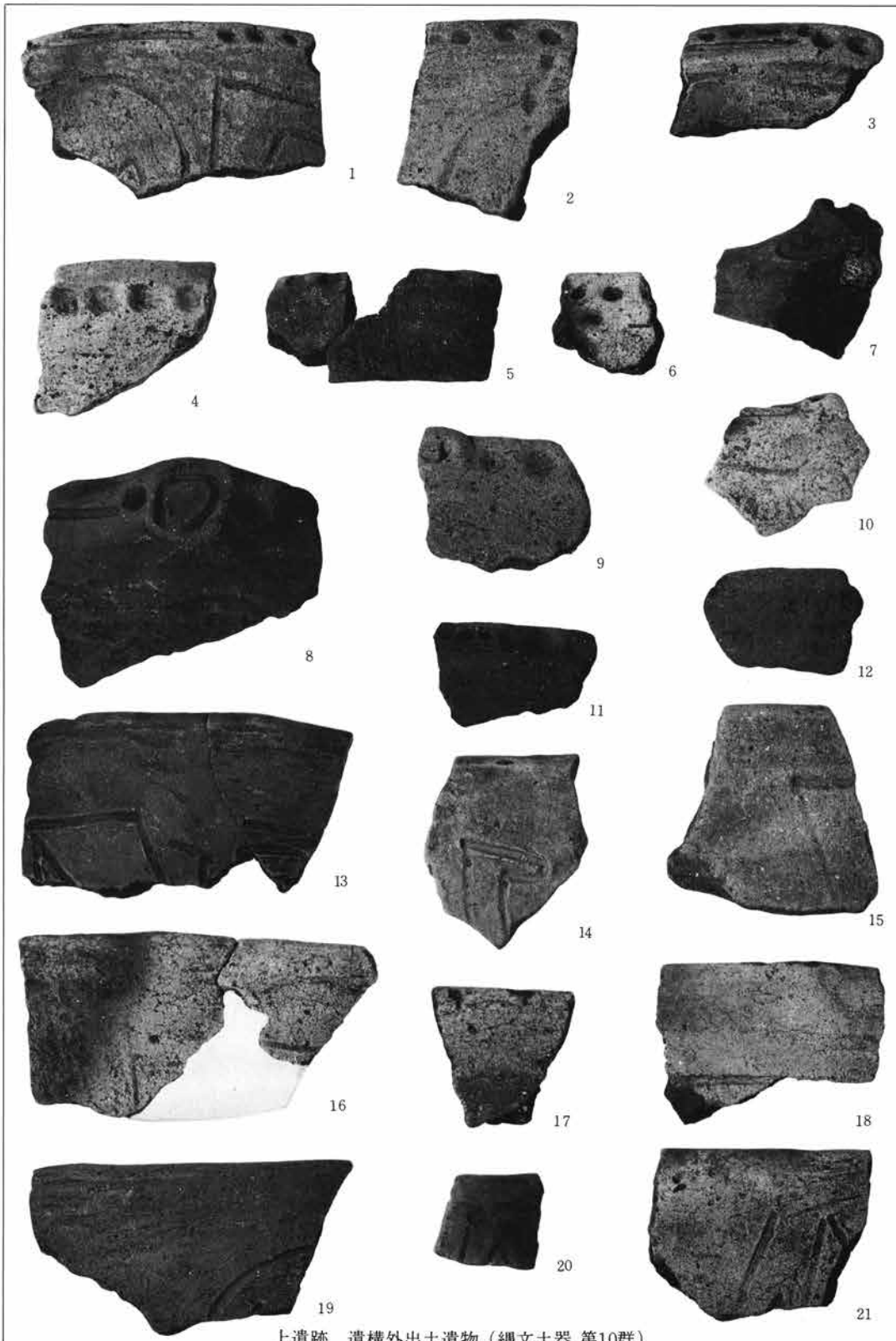
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第９群）



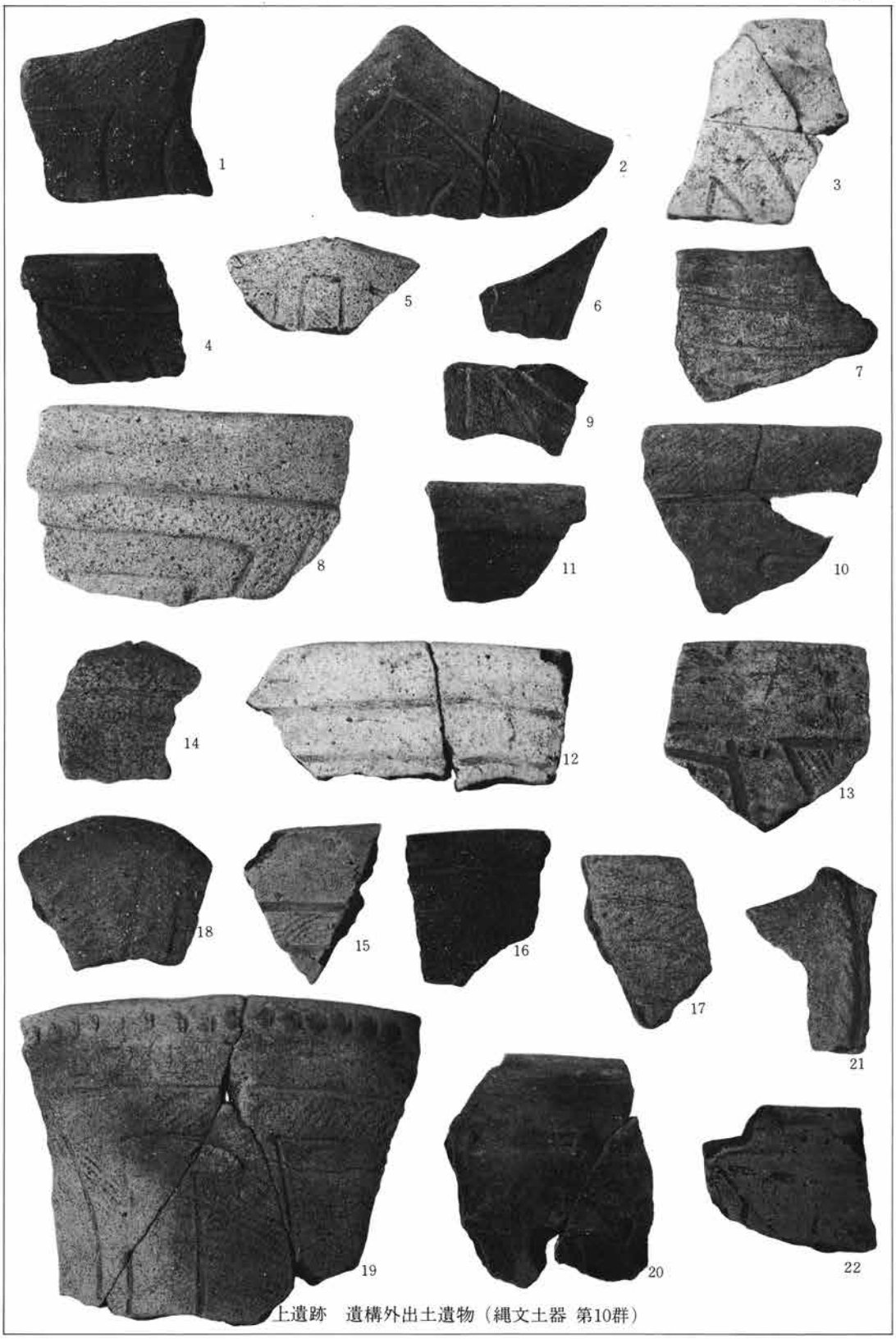
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第10群）



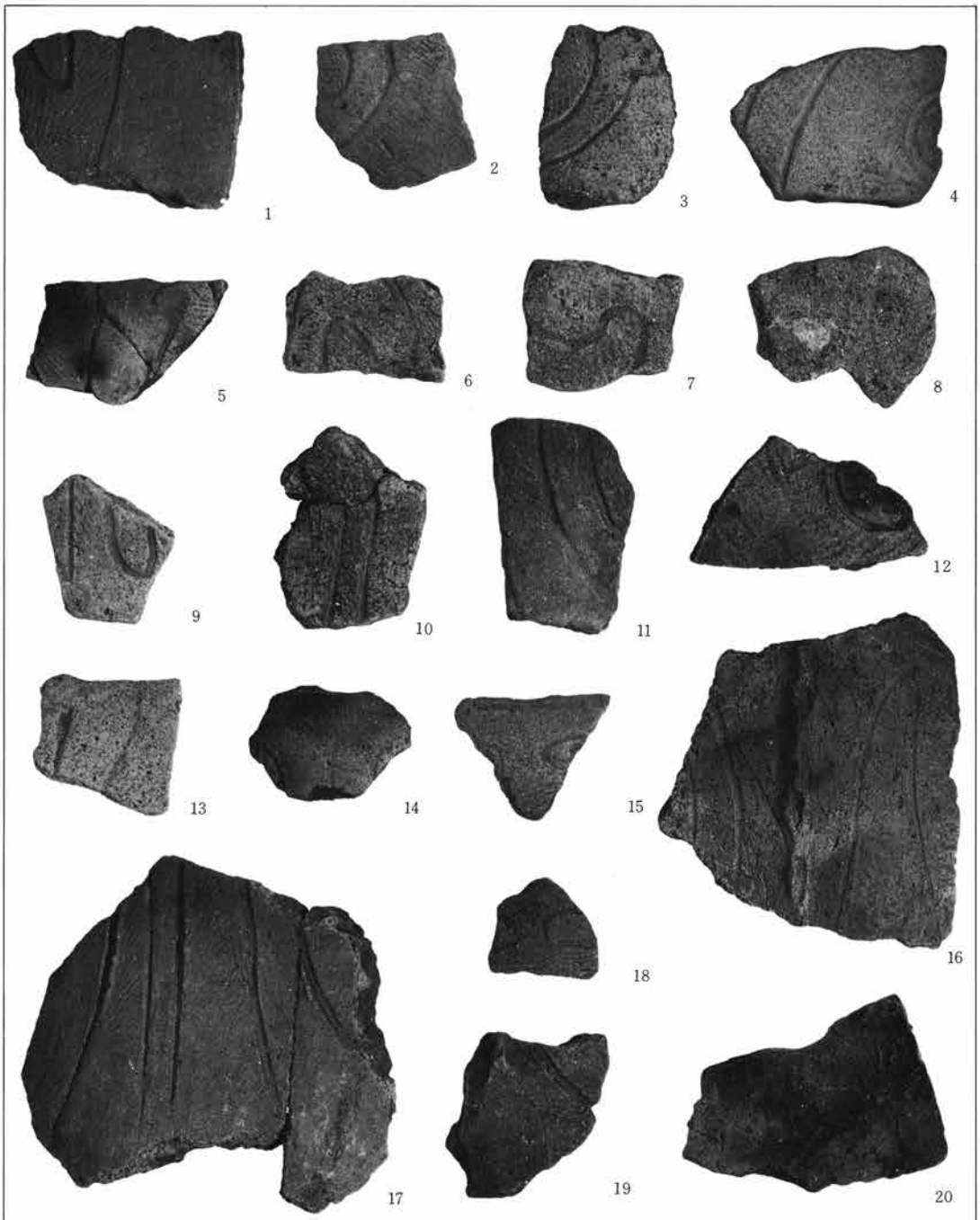
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第10群）



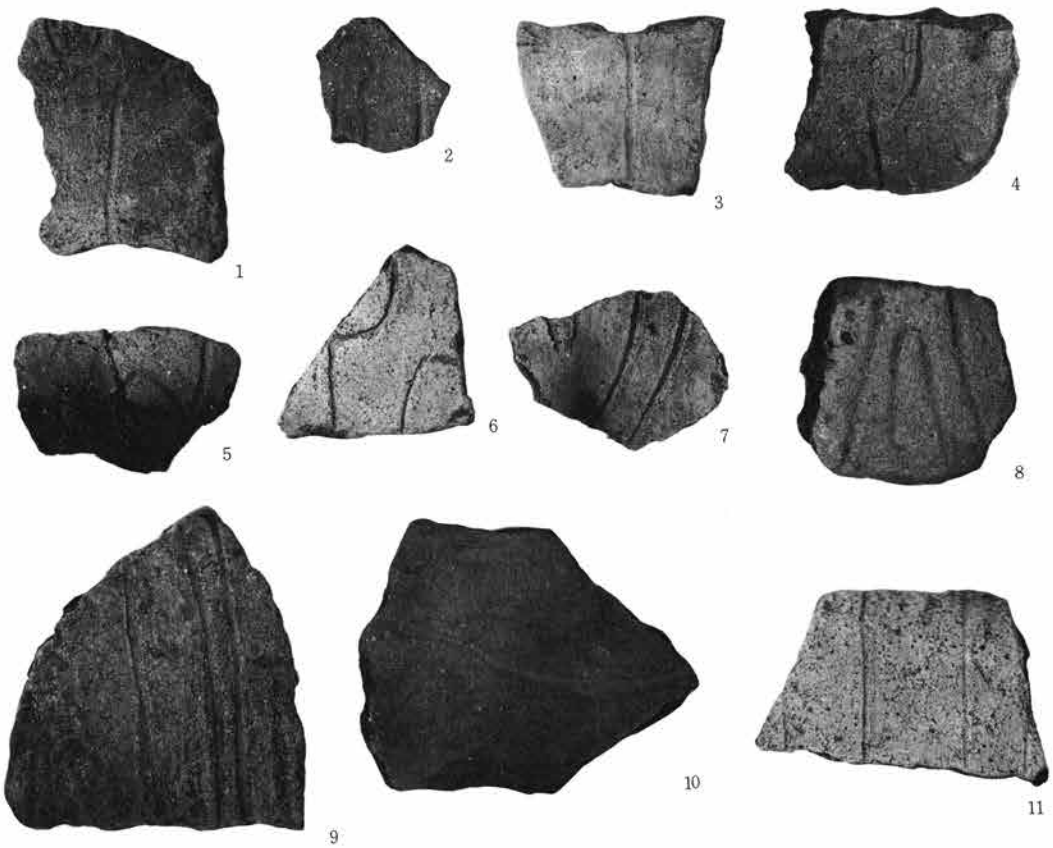
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第10群）



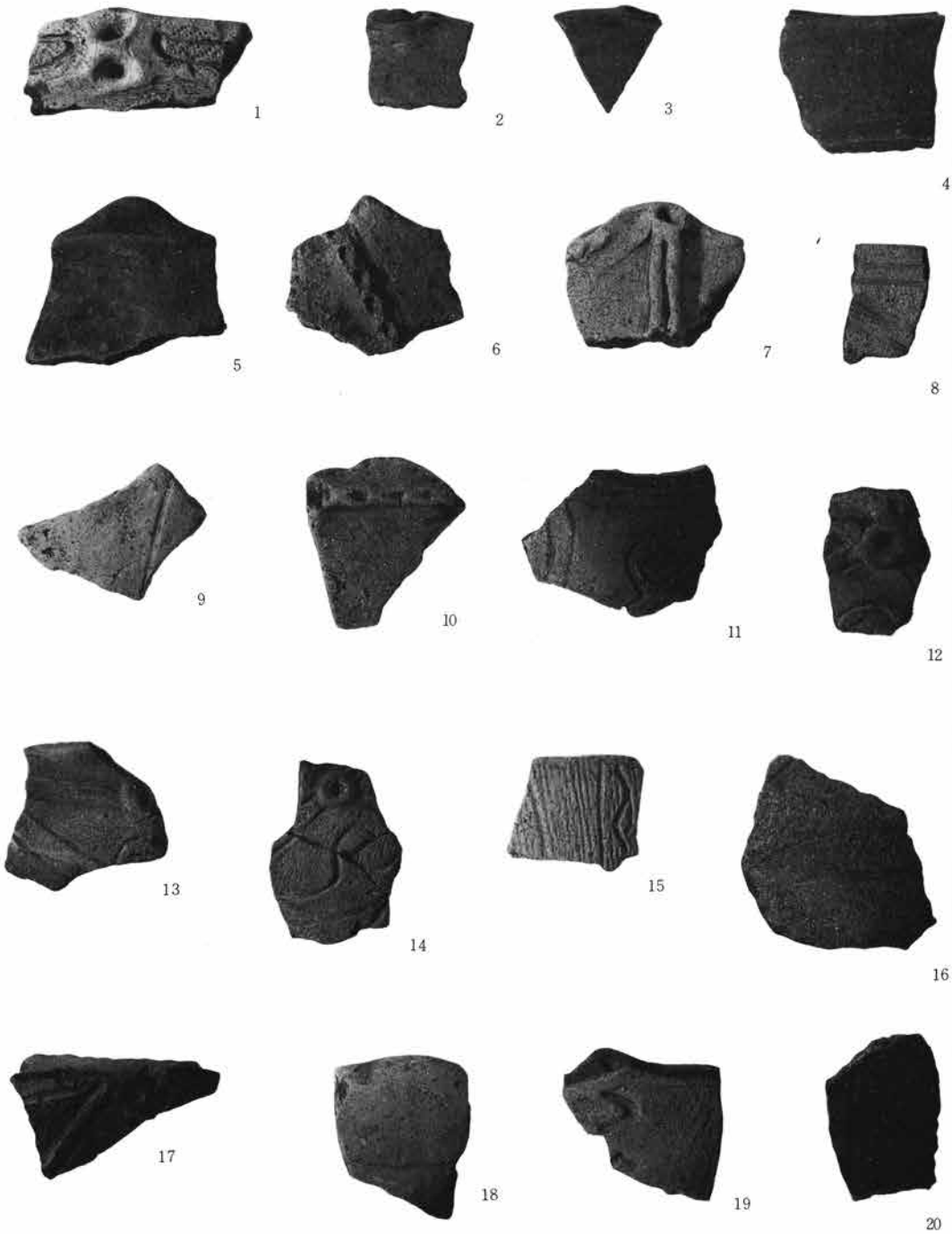
上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第10群）



上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第10群）



上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第10群）



上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第11群）

1

2

3

4

5

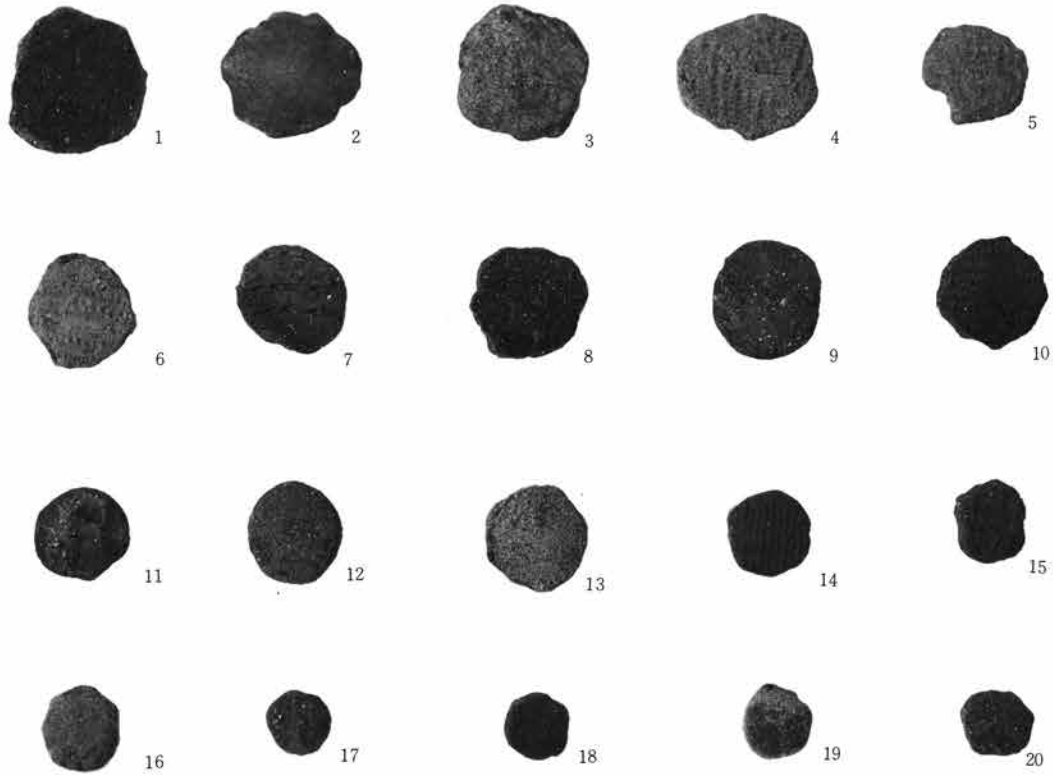
6

7

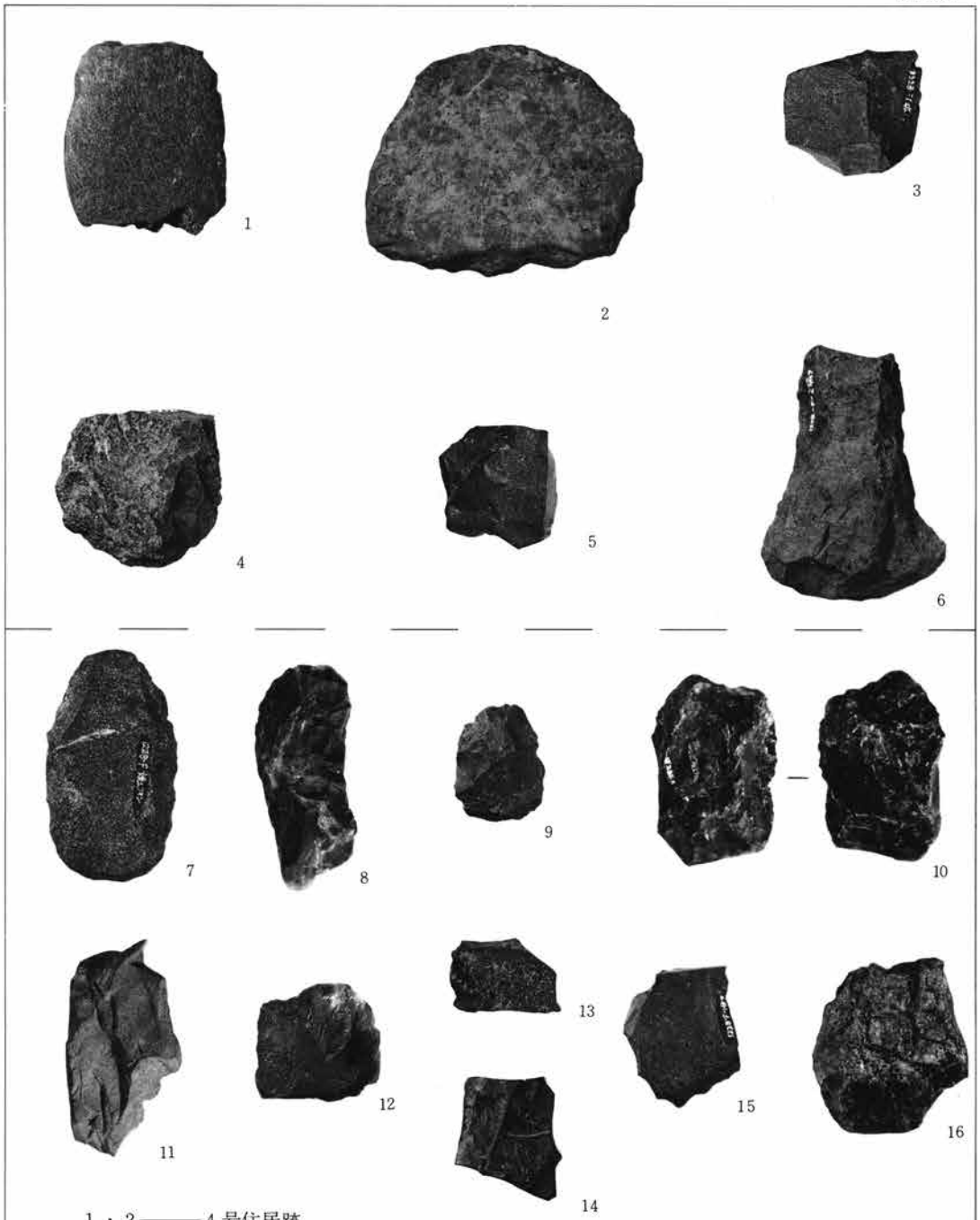
8

9

上遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器 第12群）

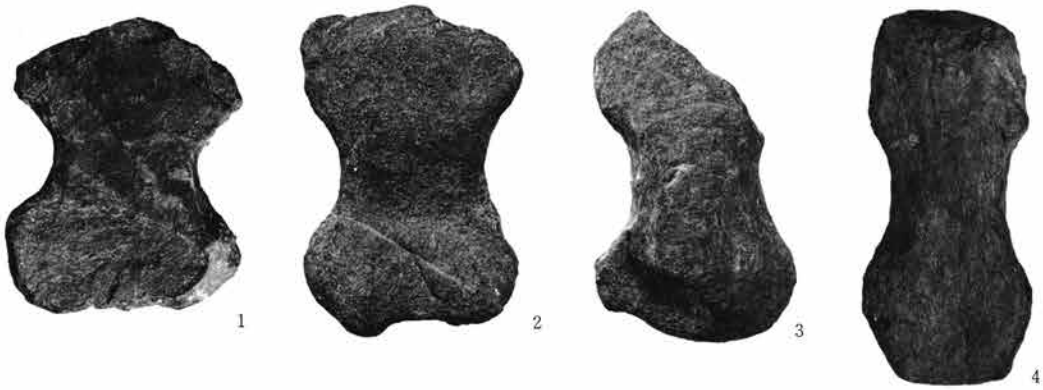


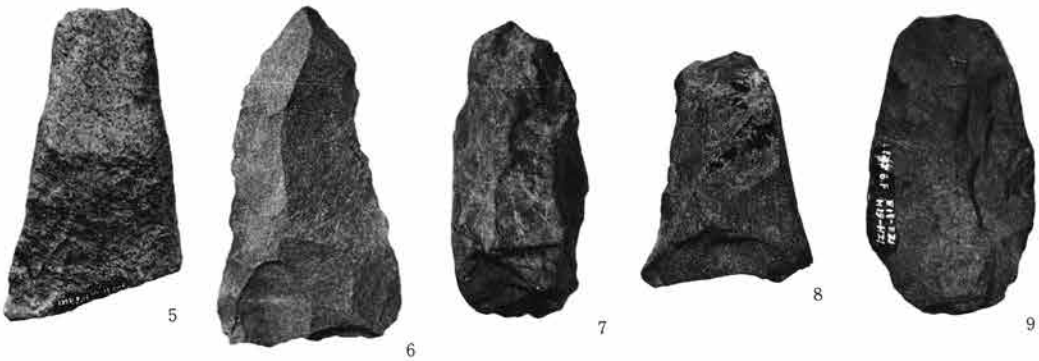
上遺跡　遺構外出土遺物（土製円盤）

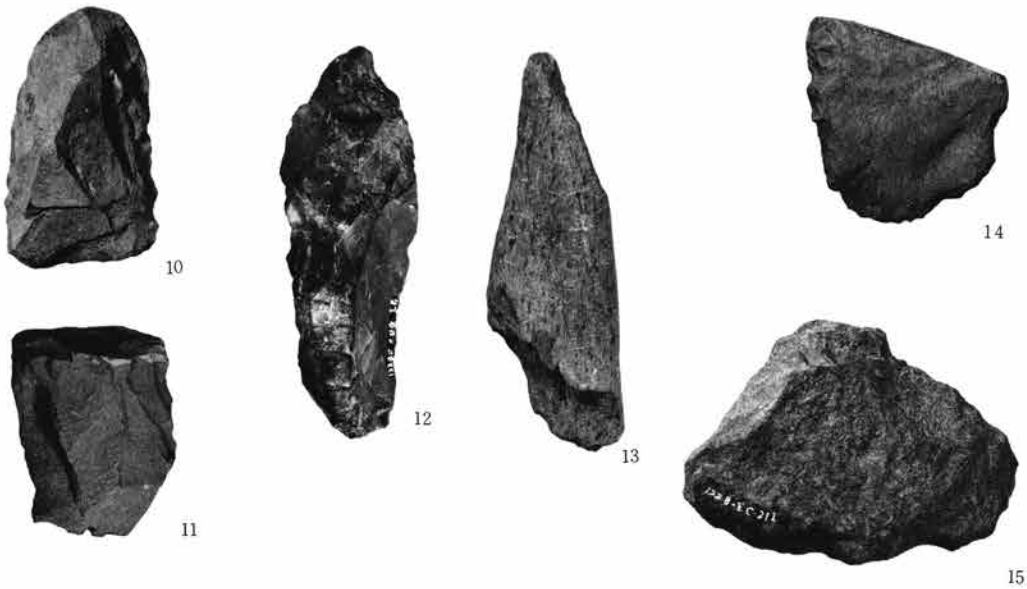


1・2――4号住居跡
3――1号土壙
4・6――2号土壙
5――6号土壙
7～16――遺構外

上遺跡　住居跡・土壙及び遺構外出土遺物（石器）







上遺跡　遺構外出土遺物（石器）

1

2

3

4

1

2

3

4

5

6

7

8

9

上遺跡　遺構外出土遺物（石器）

1

4

5

2

6

3

7

8

上遺跡　1号住居跡出土遺物

1

6

7

2

8

3

4

5

9

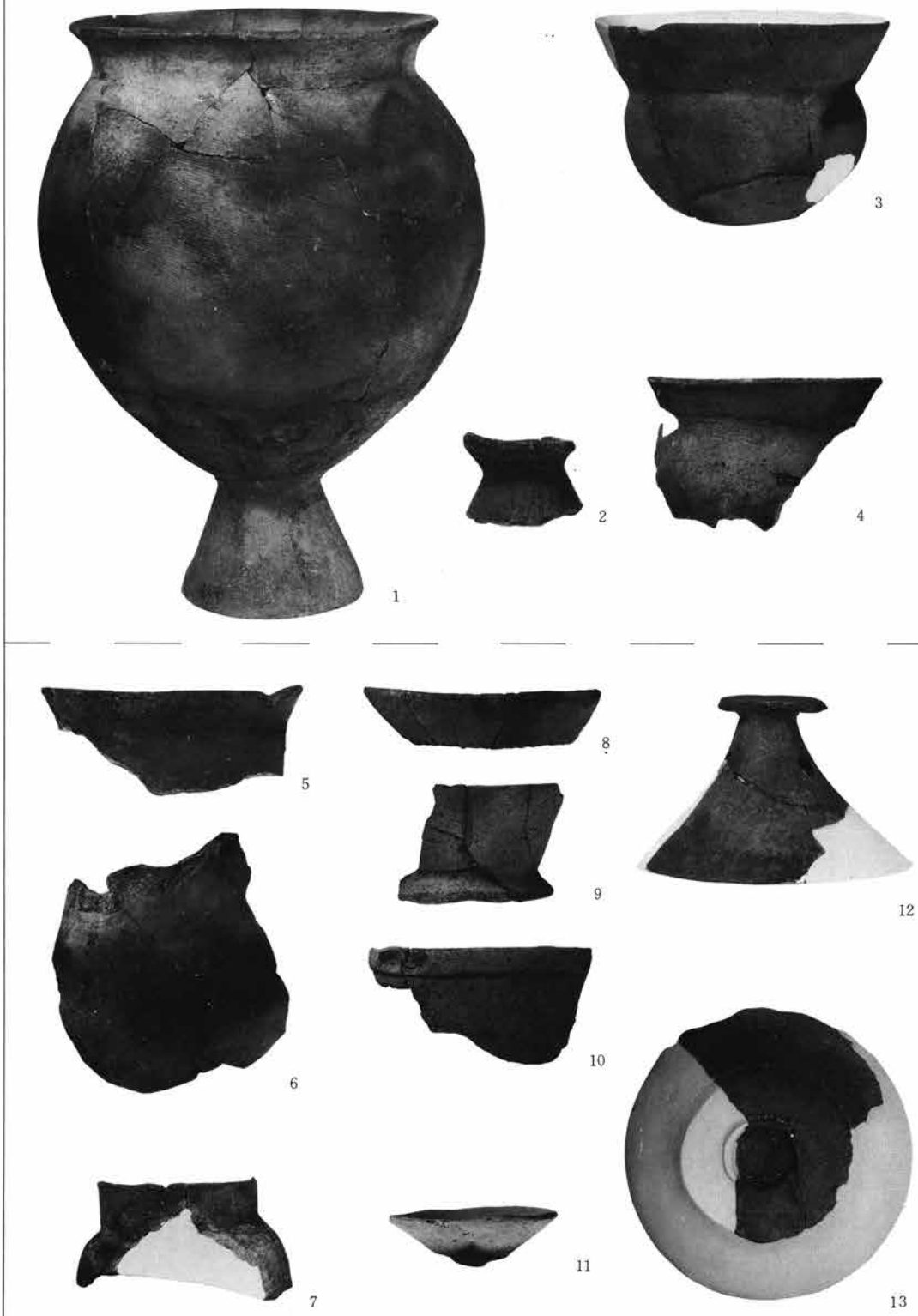
上遺跡　1号住居跡出土遺物

1

2

3

上遺跡　1号住居跡出土遺物

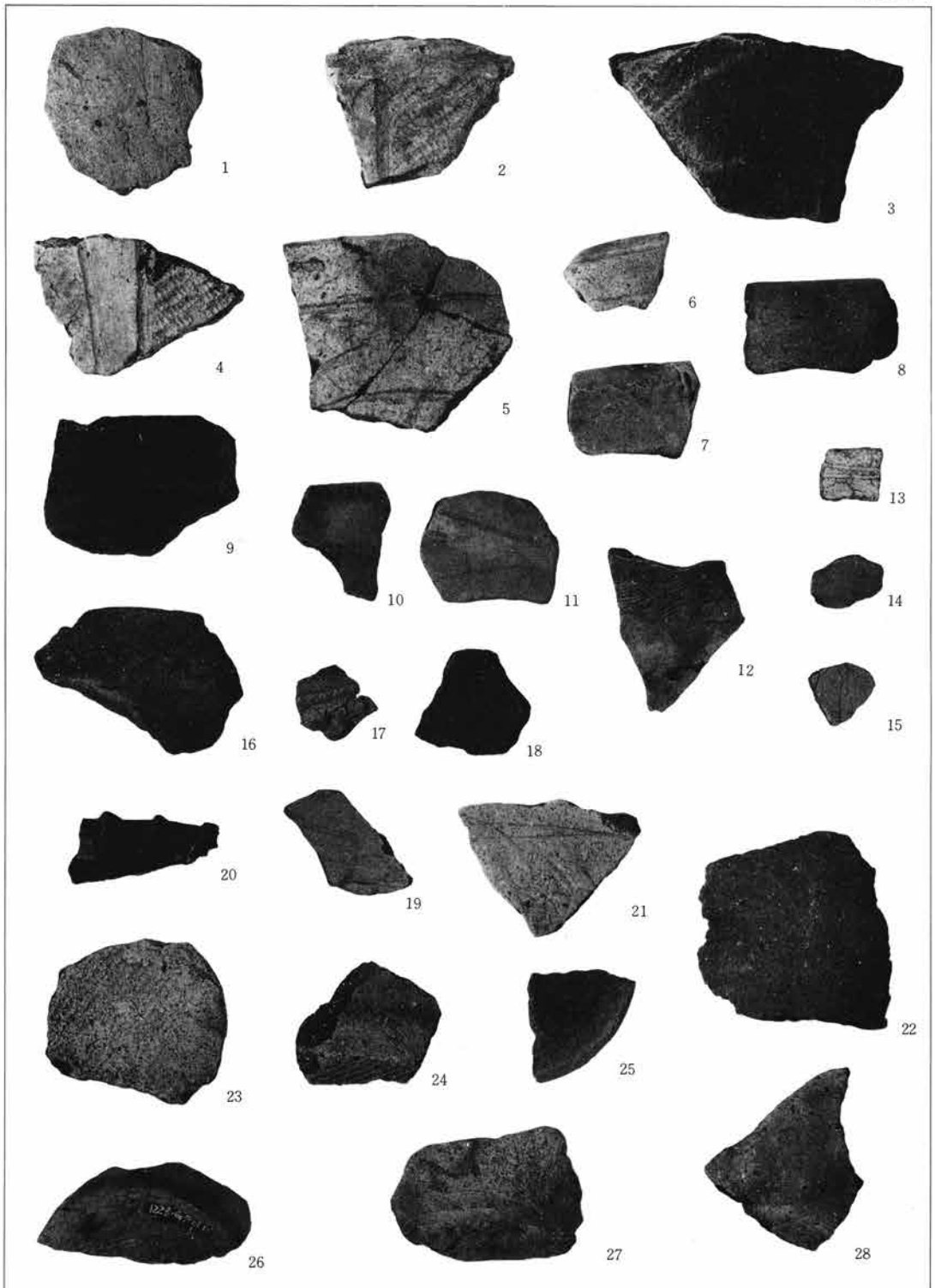


上遺跡　2号住居跡・3号住居跡出土遺物

図版70

雷遺跡調査前状況

雷遺跡トレンチ断面



雷遺跡　トレンチ・グリット出土遺物

庚塚・上・雷遺跡

国道122号（太田バイパス）
道路改良工事に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書Ⅰ

印　刷　昭和55年3月26日
発　行　昭和55年3月31日

編　集　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電　話（0279）52－2511（代表）

発　行　群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電　話（0279）52－2511（代表）

印　刷　朝日印刷工業株式会社

庚塚・上・雷遺跡　正誤表

頁・図版No.	行	誤	正
図版目次	28左	1号埋甕	2号埋甕
P10	24	（図5参照）	（図6参照）
P38	6	勝坂I式土器	勝坂1式土器
P38	27	称名寺II式土器	称名寺2式土器
P67	9	やや内傾する	やや外傾する
P135	22	に磨減し	に磨滅し
P142	3	な刃部を	な刃部と
図版18	キャプション	122号遺跡　庚塚遺跡　11号講出土遺物	庚塚遺跡　11号溝出土遺物
図版26	キャプション下	1号埋甕	2号埋甕